『アルカ』

14,fav,zan
seren arbazard

宣言

アシェットのルシーラであるセレン＝アルバザードは制定言語アルカ（以下制アルカ）の創始者であり制作者であり制定者であり、制アルカにおける著作権を始めとする全権利を持つ者である。セレンは制アルカをアシェットのために制定し、アシェットが以下の規約を守る限り、制アルカの自由な使用を認める

規約

1：改定について

制アルカの改定はアシェットの承認を経ること。承認を得ない語句や用法は正式とは認めない。同時に正式ではない語句でなされた約束や証言等は公的には効力を保証されない

2：辞書について

アシェットに認められた制アルカの辞書に記載されている語句は正式用法であることを尤も簡単に確認できるものである。そのため、正式用法は必ず辞書に記載されなければならない。尤も正式な辞書はセレンが所有する『幻日辞典』であり、メタ言語は現在日本語である

3：権利・使用・流布について

制アルカの全権利はセレンが所有するが、使用は自由に行って良い。ヴァルテ同士ならば流布も自由である。但しハルヴァに流布する場合はアシェットの承認が必要である

4：新語創造について

新語創造は自由に行って良いが、個人の乱雑な造語による混乱を防ぐため、新語はアシ

ェットが認めない限り正式用法とはしない

5：アシェットの承認方法について

　アシェットの認可・承認は賛成・無回答・反対の選択肢による多数決によるが、常に全員を集めるわけにはいかないため、大納期以外はセレンが一存で認可する

6：制アルカを使用した著作物の権利について

　制アルカを使用して何らかの著作を作成した場合、セレンはその著作権には関与しない。何人もヴァルテは自由に制アルカを使用して良い。但し、ハルヴァはアシェットの承認なしに制アルカを用いてはならないため、その著作権は認めない

7：免責事項
　制アルカの使用によって起こるあらゆる問題についてアシェットは免責される

8：古アルカについて

　古アルカは秘匿情報であり、外部に漏らすことを禁ずる。また、メル 14 年ザナの月ラルドゥラの日以前は公式な場における古アルカの使用のみを禁ずるが、メル 14 年ザナの月ラルドゥラの日以降は独り言を含むあらゆる場面での使用を禁ずる。誤って口にしたり走り書きしてしまったという場合においてもアシェットが適切な懲罰を加える
　更に、古アルカについてはできるだけ忘れることを命じる。聞かれても知らぬふりをすること。但し、古アルカという存在があったことだけは口外しても構わない
　また、メル 14 年ザナの月ラルドゥラの日以降は古アルカに関する研究を永久的に凍結するので、やむを得ず研究しなければならない場合はアシェットの認可を得ること

9：制アルカの権利継承について

　セレンの自然死、病死、事故死、或いは殺害された場合など、いずれにせよセレンが死亡した場合、制アルカの権利は第 1 使徒リディアに継承される。リディアが死亡した場合は第 7 使徒メルに継承される。メルが死亡した場合は先代ルシーラのリーザに継承される。リーザが死亡した場合は第 8 使徒ラルドゥラに継承される。ラルドゥラが死亡した場合、期や代が変わっていればそのルシーラに継承されるが、もし変わっていなければ残った使徒が会議をして継承者を定めること。会議が行えないか継承者が決まらない場合、制アルカの権利者は消滅する。その場合、残るアシェットは制アルカに関する全ての情報を抹消

し、テームスに情報が渡らないように尽力すること

10：アルティスについて

　ヴァルテは制アルカを習得せねばならないが、ハルヴァがアシェットの許可を得てハルヴァのまま制アルカを習得することは許される。尚、9 の場合はアルティスも消滅する。したがって、9 の場合、残るアシェットはアルティスに関する情報も極力抹殺しなければならない

序文

　本書は人工言語アルカに関する文献である。執筆者はセレンで、言語はセレンの母語である日本語を使用した
　本書はアシェットの承認を得て執筆したもので、承認はリーザの助言を受けて、セレン・クミール・リディア・メル・リュウ・ラヴァ・ピネナが代表で行った
　尚、本書の執筆目的はアルカに関する詳細かつ最大規模の文献を作成することである。したがって古アルカ・制アルカを問わず収録した。古アルカに関する研究は禁じられているため本来ならば言及できない。だが、古アルカはアシェットの歴史を映す鏡として重要な位置を占めるだけでなく、制アルカの母体にもなっているため、これを無視してアルカの詳説は不可能である。そう判断したアシェットは特別に本書における古アルカの概説を許可した

術語集

1：はじめに

　以下では本書を読む上で必要或いは助けとなる術語について簡単に解説する。凡例は以下の通り。尚、術語は幻字順に並べた

凡例）

制アルカ：日本語：解説

例）

arka：アルカ：人工言語アルカ。アシェットが創造した。アルティスが認める唯一の言語でもある

2：術語集

tsunk：ツンク：アルカにおけるカンマ
tempera：テンペラ：アルカにおける感嘆符
teems：テームス：悪魔の一族
kmiir mete：クミール＝メテ：第 4 期 4 代のソーンのルシーラ。アシェットのルシーラに転任。アシェットの第 28 使徒も兼任
kliiz liisia：クリス＝リーシア：アシェットの第 3 使徒
katar：カタル：ラシェットにおいてルシーラとハルマを区別しない言い方
kako：『カコ』：アルシェとソーンの抗争を記した文献
kaade：カーデ：フルミネアが作成した占い
konaarka：『神無アルカ』：セレンが前期アルカの時代に作った幻字のための表音文字案
kunon valbes：クノン＝ヴァルベス：アシェットの第 27 使徒
kuunosteira：クーノステイラ：アルカにおける疑問符
sadarka：制アルカ：メル 27 年ザナの月ラルドゥラの日以降のアルカ。ふつうアルカというと古アルカではなく、この制アルカである
saal：サール：地界に住むアルテの一族。アルデスを王とする
sidarka：古アルカ：メル 2 年のザナ月メルの日からメル 12 年ザナの月ラルドゥラの日までのアルカ
seren arbazard：セレン＝アルバザード：第 4 期 4 代のアルシェのルシーラ。アシェットのルシーラに転任。アシェットの第 14 使徒も兼任。古アルカの改定者であり、制アルカの創造者でもある
sorn：ソーン：団体名。1 名のルシーラと 13 名のハルマからなる。アルシェと敵対していた
sornarka：アルカ・エ・ソーン：ソーンの使っていた古アルカ
neene valem：ネーネ＝ヴァレム：アシェットの第 24 使徒
vartes：ヴァルテス：アルティスの派閥の一つ。テームスを至上のものとする
valte：ヴァルテ：アルティス教徒のこと
faava farfania：ファーヴァ＝ファルファニア：アシェットの第 12 使徒
fulmiia ineaato：フルミネア＝イネアート：アシェットの第 5 使徒
fuusika：フゥシカ：ハルヴァ。天秤詞の前置を発案し、制アルカの文字作りに関与した
mat vama：マット＝ヴァマ：アシェットの第 26 使徒

milf eltoa：ミルフ＝エルトア：アシェットの第 11 使徒
mel keetoia：メル＝ケートイア：アシェットの第 7 使徒
melarka：メル・アルカ：メル 11 年リュウの月エンナの日以降の古アルカ
gakon：ガコン：アルカにおけるピリオド
gil falfania：ギル＝ファルファニア：アシェットの第 4 使徒
palsaa arbazard：パルサー＝アルバザード：ハルヴァ。『幻日単語帳』や『幻日機能語帳』を作成し、『幻日辞典』の作成にも関与した
paal iiluuto：パール＝イールート：アシェットの第 10 使徒
pinena valo：ピネナ＝ヴァロ：アシェットの第 25 使徒
hanvet：エクスプローダー：古アルカの品詞の 1 つ。日本語の助動詞に相当する。メル・アルカで副詞に吸収された後、制アルカでは純詞と時相詞に吸収された
hacm：幻字：アルカの文字
hacma：ハルマ・使徒：アディアにおける 13 名の精鋭部隊で、ルシーラの管轄下にある
harva：ハルヴァ：非アルティス教徒。無宗教家も含む
haranknot：『赤アンクノット』：セレンが作成した文献で、幻字が数百個記載されている
yuua lutia：ユーア＝ルティア：先代アルシェの第 1 使徒。リディアの父
rava varsiila：ラヴァ＝ヴァルシーラ：アシェットの第 15 使徒
rsiila：ルシーラ・月司：アディアにおけるリーダー
ryuu hyuuto：リュウ＝ヒュート：アシェットの第 6 使徒
raldura lolos：ラルドゥラ＝ロロス：アシェットの第 8 使徒
ridia lutia：リディア＝ルティア：アシェットの第 1 使徒。リーザの娘。古アルカを実質上作成・改定し、制アルカの作成にも関与した
relezona valza：レレゾナ＝ヴァルザ：アシェットの第 18 使徒
ruuj bees：ルージュ＝ベース：アシェットの第 13 使徒
zana genos：ザナ＝ゲノス：アシェットの第 9 使徒
jiil vaxiv：ジール＝ヴァシヴ：アシェットの第 19 使徒
lfer：ルフェル：エルトの王
laxet：ラシェット：アルシェとソーンを合わせた団体名
lantis：ランティス：アシェットにおいてルシーラとハルマを区別しない言い方
lark：ラルク：アルカによる文化
lina vix：リナ＝ヴィッシュ：アシェットの第 20 使徒
lirk：リルク：ラルク以外の文化
liine vafii：リーネ＝ヴァフィー：アシェットの第 17 使徒
liiza lutia：リーザ＝ルティア：第 4 期 3 代のアルシェのルシーラ。リディアの母
lei e miir：『ミールの書』：セレンの著作。論理学の教科書風の実名小説。アシェットの和平の象徴でもある

atiili：『幻想話集アティーリ』：アシェット独自の神話
ax valina：アッシュ＝ヴァリナ：アシェットの第 23 使徒
axet：アシェット：第 4 期 4 代のラシェット
adia：アディア：アルシェとソーンを区別しない言い方
artis：アルティス：アシェットが起こした新興宗教。アルカを神の母語とする
arte：アルテ：神の一族。エルトとサールに分かれる
arka：アルカ：人工言語アルカ。アシェットが創造した。アルティスが認める唯一の言語でもある
arkaparm：『幻日辞典』：セレンが作成した辞典
arxion：アルシオン：アルティスの派閥の一つ。アルテを至上のものとする
arxe：アルシェ：団体名。1 名のルシーラと 13 名のハルマからなる。ソーンと敵対していた
arxearka：アルカ・エ・アルシェ：アルシェの使っていた古アルカ
arma：アルマ：アルマスト派が至上とする究極物質
armast：アルマスト：アルティスの派閥の一つ。アルマを至上のものとする
ardes：アルデス：サールの王
ilmi：『リーザの日記』：リーザの付けている日記の総称
ovi gaavi：オヴィ＝ガーヴィ：アシェットの第 2 使徒
eketone vaana：エケトネ＝ヴァーナ：アシェットの第 21 使徒
enna vajo：エンナ＝ヴァジョ：アシェットの第 22 使徒
elt：エルト：天界に住むアルテの一族。ルフェルを王とする
umtona vates：ウムトナ＝ヴァテス：アシェットの第 16 使徒

第 1 章：総論

1－1：アルカとは

　アルカは人工言語の一種で、アシェットのために作られたものである。アルカは誕生日を持つ珍しい言語で、メル 2 年のザナ月メルの日に生まれた。それからメル 12 年ザナの月ラルドゥラの日までのアルカを古アルカと呼び、以降を制アルカと呼ぶ
　古アルカの創造者はリーザで、制アルカの創造者はセレンであるが、着想者はいずれもリーザである

1－2：アルカの名の由来

アルカという名はリディアの使用するある言語で「つなぐ」を意味する言葉からきている。リーザがメル 2 年のザナ月ごろにリディアにアルカの着想を語ったことがきっかけでその名が生まれた。しかしすぐにアルカという名がその人工言語に適応されたわけでなく、はじめは無名の言語だった。それでは不便だということでリディアが慣用としてアルカと言い出したものが定着していき、やがてその人工言語はアルカという名が付いたのである

尚、アルカという名がアルシェで正式に認定されたという過去はないが、文献を見るに、この名はアルカを表わす幻字と共にメル 4 年ごろには定着していたと考えられる

1－3：アルカの特徴

アルカの特徴はまずアシェット或いはアルシェ・ソーンという特定の団体のために創造されたという点である。この団体は精鋭部隊の数が少なく、アルシェ・ソーン両団体を合わせても 30 人ほどという規模である。実際にはアルカに関与している人間はこれより遥かに数が多いが、それでも危機言語並にしか流布していない。アルカはこのように非常に限定された人々のために創造されたものであるという点で特徴的である

また、創造されてから年月が浅いという点でも特徴的である。アルカは古アルカと制アルカに大別できるが、その古アルカなどはたった 10 年で滅んでいるのである。いかに言語の進化と衰退が早いかが見て取れるわけであり、これもまたアルカの特徴となっている

アルカは少数の人間しか使わないので、非常に進化が早く、変化に富む。それゆえ定期的な改訂を必要としていた

音声面で言えば、アシェットは様々な母語話者が寄り集まってできた団体であるため、アルカで使われる音声は非常にバラつきがあり、一貫性に乏しい。古アルカはランティス個人個人の属する文化を尊重しあうという風潮があったために、そのバラつきをできるだけ忠実に保っていたが、当時の幻字は表意文字であったために、忠実にランティス個人の音声が反映されるとは限らなかった

たとえばセレンが/r/だと思っているものをリディアは/d/のように感じることが多くあったが、そのような場合でも幻字は不変であるため、セレンやリディアの発音は文字に反映されないままであった

一方、制アルカに近付くにつれてラルクやアルティスが確立していき、それにしたがってランティス個人個人の文化よりもランティスに共通するラルクやアルティスを重視しようという風潮に変化していった。そのため、音声もランティス個人の発音を重視しないようになった。代わりにアシェットがアルカではこの音を使うという決まりを作り、ランティス個人が自分の発音をそれに合わせていくという考え方に変わっていったのである

文字の面では古アルカと制アルカで表意文字と表音文字を経験している。これらは幻字と呼ばれ、アルカに特徴的なものである

統語の面では基本語順が古アルカ内で SOV から SVO に変わって以来、大きな変化はな

い。SVO に以降してからも SOV の歴史を引きずって修飾語が前置されることも多かったが、SVO 式に合わせて後置される事態も次第に増えていった。また、改定のたびに機能語の使い方が劇的に変化するという人工言語に特有な面をも持っていた

類型の面では古アルカのころから極めて膠着性の強い言語といえ、屈折はほぼ皆無であった。古アルカの口語において「私の」を表わす[e an]という2語が[æn]という1語になったが、これは数少ない屈折の例である。また、基本語順SVOでは通常SとOは格が表示されないため、この点では孤立的である

形態の面では品詞の数に変動が多くあったという点が特徴的である。たとえば古アルカのころに存在したエクスプローダーは日本語では主に助動詞に相当するが、これは制アルカでは消滅し、純詞と時相詞に吸収された

文体の面では古アルカには存在した敬語表現が時代を経るにつれて減少した。制アルカでは敬語表現が極めて退化しているという特徴を持つ。また、言文一致は古アルカのころからあり、文語を口語に合わせることにためらいは少なかった。但し、表意文字なので口語に一致させても音の変化が文語に反映されることは事実上殆どなかった

2－1：古アルカとは

古アルカとはメル 2 年のザナ月メルの日からメル 12 年ザナの月ラルドゥラの日までのアルカのことである。古アルカはアルシェのために創造された言語であるが、後に起こるクミールの反乱によってソーンのための言語にもなっていった。つまり、古アルカはアルシェとソーンのために創造された言語である

ところが両団体は抗争していたため、互いの言語が通じ合わないように古アルカは暗号性を帯ながら変化させられていった。そのため、アルカ・エ・アルシェとアルカ・エ・ソーンという対立が生まれたのである。両者は互いの使徒が聞きあっても理解が難しいほど異なった言語である

古アルカはアルシェの言語としてリーザが着想をしたもので、セレンやリディアが中心となって作っていった。メル 2 年のザナ月メルの日に誕生して以来、古アルカは多くの変革を遂げてきた。語彙は勿論のこと、文法もことごとく変わっていった。古アルカ共通で言える一番のことは幻字という表意文字を使っていたということである

古アルカは幻字という表意文字を使用していた。幻字の数は優に 1000 を超えた。漢字とまではいかなくともそこそこに発達した文字文化だと自負できるだろう

メル 9 年メルの月ルージュの日にクミールがアルシェを離脱した。そのことによりアルシェとソーンが対立した。それ以後両者の交流は少なかったため、アルシェ側で変化したアルカはソーンに伝わらなかったし、またその逆も然りだったため、両者の古アルカは通じなくなっていった。それどころか両者は互いの言語が通じないように変化させていったので、ますます両者のアルカは通じなくなっていった

古アルカには数度の大変革が見られ、その度ごとに古アルカを歴史的に区切って区別することができる。その中で特筆すべきはメル・アルカである。アシェットの対立により互いのアルカが通じにくくなっていたが、和解がなされると途端に言語が通じにくいことが問題になった。そこで通訳をしていたメルがセレンと協力して両者のアルカを混ぜ合わせたメル・アルカを作っていったのである

2－2：古アルカの歴史

古アルカは内訳が細かく分かれ、メル 2～6 年ごろ・6～9 年・9～12 年の 3 期に分けることができる。これらを順に前期アルカ、中期アルカ、後期アルカという

前期アルカはメル 4 年の終わりから 5 年のはじめごろに行われた改定を境に前（ゼン）第一改定アルカと後（ゴ）第一改定アルカに分かれる

中期アルカはメル 7 年にクミールがアルシェの使徒になる前後で分かれる。これらは前クミール・アルカと、後クミール・アルカである

後期アルカはメル 9 年ギルの月ギルの日に始まる。その日から同年メルの月ルージュの日に起こったクミールの離反までが前ソーン・アルカである。それからメル 11 年リュウの月エケトネの日までが後ソーン・アルカである。そしてそれ以降がメル・アルカである。以下に表を挙げる

＜アルカ年代区分表＞

Ⅰ：メル 2 年ザナの月未明：リーザが使徒用言語案を作成。言語案にはメル－9 年時に発足させた暗号が使用された
Ⅱ：メル 2 年ザナの月未明：試用としてリーザがリディアに同上の言語案を教える
Ⅲ：メル 2 年ザナの月メルの日：リディア、セレンとの接触に失敗。ただ、この日セレンに投げかけた言葉にセレンが応じたため、この日を以ってアルカのコミュニケーションとしての機能を認めると同時に、アルカの誕生日とする
Ⅳ：メル 2 年ザナの月ラヴァの日：リディア、セレンと接触を取る
Ⅴ：メル 4～5 年：第一改定
Ⅵ：メル 5～6 年ごろ：第二改定
Ⅶ：メル 9 年メルの月ルージュの日：第三改定
Ⅷ：メル 12 年ザナの月ラルドゥラの日：第四改定

以上から、アルカはメル 2 年ザナの月メルの日を以って誕生したとされる

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ時のアルカはリーザ（使徒用言語案）の語彙・フィンランド語など、リディアの使える言語によって成っていた

Ⅳによってアルカはリーザ（使徒用言語案）の語彙・フィンランド語などのリディアが使える言語に日本語や英語を混ぜた言語になった。また、このアルカの文法は混沌として整理されておらず、音韻体系もまた混沌としていた。語彙は両者の母語を元にしたものが主だったが、Ⅴに至るまでに英語からの語が多く流入した

Ⅴで改定を行った理由は、使徒が増えたことに起因する。使徒が増え、彼らの母語から語や文法がアルカに流入したので、旧来の使徒は混乱した。その結果、何が正しいアルカであるかということを規定する必要性が出てきたのである。そのためⅤでは正式なアルカの記述を規定した。それが第一改定である。Ⅴを行った結果、修正されたのは主に文法で、文法は日本語のようになった。だが大半の語は定着したままであった。当時の語彙はまだ使徒の母語や英語に起因していた

Ⅵでは統語が英語的になり、使用される音韻も次第に定着してきた。語彙は音象徴ができたことにより英語のものが淘汰される傾向になり、Ⅶに至るまでに多くのアルカ語彙ができた。その集大成が『制定語彙』である。また、ここで特筆すべきは、『制定語彙』によって新たな語彙には新たな幻字が考案されるようになったという点である。また、それに加えて幻字の書き方も固定化された。1 つの幻字に数種書き方が混在していたが、それが 1 つの書き方に固定されたのである

Ⅶでは幻字の記述法が再び固定化された。語彙は殆どがアルカ独自のものになった。が、文法はまだ英語的な点が残っていた。音韻体系は『高水準制定語彙』によって若干確認できるようになっていった

Ⅷではアルカはその性格をがらりと変えた。つまりは制アルカ改定である。一番の変化は表意文字の幻字が消失したことである

以下にアルカの年代を図解したものを掲げる

＜アルカ年代区分図解＞

			前第一改定アルカ：mel2,zan,mel
		前期アルカ	
			後第一改定アルカ：mel5,kat
			前クミール・アルカ：mel6,kat
	古アルカ	中期アルカ	
			後クミール・アルカ：mel7
人工言語アルカ			前ソーン・アルカ：mel9,gil,gil
		後期アルカ	後ソーン・アルカ：mel9,mel,ruj
			メル・アルカ：mel11,dyu,ket

2－3：古アルカの特徴

古アルカは 10 年で滅んだが、その間に起こった変化は非常に多い。細かい変化は後述することにして、まず古アルカ全体を通しての特徴を述べる

古アルカのもっとも際立っている特徴は幻字であろう。これは漢字のような表意文字であるが、漢字の形声文字と同じく表音的な特徴も持ち合わせた文字であった。特にアルテの名などを記す際やオノマトペを表わす文字は形声文字の性質を持つことがあった

幻字の特性は漢字と違って直線と曲線の区別が明確で、直線か曲線かで意味が変わる字が多いということである。流線型の字が多いため、角ばった漢字とは違った視覚印象を受ける。流れるようで美しいという見方もできれば、直線と曲線を区別するので見分けが難しいという見方もできる

次に思想的な面から古アルカの特徴を述べると、古アルカはアルシェという団体のために創造されたという点が挙げられる

音声音韻面ではランティスの属す言語文化を尊重しあうという風潮だったために、様々な音を音素として認めた歴史がある。しゃっくりなどを表わすたった数語のためだけに認められた音素があったほどの徹底振りであった。その他、統語面等については後で詳しく述べる

他にも古アルカの特徴を挙げるとすれば、その変化の早さを挙げることができるだろう。たった 10 年の間に極めて多くの変化が起こったため、前期アルカとメル・アルカでは殆ど共通点がないようにさえ思えるほどである

たとえば「私は死んでいない」ということを前期アルカでは[del jan de matalo]というが、同じことをメル・アルカでは[non den laat]という。これを見れば古アルカの変化がいかに劇的だったかが伺えるだろう

2－4：古アルカ衰退の原因と過程

古アルカが生まれたメル 2 年の時点では、古アルカはまだ一つの言語と呼ぶべきか悩むような状態だった。というのも、殆どの語彙はリーザ（使徒用言語案）の語彙やフィンランド語の語彙などのリディアが使える言語に加えて、日本語や英語からなっており、独自の語彙は殆どなかったからである。また、文法もあってないようなものであった

自然言語を語源とする語の多くはこの時代のものであり、かなり古いものが多い。このような語はできるだけ語源を調べ上げようとしているが、これが中々難しい作業である。たとえば日本語語源のものは細かいところはセレンにしか分からないし、フィンランド語

語源のものはリディアにしかわからない

ましてセレンの日本語は標準語だが、リディアのフィンランド語は標準語ではないため、ますますリディアにしかわからないものになっている。フィンランド語は非常に事情が込み合っていて、リディアによると日本などで手に入るような教科書は標準的な言葉遣いとはされてはいるものの、実際のフィンランド人はあまり使わないそうである。ところが外国人はその教科書で勉強してくるので、フィンランド人によっては普段の言い方を止めて、そういった外国人向けのフィンランド語で返してやるというような面倒な手間を取るそうである。リディアもそういった言葉遣いをする 1 人であるため、あるときは標準的に話したり、またあるときは普段通りに話すそうである

古アルカに流入したフィンランド語の多くはしたがって標準的なものと普段の砕けたものが混ざったものである。前者は辞書などでセレンも確認できるが、後者は確認のしようがなく、ただただリディアの解釈を待つのみである

第一改定後には文法もある程度固定され、語順も定まったが、それ以外は依然として変わらなかった。第一改定に際しては文法の取り決めと、セレンが神無アルカのために独自に作った表音幻字の参入を行った。当時、古アルカの語彙は増えていたが、それに合わせて幻字は増えなかったため、増えた語彙を表現する方法がなかった。この表音幻字はそれを補うために作られたものだった。ところが、この表音幻字はあまりに日本語と英語に傾倒したものだったために好まれず、殆ど使用されなかった

ところが、この表音幻字は後になってから効果を発揮した。そもそも幻字は音を表さないため、幻字が何と読まれていたかを知る方法が少ないことが古アルカ研究の弱点である。中期になると『制定語彙』によって幻字の IPA での読みが記されたが、それまでの資料で幻字の音を表わしたものはなかったのである。しかし、この表音幻字を使用する前に実験としてある程度の文章がこの表音幻字で書かれたことにより、一部の幻字の読みが分かったのである。この表音幻字は人気がなくてそもそもの目的は果たせなかったものの、こうして後の古アルカ研究の役には立ったのである

さて、メル 6 年ごろになって中期アルカに入ると急速に自然言語の語彙が排他されはじめ、アルカ独自の語が増えた。また、新たな語には新たな幻字が考案されるようになった。尚、語順は急激に SVO になっていった。動詞には時制がつくのですぐに動詞だとわかるが、名詞はそうでないので、従来の SOV 語順だと S と O の分かれ目がわかりにくいという問題があったためである。そこで SO 間に V を挟み、SVO の語順になっていったのである。それに伴って後置詞も前置詞に代わっていった。が、形容詞や副詞などはすんなりと移行せず、その後長きに渡って前置も後置もされた

メル 9 年になり、後期アルカになると、増えすぎた幻字の収拾がつかなくなった。エリア（水）とエーホ（氷）のように形が完全に同じなのに直線か曲線かで意味が異なるとか、線が一本足りないと別の字になるとか、画数が多く複雑で覚えられないとか、図形が複雑すぎて覚えられないなど、多くの問題点が浮上した

また、同時期にカーデに使用する幻字がどんな形の字であるかしっかりと制定して欲しいという依頼がフルミネアからあった。そこでセレンはメル 9 年オヴィの月ラヴァの日に『赤アンクノット』を作成しはじめた。『幻日辞典』の ver2.1 の語源欄に「古アルカ」と書いてあるものはほぼこのノートから取っている。『赤アンクノット』には当時のアルカに使われていた幻字と意味が載っているが、その数は全体の一部でしかない。当時、アルカは団体上の最大秘匿事項だったため、『赤アンクノット』はアルシェに作成の許可を取った上で錠付の机に保管しておいた

ところで、この頃になると古アルカの複合語は語形が長くて使いづらいという実用上の問題も浮上した。後期になって古アルカには小説や学術論文の訳に伴い、更に語が増えたが、その殆どは複合語であり、音形は長く使いづらかった

加えて和平後はアルカ・エ・ソーンがアルシェに通じないという大問題も浮上した。語はいうまでもなく、統語においても中国語的兼語文がソーンにだけはあるという点などでアルシェとの違いを見せた

和平以降はアシェット内で言葉が通じなくなるのはよろしくないということで、アシェットのアルカを互いに近付けるように変えていくという動きが起こった。このとき最も貢献したのはアディア双方に人脈のあるメルであったため、このアルカをメル・アルカと呼ぶ

メル・アルカには上記の兼語文が入るなど、統語も若干変わった。が、例えばアルシェが従来「アシェット」という語を使わなかったように、思想上の問題で互いに使わない語があった。また、基本語は使い慣れているため、互いがそれぞれの語を使って良いという決まりがあった。こうした中途半端な改革のせいもあってメル・アルカは失敗に終わった

古アルカの高級語は殆ど基本語の組み合わせでできているため、基本語は各々の語を使って良いなどという決まりを作ったら、事実上何も語が変わらないことになる。案の定、メル・アルカでは殆ど互いの語彙は変わらなかった。結局、ソーンが必要に迫られてアルカ・エ・アルシェを少し学んだという結果になった。これでは和平の象徴にならないということで、アシェット内で猛反発があった

加えてランティスがそれぞれ違う母語を持つので、古アルカの音声学・音韻論はいつまでたっても不安定だった。例えばセレンが「シ」だと思っている音を他人が話すとまるで「シュ」のように聞こえたりして、「存在する」という意味の xal という基本語でさえ、人によって異なった。その異なりは誤解を招くほどで、しばしば問題を招いた。また、数例にしか使わない入破音のような音声の存在のせいで音素数が無駄に多いということも問題になった

そこで、リーザはセレンに全く新しいアルカの創造と制定を依頼。それまでにセレンは何度もアルカを改定したことはあったが、今度は新しいアルカを作ってそれを公式言語として制定してほしいとのことだった。セレンはその要請を受諾し、メル 11 年ルージュの月リディアの日にクミールと会見し、制アルカの作成を一手に任せるように依頼。制アルカ

創造は以上の問題点の解決とアシェットの和平のために発足された
　改善点は――
「幻字による混乱をなくすためにも表意幻字を廃し、表音幻字を擁立する」
「使用する音素数を軽減して、口頭における実用時の誤解を避ける」
「語形が長いので短縮する。それによって古アルカと音形がかけ離れても構わない」
「アルシェ・ソーンのどちらかに偏らず、語をなるべく公平に取り入れる」
――などである。逆を言えば以上が古アルカの満たしていなかった点であり、わずか 10 年で衰退して滅んだ原因といえるのである

3－1：制アルカとは

　制アルカとはアシェット内の相互理解を可能にするための全く新しいアルカである。制アルカはリーザの要請を受けてセレンが創造・制定したものである
　アルシェとソーンが意思疎通できるように作られたアルカには他にメル・アルカがあるが、実際はソーンがアルシェのアルカを覚える形が多く、メル・アルカは状況を好転させるものではなかった。その状況を重く見たリーザはセレンに全く新しい人工言語の作成を要請。メル・アルカは強制力が弱かったために思ったほどの効果が出なかったと考えたリーザはセレンに言語を創造するだけでなく、その言語を皆に使わせるように制定することも依頼した。だから制アルカの規約は上記のように厳しいのである
　古アルカの作成者は誰と決めがたいが、制アルカの作成者はセレン一人である。セレンが一人で作ることによって妥協や混乱や例外をなるべく押さえ込めたり、修正が容易にできるという利点があった
　一度アシェットに制アルカを公開してしまうと修正がしづらいので、セレンは公開に至るまでに何度も試案を作成した。そして公開後は周りの反応を取り入れ、更にそこから変更を加えていき今に至る。そのくだんのタイムテーブルを以下に記す

3－2：制アルカ制作過程

メル 11 年ルージュの月リディアの日：セレン、クミールと会見。セレンに制アルカ制定をまかせるように交渉。クミールはこれを飲む

メル 12 年春：セレン、制アルカプロトタイプを作る。周りから要求の高かった幻字の表音化を構想に入れた。実験ということがあったので抵抗なく文字にアルファベットを使用。しかし、被験者であるメルが強くそれを拒んだため、幻字から音を取った表音文字を作成。これはたとえば幻字 dia（夢幻）は[d]を表わすといったものである。文法は簡便で、SVO 型。アクセント体系は強弱と高低のハイブリッド型

同年ラルドゥラの月ごろ：セレン、プロトタイプの文字を筆記体のものに変える。全て一筆書きで書けることを主眼とした。メルはこれを使い、膨大な量を翻訳し、使い勝手の悪いことを指摘した

同年ザナの月ごろ：セレン、フゥシカと会見。表音文字化することを決定。古アルカの幻字は表音文字として残すことという方針を決めた

同年ザナの月クノンの日：セレン、フゥシカと会見。子音 m,ʃ,h,s,y,k,f,n,w,t,p,ts,l,r の順で文字を作成。多くは古アルカ幻字から取られている。たとえば h はハルマの幻字から取られている。これを筆記体で用いるということを定めて、コンピュータ用のフォント作成をフゥシカに依頼

同年ミルフの月リュウの日の日本時間で宵：ミルフの月レレゾナの日の〆切に間に合わせようとセレンは焦って仕事をしていた。フゥシカから文字についてのメールを受け取っている

同日深夜：アメリカでのテロ発生を知る

同月メルの日の早朝以前：セレン、ウィザード達から連絡を受ける

同日夜：アルシェ・ソーン及び関係者全てが揃い、最大 4 年間の凍結宣言をする。同時にメルはセレンに最終論文を個人的に譲渡。論文名は『大好きなお兄ちゃんへ』。それまでにあった文字に関する 6 大原則はこうだ
1：アルファベットなどの既存の文字に似ない
2：書きやすい
3：書くのが速い
4：汚くても他の字と混同しない
5：一部がかけても何の字かわかる（フゥシカ案）
6：見た目が綺麗
　このうちからメルが論文中で選んだのは、2 と 4 と 5 だった。3 は 2 が含意するだろうとのこと
　メル最終論文には、「[ts]は 2 重子音だから現状に合わせるなら選択すべきではない」「音節数が少ないから、子音字の回りに母音を表わす斜線を付加するような音節文字の体系を取る」「[h]はソノリティが弱いので排除する」といったものがあった

同月ミルフの日：メル最終論文に基づき、字案を作成。子音は 10 種で、母音は 5 種

同月ファーヴァの日：字案をフゥシカに提出

同年ファーヴァの月メルの日：字案に基づいたフォントをフゥシカより受領

同年ルージュの月ラルドゥラの日：ラルドゥラがセレンに会見。セレンは子音を 18 種に **(凍結中の会見は違反なのでこの部分は翻訳時に削除してください)**

同月未明：フゥシカに新たに字案を提出

メル 13 年初頭：セレン、[w][y]を増やす。音節数は 98 種に。フゥシカに修正して字案を提出

同年クリスの月リディアの日：フゥシカよりフォント『最終案件』を受領

同月 1 週目：制アルカプロトタイプをアルシェ・ソーンに提出

同月ラルドゥラの日：『最終案件』の修正版をセレンのパソコンにインストール完了

同年ギルの月ウムトナの日ごろ：セレン、リーザと会見。『俺案』に対抗して使徒全員が改定案を提出してきた。全ての語が CV（V は 2 重母音 25 種を含めた計 30 種）の音節構造になる。[y][w]を除く代わりに英語の/r/の音を入れて、音節数が 19×30 にアクセント高低の 2 種をかけた計 1140 種になるようにした。セレンはそれに合わせて文字案を考慮したが、それなら単音文字にしたほうが良いと判断

同月ジールの日：セレン、クミールと会見。アルシェ・ソーンの全員が集結。クミールは、ソーンのコンセプトと制アルカプロトタイプが違うことに遺憾を示し、セレンに全面改定を要求。一方、セレンは和平反対派から強く改定要求をはねのけるように要求される。制アルカプロトタイプはアルシェ内においてさえ支持されなかったこともあって、改定要求を呑まざるを得なかった。クミールはセレンに依然として制アルカを一任することを表明。これに応じてセレンはクミールの要求をほぼ全面的に呑んだ

　クミールはノシロ語という人工言語をセレンに URL と共に教えた。ノシロ語はコンセプトが制アルカプロトタイプによく似ており、このコンセプトで行くと制アルカがどのような言語になるかという見本になるということで推薦された。そしてノシロのコンセプトと同じようなコンセプトを期待していないということをクミールは強く主張した

同年ザナの月メルの日：この日までにセレンはリーザに言われていた目標 5000 語のチェックを優に超えた 12000 語のチェックを終了する。チェックとは(株)アルクが定めた「SVL 標準語彙水準 12000」に記載された英単語に相当する単語が『幻日辞典』に記載されているかを調べるという内容で、記載されていなければ単語を作成するか、或いはその単語は必要ないと捨て置いた。この時点では使用する音素は決まっていたものの、文字案がまだ固まっていなかった

同年ファーヴァの月ミルフの日：セレン、筆記体に対応する文字にするために母音の形を変える

同月ジールの日：セレン、筆記体の存在を否定し、母音の形を戻し、動詞と時相詞を繋ぐ動詞媒介辞の文字を作る

同月アッシュの日：セレン、制アルカ用フォント tiphac を作成

同月ネーネの日：セレン、画面に現れる文字のギザギザを取り除いた制アルカ用フォント dien を作成

同月ピネナの日：セレン、Word で作成していた『幻日辞典』ver2 を打ち切り、電子辞書化する計画を立ち上げる。計画には既に所有している PDIC を使うことにした

同年ルージュの月ミルフの日：セレン、PDIC に登録開始

同月ンムトの日：セレン、制アルカの概説書『制定言語アルカ』の執筆を開始

メル 14 年オヴィの月ザナの日：セレン、Word の内容を PDIC に移行完了。同辞書の修正にかかる

同年クリスの月：クミールがセレンが公表した少ない制アルカのデータから制アルカのイントネーションと高低アクセントについての理論を発案。その案では、純粋な高低の 2 段階しかなく、カタセシスもピッチの自然降下も認めないため、抑揚が極めて少なかった

同月：セレンはクミールの案に反対。常時は HML をの 3 段階の高低を有し、句末音調によって SH、SL の 2 段階を更に設けた 5 段階の体系を発案した

同年ギルの月オヴィの日：クミールはセレンの案に反対。M を除いた 4 段階にすべきと主張しなおした。更にそのときの伝達者であるリディアはクミールの新案について反対し、別の話に持っていった

　リディアは無アクセント語の頻度が高いことを面倒だと主張した。無アクセント語は書くのも読むのも打つのも面倒で、廃止してしまえば良いといった。更に有アクセント語も不必要だと述べた。セレンはメルを交えて話し合った。メルは半分リディアの意見を取り入れた。有アクセント語は廃止しても良いが、無アクセントは残すといった。しかしリディアは無アクセントがあることによってピッチの自然降下やカタセシスが阻害され、イントネーションによる表現の幅を狭めていると主張し、無アクセントの廃止を主張した。セレンは実験的にリディアの意見を取り入れることにした

　加えてリディアは動詞を含む全ての語のアクセントを第 1 音節に置くことによってアクセント記号を完全に排他できるとまで主張した。セレンはリディアのそのフィンランド語的発想を拒絶した。制アルカが自然言語に蝕まれるからである。しかし、より単純なシステムを取れるならその方が良い。イントネーションやポーズなどで誤解を解消できるならその方が良いとしてこれも実験として取り入れることにした

同月クリスの日：セレンは前日のリディアの主張を実験的に取り入れ、制アルカの調整に入った。この際、コプラの a と接続詞の a が区別できなくなるので、前者を at などとした

同月エケトネの日：セレン、自動詞を表わす手段を接頭辞 o に委ね、自動詞を語彙的な統語手段で表わすようにした

同年フルミネアの月ピネナの日：セレン、『幻日成句辞典』と『日幻文例辞典』を PDIC で作成開始。『幻日成句辞典』の最初の登録成句は varte asort-ik で、次は oxt-i las。『日幻文例辞典』の見出し語は Thw Japan Times の『日常英会話 5000』に準拠した。また、『日幻文例辞典』の見出し語は「ひらがな：漢字仮名混」という『日幻辞典』の方式を却下して、漢字仮名混にした

同年リュウの月エンナの日：セレン、Thw Japan Times の『日常英会話 5000』に収録された日本語文 4300 文を『幻日文例辞典』に訳し入れ終える

同月アッシュの日：セレン、『幻日文例辞典』の経験により、制アルカの不備を修正する。自動詞を作る接頭辞の o を廃し、受身を作る a も廃した。同様に能動の i も廃した。受動は複数の se と同じく強弱を設け、語彙的な場合は強で、接頭辞 yu を使うようにした。また、統語的な場合は弱で、純詞の yu を使う。また、純詞 mip などの動詞からの遊離を実現。純詞によっては文頭・文末に来ることが可能になった。更に、使わなかった意味時相詞を取

り上げて廃した。連続・反実・排他反実・推量・伝聞・自発・試行・使役・経験時相詞を廃したのである。また、ソノリティの問題から、禁止依頼の if は ol に変えた。同じく、勧誘も意外に多用したので言いにくい ec を止め、ar に変えた

同月ピネナの日：セレン、予め使徒から出ていた、後期ごろに乱発した語頭子音連続は言い辛いものが多いので語頭子音連続はできるだけ抑えてほしいという要望を踏まえ、古アルカに少なかった語頭子音連続を廃し、制アルカ作成時にできたが発音しづらかったために避けられた語頭子音連続を廃して、類音の語頭子音連続は gr→kl などのようにできるだけまとめることにした。これによって語頭子音連続はかなり減った

　更にセレンは意味時相詞に純時相詞を後続させることを再度却下しなおした

同年ザナの月エンナの日：パルサー、『幻日単語帳』を『幻日辞典』より蒐集。約 4000 語が収録されている

同年パールの月ミルフの日：パルサー、『幻日機能語帳』を『幻日辞典』より蒐集。純詞、接続詞、格詞などを取り揃えたもの。同日完成。セレンが受け取り、内容を確認、修正。372 語収録

同月セレンの日：セレン、『幻日辞典』を作成開始。従来の『幻日辞典』を改訂したもので、セレンによる発案

　作業時の名前は『改訂幻日辞典』。従来のものは単語帳と雑記帳的性質が強かった。そこでセレンはジーニアス英和などを、既存の辞書を参考にあるべき幻日辞典の姿を描いた

　最大の変更点は定型化された形式による記述。始めに見出し語語義がきて、次に分綴がきてなどといった順序を定型化した

　内容の強化は語源を強化し、文型情報を語義ごとに明記し、品詞別に語義を分けた

　また、これまでは殆ど皆無に等しかった用例を強化した。ほぼ全ての語に用例が付してある。用例はコロケーションをすぐに確認できるものと、実生活でそのまま使えるという 2 点に注目して蒐集した。尚、成句は別に品詞ごとにまとめて収録した

　その上、語法や文化項目を設け、見出し語にレベルを付けた。これらは従来は「＊」という記号の後に書かれており、区別が明瞭でなく、読みづらかった

　編集主幹・総責任者はセレンで、本辞典に関する全ての権限を持つ

同年ファーヴァの月リュウの日：セレン、制アルカに急上昇・上昇・平・下降・急下降・昇降・中止という 7 種のイントネーションを認め、それぞれの表記法を制定。全てガコン・クーノステイラ・テンペラで表現される

同月ザナの日：セレン、『アルカ』を執筆開始。アルカに関する最大規模の文献を目指したもの。『制定言語アルカ』を基盤とし、それに必要な記述を加筆したもの

3－3：制アルカの特徴

・人工言語であるが故に全体的に構造が単純であり、学習が容易

・全てを法則的にするのでなく、その言い回しの頻度によってオクシデンタルのように例外を認めている。それによってエスペラントより合理的な言語になっている

・幻字と呼ばれる固有の表音文字を使う。この文字は制アルカの 25 種の音素に対応しており、英語のようにスペルを見ても読み方が分からないということはない。その上、幻字はアルファベットに比べて効率良く書けるので合理的である。尚、幻字のアルファベットへの転写も可能である

・単純な膠着語システムを随所に盛り込んでいるため、習得が容易である。これは英語やドイツ語とは違って覚えづらい屈折がないということを意味しているわけであり、それを知っただけでも制アルカが習得しやすいということが分かるだろう

・造語法が非常に単純。これは人工言語が陥りがちな過論理な造語法を全て排除することによって実現した

・命題依存・主観的客観などの思想により、言語運用も容易なものになった

・制アルカの語彙は特定の自然言語文化に偏っていない。ほぼ全てラルクから来た語である。従ってエスペラントのような西洋人工言語ではなく、万民に対し平等なものである

・時相詞や純詞などを使った幅広い表現が可能

・人工言語であるが故に様々な面で自然言語より論理的にできており、厳密な表現が可能

3－4：習得の容易性と合理性の合間

　以上をみれば自ずと分かるだろうが、制アルカは人工言語なので、自然言語にありがちな覚えづらい規則や数多ある例外を極力覚えずに済む。しかも複雑な屈折もない。単純な膠着からできた言語である。従って、覚えなければいけないことを最小限に留めている。

その点で制アルカは学習が容易である

しかし制アルカに比べるとエスペラントの方が若干覚えやすいだろう。エスペラントが覚えやすいのはエスペラントが堂々と西洋語の語彙を使っているというところが大きいが、今問題にしているのはそれではない。制アルカはエスペラントより例外が多く、その分だけ余計に覚えねばならないという点である

ではなぜ例外が多いのかというと、学習のしやすさだけでなく学習した後の使いやすさという点にも注目したからである。言語はいくら覚えやすくても使いづらければ困る。一度覚えてしまえば後はそれを一生使っていけなければならないわけだけだから、たとえ多少覚えづらくても使いやすい方が長い目で見れば合理的なのである

しかしエスペラントはこの配慮をしなかった。徹底して学習の容易さを追及していったのだ。おかげで be 動詞の is に当たるものが estas という恐ろしく長いものになってしまった。estas は機能語にしては長すぎる。estas は英語では is だし、制アルカでは it である。3 者を比べるとエスペラントだけ長く使いづらいのが分かる

結局、セレンは学習の容易さを取るか運用上の便利さを取るかで悩み続けたわけである。そして、セレンはそのどちらも折り合いが付くようにバランス配分に気を付けながら制アルカを作っていったのである

このことは語においても同様である。例えば飛行機は jamp というが、これは janpan が語源である。janpan は jan(空)＋pan(乗り物)という意味である。勿論、学習者にとっては飛行機は jamp より janpan である方が覚えやすい。というのも jan と pan から想像が付くからだ。しかし飛行機は基本語なので、頻度も自ずと高い。それを一々janpan というのは面倒ではないか。そこで janpan から一部を削って jamp を飛行機としたわけである。このように、語においても制アルカは常に学習容易性のみならず合理性をも意識しているというわけである

3－5：制アルカは運用が容易

言語には運用しやすい言語とそうでない言語がある。学習者が生兵法で学んだ言葉をそのまま道端で使っても違和感がないかという点で運用しやすさを考えると、日本語は運用しにくい言語といえる。一方、英語はやや運用しやすい言語で、制アルカは極めて運用しやすい言語であるといえる

たとえば、ふいに誰かに殴られたときを考える。このとき日本語学習者が「貴方は私を殴りました」と言うのは十分ありえる。命題的には正しいからだ。しかしこれは談話的には不自然な日本語である。命題としては「あなた」が「わたし」を殴ったのだから上の文で良さそうなものである。しかし談話的にはこのような場合、「よくもやりやがったな」とか「なにしやがる」とか言う方が遥かに場面に合っている。このように、日本語は命題を命題のまま述べることをあまりしない。そのせいで日本語表現は非常に難しくなっていて、

辞書を引いて単語を繋げただけでは自然な談話を形成できないのである
　また、仮に「殴ったな」という表現を談話的に自然だとしても、今度は「な」という終助詞がどういうモダリティを表すかというのが学習者にとっては非常に難しい。更に「な」が「ね」に変わるとどう印象が変わるかなどと考えると問題はいっそうややこしくなる。加えて、助詞を削って「殴った」にすると途端に談話として不自然になることにも注意せねばならず、まことに日本語は運用がしづらい言語である
　一方、英語では今のような場合、場合にもよるが”Hey, you hit me!”ということができる。別に Hey は抜いても構わない。いずれにせよ英語では命題を命題のまま相手にぶつけても談話として少しも不自然でない。足を踏まれて"You stepped on my foot!"というのも同じである。従ってこういう場合においては英語は辞書を引いて単語を繋げただけで自然な談話が形成できる言語といえる
　さて、制アルカが自由に日本語と英語どちらかの立場を選べるとしたら、どちらの立場を選ぶだろうか。迷うことなく英語を選ぶに決まっているだろう。いくら個々の文法なり語なりが覚えやすかろうと、それらの運用が難しいのでは元も子もないからだ。そして事実、制アルカは英語以上に命題をそのまま相手に突きつけて自然な談話を形成することができるのである

第 2 章：歴史

1：初代アルカ

　アルカの語の中でもっとも古いものはどのような語であろうか。その答えは『カコ』に収録されている語である。たとえば semaim（紫陽花）などがその例である。このころの語がアルカの中ではもっとも古いものだが、『カコ』は一体いつごろの話であるかということは不明である。ただ、アシェットに継承された『カコ』という文献があり、その中に使われた語のいくつかがアルカに流入したことは確かである
『カコ』は初代アルシェとソーンの抗争を描いたものであるため、この時期の語を初代アルカと読んでいる。但し、アルカはメル 2 年に生まれたものであるため、初代アルカは厳密にはアルカではない。名前からアルカの一部だと誤解してはならない
　初代アルカは初代ソーンの作った花言葉を拡張した暗号としての人工言語である。機能語は独自のもので、内容語は全て名詞でできている。抽象的な概念は抽象的な名詞から派生させている。文法は単純。全体として使いづらく文が長い。暗号としては使えるだろうが、人工言語としては満足に機能しないと目される
　初代アルカは実際のところたった数語しか制アルカに残っていない。その数語も機能語には関与していない。ただ、ip は初代アルカでは桃という意味だったが、形状の類似から

尻という身体語彙になって制アルカに流入した。尚、古アルカでは尻は[u]である

2：先代アルカ

リーザがユーアの助けを借りて作った使徒用暗号。制作完了の年月日が明瞭で、彼女の日記によると、メルー9 年メルの月ジールの日にできている。この暗号には名がなかったのでセレンが先代アルカと名付けた。初代アルカと同じくこれもアルカの一種ではない

先代アルカの語彙は 10 数程度だとかつて思われていたが、派生する語や未知の語があったため、実際の語彙数は 100 を超える。ジェスチャーでも口頭でも筆記でも同様の命題が伝わるようになっているという点で特徴的である

先代アルカから制アルカに流入した語は em、dad、sor、xiv のような基本語が多く、jam のような身体語彙にも見られる。また hacma や rsiila など、アシェットに関する語彙にも流入している

3－1－1：前期アルカ

前期アルカはメル 2 年ザナの月メルの日からメル 6 年初頭までのアルカである。内訳は前第一改定アルカと後第一改定アルカに分かれる

前期アルカは様々な自然言語を混ぜたピジンという性質が色濃く、独自の人工言語といえる状況ではなかった。統語も 2 語文のごとき単純さで、単純に主語・述語の順番だった。音韻体系も全く確立していなかった。幻字も一時的なものが多く、通して使われたものでさえ変種に満ちていた。ほぼ言語というには怪しいような体系だったのである。また、このころの文献は殆ど残されておらず、専ら当事者の記憶に残るのみである

ただ、この惨状は第一改定を境に大分良くなっていった。第一改定を境にアルカは語順が定まり、幻字の変種もある程度統一された。また、幻字の読みもある程度統一されたが、音韻体系が確立されていないためにその試みは中途半端に終わった

3－1－2：前第一改定アルカ

メル 2 年ザナの月メルの日からメル 5 年初頭ごろまでのアルカ。もっとも原始的なアルカであり、文献は殆ど残されていない

前第一改定アルカに関する記録は唯一リーザが手帳に残していたのみである。手帳にはこのころ生まれた原始的な幻字が書かれており、その幻字の意味と IPA に準拠した音声が併記されていた。ただ、創造者のセレンとリディアがまだ 10 歳程度の子供だったこともあり、幻字の意味も音もきちんと固定化されていたわけでなく、一時的な絵文字が多かった。そのため加筆修正が増えてしまい、手帳が見づらくなってしまった。リーザはその内容を

纏め上げてノートに転写した。『リーザの日記』によると、そのノートを作成し始めたのはメル 2 年ミルフの月クリスの日のことである

ところがソーンとの抗争が原因でリーザはメル 10 年初頭にその手帳もノートも全て焼き払ったため、前第一改定アルカの文献は現存せず、わずかにリーザやセレンやリディアといった当事者たちの記憶に残るのみである。尚、このときの記憶の齟齬が元で意見の食い違いが生じることが多く、この点が古アルカ研究の難点にもなっている。前第一改定アルカにおいてはセレンやリディアはまだ 10 歳程度だったため、もっとも信用できるのはリーザであり、このころの研究はリーザに依存している。したがって以下の内容は主にリーザの記憶によるもので、必ずしも正確とはいえない

前第一改定アルカの幻字は身近で具体的な名詞とわずか数語の動詞と形容詞を表わしたものしかなく、機能語や代名詞の類はリーザが先代アルカから意図的に流入させた。したがってこのころは幻字の数は少なかった。また、このころの幻字は直線と曲線の区別もされていなかった

更に、音形を持って語としてきちんと存在していても、それに対応する幻字が生み出されないということが非常に多かった。そのためリーザはその幻字のない音だけの語を IPA で書き留めて意味を併記していた

前第一改定アルカの語彙は殆ど日本語かフィンランド語などから来ていた。たとえば「火」はライターを語源としてセレンが[rai]とした。ところがこの語もすぐに幻字が作られたわけではなかった

それと時を同じくしてリディアによる英語語彙の流入が起こった。セレンはフィンランド語が全くできないし、このころのリディアは日本語が上手くない。一方、リディアは英語ができるし、セレンは外来語という形で多少英語に慣れている。そういった事情で自然と英語語彙から流入していったのである。だが、英語が入ってくる程度は大したものではなかった

メル 3 年にオヴィを使徒として迎え入れてから、それまで日本語がアルカの語源として優勢だった状況が若干傾き、フィンランド語が以前より優勢になったが、それでも日本語の方が優勢だった。英語は以前としてリディアが流入を行っていた。アルカ独自の語は初代アルカと先代アルカを除けば少なく、制アルカに残っているもので言えば、オノマトペ由来の gii などで、非常に少数である

前第一改定アルカの統語は殆ど幼児の 2 語文のようなものであった。数語しか存在しない形容詞は述語として使え、繋辞はなかった。動詞も同じく数語しかなかったために、極めて 2 語文に近い状況であった。否定を表わす手段は語調と表情と身振りであり、険しい表情で首を横に振りながら強く言えば否定を表わした。疑問はイントネーションで表わした

メル 4 年になると対応する幻字のない語に次第に幻字が当てはめられていくようになっていった。しかしその幻字は変種に富んでいた。曲線と直線の区別は依然としてなかった

し、線が融合したり分離したりしても同一の字と同定されたのである。それを当時のアルシェは幻字は漢字に比べて美しいという主観的な評価で片付けていた

ところが必要な幻字の数が増えていくにしたがって次第に幻字の図形案が尽きてきたため、線の数が違えば別の字とするといった配慮をする必要性が出てきた。更に幻字の数が増えると今度は直線と曲線を区別するようになっていった。漢字と違って画数が多く複雑な図形を好まなかった幻字は漢字とは異なった進化を遂げていったのである。このことは後第一改定アルカを起こしたきっかけの一つである。ただ、幻字が増えたといってもこのころの幻字はどれも形が単純だったため、互いに文字が似てしまっていただけであり、実際の文字数はそう多くはなかった

3－1－3：後第一改定アルカ

後第一改定アルカはメル 5 年初頭ごろからメル 6 年初頭ごろまでのアルカである。使徒の増加によって彼らの母語から語彙や文法がアルカに流入したので、アルカ使用者が混乱した。その上、一つの幻字の読みがいくつもあるという状況であった。その結果何が正しいアルカであるかということを規定する必要性が出てきたのである

そこで、まず増えた幻字の変種を纏め上げるために文字の固定化を行った。また、幻字の読みも制定した。たとえば火を意味する幻字は[ɾai]を正しい読みとすると制定したのである。ところがこのころは音韻体系が確立していなかったために、セレンが火の幻字を[ɾai]だと思っている一方でリディアは[dai]だと思っているといった齟齬が起きてしまった。これによって幻字の読みの制定は失敗に終わった。更に言えばこのとき幻字が当てられた文字は少なく、多くは幻字が当てられずにいた

また、文法は日本語のような SOV 語順になった

尚、後第一改定アルカでは大半の語彙は自然言語由来で殆どがまだ使徒の母語や英語に起因していた。だが、その後中期になって現われる『制定語彙』を見ると自然言語由来の語は少ない。『制定語彙』が作成されたころは自然言語由来の語が排他されていたからである。もっとも、『制定語彙』のころも自然言語由来の語は多く使っていたが、それは収録されなかったのである。尚、英語からの語彙の流入が増えたのはこのころ機能語の流入に際して英語がメタ言語として使われていたためである

このように、後第一改定アルカでは正しいアルカの記述を規定していったわけであり、これを第一改定と呼んでいる

3－2－1：中期アルカ

中期アルカはメル 6 年初頭ごろからメル 9 年ギルの月ギルの日までのアルカである。内訳はメル 6 年初頭ごろからメル 7 年ごろの前クミール・アルカと、メル 7 年ごろからメル 9

年ギルの月ギルの日までの後クミール・アルカである
　中期になるとまずアルカは第二改定を経験する
　このころになるとアルカ独自の音象徴が生まれ、それによって自然言語に依存しないでアルカ独自の語を作れるようになっていった。その結果、形容詞などの語が増え、修飾法が発達した。それに呼応するように統語も変化していき、語順なども変化していった
　そして音象徴の成果が高じた結果、後クミール・アルカになると『制定語彙』が生まれた。『制定語彙』によってアルカは自然言語に頼らずに日常生活レベルの会話が実現されるようになっていった
　このように見てみると中期はアルカにとって自然言語からの独立という点で第二の誕生の時期だったということができる。事実、『制定語彙』の完成の後、急激にアルカによる翻訳や独自の文章の作成が行われている
　尚、中期アルカに関する文献もソーンとの抗争によって、その殆どが紛失している。当時の貴重な文献は後期に作られた『赤アンクノット』にある少量の記述等、少数の文献にしか見られない。しかも『赤アンクノット』に記載された情報は後期アルカと混在しているため、どれが中期のものか区別するのが難しい
　また、メル 6 年ごろから『幻想話集アティーリ』の原型ができあがってきたが、これが『幻想話集アティーリ』としての原型を保つには最低でもメル 7～8 年の『制定語彙』の登場を待たなければならなかった
　中期にできた『制定語彙』のおかげで『幻想話集アティーリ』の原型が整い、これによって神の物語が徐々にアルカに現われたり記されたりするようになっていった。その文献はリディアの所有するメモという形で現存している

3－2－2：前クミール・アルカ

　前クミール・アルカはメル 6 年初頭ごろからメル 7 年ごろまでのアルカである。メル 5 年の初頭に第一改定を行ったが、そこからの一年で急激にアルカが変化していったためにセレンが大きな改定を行った。これが第二改定であり、第二改定を境にアルカは中期に入っていき、前クミール・アルカの幕開けとなる
　前クミール・アルカでは統語が英語的になり、使用される音韻も次第に定着してきた。語彙は英語由来のものが淘汰される傾向になり、第三改定に至るまでに多くのアルカ語彙ができた。前クミール・アルカでは自然言語由来の語彙が排他されはじめ、アルカ独自の語が増えたのである。具体的にはアルカ独自の音象徴を創造し、それを根拠にアルカ独自の語を創造していったのである。そのときに新たな語彙が数多く生まれたが、それらの語の扱いはこれまでとは打って変わったものであった。それまでは新たな語ができても対応する幻字がすぐには作られないという状況だった。ところがそれでは困るということを過去に経験しているので、このときはできるだけ新たな語には新たな幻字が考案されるよう

になった
　アルカの音象徴によって急激に語が増えた結果、形容詞などの修飾語も発達し、主語や目的語が粉飾されて長くなるという傾向が生まれた。また、語の文法化が急速かつ意図的に行われていった結果、エクスプローダーや時制が発達しはじめた
　そうしているうちにSOVの語順だと困る事態が起きてきた。動詞には時制がつくのですぐに動詞だとわかるが、名詞はそうでないので、従来のSOV語順だとSとOの分かれ目がわかりにくいという事態である。そこでSO間にVを挟み、SVOの語順になっていったのである。それに伴って後置詞も前置詞に代わっていった。が、形容詞や副詞などはすんなりと移行せず、その後長きに渡って前置も後置もされた

3－2－3：後クミール・アルカ

　後クミール･アルカはメル7年ごろからメル9年ギルの月ギルの日までのアルカである。後クミール・アルカと呼ぶのは、ちょうどこの時期にクミールがアルシェの第12使徒に就任したためである
　後クミール・アルカでは特に大きな改定が起こったというようなことはない。後第一改定アルカや前クミール・アルカは改定によって発生したが、後クミール・アルカはそうではない。ではこのころに一体どのような特筆すべき出来事があったのかというと、それは『制定語彙』の制作と完成である

3－2－4：『制定語彙』

『制定語彙』はメル7～8年にかけてアルシェが大々的に作成した文献である。これまでの古アルカには生活に関する多くの語彙が欠けていたり、同じものを意味する複数の語が乱立していたりと非常に混乱していたので、それを整理したものが『制定語彙』である
　幻字のある語の殆どは古アルカの音の象徴からできた語であり、これらは純粋に自然言語と無縁である
　一方、幻字の用意されていない語の殆どは自然言語由来のものであり、この数は古アルカの語彙としては相当な数があったと思われるが、『制定語彙』が作成されたときは既に自然言語由来の語を排他する傾向にあった。そのため、『制定語彙』の中で幻字が用意されていないものは大体自然言語由来でなく、音象徴によってできたものである。自然言語由来のものは[rai][bande:][ko:mi]など、そう多くない。もっとも、『制定語彙』のころにも自然言語由来の語は多く残っていたが、それらは『制定語彙』に収録されず、歴史の影に隠されてしまっている。また、『制定語彙』には幻字の欄が空白になっていて、意味と読みだけが記されているものもあった
　ともあれ、『制定語彙』の出現によってアルカは飛躍的に表現の幅が広がった。また、『制

定語彙』は音象徴からできているため、音象徴を使えば今後も比較的容易に足りない語を作ることができるといった利点もあった

尚、『制定語彙』に使われた音象徴はメルがきっかけとなってリーザが発案してもので、当時のアルシェ全員とリーザがともに協力して作り上げた。『制定語彙』の作成も全員共同で行い、リーザが編集主幹となり、セレンとリディアがその補佐に当たった

また、『制定語彙』はリーザが幻字とその読みと意味を順にノートに記していったものであり、読みはリーザが耳で聞いたものと内省を通して IPA に変換したものである。後にセレンはそれを参考に『赤アンクノット』を記したが、読みはカタカナで書いた

『制定語彙』の原本であるリーザのノートは黒緑色のインクで書かれていた。『制定語彙』は使徒全員の手に渡って閲覧されて丁重に扱われたため、このことをきっかけに『制定語彙』はアルシェにとって最も重要な文献になり、同時にこのとき使われた黒緑色がアルシェにとって最も公的な色になった。『制定語彙』は全員が回し読みをしたが、本来ならば写本があったほうが便利である。だが、写本を作った場合は原本を廃棄しなければならないという使徒規則によってそれは叶わなかった

尚、『制定語彙』は 1 年以上かけて全ての使徒に回し読みされた。回し読みの際に予め使徒は『制定語彙』の暗記を命じられていたため、『制定語彙』の内容は全員が暗記していることになっている。また、写本と原本の共存は禁じられているため、『制定語彙』はその一部さえも別所に書き写してはならなかったため、暗記は必須であった

だが、実際のところ『制定語彙』に収録された語は 1347 語である。多くは複合語なので幻字の数は 611 字でしかないが、それでもこれを全員が暗記したと考えるのは現実的ではなく、写本の欠片がどこかに存在するものと目されている

全員に回し読みされた『制定語彙』だが、その後はリーザの手元に戻っていた。時折研究に際して使徒が閲覧していたが、『リーザの日記』によるとメル 13 年ラルドゥラの月フルミネアの日に事故が起こった。その日、『制定語彙』の原本はメルに貸し出されていた。メルはリディアから『制定語彙』を受け取って鞄に入れて帰った。ところが帰る途中で雨が降りだし、傘を持ってなかったメルは鞄の中の『制定語彙』を濡らしてしまった。『制定語彙』は水性インクで書かれていたため、およそ 4 分の 1 が判読不能になってしまった

リーザはその事件を受けてすぐに『制定語彙』の復旧を試みた。リディアなど、記憶力の優れた使徒の情報を元に『制定語彙』の判読不可能になった部分を耐水性のある紙に油性インクで復旧し、判読可能な部分はそのまま転写した。そして規則通り、原本のノートは焼却処理した。ところが復旧できたのは幻字の字形と読みと意味だけであり、ページの隅にびっしり書き込まれていた中期アルカに関するリーザの貴重な小書きは悉く失われてしまった

尚、現存する『制定語彙』はリーザの手元にあり、貸し出しは禁止されている。また、原本に記された IPA はメル 0 年ごろに改訂されたものに準拠していたが、写本にはメル 4 年ごろに改訂されたものが使われた

3－3－1：後期アルカ

後期アルカはメル9年ギルの月ギルの日からメル12年ザナの月ラルドゥラの日までのアルカである。内訳はメル 9 年ギルの月ギルの日から同年メルの月ルージュの日までの前ソーン・アルカと、同年メルの月ルージュの日からメル11年リュウの月エケトネの日までの後ソーン・アルカと、メル 11 年リュウの月エケトネの日からメル 12 年ザナの月ラルドゥラの日までのメル・アルカに分けられる

後期アルカになるとアルカはアルカ・エ・アルシェとアルカ・エ・ソーンという 2 つの分派に別れた。分裂以降は互いに互いのアルカを通じさせないように暗号性を帯びていったため、両者のアルカは互いに理解ができないものに変化していった

前ソーン・アルカのころに修飾法が確立し、複雑な関係詞節の作り方も発達した。また、幻字の変種も再度整理された

後ソーン・アルカは両者のアルカが離れていき、意思疎通が不可能になっていく過渡期である。この 2 年の間に両者のアルカは急激に、特にアルカ・エ・ソーンが急激に変化していったのである。実際のところ、後ソーン・アルカでアルシェに起こった重要事項は『高水準制定語彙』を除いてそう多くない

ところが和平が起こると両者のアルカが通じないことが仇になったため、両者の意思疎通を実現するためのメル・アルカが生まれた。メル・アルカではアルカ・エ・ソーンの特徴が流入したため、統語も語彙も変動が見られた

3－3－2：前ソーン・アルカ

前ソーン・アルカはメル 9 年ギルの月ギルの日から同年メルの月ルージュの日までのアルカである。前ソーン・アルカは第三改定によって生まれた。第三改定はフルミネアがカーデを作成する際に幻字の書き方が固定化されていることが必要だといったことに起因する。その要請を受けたセレンは『赤アンクノット』を記した。『赤アンクノット』を記念してそれまでうやむやになっていた統語上の変化なども合わせて制定することにした。したがって第三改定の本質は雑多な事項の整理にある

第三改定ではまず幻字の正しい書き方を制定し、更には正しい書き順も制定した。意味に揺れがある幻字も整理して、この幻字はこの意味だということを明確にした

また、統語的には曖昧に使われていた修飾法を発達させた。複雑な関係詞節の作り方も制定した。音声も母音は[a][i][o][e][u][æ][ɛ][ɔ][ɯ]の9種の音声を音韻として制定して、整理した。一方、子音は着手しなかった

こうして様々な事項を整理した前ソーン・アルカであるが、メル9年メルの月ルージュの日にクミールが反乱を起こしたため、前ソーン・アルカは3ヶ月ほどしか続かなかった

3－3－3：後ソーン・アルカ

後ソーン・アルカはクミールが反乱を起こしたメル9年メルの月ルージュの日からメル11年リュウの月エケトネの日までのアルカである
前ソーン・アルカが非常に短い期間しか続かなかったこともあり、後ソーン・アルカは事実上殆ど前ソーン・アルカと変わらない。ただ、ここを境にアルカ・エ・ソーンが生まれたという意味では里程標としての価値があるといえる
後ソーン・アルカで起こった主なことはアルシェの側では『高水準制定語彙』の完成、ソーンの側ではアルカ・エ・ソーンの誕生と『暫定語彙帳』の完成である

3－3－4：『高水準制定語彙』

メル 9 年オヴィの月リディアの日にリュウがアンクノットを作成しだしたことにより、古アルカの語彙を広げる必要がでてきた。改良点は 2 点。第 1 に語彙の拡充。第 2 に略語を正規の用法として認めること。これをしないと『制定語彙』を参考にしてできた語の語形があまりに長すぎて使いづらいため。これらの改良点を踏まえてアルシェは『高水準制定語彙』の作成を開始。ところが、同年メル 9 年メルの月ルージュの日にクミールが反乱を起こしてアルシェから離反したため、クミール率いるソーンに情報が漏れた場合に意味が分からないようにする必要性も新たに生まれた。こうした要求も踏まえた上で『高水準制定語彙』は作成された
アルシェは『高水準制定語彙』を作成する際に新たに語を制定しようとしたが、既に使われている音形が多いせいで語の制定が難航した。たとえば kal という語を作ろうとしても既に「場所」という意味で使われているため、kal は使えないといった問題が起こったのである。『制定語彙』などによって CVC の音節構造を取るものは大抵既に何らかの語が当てはめられていたのである。そこでアルシェは当時殆ど外来語を除けば使われていなかった語頭重子音を多用した
『高水準制定語彙』はリュウとリディアが編集主幹となって作成したため、あまりセレンは関わっていない。彼らは幻字の蒐集をし、意味と音の記述を行った。その方法はリーザによる『制定語彙』を踏襲した。音の記述はリディアが行った。リディアが耳で聞いたものや内省したものをIPAに変換して記述して言ったのである。尚、ここで使われたIPAはメル0年ごろに改訂されたものであるため、[ʕ]などという記号が使われている。ところで、現存する『制定語彙』のIPAはメル4年ごろに改訂されたものを使っているが、これでは時間が前後するように感じられる。なぜ『制定語彙』より新しい『高水準制定語彙』に古いIPAが使われているのであろうか。それは『制定語彙』がメル13年ラルドゥラの月フルミネアの日に損傷したことにより写本を作ったためである。写本にはより新しいメル4年ごろに改

訂されたIPAを使ったのである。尚、現存する『制定語彙』はこの写本で、原本は使徒規則によって焼却された
『高水準制定語彙』は『制定語彙』の失敗を活かしてはじめから耐水性の紙に油性インクで書いていった。その結果 887 個の新字と 4756 個の単語が生まれた。原本はルティア家が保管している。これも一度全員に閲覧させて暗記させたが、それ以降は持ち出しも貸し出しも禁止されている。やはりこれだけの数の語は暗記できるわけがないので、どこかに写本が存在すると目されているが、誰がどれだけ所有しているのかは不明である

3－3－5 :『赤アンクノット』

『赤アンクノット』はメル 9 年オヴィの月ラヴァの日からセレンが作り出した文書である。フルミネアがカーデに使用する幻字の正しい書き方を制定してほしいと依頼したことにより作成した。なぜ赤というかというと、原本の表紙が赤いノートだからである
『赤アンクノット』には幻字やその意味と音などが記載されている。また、中期と後期アルカに関する小書きも多数記載されている。だが、そうした記述の中にはセレンがアルカの改革案として唱えようとした案の小書きや、後に『幻想話集アティーリ』でリディアの時代の原型となる『小説版アンクノット』に関する小書きも多く含まれており、どれが実際のアルカの記述でどれが改革案にすぎなかったのかという区別が明瞭でない。また、作成者のセレンも忘れていて両者の区別ができなくなっているため、『赤アンクノット』の小書きはあまり信用すべきではない
　尚、『赤アンクノット』に収録された語数は 695 語である。これらは幻字とその音と意味が記載されていて、このうちのどれかが欠けるものは数に入れなかった。695 語の内訳は一般の語とエクスプローダーと前置詞である。前置詞とエクスプローダーの一部の幻字は一般の語と重複がある。一般の語数は 594 語、エクスプローダーは 89 語、前置詞は 12 語である。594 語のうち 50 語が複合語で後の 544 語は単純語である。したがって幻字の数は 544 字である。一般の語と重複しない前置詞の幻字はケイマ、ヒュヒュ、モモ、セセ、フィーナ、ムトの 6 字である。前置詞には他にもケケルなどがあるが、これらは複合幻字なので 1 つの幻字とは数えなかった。したがって幻字は 550 字である
『赤アンクノット』は原本が存在し、セレンが保管している

3－3－6 :『青アンクノット』

『青アンクノット』はメル 9 年ファーヴァの月セレンの日から作成しだした文書である。『赤アンクノット』の姉妹品であり、主に中期から後期のアルカに関する形態論や統語論についての情報が書かれている。『小説版アンクノット』などに関する記述と混同が残っていて、『赤アンクノット』と同じように過信してはならないが、『赤アンクノット』より情報はア

ルカのことに限定されていて、『赤アンクノット』より信用に足る記述である。尚、なぜ青というかというと、『赤アンクノット』と同じく表紙が青いためである
『青アンクノット』の原本は現存し、セレンが保管している

3－3－7：メル・アルカ

　メル・アルカはメル 11 年リュウの月エケトネの日から、メル 12 年ザナの月ラルドゥラの日までのアルカである。アシェットの和平以後、アルシェとソーンのアルカが通じないことが問題となった。そこで両者を折衷したものメル・アルカが起こったのである
　メルは当時アルカ・エ・ソーンを話せることからアルシェとソーンの通訳として活躍していた。メルはそのときの経験を活かし、メル・アルカをセレンと協力して作り上げていったのである
　当時のアルカ・エ・アルシェとアルカ・エ・ソーンは基本語から既に異なる点が多かった。たとえば前者では紫は[alhoːra]というが、後者では[lejemme]というように。これは問題だが、当時のアシェットはようやく和平が成立したのだから、どちらのアルカを残すかということでせっかくの和平を崩したくなかった。そこでメル・アルカには基本語は自分の団体のものを使って良いという決まりがあった。ところが基本語を変えないということは基本語を元にしてできた高級語もまた変わらないということであり、結局両者の語彙はどちらも変わることがなかった。紫という同じ指示対象を表わすのに[alhoːra]と[lejemme]という 2 つの語形が共存するのは非合理的である上に、アルシェは[alhoːra]しか知らないし、ソーンは[lejemme]しか知らないというのでは依然として意思疎通は不可能である。こうしてメル・アルカは中途半端に終わってしまった
　ただ、メル・アルカが原因でアルカ・エ・アルシェにそれまではなかった変化が訪れた。つまり、アルカ・エ・ソーンとの融合である
　まず、幻字の整理統合が行われた。アルシェとソーンで意味の異なる幻字と、意味は同じだが幻字が異なるものと、どちらかにしかない幻字の 3 種をセレンはクミールと整理統合していった。どちらかにしかないものは大抵取り入れた。アルシェとソーンで意味の異なる幻字は同じ幻字の新語義にするか或いは別の字にした。意味は同じだが幻字が異なるものは協議してどちらかに合わせていった
　次に、統語面では兼語文が現われた。それまでは「私はアルシェのルシーラのセレンだ」という文を"an de seren, rsiila e arxe"といっていたが、兼語文により"an de seren de rsiila e arxe"ということが可能になったのである
　形態面でもエクスプローダーが副詞に吸収されるという変化が起こった
　また、使徒の数が倍増したことにより、これまでに耳慣れなかった声の人間と付き合う機会が増えた。旧来の使徒の発音には皆慣れていたが、新たな使徒の発音は慣れていないため聞き取りにくく、今までの 9 母音体系を保つことができなくなった。聞き分けられる

母音の数が減少していき、母音の数は急激に減少していった。まもなくアルカの母音は現在と同じ5母音に減少していった。尚、メル・アルカの母音を7や6と捉える立場もある

メル・アルカはアシェットの和平の象徴だが、和平を象徴するものは他にも多く、この時期のアルカによる作品はアシェットの和平に関連するものが多い。『ミールの書』などは好例である

尚、メル・アルカの文献は和平以降なので償却する必要がないため、比較的残っている。現存する古アルカの資料の 8 割以上がメル・アルカの資料である。メル・アルカの時代に作られた資料は多数あるが、中でも最大なのはセレンの著した『ミールの書』である。これはリディア・メル・リーザなどが翻訳に当たった。原本は日本語で書かれており、50 万字ほどの内容になっている。但し、メル・アルカに翻訳されたのは一部であり、全てではない

3－3－6 :『幻想話集アティーリ』

メル 6 年に、それまで散在していたリディアによる空想のキャラクターたちがまとめてアルテと呼ばれるようになった。そういった登場人物は強大な力を持っているとされていたため、速やかに神格化がなされた

アルテの存在は古アルカ以前からだったが、セレンが初めてその存在を知ったのはメル2年を過ぎてからだった。前期アルカではアルテはリディアが創造したただの空想の人物なのでリーザもセレンも特に注目しなかった。殆どのアルテは一時的なもので、創造されては忘却されていった。リディア本人も一時的に作り上げた人物が多く、一々それらの設定や名前を覚えてはいなかった。こうして記録に残されなかったアルテが殆どだった

やがて中期アルカが近付くにつれ、幻字の数が軒並み増えていった。それに合わせて、セレンやリディアなど、使徒の名を表わす幻字が生まれていった。また、その影響でアルテの名を表わす幻字も生まれていったのである

前期に忘却されなかったアルテの数はエルト・サール・アルテ・ハーディスなどそう多くはない。これらを書き表す幻字は前期にはなく、リディアの描いた絵という形で保存されていた。その名はセレンやリディアの記憶に留まる限りであるため、記憶違いで変化している可能性がある

中期になってアルテの名にも幻字が付くようになると、アルテの名も『制定語彙』に収録されることになった。『制定語彙』に収録されたということはリーザによってIPAの読みが付されたということである。ここに至るまでアルテの名は記憶の中にしかなかったため、変化が生じていた可能性があるが、『制定語彙』に記録されたことによってようやくアルテの名が固定化されたのである

中期になって幻字が増えたおかげでアルテは創造されては消えということが極端に減った。また、それまではリディアの絵だけがアルテの情報だったため、2人のアルテが同一だ

と混同されていたり、或いは逆に 1 人のアルテが別の人物だと勘違いされていたことも多かったが、幻字と『制定語彙』のおかげでそういった誤解もまた極端に減った

また、アルテの名が確立することによって、それまで一時的な存在でしかなかった多くのアルテに細かな設定を持たせることが可能になった。更に、テームスについても同様で、これらも数を増やしていった。そうこうしているうちに神の数は増えていき、後の『制定語彙』に記録されただけでも神の数は 136 人に上る。ただ、このうち幻字が当てられている神はたった 21 人で、既存の幻字の組み合わせで書かれた神が 75 人で、残る 40 人の神は幻字がなく音と説明だけが収録されていた。幻字のない神の多くは既存の幻字の組み合わせでは説明しづらい特徴を持った神だった

幻字の組み合わせというのはたとえば「火」という幻字と「テームス」という幻字を合わせて悪魔ベーゼルを表わすといった類のもので、ここでの幻字は音でなく意味を表わすものとして機能していた。悪魔ベーゼルは火を操る悪魔なのでこのように既存の幻字から作ることができた。ところが、アーディンのような神はそうはいかなかった。アーディンは鈴蘭を司るが、鈴蘭を意味する幻字がないためである。それでアーディンのような神は音と意味のみが残され、幻字は与えられなかった

『制定語彙』の後、幻字のない文字がいくつも現われた。『制定語彙』では幻字を当て切れなかった語や神である。これらには徐々に幻字が付されていったが、神の名は最後まで決まらなかった。だが、こういった神の名が幻字にないということは、文章を書くとき彼らについて書くことができないということである。たとえばアーディンについて書こうとしてもアルカは幻字しか使わないので IPA を使うことはできない

その事態に最初に困ったのはリディアで、『制定語彙』を使徒に回し読みさせたときに、幻字欄が空白になっている神について質問されて答えに窮してしまった。そこでリディアは苦肉の策として既存の幻字の音を組み合わせて空白の幻字の代わりにした。たとえば、アーディンは「アルテ」を意味する[arte]と「木の実」を表わす[din]の幻字で表わした。これでは[artedin]になってしまうため、一見意味が通じないが、使徒は『制定語彙』の IPA でその神の名が[ardin]だと分かっているため、すぐにこれが誰のことだか判別することができた

こうして『制定語彙』が完成した後でリディアの手によって続々と幻字のない神に幻字が付されていった。それとともにこれは幻字が表音文字として使われた瞬間でもある。幻字を表音文字として使うことで、これまで以上に自由に神を想像することができた

神が増えていくにしたがってそれまでまばらに存在していた神々の間に社会性や秩序を創造しようという考えが生まれてきた。たとえばエルトはルフェルが王であり、サールはアルデスが王であり、その下に様々な部下がいるといった神の社会が考えられた。また、エルトはサールと敵対していているが、テームスはエルトにとってもサールにとっても共通の敵であるというようなアルシェとソーンの類推から神々の対立関係も考えられた。更にそういった神々の関係から、神の戦争までが創造された。こうして生まれたのがエルト・

サールとテームスの戦争であるヴァステや、エルトとサールの戦争であるラヴァスという物語である

加えて、アシェットに継承されていた『カコ』という実話をこの神々の話の続編として繋げてしまおうという考えが生まれた。ただ、そのまま繋げたのでは物語性がないため、『カコ』をモチーフとしたフィクションを作り上げた上で続編としたのである

ここまでが中期から後期のはじめにかけて起こった出来事である。中期の終わりごろにはアルテは既に空想のキャラクターではなく、神格化された神であったため、使徒の間で信仰の対象へと徐々に変わりつつあった。だが、その時点では多くの使徒はアルテを信仰するということを馬鹿げていると考えたし、何よりアルテの信仰は使徒規則である宗教の禁止に反すると考えた

だが、アルテを信仰することがアルシェ内の団結力を高めると考えたリーザはこれを励行。リーザはメル 9 年オヴィの月ミルフの日にアルテに対する信仰を公的に許可した。これを受けたフルミネアはカーデの作成を決心し、同月ラヴァの日にセレンに幻字の整理を依頼した。このときに整理を依頼された内容には神の名の正しい記し方も含まれていた。依頼を受けたセレンは即日『赤アンクノット』を作成しだし、幻字の整理や記録を行っていった。だが、実際『赤アンクノット』には神の字は載せられていない。神の名は早くほしいとフルミネアから頼まれていたのでセレンは別紙で逸早く直接伝えたためである

ここまでが前ソーン・アルカであるが、この時点で現在の『幻想話集アティーリ』に収録されている殆どの内容は創造されていた。この時点で神の幻字も固定化され、更にはカーデもできたため、アルテに関する創造と研究はいよいよ本格的に花開くものだと目されていた。実際、セレンは同年ギルの月ギルの日にアルカの第三改定を行っており、これによってアルテの物語を膨らませていく手立ては整ったのである

ところが同年メルの月ルージュの日に起こったクミールの反乱によってアルシェとソーンの対立が浮き彫りになってしまい、アルテに関する創造と研究を続けることが叶わなくなってしまった。アルシェはアルテの研究に割く時間を『高水準制定語彙』の作成に全て充当したし、ソーンは専ら自らのアルカを変えることに専念していた。後ソーン・アルカである。ここからメル・アルカに至るおよそ 2 年の間は『幻想話集アティーリ』にとって暗黒時代であった。この間に『幻想話集アティーリ』は殆ど発展しなかった。だが、互いに対立したことによって両団体は緊張が高まり、その緊張は多大な不安を生んだ。その不安は使徒のアルテに対する信仰を高めた。この暗黒時代に『幻想話集アティーリ』そのものの話が膨らむことは少なかったが、アルテの更なる神格化は行われた。そのため、この暗黒時代は後にアルティスを生むための重要な時期であったという見方も可能である

メル 11 年リュウの月エケトネの日にメル・アルカが始まったことにより、『幻想話集アティーリ』は暗黒時代を切り抜けることができた。両団体は暗黒時代に数人の神々を創造していたが、それは互いに秘密事項だった。リディアはメルの助けを借りて暗黒時代に創造された神の資料を蒐集した。その上でリディアは『幻想話集アティーリ』の躍進を試み

ようとしたが、和平の事後処理が山積していたため、その願いは叶わなかった

メル・アルカの時代は幻字が表意文字だった最後の時代であり、そのころにはほぼ全ての神の名に幻字が付されていた。神に関する物語をリディアが集め、その総量はかなりのものになった。ところがそういった貴重な資料の研究よりも抗争時代に秘匿されていた互いの情報の解読や公開のほうが優先されていたため、『幻想話集アティーリ』はやはりここでも発展しなかった。また、『幻想話集アティーリ』は対立と戦争を描いたものが多いため、和平時代には沿わないとして好まれなかったという団体運営上の理由もあった。そういった理由から和平を象徴した新しい文献である『ミールの書』などが『幻想話集アティーリ』を押さえて尊ばれる風潮になっていった

だが、メル 12 年に入ると両団体の和平は次第に確固としたものになっていき、両団体はアシェットという 1 つの団体として安定していった。この動きに合わせてアシェットは共通の思想を持つことを必要としはじめた。アルシェとソーンの使徒では考え方も仕事の進め方も違う。こういった齟齬が繰り返されればいつか使徒らが内部で分裂しかねない。そういった事態を憂慮したリーザはアシェット共通の思想として『幻想話集アティーリ』を回顧することを提案した。『幻想話集アティーリ』は両団体に共通する物語であり、両団体の生活習慣や思想は『幻想話集アティーリ』から影響を受けている点が多かったため、これを見直して研究することによって互いの共通点を多く見出せるのではないかと考えたのである

だが、この時点では『幻想話集アティーリ』の研究を行うのは難しかった。というのも、使徒はアルテやテームスを信仰対象と考えてはいたものの、彼らにとって魅力があるのは神々の力であり、その背景にある物語ではなかったからである。あくまでも使徒にとっては『幻想話集アティーリ』の物語自体はリディアが中心となって個人的に作り上げたものでしかなかったのである。それをリディアが個人的に研究するのは許されるが、アシェットを挙げて研究させるのは不可能である。一方、当時リディアは自らが完成させた『制アルカオノマトペ』の功績によって賞賛されていた。そこで、セレンはその状況を利用し、『幻想話集アティーリ』の研究をアシェットに投げかけた。やはり多少の不満は上がったものの、過半数以上の賛同が得られたために、『幻想話集アティーリ』を制アルカと同じくアシェット総体としての研究事項とした。但し、研究を許可する条件として『幻想話集アティーリ』にアシェットをモチーフとした物語を加えることが要求された。これによって『幻想話集アティーリ』は完全に花開いたといえる

セレンはアシェットの要求を受け、自分たちをモチーフにした物語を『カコ』の物語の後に繋げることにした。この物語はセレンがメル 6 年パールの月リディアの日から作成しだした『小説版アンクノット』を『幻想話集アティーリ』仕様に書き換えたものである。『小説版アンクノット』はセレンの知っているフィクションから色濃く影響を受けていたため、そのままでは『幻想話集アティーリ』に繋げることはできなかった。そこでセレンは『小説版アンクノット』を『幻想話集アティーリ』の『カコ』に繋がるように話を変えて繋げ

たのである。ところが、話を変える際にリディアが大幅に関与してきたため、その物語はセレンの考えたものとは随分違うものになってしまっている

3－4：アルカ・エ・ソーン

メル 9 年メルの月ルージュの日に起こったクミールの反乱をきっかけに第 4 期 4 代ソーンが確立し、アルシェとの対立が浮き彫りにされた。両者は互いの情報が漏洩しないように細心の注意を払ったが、情報を完全に封鎖するのは不可能なことである。そこで、万一情報が漏洩しても相手に意味が伝わらないようにアルカを変化させていったのである

このとき、この作業に熱心だったのはソーンのほうで、アルシェはというと、専ら『高水準制定語彙』の制作に臨んでいた。ソーンは根本からアルカを見直して意図的に変化させるなどの作業を行っていたが、アルシェは『高水準制定語彙』を作るのに膨大な労力と時間をかけてしまっていたために、そう易々とアルカを変えるわけにはいかなかったのである。幸い、『高水準制定語彙』で作られた語はソーンが分からないものであったため、アルシェは『高水準制定語彙』のおかげでアルカを大々的には作り変えずに済んだのである

クミールはアルシェから離反し、すぐにアルカ・エ・ソーンを作り始めた。その後、第 4 期 4 代ソーンを結成。ラヴァやピネナの協力を得てアルカを変化させていった

ただ、アルカ・エ・ソーンには大きな問題点があった。完全に互いの言語が伝わらないのでは外交的な交渉すら行えない。だからといって言語が伝わると情報が漏れてしまう。そこでクミールが選んだ選択はクミールにとってもっとも親密であったメルをアルシェ側の特別外交官として推薦し、メルにだけはアルカ・エ・ソーンを伝授して翻訳させるというものであった。セレンはこれに賛成し、メルを派遣した。これは同時にメルが人質として捕らえられたということをも意味する。アルカ・エ・ソーンが漏洩されたという嫌疑がかかればメルの身の安全は保証されないということである。メルはアルシェにとって重要な使徒であるため、捨石にすることはできなかった

ただ、実際のところ当然のことながらセレンはメルからアルカ・エ・ソーンを聞き出していた。それによって事前に情報を得ていたことも多い。セレンは当然それをリーザに報告していた。だが、事前に情報を得たといってもそれに備えて対策を講じたのでは漏洩したことが知られてしまい、メルを失うことになる。そこで、情報は事前に知っているものの対処はできないという事態に陥ってしまった

一方、当のクミールはメルがアルカ・エ・ソーンを漏洩していることを知りながら泳がせていた。そこでクミールはセレンを混乱させるために定期的にアルカ・エ・ソーンを変化させていった。たとえば va をあるときは「強調」を意味させたり、あるときは「限定」を表わしたりした後に、突然「反意」を表わすように変えるのである。そうするとセレンは「反意」だとは知らずに意味を取ってしまうため、意味を逆に取ってしまうのである。クミールは用意周到で、メルにアルカ・エ・ソーンを教えるといっておきながら一部しか

教えなかったり、あるときは嘘を教えたりした。だが、その大半はラヴァの指示であり、その方針を嫌ったクミールはメルに真実を教えていたということが和平後に明らかになった。そういったことを繰り返したため、アルカ・エ・ソーンはメル・アルカに至るまでのわずか2年の間にアルカ・エ・アルシェと大きく隔たってしまったのである

アルカ・エ・ソーンは類型的にはアルシェと同じくSVOの膠着語である

また、クミールは従来の幻字に違う意味を当てたり、新たに幻字を作成したりした。その幻字は大抵重要な内容を持った字であり、1字がそのまま文になっているということも多くあった。その中にはたとえば何時にどこで会議をするといったような文字が多く含まれていたのである。クミールはそういった重要な意味を持った幻字を一切メルに教えなかった。そういうソーンの運営に関わるような事態を専門的にあらわすためにソーンの幻字は作られていった。こういった字は和平語は急速に消滅していった

アルカ・エ・ソーンは統語的には兼語文を有し、倒置や受動態を嫌った。同格や挿入は前置詞を駆使して表した。また、修飾語句は一部を除いて後置にした。関係詞を単純化し、所有格の関係詞などを廃した。主格の関係詞は消滅させ、兼語文に取って代わった。強調や限定を表わす様々な程度副詞がアルシェにはあったが、ソーンはそれらを嫌い、va に統合した

形態的には早くからエクスプローダーを廃して副詞に吸収した。また、反意や対語を意味する a-という接頭辞を作り、基本語から反意語を多く作った。この a-はやがて母音同士が連続する場合は v を挟むという決まりによってしばしば va という形になり、強調の va と区別が付かないようになっていった。そこで強調を場合によってはvalとするといった新たな用法が生まれた

音韻面では9母音体系を保っていたが、次第に減少して[o][u]など、円唇性の強い後母音が消滅したとされる。だが一部の使徒は区別していたそうである。子音はおよそアルシェと同じで約30種ほどあったとされている

また、母音の連続を嫌い、母音間にはvの音を挟むということが多く見られた。やがてvが入った形が標準と考えられるようになった語が増えていった。その結果、アルカ・エ・ソーンの語には v で始まるものが多い。アルシェで母音で始まる語は殆どソーンでは v で始まるのである

やがてこの v はソーンを象徴する音としてソーン内部で尊ばれ、クミールがソーンの使徒にアルカ姓を冠したときも大抵 v で始まる名を付けた。彼らの姓は大抵 va で始まるが、このvaは強調か限定か否定や嫌悪などを表わすものである

ところで、アルカ・エ・ソーンは非常に抑揚の少ない言語である。アルシェは通信方法のアンシャンテの感度が悪かったために、大声で抑揚を付けて喋る言語に発達した。アルシェの感動詞に 2 回言うものが多いのも伝わりにくいアンシャンテが理由である。一方、ソーンの使徒は全員クミールの自宅に下宿しているため、抑揚を付けて話す必要はない。クミールはかねてより怒ったようなアルシェの抑揚を嫌っていたため、この点は徹底的に

変えた。こうしてクミールはアルカ・エ・ソーンを語と語と境界も聞き取れないくらい抑揚のない言語に変えていったのである
　尚、アルカ・エ・ソーン最大の文献は『暫定語彙帳』である。『暫定語彙帳』については後述してある

4－1－1：制アルカプロトタイプ

　制アルカプロトタイプはメル 12 年の春ごろにセレンが作り始めた制アルカの試作品である
　メル 11 年ルージュの月リディアの日にセレンは制アルカを独力で作成することを表明し、クミールに賛同を求めた。セレンが一人で作成したほうが変更が容易だからである。一度アシェットに発表してしまって使徒がそれを覚えてしまったら変更しづらいためである。セレンの申し出にクミールが賛同したため、セレンは制アルカの作成を開始した
　その成果が制アルカプロトタイプである。このころは世界一簡単な言語を目指して作っていたため、音節構造は CV の単純な構造で、音素数も 10～25 程度だった。母音はプロトタイプを通じて 5 種であり、子音は度々増減した。基本語は CVCV ででき、複合語に富む
　文字も簡便で、子音字の四隅に適宜斜線を引くことによってどの母音かを表わした。この四隅は母音三角図に準拠していて、たとえば左上の隅に引いた斜線は i を表わしていた。尚、何も斜線を引かなければそれは自動的に a の母音を示すということがメルによって提案された
　統語の雛形になったものは述語論理学の 2 項述語 D(A,O)であり、必ず第 1 項には動作主が来て、第 2 項には対象が来た。自動詞は認めず、自動詞の意味は必ず他動詞から作られるとされた
　時制は時制を表わさない無時制が入ったり入らなかったり、現在と過去を繋ぐ英語の現在完了的な複合時制が入ったりはいらなかったりしたが、基本時制は通して過去・現在・未来の 3 種であった。アスペクトは膠着語的手段で表わされたが、時制は時制を表わす古アルカと同じ記号を採用していた
　プロトタイプでもっとも変動があったのは文字である。表音文字に変えようという方針は定まっていたものの、どの音を選び、それらをどの字に当てはめようかという問題があった。そこで、たとえば[d]を表わす幻字は[d]から始まる古アルカに馴染みの文字を選ぼうというような作業を行い、[d]は夢を表わす dia の文字が選ばれた。そうやって文字を選んでいったが、幻字は 1 つ 1 つがそれなりに複雑な形をしているし、その上必ずしも 1 画ではない
　これでは使いにくいだろうということでセレンは全ての字を 1 画にしてメルに流布し、これを多く書かせた。また、フゥシカにも流布し、これをパソコンで扱えるフォントにさせた。ところがその字はとても使えるようなものではなく、甚だ非合理的なものであった

ため、すぐに廃棄された

古アルカの幻字を必ずしも使わなくとも良いと考えたセレンはその後も字案をいくつも提出したが、どれも芳しくなかった。そこでセレンはいっそのこと古アルカの字を踏襲しなくとも良いのではないかという考えに至り、しがらみを捨てて新たな字案の作成に乗り出した。音素は子音 20 種の母音 5 種と定まってきたので、25 文字がどれも 1 画で書け、しかも単純な図形であるということを目標とした。セレンはこのとき 1 画で書ける単純な図形をいくつも挙げ、それを数十個紙に書き出していった。書き出すのに要した時間が少ない文字ほど優秀な文字と考え、優秀とされた文字を残していった。また、早く書いた際に字は汚くなってしまうが、それでもどの文字だか同定できるように、できるだけ形の異なった図形を選んでいった。こうして選ばれたのが制アルカの幻字である

選ばれた幻字は 25 種だが、最後まで母音が決まらなかった。そういうわけで幻字表は子音のほうが先にくるのである。また、子音も l は中々決まらなかった

さて、選ばれた 25 種の幻字だが、この中にもより書きやすいものとそうでないものがある。s などは書きやすいが、j などは書きにくいのである。そこでセレンは使う頻度を考えて文字に音を当てていった。[s]の音はよく使うので s などの書きやすい文字を当てる反面で、[r]のようなあまり使わない音には書きにくい c の字を当てていったのである

こうして幻字に音を対応させていったが、最後に残ったのはアルファベットとの関係である。単純な図形を模索していくとどうしてもいくつかはアルファベットと同じ図形が選ばれてしまう。これらの字はアルファベットを元にしたのではなく、書きやすさという客観的な合理性を元にしているため、確かに制アルカ独自のものである。だが、知名度の高いアルファベットと同じ形を全くアルファベットと異なる音に当てはめるのは得策ではない。たとえば e の文字に[e]の音を当てはめるのなら分かりやすいが、[o]の音を当てはめては分かりにくくなってしまうのである。しかしそれでもメルなどはアルファベットと幻字とは違う音を選ぶべきだと主張したが、使徒の大半は幻字がアルファベットを元にしてできたのではない以上それは制アルカ独自のものであるという点で満足し、幻字の音をアルファベットと関連付けることに賛同した。そのほうがより学習が容易だという理由である

4－1－2：プロトタイプ公表

メル 13 年ギルの月ジールの日にセレンはプロトタイプをアシェットに公開した。ところがそれはソーンからの猛反発を受けてしまい、変更せざるを得なくなった

この時点での最大の問題点は CV という単純すぎる音節構造にあった。これではメルやセレンやクミールやアルカといった古アルカの語がそのまま使用できないためである。古アルカの音節構造は複雑だったため、このように簡単すぎる音節構造に変更することは不可能だということである

クミールは世界一簡単な人工言語よりもアシェットのための人工言語を作るように再度

依頼した。アルシェ側もこぞってクミールに賛同したため、セレンはプロトタイプを作り変えだした

4－1－3：SVL 標準語彙水準 12000

ザナの月メルの日までにセレンはリーザに言われていた目標 5000 語のチェックを優に超えた 12000 語のチェックを終了する。チェックとは(株)アルクが定めた「SVL 標準語彙水準 12000」に記載された英単語に相当する単語が『幻日辞典』に記載されているかを調べるという内容で、記載されていなければ単語を作成するか、或いはその単語は必要ないと捨て置いた。この時点では使用する音素は決まっていたものの、文字案がまだ固まっていなかった

セレンはチェックを終えた語群の中からこれ以降も恐らく変わらないだろうと目された 600 語を選択し、リディアに流布させた。ところがこの 600 語も実際はこの後かなり変わるものが多く、使徒からの苦情が殺到した

4－1－4：PDIC 化

メル 13 年ファーヴァの月にセレンはそれまで Word で作成していた『幻日辞典』を止め、以降は PDIC で『幻日辞典』を作成することにした。これを境に Word の『幻日辞典』を見直して修正し、リディアに命じてアシェットに流布させた。同時にプロトタイプの統語論や音韻論や形態論を記したメモ書きも流布させた。このメモ書きに触発されたセレンはこの後『制定言語アルカ』の執筆に入る

4－1－5：プロトタイプの問題

プロトタイプはセレンが独力で作成していたため、古アルカの比にならないほど進化が早かった。そのため、単語もしばしば劇的に変化した

プロトタイプでは「若い」と「新しい」は区別されず、どちらも sad であった時期があった。ところが「若い」と「新しい」が区別されないと"la it sad"いったときに「彼は若い」といっているのか「彼は新人だ」といっているのかの区別ができない。そこで「若い」と「新しい」はやはり区別することにした。「若い」のほうが頻度が少ないだろうと思ったのでこれを sadmel から造語した sadm という語にした

ところが、作業を続けているうちにやはり「若い」という語は頻度が高いということに気付いたため、sadm をもっと短い sam に変えた。ところが sam は既に「縦の列」という意味の語が入ってしまっているため、sam という語形は使えなかった。だが、「若い」と「縦の列」では「若い」のほうが頻度が高いので、「縦の列」を sam から追い出すことにし、「縦

の列」は samt と変え、晴れて「若い」は sam となったわけである

このような作業をプロトタイプの間中繰り返していたため、プロトタイプは非常に複雑なものになっている。当初は古アルカと関連のあった語も、そういった操作によって似ても似つかぬものになってしまったということが多く見られる

更に問題なのはカバン語の問題である。「酒」は veld であるが、古アルカでは rie という。プロトタイプでも rie と呼んでいたが、アルカ・エ・ソーンを多く取り入れるという団体運営上の目的で rie はアルカ・エ・ソーンで「酒」を意味する veld に変えられた。したがってカクテルを表わす aprie も apveld に変えられた

一方、ビールは pesr というが、これは pestrie を語源としたカバン語である。pesr ではもはや rie という要素が形態素として機能しておらず、これを一々pestveld に戻して pesd などに変えることはなかったのである。というのも、仮に pesd という語形が既に別の語として存在していたら今度はその語を適当に変えて pest などとしなければならないが、運悪く pest という語形も別の語で既に使われていたとしたらどうだろう。永遠にこの作業は続くかもしれない。英語の大母音推移のように、1 つの変化が将棋倒しに全体の変化を生みかねないのである。もしそうしたらこのプロトタイプは全面的に変えなければならない。だが、この時点でのプロトタイプは既にアシェットにある程度公開してしまっているため、勝手な変更はもはや許されない。そういうわけでカバン語の語源についてはプロトタイプの語形の rie を残すこととした

rie のような語がかなり多くあるため、制アルカの語にはプロトタイプ時代の混乱によって生まれた語がかなりあるといえる。これらは古アルカでもなければ制アルカでもない中間的な語源であり、その扱いには注意を要する。幸いセレンは定期的に『幻日辞典』のバックアップを取っておいたため、こういったカバン語の語源の実態を掴むことは可能である。事実、『幻日辞典』の語源欄にはそういったバックアップが役立っている

4－2：『幻日辞典』

セレンはメル 14 年パールの月セレンの日にこれまでの PDIC の『幻日辞典』を破棄し、新たにやはり PDIC で『幻日辞典』を作成し始めた。これまでの『幻日辞典』は『旧幻日辞典』とし、これ以降のを『幻日辞典』と称した

このころにはプロトタイプに起こった怒涛のような変化は下火になり、変化は非常に緩慢としたものになっていった

第 3 章：文字

1－1：古アルカの幻字の総論

古アルカの文字は例外なく幻字であり、幻字以外の文字は使われない。アルファベットや漢字などは一切使われないということである。古アルカはその全てを幻字のみで表現することができる。内容語も機能語も全て幻字で表わされる

古アルカの幻字は表意文字であるが、表音文字として使われることもあった。表音文字として使われるのは主に固有名詞などの音を表わすときである。表音文字としての幻字は日本語の万葉仮名のようにその文字の意味と関わりなく音だけを表わしたものである。ただ、古アルカの時代は万葉仮名の時代と違って既に IPA のような表記法が存在していたため、幻字を表音文字として使うことはあっても、それは頻繁に行われることではなかった。万葉仮名の時代には日本語の音を記す方法が万葉仮名しかなかったため、日本語の音韻体系を記すには好都合とはいえない漢字の音を借りたりしなければならなかった。だが、古アルカの音韻体系を記すには幻字よりも遥かに音を表わすのに好都合な IPA が存在していたのである。そこで古アルカの幻字の読みは主に IPA で綴られることが多く、表音文字としての幻字はアルテの名前などの固有名詞に限られた

ただ、古アルカの表音文字はかなりいい加減なもので、その文字の音を正確に表わしているとは限らない。中国語の音訳と同じくらいの精度でしかなかったのである。中国語ではコーヒーのことを/kafei/というが、これは英語の発音に忠実ではない。/kafei/などは良いほうで、中国語の音訳にはもっといい加減なものが多い

古アルカの表音文字としての幻字もこういった程度の精度のものだった。たとえば鈴蘭を司るサールのアーディンは「アルテ」を意味する[arte]と「木の実」を意味する[din]とで表わされた。[ardin]に対して[artedin]であるから音訳の精度はお世辞にも高いとはいえないものであった

ただ、万葉仮名と違って[ar]の音を表わすときにはいつも「アルテ」を表わす文字が使われるように、決まった音には決まった文字が使われるという特徴があった。これは幻字を表音文字として使いはじめて昇華させていったのがリディア一人であり、他の人物が関与しなかったためである。リディアが一人で音を当てたために、ある音にはある文字が対応するという対応関係が規則的に作られていったのである。もし数人でこの作業を行っていたら、人によって当てはめる文字が異なってしまい、万葉仮名のようになっていたことだろうと思われる

さて、以上を見るに、やはり古アルカの幻字の本質は表意文字であって、表音文字はあくまで異種としての存在でしかないといえる

1－2：古アルカの幻字の歴史

古アルカの幻字の中で、即ち換言すれば幻字の中でもっとも古いものはなんであろうか。実はそれは不明である。リーザは『使徒用言語案』を表わす文字に表意文字を選択してい

た。その案の中には既に文字がいくつか作られていて、それらの文字は後に先代アルカや初代アルカと呼ばれることになるものである。『使徒用言語案』には機能語や代名詞や基本動詞や一部の身体語彙といったものが収録されており、それらは殆ど古アルカに流入している。また、『使徒用言語案』に書かれた文字の形はその後古アルカで実用されたものと同一である。したがって『使徒用言語案』に収録されていたものが最も古い幻字ということができる。だが、『使徒用言語案』の中には幻字がいくつも収録されているため、どれが一番古い文字であるか不明である。そのノートの一番初めに記されているのは自分を表わす[del]という文字であり、これはそのまま古アルカに流入したが、だからといって書かれた順に古い文字とは限らないのである。だが、少なくともこれらの文字が幻字の中で最も古い部類に入るということは間違いなさそうである

前第一改定アルカの幻字は身近で具体的な名詞とわずか数語の動詞と形容詞を表わしたものしかなく、機能語や代名詞の類はリーザが先代アルカから意図的に流入させた。したがってこのころは幻字の数は少なかった。また、このころの幻字は直線と曲線の区別もされていなかった

更に、音形を持って語としてきちんと存在していても、それに対応する幻字が生み出されないということが非常に多かった。そのためリーザはその幻字のない音だけの語を IPA で書き留めて意味を併記していた

メル 4 年になると対応する幻字のない語に次第に幻字が当てはめられていくようになっていった。しかしその幻字は変種に富んでいた。曲線と直線の区別は依然としてなかったし、線が融合したり分離したりしても同一の字と同定されたのである。それを当時のアルシェは幻字は漢字に比べて美しいという主観的な評価で片付けていた

ところが必要な幻字の数が増えていくにしたがって次第に幻字の図形案が尽きてきたため、線の数が違えば別の字とするといった配慮をする必要性が出てきた。更に幻字の数が増えると今度は直線と曲線を区別するようになっていった。漢字と違って画数が多く複雑な図形を好まなかった幻字は漢字とは異なった進化を遂げていったのである。このことは後第一改定アルカを起こしたきっかけの一つである。尚、実際は幻字の定まっていない語は多く、それらは『制定語彙』に幻字なしで記載されている

尚、幻字の進化は殆ど前期アルカの中で完結したといえる。前第一改定アルカでは幻字の総数が少なかったために、線の形や数が違っても同じ文字の異形態としてしか捉えられなかった。ところが第一改定を迎えて幻字が増えてからは線の形や数などで幻字を区別する必要性が出てきたのである。幻字は漢字のような画数の多い字を嫌ったため、曲線と直線を交えた図形の方向で発達していった。このことは第一改定で定まったことであり、このとき定まった幻字の性質は以降古アルカが滅ぶまで変わることなく保たれたのである。したがって、幻字の進化は少なくとも幻字の形という観点では前期アルカの時点で既に進化しきっているということができる

ただ、音声面ではそうではない。前期アルカの時点では幻字に表音性はなかった。ところが中期になり、『制定語彙』ができたときに問題が発生した。意味と音は定まっているのに対応する幻字が決まらない語がいくつも出てきたのである。それらの殆どは神の名であった。そこでリディアはその神の名を記すために幻字を表音文字として使ったのである。このとき初めて幻字は表音性を持ったと考えられ、音声面での進化を遂げたことになる

ところが中期に起こったこの進化を最後に幻字は進化を遂げることがなかった。幻字は常に正しい書き方がなんであるかという面倒な問題に晒され続けてきたし、正しい読みは何かという問題にも晒され続けていた。セレンはそういった問題がある程度まで山積するたびに幻字の整理を行ってきた。だが、これはいたちごっこでしかなかった。セレンがどんなに食い止めようと幻字はこのような問題を引き起こす

たとえば[hacma]という文字はもともとは「使徒」を表わす文字でしかなかったが、これとよく類似した「文字」を表わす文字と混同され、[hacma]は「文字」という意味も表わすようになった。これは中期の話であり、セレンはそのことを受けてアルカの文字のことを日本語で幻字と名付けた。というのも、[hacma]という幻字の形が漢字の「幻」によく似ているためである。こうして[hacma]は意味が増えてしまったが、メル・アルカの時代になると事態はもっとややこしくなる。メルとクミールがメル 8 年に作成したシェルトではメルの駒を表わす幻字が[hacma]だった。メルを表わす幻字は既に確立しており、メルの提出するレポートなどにはサインとしてその文字が使われていた。ところがシェルトができてからメルは個人的に[hacma]を自分のサインとするようになった。はじめは個人的な場面でしか使われなかったこのサインもメル・アルカの時代になると次第に公的な場面にも現われるようになっていった。やがて制アルカの時代になるとそれまであった文字を淘汰して[hacma]のほうがメルを表わすようになっていった。こうして[hacma]は「使徒」と「幻字」と「メル」を表わすようになり、事態はより複雑なものへと変わっていった。こういったことが度々幻字には起こったため、アシェットはほとほと幻字の扱いに困窮していた。そこで考え出されたのが幻字の表音文字化である

幻字の表音文字化という考えは古く前期のころからあった。セレンが幻字を表音文字で表わそうとした試みたときの試作である『神無アルカ』がそうである。『神無アルカ』はそのプロトタイプが現存するセレンの手帳に記されているが、実際の『神無アルカ』の文字とセレンの手帳にあるプロトタイプとはにてもにつかないものである。だが、両者は表音文字という点では共通しており、幻字の音を表わす手段として考案されたものであった。幻字の音を表わすには既に IPA があったが、IPA はアルファベットでできているため、リーザは IPA をアルカの文字として使うことを拒んだ。そのため表音文字案が生まれたのである。そうして作ってみた『神無アルカ』であったが、それは日本語と英語に傾倒していたため、アルカの音の表記には沿わず、実用はされなかった。結局、幻字の表音文字化はなされぬまま、中期に作成された『制定語彙』もより便利な IPA で幻字の音が記された

だが、幻字には上記のような様々な問題点があったため、これを表音文字化しようとい

う試みは何度もあった。しかし、アシェットにはずっと表意文字の体系で進んできた歴史があり、ましてその文字体系できちんと意思疎通ができている以上、むやみやたらと表音文字に変えるのは早計である。更に、ランティスは個々に使う母語がまちまちであるため、/s/と言うとき、使徒によっては[s]といったり[ʃ]といったりというように発音が異なる。こういった齟齬は表意文字の段階では容易にうやむやにできる。だが、もし表音文字にしたら今までうやむやにしていた齟齬が問題となってどっと沸き起こってくるのは目に見えていた。それは大仕事であるため、労力も時間もかかる。そういった事情により、幻字の表音化は見過ごされていた

そんな状況がメル・アルカまで続いていたが、リーザの提案による全く新しいアルカ、即ち制アルカの登場によって幻字の表音化がなされたのである

1－3：古アルカの幻字の数

古アルカの幻字の数を正確に計った者はいない。ただ、メル 13 年にリディアが発表した幻字の総数はおよそ 2000 である。但しこの調査では既に滅んで別の字に統合された幻字や、その時点では既に使われなくなっていた過去の幻字も数に入れているため、ある時点で使われていた幻字の総数とはいえない。ただ、古アルカを通じて今までにどれくらいの幻字が存在したのかという観点で見ると非常に有益な調査であるといえる

この調査では実際に 1536 の幻字が挙げられており、他に 302 の復元された幻字と、227 の形の不明な幻字が挙げられている。復元された幻字とは過去に存在したが現存する文献には載っておらず、使徒の記憶にあったもののことである。また、形の不明な幻字とは意味と音が分かっているが、その字形が不明なもののことである。形が不明な幻字の中にはもともと幻字が当てられてなかったものが少なからずあるだろうと目されている

仮にリディアの調査を全面的に信用し、漏れも重複もなく、復元も全て正確で、字形が不明なものも全て存在したとすれば、古アルカに存在した幻字の総数は 2065 字になる。漢字は総数がおよそ 50000 字であるから漢字には遥かに及ばないものの、2000 字もあればその組み合わせで何万という語を作ることができる。実際、日本で使われている常用漢字も 1945 字であり、これがあれば日常生活は行えるという目安になっている。幻字も、これだけあれば大抵のことは組み合わせて表現できるといえよう

2－1：制アルカの幻字の歴史

制アルカの幻字は最初のプロトタイプのときから表音文字であった。だが、プロトタイプは音韻体系が確立してなかったため、子音の数に変動があった。対して母音は常にメル・アルカと同じ 5 種であった

メル 12 年春になるとセレンは制アルカプロトタイプを作ったが、そのとき周りから要求

の高かった幻字の表音化を構想に入れた。実験ということがあったので抵抗なく文字にアルファベットを使用した。しかし、被験者であるメルが強くそれを拒んだため、幻字から音を取った表音文字を作成した。その文字が出来上がったのはメル 12 年ラルドゥラの月ごろのことである。この文字はたとえば幻字 dia（夢幻）は[d]を表わすといったもので、全て 1 画で書けるようになっていた。1 画で書けて見た目にも美しい幻字を選んだが、それはあまりにも使いにくい字であった。尚、この字は筆記体のように繋げて書いたときに波打つように見え、その波形があたかも心電図の波形に似ているため、セレンが心電図と名付けた。メルは心電図を使って実験を重ねたが、あまりにも使い勝手が悪いため、すぐに廃案となった

心電図は制アルカの最初の文字案である。心電図は筆記体専用のフォントで、セレンがペンを離さず書ける筆記体は楽かつ美しいと思ったことが原因でできた。これによって、左から右に抜け、かつ全て一筆書きできる幻字が選ばれた。子音と母音は別々な単音文字である。心電図はアルファベットより長く複雑で、文字と文字との境界も曖昧だった

メルはこの文字を使っておよそ原稿用紙数十枚分もの量を制アルカプロトタイプに訳して書いたが、メルの不評は強烈だった。人工文字であるにもかかわらず既存のアルファベットより不便な心電図は極めて不評だったのである。セレンはザナの月ごろに心電図を改良したが、それでもメルは通さず、結局心電図自体廃止になったのである

パールの月にかけてセレンは心電図のパソコンフォントを作成しだしたが、すぐにアメリカでテロが起きたため、研究が中断された。メル 12 年ミルフの月メルの日に受領したメル最終論文でセレンはフォント作成についてのアドバイスを受けた。これにより、フォント案の志向性は全く変わることになった。一筆書きの心電図は止めるべきとか、いくつかの原則リストとか、音節数が少ないのだから単音文字ではなく音節文字にすべきだとか、いくつものアドバイスを受け、多大な影響を受けた。メル案では、子音字を核として、母音は印で表わされるとするとあった。母音は子音字との位置関係で決まるともあった。また、母音の印がなければ頻度の高い a を示すという案ももたらされたし、メルは「事実アラビア語の体系はそうだ」と例示さえした

同年ミルフの月リュウの日にアメリカでのテロが発生。その翌日にアルシェ・ソーンが凍結。同時にセレンはメル最終論文を受領。そしてそれにより心電図が廃案になり、セレンはメルの論文を参考に新たに文字を作った。新たな文字案では子音が 10 種（子音 φ を入れると 11 種）、母音 5 種だったので、必要な表音文字は 11 個であった。因みに、子音は s,p,t,k,m,n,f,∫,l,r の 10 個で、順序はこの順だった

同年ルージュの月ラルドゥラの日、セレンはプロトタイプの子音を増やして文法を変え、語彙の体系も、何から何まで全て変える事にした。当然子音の増加に伴って文字も増える。増えた子音は h と、有声子音の v,b,d,z,g,j の 6 個。h はメルの反対があって止めていたが、古アルカに h が多用されていたので採用した

更にセレンはその後、y と w の追加を決定した。ユンクのユの音が出ないのが不満だっ

たためである。但し、y は入れたもののそれの無声音のヒャにあたる子音は入れなかった。h も無声音のみを入れた。何故なら古アルカに使われていなかったためである

こうして無子音を表わすφを入れた 25 字体系になったというわけである。音節数は理論的な穴である[ji][wu]を抜かした 98 音節。更に、意味幻字も加えた。尚、ここで述べたような、子音を中心に据えて周りに母音を記す音節文字からできていた幻字を音節幻字と呼ぶ

メル 13 年ギルの月ジールの日、セレンはクミールと会見し、制アルカ化の構造を根本から見直すことになった。それによって音節構造が単純な CV 構造でなくなったため、これまでの音節文字の体系を崩し、再び単音文字の方向性で考えていった。この単音文字が最終的な制アルカの幻字になる

文字の発達の順序を見ていくと、まず単音文字の心電図があり、次に音節文字の音節幻字があり、最後に単音文字の幻字になったということがわかる

さて、音節幻字を打ち捨てたセレンであるが、実はこの音節幻字は現在の幻字と酷似したものが多い。セレンは音節幻字を全て捨てたのではなく、そのノウハウを活かそうとしたのである。新たなプロトタイプでは音韻体系が変わり、c を増やした 20 種の子音と 5 種の母音になった。したがって必要な文字は 25 字である。これら 25 文字はどれも 1 画で書け、しかも単純な図形であるということを目標とした。セレンはこのとき 1 画で書ける単純な図形をいくつも挙げ、それを数十個紙に書き出していった。書き出すのに要した時間が少ない文字ほど優秀な文字と考え、優秀とされた文字を残していった。また、早く書いた際に字は汚くなってしまうが、それでもどの文字だか同定できるように、できるだけ形の異なった図形を選んでいった。こうして選ばれたのが制アルカの幻字である

2－2－1：制アルカの幻字

制アルカは 25 種の表音幻字と数種の表意幻字を使う。表音幻字は子音と母音からなる。表意幻字は動詞と時相詞の間に介入する記号である動詞媒介辞やツンク、ガコンなどの記号のことで、種類は少ない。以下に一覧を挙げる

＜表音幻字＞

tkxsnvfmdgpbhycrzjwlaioeu

＜表意幻字＞

1：動詞媒介辞：-：動詞と時相詞の間に義務的に入る。音はない
2：強連言：/：強連言の意味

3：引用符："：引用部につける。台詞や思想の引用は 5〜8 の表意幻字で行うため、3 は書名の引用や語句の引用を扱う。また、ある語句を強調して他の語との区別を行ったり、それが自分なりの特殊な定義であるということを示すときにも使われる。fan といえば純粋に「女」を意味するが"fan"といえば「ここで私が主張している類の女」というニュアンスを表す
4：桁示：'：4 桁ごとに入れ、数字の桁数を示す
5：喋り括弧開：@：6 とセットで使い、以下が台詞であることを示す
6：喋り括弧閉：`：5 とセットで使い、以上が台詞であることを示す
7：思う括弧開：^：8 とセットで使い、以下が考えている内容であることを示す
8：思う括弧閉：~：7 とセットで使い、以上が考えている内容であることを示す
9：ツンク：,：カンマと同義
10：ガコン：.：ピリオドと同義
11：テンペラ：!：感嘆符！と同義
12：クーノステイラ：?：疑問符？と同義
13：括弧開：(：数学記号に使ったり、日本語と同じく補足事項を沿えるときに使う
14：括弧閉：)：同上。13 を補う形で使う

2－2－2：文字の順序

　英語ではアルファベットは a から始まり z に終わるが､制アルカにも文字の順序がある。この順序は制アルカ制作過程でセレンが書いていた順番が慣例化したもので、特に意味はない。文字の形が似た tkxs などをひとまとまりとしたことは確かだが、どのまとまりが先に来るかということはセレンが思いついたままに書いただけなので深い意味はない。だが、強いて言うなら l を除けば始めに来る方が頻度が高い子音であるという点が意味があるといえるだろう。また、母音の図案は子音の後に決まったため、子音に後続することとなった。この点に関しては作成順序が文字の順序に影響しているので、文字の順序に意味があるといえる
　尚、幻字の順序は以下の通りである。r までは 4 つごとに似た形が並んでいる。これは幻字表といって幻字を並べたものであるが、幻字表はこのように 4 文字ずつ書かれ、母音だけが 5 つ揃って書かれる

tkxs

nvfm

dgpb
hycr
zjwl
aioeu

2－2－3：文字の名前

　英語でＡという字に「エー」と名が付いているように、幻字にもそれぞれの名がある。幻字の名はエスペラントのアルファベットのように子音＋[o:]や母音の長音だけという単純なものではない。エスペラントのアルファベットは確かに覚えやすいが、使いにくいという問題がある。アルファベットの名は主としてスペルを伝えるときに使うが、スペルを伝えるという文脈が共通する以上、類音による聞き違いが生じやすい。たとえば D は[do:]と読むがこれは T の[to:]と間違えやすい。このように、エスペラントのアルファベットは聞き違えやすく使いづらい。エスペラントのアルファベットは別のアルファベットと文脈上共起しやすいということを全く考慮していない

　制アルカの幻字の名はスペルを伝えるときなどに用いられ、大抵それが使われるときは他の幻字の名と共起することが多い。つまり数字と同じようなものだ。従って幻字の名は互いに似すぎていると困るのである。だから幻字の名は互いに区別が容易になっている

　子音は全て古アルカを語源としている。古アルカでよく使われていた単語が語源となっていることが多い。子音は「その子音＋母音＋別の子音」という音節構造をしており、古アルカの語を無理にその構造に合わせた。「別の子音」は発音しやすいように無声子音と対立のある有声子音は避けた。また、他の語との差が付くように、「母音」も「別の子音」もできるだけ重複しないようにした。つまり、l や a などの人気音ばかり使わないように注意したということだ。中でも母音の数は特に偏りがなく、a,i,o,e,u が 4 つずつ均等に使われている。結局のところ、音の重複を避けつつ発音しづらい音も避けなければならないわけで、両者のバランスを取ったらこういう結果になったのである。子音の語源に規則性はなく、人名が混ざっていることもある。加えて、アシェット内のヒエラルキーをなくすために、アルシェのみならずソーンの言葉も混じっている。それらの条件を満たした上に、発音もしやすい語が子音の語源として選ばれているのである。尚、母音は単に母音を長音化したものであるから語源はない。さて、以上を踏まえた上で、幻字の名称と語源を見てみよう

t：tes(電気 tes から)

k：ket(猫 ketto から)
x：xal(存在 xal から)
s：sol(行為されたこと soal から)
n：nim(色 nim から)
v：vin(下限の月 viine から)
f：fox(摩擦 fox から)
m：mir(論理 miir から)
d：dur(上限の月 duurga から)
g：gat(門 galt から)
p：par(太陽 paparura から)
b：bel(料理 kyubelii から)
h：hac(使徒ハルマ hacma から)
y：yun(鳥籠姫ユンク yunk から)
c：cuk(皇女ルーキーテ cuukìiteka から)
r：rus(月司ルシーラ rsiila/rusìila から)
z：zam(木 zamo から)
j：jok(吉な方向 joks から)
w：wit(挨拶 wit から)
l：lex(知識 lex から)
a：aa
i：ii
o：oo
e：ee
u：uu

２－２－４：転写法

制アルカの転写はアルファベットで可能である。以下にアルファベットで転写したものを掲げる

tkxsnvfmdgpbhycrzjwlaioeu

tkxsnvfmdgpbhycrzjwlaioeu

尚、喋り括弧、思う括弧、引用符はいずれもダブルコーテーションで表わす

桁示はシングルコーテーションで表す
ツンクとガコンはそれぞれカンマとピリオドで表す
テンペラはエクスクラメーションマークで表わす
クーノステイラはクエスチョンマークで表わす
強連言は an に書き直すかカンマにする
動詞媒介辞はハイフンにする

2－3－1：表記法

ここでは幻字を使った制アルカの表記法を説明する

2－3－2：字の進行方向

幻字は左から始まり右へ進む。行が終わると 1 段下へ進み、また左から始める
字の進行方向はいくつか種類がある。昔の日本語のように右から進むものや上から下へ進むものがある。変り種では牛耕式というのがある。牛耕式とは左から書いていって行が終わると今度は右から始めるというものである。たが制アルカは古アルカや英語と同じ方法を取っている
制アルカが英語と違うのは、書く場所の幅が狭ければ上から下に書いても良いという点である。洋書のタイトルはつい首を曲げてみてしまうことになるが、制アルカではそんな苦労はないというわけだ。因みに、上から下まで行ったら今度は**右**へ 1 段移動して、また上から書いていく
日本語には縦書きがあるが、下までいったら左へ移動するのが慣わしである。しかし制アルカはこれと逆で、下までいったら右へ移動するのである。これは右利きのものが自分の書いた字を自分の掌で汚してしまうことがないようにとの配慮である
制アルカが左から右へ進む横書きであるのも同様の配慮からだ。右から書いていくとどうしても自分の掌で字を汚しかねないからだ。つまり、右利き優先である

2－3－3：単語の途中で行が終わってしまったら――ハイフネーション

英語では単語の途中で行が終わってしまったらハイフンを使って次の行に持ち越すが、制アルカもその点は同じである。行が足りなかったらハイフンを伴って次の行まで持ち越せばいい
但し、語の切り方には一応推奨される方法がある。どこで切ってもいいというわけではないのだ。英語も状況は同じで、その切り方は一筋縄でいかないものがある。それに比べて制アルカの切り方は英語と比べれば遥かに簡単で、以下のポイントを抑えておけばよい

1：複合語は複合語要素ごとに切る。例えば avelan という語は avel と an からなっているから avel&an にすべき
2：単純語は基本的に切らない。単純語は大体が短かく、大抵は 4 字以下である。これくらいならわざわざ切るまでもないので次の行にそっくり送ってしまった方が却って見やすくなるからである。要するにワープロでいうところのワードラップを行えばよいということである。もちろん 1 行が非常に短ければハイフンを付けるしかないが、その場合はできるだけ音節単位で区切ると良い
3：それ以外は適当に切って良い

2－3－4：スペーシング

　スペーシングは語と語の間で行う。スペーシングは単純に語境界を示すだけであり、それ以外には使われない。これによって制アルカは日本語とは違ってどこまでが単語かという議論をしないで済んでいる
　また、ツンク、ガコン、クーノステイラ、テンペラなど、意味幻字の後ではスペーシングは不要である。これは手書きの場合はあまり反映されないが、コンピューターで制アルカを使うときには大きく反映されることである
　コンピュータで作業をしているとき、英語ではカンマやピリオドの後にスペースを入れた方が見やすい。エクスクラメーションマークやクエスチョンマークについても同じことが言える。しかし制アルカではその必要はないのである。制アルカのフォントはカンマやピリオドの後に 1 文字分ほどの余白が予め入っているため、スペーシングをせずに文を書き続ける。尚、アルファベットへの転写時はスペースを入れても入れなくとも良い

2－3－5：句読点の入り方

　ガコンはピリオドや句点(丸)と同じように、文の終わりに入れる
　一方、ツンクは特に使用に関して決まりはない。ドイツ語は読点の入り方が体系的にできているが、制アルカのツンクは日本語の読点と同じで体系的ではない。読点は書き手によって入る場所が違う。一般に読点が入りやすい箇所は以下の通りである

1：従属節が主節の前に来る場合、接続詞と節の間に入れて節同士を区別する(推奨)
2：同格・挿入要素の前後に入れて本文と区別する(義務的)
3：関係詞節のような長い節と他の節との境界を示すために入れる(書き手次第)
4：台詞などでポーズを表わすために入れる(書き手次第)
5：弱連言の代わりに入れる（推奨）

この他にもある程度まとまった語群の前後に読点を入れて語群の境界を示すことがある

2－3－6：パラグラフ・インデント・エクスデント

ある程度の長さがある文章は複数のパラグラフから成り立っていて、1つ1つのパラグラフは改行と 1 字下げのインデントを伴って表される。これは日本語と同じである。簡単にいうと、段落毎に改行し、更にその段落の始めの1字は開けておくということである

この方法は日本語を始めとして様々な言語で取られている。尤も古アルカはそうでなく、伝統的に段落の最初の字が 1 字上げされていた。要するに現在と逆だ。これの利点は段落の頭に1字ひょこっと現れるので、段落数が数えやすいということであった

古アルカでこうなった原因は詩歌である。古アルカの長い詩歌は 4 つのパラグラフからできている。詩歌の編纂作業をしていると分かることだが、詩の数を数えることが頻繁にあり、これが非常に面倒な作業である。ところが、数えるときにパラグラフの最初の 1 字が頭に出ているとパラグラフ数を数えやすく、パラグラフ数を 4 で割った数が詩歌の数だということがすぐに分かって便利なのだ

それで古アルカはそれまで行われていた通常のインデントを取りやめ、1字上げをするようになった。尚、リディアによって1字上げはexdentと造語された。尚、メルはこの語を[éksdənt]と発音するが、リディアは[iksdént]と発音していたというように、その読み方はアシェット内でも一致を見ない

エクスデントは始めは詩歌にしか起こらなかったが、統一感がないとのことで通常の文章にも起こるようになった。しかしエクスデントはインデントに比べて紙が無駄だということと、コンピュータ処理するときに作業が若干面倒だということが原因で、だんだん廃れていった

エクスデントを取るかインデントを取るかは最終的には個々人の好みになり、統一感がなくなってしまった。そこで制アルカはインデントを採用し、エクスデントは却下することにした

2－3－7：行空けについて

文は文と集まって1つの段落を作る。段落毎には改行を入れる。ただ、その段落と次の段落の内容に関連性が薄い場合、即ち話が大きく変わる場合は改行だけでなく更に1行空けることになっている。つまり以下のような具合だ

段落Ａ

段落B

――というように。また、ＡＢ間で話がもっと大きく変わる際は2行空白を空ける。そして、章などの大きな単位が変わる際は4行空けるか次のページに移すことになっている

2－3－8：コンピュータでの表記法

制アルカは普及型のクワーティキーボードで入力できる。クワーティでなくとも AtoZ のキーがあるボードなら可能である。幻字が対応しているアルファベットキーを使って幻字を入力すれば良い。arka と入れたければ arka と打てば良い

尚、フォントは tiphac と dien の 2 種類がセレンによって既に作られている

第 4 章：音声・音韻

1：アルカの音声と音韻

アルカの音声と音韻は古アルカと制アルカでは大きな差がある。全体的にいって古アルカは音韻体系が確立していなかった。メル・アルカの時代になっても、即ち最後の時代になっても音韻体系は確立しなかったといっていい。その原因は幻字にある。幻字は表意文字だったため、その文字がなんと読まれるかは見ただけでは分からない。そこでその文字の読みは『制定語彙』や『高水準制定語彙』といった文献に IPA という形で残された。IPA にしたのは『制定語彙』ではリーザであり、『高水準制定語彙』ではリディアである

当時アルシェは IPA で精密な音声の記録が行われたことに喜んでいたが、これには大きな問題があった。IPA が使われたことによって確かに古アルカでどのような音声が使われていたかということは記録された。だが、それは古アルカの音韻体系を明らかにしたということを意味しないのである

たとえば以下の状況を考えてみよう。セレンは[s]と[ʃ]を/s/だと思っていて、[ʃ]は[s]の異音だと考えているとする。一方、リディアは[s]と[ʃ]を区別しており、これらは別々の/s/と/ʃ/だと思っているとする。また、『制定語彙』に収録される語の音をリーザが集めていて、セレンとリディアの発音を元に語の音を IPA に変換するものとする。ここでリーザが[ʃiːna]という語の音を彼らの発音から IPA で記述しようと考えているとする。このときもしセレンが発音すればリーザは[siːna]と記述するかもしれないし、リディアが発音すればリーザは[ʃiːna]と記述するかもしれない。そしてもし古アルカに/ʃ/という音素があるにもかかわらず、[ʃiːna]以外に[ʃ]の音を使う語がなかったとした場合、仮にセレンが発音した[siːna]をリーザが『制定語彙』に記述したらどうなるだろうか。/ʃ/という音素は存在したにもかかわらずな

かったことになってしまうのである
『制定語彙』や『高水準制定語彙』は確かにアルシェがどのような音声を用いていたかを教えてくれる。だが、それは決して音韻体系を明らかにするものではないのである
　こういった点から古アルカの音韻体系は確立していなかったといわざるをえない。ただ、使徒ごとには音韻体系がなんとなく定まっていたし、古アルカを実質上作り上げたセレン・リディア・メルなどが互いの音韻体系を理解しあっていて、それに基づいて『高水準制定語彙』などの記述を行っていたことから、ある程度 IPA の音声記述がそのまま音韻体系を示しているということはいえる。だが、それは完全な音韻体系ではないため、古アルカの音韻体系は確立していなかったといわざるをえないのである
　一方、制アルカに入ると幻字を表音文字にしたり『制定言語アルカ音声教書』を作成したりしたことによって音韻体系が確立されていった。ある音素がどのような環境でどのような音声になるかということがきちんと制定されたのである。これによってある音声が音素ではなくある音声環境に現われる異音であるというようなことが明らかになり、音韻体系が確立していったということである

2－1：古アルカ

　古アルカは制アルカに比べて子音母音ともに種類が多く、しかも変動が激しかった。だが、その中にはよく使われる音とそうでない音の差が激しく、ほんの数語にしか使われない音でも音素として認めていた
　古アルカのこういった特徴は当時のアディアの思想にある。アディアは様々な言語圏に属するランティスから成り立っていた。ランティスは互いに異なる母語の音韻体系を確立していたし、更には発声法まで異なっていた。古アルカの/s/という音素が使徒によっては[s]や[ʃ]のように発音されることが日常茶飯事であった。そのため、たとえばリディアは[s]と[ʃ]を区別しているので/s/と/ʃ/という 2 つの音素があると考えている一方で、セレンは[ʃ]は[s]の異音でしかなく、/s/1 つしか音素として考えていないというような齟齬があったのである。そのような齟齬は殆ど水面下にあり、実際に生じていると発覚したものは氷山の一角でしかなかった。ただ、氷山の一角でも発覚すればその場合はセレンはセレンで正しいし、リディアはリディアで正しいというような判断を下していた。アディアはランティス個人の文化を尊重しあうという風潮にあったためである
　ところがこの風潮では音素数が増える一方であった。というのも、セレンはセレンで正しいとした場合、/s/は音素であるが、リディアも正しいとした場合、/s/だけでなく/ʃ/も音素になってしまうからである。つまり、より音素数の多いほうに実質上は合わせるという結果を招いていたのである。こうして古アルカの音素は制アルカに比べ、遥かに多かった。以下では古アルカの歴史別に音素の変動を眺めてみる

2－2：前期アルカ

前期アルカは殆ど文献が残されておらず、使徒の記憶を頼りに音声と音韻を探り当てるか、中期に記された『制定語彙』の中から既に前期にあったと目されるもので探り当てるしかない

前第一改定アルカに存在したと考えられる音韻は日本語・フィンランド語・英語の音韻のうち、セレンとリディアが共通で識別できるものであったと理論的に考えることができる。英語に存在する音素である/l/と/r/は通常[l]と[ɹ]の音声であるが、この音声はリディアは英語ができたので識別できたが、セレンには識別できなかった。そのため、リディアが[l]と[ɹ]を区別して別々の/l/と/r/という音素だと考えていたとしてもセレンはその識別ができないため、恐らく/l/と/r/の区別はされていなかったと思われる。セレンは[l]も[ɹ]も[ɾ]に近いと認識したため、恐らくこれを/r/だと考えていた。ところがリディアは[ɾ]と[d]の区別ができないため、これを/d/という音素だと考えていた。一方のセレンは[ɾ]と[d]が区別できるため、/r/と/d/という音素が存在すると考えていた。つまり、セレンは/r/と/d/を認めていたがリディアは/l/と/r/と/d/を認めていたわけである。しかしセレンの/r/や/d/とリディアの/r/や/d/は別の音声からなる音素であるため、同一の音素ではない。そのため、これらを音素として両者が認めていたとしてもその音は別々のものであったと考えられる。また、/l/は両者に共通しない音素だったため、これは恐らく古アルカの音素と考えられてはいなかったと思われる

このように考えていくと、古アルカに使われていた音声は日本語・フィンランド語・英語のものと多種多様であったが、音素として認められるものはそう多くなかったという推測がなされる

日本語・フィンランド語・英語の音韻体系を対照して当時の音韻体系を推測するに、おそらく/s/,/t/,/k/,/n/,/m/,/r/,/h/,/d/,/g/,/a/,/i/,/o/,/e/,/u/は音素だったと思われる。/h/はその存在が怪しいと考えられたが、メル2年ごろに創造されたサールにハーディスというのがあり、これは『制定語彙』では読みが[haːdis]と記録されていることから、恐らく音素だったと考えられている。ただ、『制定語彙』の音声記述を音韻体系を映す鏡だと安易に考えてはならないとは既に述べたとおりであるため、あくまでこれは推測の域を出ない

2－3：中期アルカ

中期アルカになると使徒が増えたことによって彼らの母語から様々な音声がアルカに流入された。このとき、音素数が多い母語の使徒は古アルカの音素を多いと判断したし、音素数が少ない母語の使徒は逆に古アルカの音素を少ないと判断した。たとえば[s]と[ʃ]の区別がある母語話者はそうでない母語話者の発音するアルカを聞いて勝手に/s/と/ʃ/という音素を立ててしまうのである

そうやって中期は新参の使徒が勝手に音素を増やしていったのである。新参の使徒は自分が区別する音素の分だけ音素が存在すると考えた。したがって新参の使徒が持ち込んだ音声と旧来の使徒が持ち込んだ音声の分だけ古アルカには音韻が存在することになってしまった

厳密に言えばこのときの音素数は使徒によってまちまであった。たとえばある使徒にとっては 20 種だったし、またある使徒では 30 種というようなことがあったのである。ところが幻字は表意文字だったため、この問題は浮き彫りにされなかった

幻字がもし表音文字だったら音素が増えればそれに対応する文字を作らねばならない。[s]と[ʃ]がともに/s/であるうちは 1 文字でよいが、これらが区別されて/s/と/ʃ/になったときは/ʃ/を表わす文字が新たに必要になるのである

したがって、もしこの時期に幻字が表音文字であったなら、使徒間の音素の捉え方の齟齬が浮き彫りになり、ランティス同士の文化を尊重しあうという風潮は続行不可能であったろうし、また古アルカという言語の存亡にも関わったことであろう。ところが現実には幻字は表意文字であったため、この問題は回避されたのである

このことは漢字も同じで、漢字は表意文字だからこそ中国語・韓国語・日本語といった異なる音韻体系を持つ言語にもするすると問題なく入っていくことができたのである。これがアルファベットのような表音文字であったら、転地での音韻体系に合わせて新しい文字を作ったり、既存のアルファベットを組み合わせたり、補助記号を付けて音素を表わさなければならない。もし幻字が表音文字だったらそのような事態に陥ってたのである

音素数は使徒によってまちまちであったが、古アルカはアルシェのものなので、誰かの音素論を正当とすることはできない。したがって全ての使徒が提唱する音素を全て集めてそのうちの異なり音素の数を音素と認めなければならないのである。これは言い換えればおおよそ使徒の使う音声の数だけ音素があるということである。音声はリーザが『制定語彙』で IPA の形で記している。つまり、リーザが聞き取れた音声の分だけ中期には音素があったと考えなければならない

ところで、このときリーザが用いた IPA はメル 0 年ごろに改訂された IPA で、『制定語彙』の原本はこの時点の IPA で綴られていた。ところが『制定語彙』はメル 13 年ラルドゥラの月フルミネアの日に原本の一部が損傷したため、写本が作られ、原本は焼却された。そして写本にはメル 4 年ごろに改訂された IPA が使用されたのである

では、『制定語彙』に記録された音声はどれだけあったのだろうか。以下に列挙する

＜子音＞

[p][b][t][d][k][g][/][m][ɱ][n][ŋ][ɲ][N][B][r][R][ɾ]

[ɸ][β][f][v][θ][ð][s][z][ʃ][ʒ][ʂ][ʐ][x][ɣ][χ][ʁ][h][ɦ]

[j][l][ʎ]

ここに挙げられた子音は 38 種で、これが『制定語彙』に記録された異なり子音の数である。ところがこの中の[ɱ][N][R][ɸ][β][x][ɣ][χ][ʁ][ʎ]は「この発音が正式であるが、通常は以下のように発音する」という意味の括弧書きがなされていたものである。たとえば[x]と書いてある後に([h])などと書いてあるのである。このことから、これら 10 種の子音は半分異音のような扱いを受けていたといえる

＜母音＞

[i][y][ɪ][e][ø][ɛ][œ][æ][a][ə][ɑ][ɔ][o][ɯ][u]

母音はこれら 15 種であり、非円唇のものが多い。また、前舌母音のほうが奥舌母音よりも多く見られる。母音は子音と同様に減少の一途を辿るが、円唇母音が優先的に減少していった

但し、母音も子音と同じく[y][ɪ][ø][œ][ɑ][ə]の 6 種に括弧書きがなされており、これらは半分異音のように扱われていた。また、母音は子音と違ってこれらは異音であるというように取れる記述がリーザによってなされていたため、これら 6 種は異音と考えるほうが自然である。そこで古アルカは 9 母音体系だったという考え方が一般的なのである

以上が『制定語彙』に記録された中期アルカに使われた音声であるが、殆どの使徒はこれを全て区別することができなかったと考えられている。ところが『制定語彙』の後身に当たる『高水準制定語彙』は『制定語彙』の方法を真似たために、このような記述法が後期でもなされてしまった。そしてそれによって古アルカの音韻体系は最後まで確立しなかった

2－4：後期アルカ

後期アルカの音声・音韻事情は中期のそれと何ら変わることがない。後期に入るまでにアルシェの使徒は殆ど集まっていたため、新たな使徒による音声の流入も殆ど見られなかった。メル8～9年ごろにアルシェの軍門に下ったファーヴァによって入破音[ɠ]を除いて子音の増加は見られなかった

後期アルカ最大の文献は『高水準制定語彙』であるが、『高水準制定語彙』に記録された音声は[ʕ]を加えただけで他は変わりなかった

2－5：メル・アルカ

メル・アルカになるとソーンとの和平の影響で使徒の数が倍増し、それによって互いの母音が聞き分けられなくなり、同定可能な母音数が減少した。それまで9母音体系と考えられていた母音数は軒並み減少し[a][i][o][e][u]或いは[a][i][ɔ][ɛ][ɯ]を使った/a/,/i/,/o/,/e/,/u/の5母音体系と考えられるようになった。子音数も同様の理由で減少の一途を辿った

それまでランティスは自分の音素数をアルカにも当てはめようとしていたために音素数は音声の数だけ増えてしまったが、これには問題があった。いくら『制定語彙』や『高水準制定語彙』に[h]と書かれていても、これを発音できない使徒は頭では分かっていても口頭ではその音を発音できないのである。メルなどは/hacma/を[arma]と発音したし、無理に/h/を発音しようとするとそれは[karma]などとなってしまっていたのである

これでは『制定語彙』や『高水準制定語彙』でいくら厳密な記録をしても意味がない。ところが和平以前はランティスが発音できないのは個人の責任と考えられ、救済措置は取られなかった。ところが和平以降は話が違う。和平で使徒が倍増し、メルのような問題が急増した。これでは意思疎通が不可能であると判断したアシェットは音素の概念を取り入れることにした

メル・アルカのころに作成された『制アルカオノマトペ』の音は『高水準制定語彙』のIPAを記入したリディアによるが、『制アルカオノマトペ』と『高水準制定語彙』の音を比べると『制アルカオノマトペ』の音声数は極端に減少しているのである。『制定語彙』・『高水準制定語彙』・『制アルカオノマトペ』の音の欄はいずれもブランケットやスラッシュの記号を使っていないのでそれが音声なのか音韻なのかという区別がなされていない。そのため、『制アルカオノマトペ』に記録された音が音声であるか音素であるかは分からない。だが、『高水準制定語彙』から2～3年ほどしか離れていないのにそこまで音声が減少するということは考えにくい。そこで、『高水準制定語彙』に記録された音は音声であり、『制アルカオノマトペ』に記録された音は音素であったと考えるのが妥当である。作成者のリディアも確かに前文でそのように述べている。ただ、実際『制アルカオノマトペ』を見てみると、どの音声をどの音韻に当てはめるかといったことが統一されておらず、リディア個人の中で迷いが見られる。したがって『制アルカオノマトペ』の音を全て音素と考えるのは危険であるが、『制アルカオノマトペ』に記録された音素は以下の通りである

/p//b//t//d//k//g//m//n//B//r//ɾ//ɸ//β//f//v//θ//ð//s//z//ʃ//ʒ//ʂ//

ʐ//x//ɣ//χ//ʁ//ħ//ɹ//j//ɭ//ʕ//a//i//o//e//u/

以上、子音 32 種、母音 5 種の計 37 種が『制アルカオノマトペ』に記載された、換言すれば古アルカの最終的な音素であり、これら 37 種の音素から古アルカの音韻体系はなっていたと考えられる

ただ、この考えには異論が多い。特にメルなどはこの説に強く反対している。メルは母音はいいにせよ、子音はもっと音素としては少なかったはずだと考えている。メルの考えによるとメル・アルカの音韻体系は――

/p//b//t//d//k//g//m//n//r//ɾ//f//v//θ//ð//s//z//ʃ//ʒ//ħ//ɹ//j//ɭ/

/a//i//o//e//u/

――という子音 22 種、母音 5 種の体系だったと考えられている。入破音などは/p/の異音だと考えられていたのである。この提示はリディアの提示と随分異なるものである

だが、メルの考えは後の制アルカを考慮して考えると頷けるものである。制アルカの音はそれまでのアルカの音を参考に選ばれたものである。当初は世界一簡単な人工言語をセレンが目指していたため、古アルカの音は無関係だったが、最終的に制アルカは古アルカの音を参考にしている

制アルカの音素は子音 20 種、母音 5 種である。制アルカが古アルカの音を参考に作られたとするならメルの考えである子音 22 種、母音 5 種という音韻体系は非常に受け入れやすいものである。また、メルの出した音韻体系は数だけでなくその内容もまた制アルカの音韻体系とよく似ている。こうした事情を考えるとメルの提示したメル・アルカの音韻体系は強ち誤りとはいえないようである

2－6：アルカ・エ・ソーン

アルカ・エ・ソーンの音韻体系は中期のものと変わらない。クミールは統語論や形態論を変えることはあっても音韻体系を変えようとは試みなかったのである。アルシェがソーンと対立していた後期には殆ど両者の音韻体系は変わることがなかった。ただ、それでも使徒の個々の発音がアルシェとソーンでは互いに耳慣れないものであったため、メル・アルカになるとすぐに音韻体系は単純なものに変わっていったということは既に述べたとおりである

アルカ・エ・ソーンでの音に関する特筆すべきことは母音の連続を嫌い、母音の間に v

を挟んだということである。但し語の内部に起こる 2 重母音などはこの対象としなかったため、「愛」を表わす/tia/は/tiva/にはならず、/tia/のままであった

3－1：制アルカ

制アルカは表音文字を使用するため、古アルカと違って早くから音韻体系を確立する必要性があった。当初セレンは制アルカを世界一簡単な人工言語にするつもりでいたため、非常に簡単な音韻体系を持たせていた。それは母音の数が 5 種で子音の数が 10 数種という極めて単純な体系で、更に音節構造も CV という極めて単純なものであった。また、その音素に当てる音声も類型論的によく使われる音を採用していた。即ち、入破音などは採用せず、[p][t][k]などを採用したのである

ところがその体系はクミールに否定されたため、セレンは音韻体系を作り直すことにした。その後、セレンはメルが提唱したメル・アルカの音韻体系を参考に、制アルカの音韻体系を新たにしていった。メル・アルカで認められた音素のうち、母音は 5 種をそのまま選んだ。子音はメルの提唱する 22 種の中から選択し、これに半母音の/y/と/w/を加えた 20 種とした。子音の数や種類はプロトタイプの時代に変動が激しかったが、母音は数も種類も常に一定であった

制アルカの音韻体系は子音が母音より多く、母音は世界的に見ても平均的な数である。音節構造は複雑で、子音の連続が激しいが、語頭の子音連続は語末に比べて少ない。また、語末では子音連続の種類が多いが、語頭では少ない。たとえば古アルカの語である grat には存在した gr-という語頭子音連続は制アルカでは許されない

また、アクセントは高低アクセント体系であり、語は必ず第 1 音節にアクセントを持つ。アクセントは 1 語に 1 つであるが、複合語の場合は形態素ごとに副次アクセントが置かれることもある。尚、声調はない

通常、ドイツ語とは違って語と語の間に声門閉鎖音が挟まれることはない。挟まれるとすれば個々の語を強調したり、文全体の歯切れをよくしようとする場合である

3－2：制アルカの音素と音声

古アルカは非常に多くの音素を使用していた。たった数語のためにしか使われない音も数多くあった。代表的なものは使徒ファーヴァの参入頃に流入した両唇入破音[ɓ]や[p]を表わした/ɓ/や/p/で、これらは通称ρ（ロー）音と呼ばれていた。この音は[ɓanto]という植物の一種や装飾品の名、或いはしゃっくりを表わすオノマトペ[ɓaʔ]にしか使われなかった

制アルカはあまり使われなかったこれらの音を排除し、頻度の高かった音を採用した。音声学的にとか言語学的にということではなく、アディアがどのような音を使ってきたかということを基準に音素を制定した。そして、選ばれた音は以下の通りである

制アルカの子音は 20 種で、母音は 5 種。比較的他の言語より子音の比率が高い言語である。子音の数はプロトタイプで何度も変化したが、母音は常に一定だった

子音は基本的には[b][r][d][f][g][h][ʒ][k][l][m][n][p][ɹ][s][t][v][w][ʃ][y][z]の音声を使用する。これらは順にbcdfghjklmnprstvwxyzに対応する。但しその音素が存在する音声環境によって実際に採用される音声は変化する。例えばhは語頭などでは[h]だが、[a]の後にきて更に語末に来ると[x]に変化する

母音は基本的には[a][i][o][e][u]を使用するが、これも音声環境次第で変化する。また、これらは順にaioeuに対応する

3－3：音節構造

プロトタイプでは純粋なCV構造だったが、結局は英語と同じような複雑な構造になった

もしコンピューターに音声認識をさせようとするなら音節構造は単純な方がよいが、特にそういうつもりもなく単に単純で学びやすいという理由でCVという単純な構造を取っていた

しかし古アルカの音節構造が複雑だったために、CVという単純な音節構造は許されなかった。一般語がどのようなものになろうと良いが、人名が著しく変わってしまうことが許されなかったのである。例えばメルはmelu、セレンはserenu、クリスはkliizでなくkaliizuとかkuliizuとならざるをえなかったのである。これによってCVの音節構造だけでは不十分という認識がなされたのである

制アルカは子音の連続を許す。よって、CVもVもCVCもCCVも全てありうる音節である。母音は2重母音を認める。同一母音の連続は長音であるが、母音の長短は古アルカほど語彙や文法に関与しない

3－4：子音連続

子音は子音に後続することができる。その組み合わせは1音節で理論上、CCCVCCCを最長としている。つまり、制アルカでは1音節につき3つが子音の重なる最大値である

ただ、CCCVCCCという語は現実には未だ無く、多くはせいぜい二重子音どまりである。特に語頭は子音連続が少なく、2重子音でさえ英語のようには多くない。逆に、語末は子音が連続しやすく、2重子音は極めて頻度が高い。制アルカにおいて子音連続を含む典型的な音節はCVCCである。CVCCは数が多く、makl（散布）やtikl（真似）など、すぐに挙げることができる。尚、どんな子音の組み合わせでも連続が可能というわけではない

3－5：アクセント

強弱アクセントはどこまでが 1 拍かを示すのに都合が良い。一方、高低アクセントは同音異義語の区別に便利である。ならば強弱アクセントをといいたいところだが、強弱アクセントでは弱い音節の母音がシュワーになる傾向がある。シュワーは発音の労力を減らして効率的な発話に役立つが、制アルカの語は語形が短い上にたった 1 つ音が違えば意味が全然異なる語が多い。そのためシュワーを避けられない強弱アクセントは不都合である。そこで制アルカは高低アクセントを選んだ

制アルカは拘束アクセント体系の言語であり、常に第 1 音節にアクセントが置かれる。固有名詞であろうが外来語であろうが登録商標であろうが、常にアクセントの位置は一定である。このおかげで制アルカは単語がどこから始まってどこで区切れるかということが明瞭である

3－6：語境界

制アルカでは単語の始めの音節にアクセントが置かれるため、アクセントが語境界の役目を果たす

ただ、実際はアクセントだけが語境界を示しているのではない。一般に語の終わりの子音は語頭や語中の子音より長いという特徴がある。母音についても同様である。また、語末音調を持つという特徴もある

3－7：イントネーション

制アルカは高低アクセントなので、アクセントに覆いかぶさるように語末や文末にイントネーションが掛かる。イントネーションは音の高低で表わされるため、母音だけに掛かる。というのも、子音は音に高低を付けられないからである。イントネーションが掛かる部分は音が若干伸びる。場合によってはアクセントの置かれた第 1 音節より高くなることもありえる

イントネーションは上昇調、平調、下降調、急上昇調、急下降調、昇降調、中止調の 7 種があり、文末に現れてモダリティを表わす。例えば上昇は疑問や返答の要求などを表わし、下降は中立的な文の終わりを表わしたりする。以下にそれぞれの意味と対応する意味幻字を挙げる

1：上昇：？

上昇調は相手への疑問や自分の自信の無さを示す。また、相手に対して返答を要求したり、行動を促したりする場合にも使われる

2：平：!!

　平調は文が継続していることや詠嘆を表わす。詠嘆の場合、そこで文が終止する。なぜこれらが同じ平調で示されるのかということについて説明する。文が継続しているということは本当はまだ言いたいことが残っているわけである。にもかかわらずそこであえて文を終わらせるという行為によって文全体に余韻を残すのである。そのため、平調は文末では詠嘆の意味を持つ

3：下降：.

　下降調は文が自然に終了する場合であり、話者の心理としては納得や賛成を表わしている。下降調は自然下降調とも呼ばれ、もっとも一般的なイントネーションである

4：急上昇：??

　急上昇調は意外感や強い驚きを表わす。相手に疑問文で問いかける場合に急上昇調を使う場合、大抵はその答えを知っている上で驚きを表現する場合である

5：急下降：落胆や怒りなど：!

　急下降調は話者の落胆や怒りや驚きを表わす。語気が荒ければ怒りや驚きで、語気が弱ければ落胆を示す

6：昇降：$

　昇降調は相手に対する疑心や侮辱心などを表わす。また、相手に対して不賛成を示すが、これも丁寧な意味での不賛成ではなく、無礼な態度である。更に、聞き返しとしても使えるが、これもやはり無礼な聞き方である。制アルカでは一般に昇降調は無礼な言い回しとされ、あまり良い意味を持たない。したがってこのイントネーションはできるだけ使わないほうが無難である

7：中止：歯切れのよさや瞬間的な驚きなど：_

　中止調は文末で突然音が切れたようなイントネーションである。日本語で書き記すなら、驚いて「何？」と言おうとしたが、驚きのあまり「なっ…！」といってしまうときのイントネーションに近い。文の最後の音はふつう若干長く発音されるが、中止調の場合、突然

途切れたように発音するため、かなり短く発音されるのである。文の最後の音が母音ならばその母音は非常に持続時間が短く、子音ならば口の構えだけで実際は殆ど発音されないといった風に実現される

3－8：有声音と無声音

制アルカは有声音と無声音の対立があるが、有気音と無気音の対立はない。無標はエネルギーの消費が少ない無声音である。このことは言語の経済性を優先すれば当然のことであり、多くの自然言語で観測されることである。換言すれば b より p の方が良く使われるし、z より s の方がよく使われるということである。実際に辞書で確認すれば分かるが、圧倒的に z より s の方が多く使われている。いかにアルカという言語が自然発生に近い形で作られた人工言語かということが分かるだろう

3－9：[v]について

一般に、無声音は無標である。有声音は対応する無声音に比べて頻度が非常に少ない。だが、例外が 1 つある。v だけは他の有声子音に比べて頻度が高いのである。これはなぜか？

そもそもセレンの母語である日本語に v はないので、セレンは v と b を聞き分ける環境になかった。もっとも、フィンランド語には v の音が使われるので(例えば ovi は「ドア」)リディアは v の音を知っていたが、セレンがついていけなかったため、初期の古アルカには殆ど v を持つ語は生まれなかった

このころの環境がアルカの根本的な音声についての性格を決めているため、使徒が増えた後も v はあまり使われなかった。因みに、古アルカには b も少なかったが、その原因は v と逆で、リディアが b を若干苦手としていたためである

さて、セレンに避けられたせいで殆ど使われてなかった v だが、そのおかげで後に却って大躍進を遂げることができたのである。後期アルカに入ってクミールが離反し、アルカ・エ・ソーンが発生すると、クミールはアルカ・エ・アルシェを変化させてアルカ・エ・ソーンを作っていった。中でも語と語の間に母音が続くことを嫌った彼女は、語頭に適当な子音を挿入することによって問題を解決しようとした

だが、適当な子音といっても頻度の高い s や k だとまずい。というのも例えば ait という語に s-を付けて sait としてしまうと既にアルカには sait という語があるため、同音異義語が生じてしまう

そこでクミールが目に付けたのは尤も人気のない子音である。尤も人気のない子音を付ければ同音異義語が発生しにくくなるからだ。そこで選ばれたのが v である。v はそれから大躍進を遂げ、様々な語に組み込まれていった

ところで、アルシェの中には当時敵性語であったアルカ・エ・ソーンに憧れを感じてい

た者がいた。アルシェにとってアルカ・エ・ソーンは唯一の方言や外国語であり、そこにエキゾチックな雰囲気を感じた者がいたのだ。彼らはアルカ・エ・アルシェに v 音を輸入した。また、ソーンを特に敵視していた者が悪い意味の言葉に v を輸入することもあった。こうして v は急激に頻度が高くなっていった。従って制アルカにおいて v を持つ語の殆どはアルカ・エ・ソーンが語源かアルシェが輸入して作ったものが語源かのどちらかである

第 5 章：形態論・語彙

1－1：古アルカ

古アルカの形態論は中期ごろまでに確立し、以降はあまり変わることがなかった。古アルカの形態論で特徴的なものは天秤詞の存在だろう。これは日本語ではおよそ終助詞にあたり、典型的には対人的モダリティを示すものである。また、助動詞に当たるエクスプローダーも特徴的である。更に、テンスとアスペクトを表わす符という小辞もまた特徴的である

前期のころは機能語が乏しく、統語論もまた極めて単純だった。尚、統語論は次章で述べる。機能語は改定のたびに流入されたが、流入させたのは主にリーザであった。リーザは先代アルカから機能語を輸入していったが、前第一改定アルカのころはあまり輸入しなかった。輸入したところでメタ言語がなく、その語が何を意味するかということが使徒に伝わらなかったためである。そのため、機能語は極めて少なかったのである。後第一改定アルカになってメタ言語に英語が使用されるようになると、先代アルカから流入した機能語の数が増えていったのである

また、古アルカの語彙は時代を経るごとに増えていったが、その増え方は一定ではなかった。『制定語彙』や『高水準制定語彙』といった文献の登場があると途端に語彙は膨らむというように、古アルカの語彙数は文献に左右されていたのである。『制定語彙』や『高水準制定語彙』ができれば語彙が整理される。語彙が整理されれば使徒は翻訳や文章作成の仕事に入る。それによって語彙が更に増えるという仕組みである。尚、古アルカの語彙は最終的にはおよそ 15000 語であると考えられている

1－2－1－1：前第一改定アルカ

前第一改定アルカの語彙はその殆どがリーザによってもたらされた初代アルカと先代アルカの語彙である。セレンとリディアが作り上げた語もあるが、前第一改定アルカの語彙であると判明しているものの中では、それは例外なく自然言語由来のものである。たとえば「火」を表わす語は[rai]であるが、これは日本語の外来語のライターからきている

このころの語彙の種類は非常に原始的である。名詞は身体語彙や身近な物の名前に限られ、抽象的な概念はないか或いは具体的なものをそのまま転用していた。たとえば上述の[rai]は具体的には「火」という意味だが、これを抽象的に用いて「熱い」「暑い」の意味で用いていたのである。動詞は行くや来るといった基本動詞が数語で、形容詞は大きいや小さいを表わすものなど、ほんの数語だった。しかもこれらは形容詞という区別はなされず、ただ名詞のように扱われた

一方、機能語や代名詞はリーザが流入したものが全てで、前第一改定アルカの語彙であると確認できるのは例が少ない。例を挙げると[del]「私」、[de]「繋辞」などである。ところが[de]はリーザによるとセレンがこの意味を理解しなかったため、廃止されたという。また、リーザは否定を表わす[jan]も流入しようとしたがこれはリディアもセレンも理解しなかったため、これも廃止された。結局、このころ否定や疑問はイントネーションや語調などで表わされていたのである

ところが禁止を表わす[na]は理解され、これは普及した。古アルカで城は[nalu:ta]というが、これは「入るな（＝入ってはいけないところ)」が原義である。因みに[nalu:ta]はもとは城ではなく学校を表わしていた

1－2－1－2：語彙の内訳

前第一改定アルカの語彙の総数とその語源の内訳について述べる。前第一改定アルカは文献が殆ど残されていないため、語彙数を計ることは不可能である。前第一改定アルカの語彙数を計るには中期に作られた『制定語彙』の中から前第一改定アルカのころに既にあったと使徒が記憶しているものの総数を挙げる方法しかない

生き証人になっているのはリーザ・セレン・リディア・オヴィの 4 人だが、オヴィは当時のアルカの力量を考えると当てにならない。オヴィの次の使徒であるクリスは尚更である。したがって、実質記憶が頼りになるのはリーザ・セレン・リディアの 3 人であるが、このうちセレンとリディアは年少者だったため、記憶が曖昧である

もっとも信用に足るのはリーザであるが、これにも問題があった。リーザは確かに記憶が一番確かであるが、彼女は前第一改定アルカの話者ではないのである。前第一改定アルカはセレンとリディアが実質上の話者であり、リーザはどちらかというとむしろ観察者に近い。実際のところリーザは前第一改定アルカを殆ど話していなかったのである。つまり、観察者としての立場でしかないリーザは実際の前第一改定アルカを知らないわけで、何が前第一改定アルカの語であったかを判断するのは難しい

そこで、結局リーザはセレンとリディアの助けを借りて前第一改定アルカの語彙数を推定した。『制定語彙』に収録されたもののうち、前第一改定アルカに使われていたかどうかを3人が判断し、2人以上があると判断したものを前第一改定アルカの語彙としたのである。尚、前第一改定アルカについて書き記したリーザの手帳があり、非常に有益な情報を与え

てくれるはずであったが、それはソーンとの抗争が原因でメル 10 年初頭に焼却されているため使えない。尚、この内省実験はメル 11 年メルの月ごろに行われたものである

さて、その結果、前第一改定アルカの語彙数は 107 語と計上されたが、この調査では『制定語彙』に収録されるまでに既に滅んでしまった語については全く計上できないという欠点がある。『制定語彙』以前に生まれて滅んだ語については全く考慮できないのである。したがって実際は 107 語よりもっと多かった可能性がある。また、ここに計上された 107 語でさえ果たして正しい内省であったかどうかという保証はないのである

続いて前第一改定アルカの由来の分布を記す。前第一改定アルカの語彙は自然言語由来のものと初代アルカ・先代アルカ由来のものとでできている。ところが『制定語彙』には自然言語由来のものが殆ど収録されていないため、自然言語由来の語数は不明である

上述の調査では 107 語のうち、[del]などの初代アルカ・先代アルカ由来のものが 37 語あり、[rai]や[bande:]など、自然言語由来のものが 70 語あったとされている。初代アルカ・先代アルカ由来のものは機能語や基本語彙であるため、そのまま滅びずに『制定語彙』まで残ったものが多い。ところが自然言語由来のものはそうではないため、作られても消えやすい。そのため、実際自然言語由来のものはもっとたくさんあったのではないかと思われる。尚、この時点では古アルカの音象徴による語は 1 語も見られない

1－2－2－1：後第一改定アルカ

第一改定によって幻字の整理が初めて行われた。それによって語彙も増加したが、このとき増加したのはリーザによる機能語である。これは前第一改定アルカで行われた試みと同じことであったが、大きな相違点がある。それは後第一改定アルカにおける機能語の流入はメタ言語を介して行われたという点である。このとき、メタ言語には英語が選ばれた。リーザは英語をメタ言語として使い、先代アルカの機能語や基本語彙を古アルカに流入させていったのである。たとえばリーザは英語の is を取り上げて、それが[de]であると教えた。また、not を取り上げてこれが[jan]であると教えた。こうやってメタ言語を介すことによって古アルカの機能語は飛躍的に増えたのである

尚、このころ英語からの語彙の流入がそれまで以上に多く見られるようになるが、その背景にはこうしたメタ言語としての英語が控えていたのである

後第一改定アルカで増えた語彙は主に機能語で、それ以外は英語や使徒の母語由来の語である。後者はアルカの語とは言いがたいため、アルカの語彙といえば前者しかありえないという状況であった

ところで、後第一改定アルカまでに発生した品詞の種類であるが、これはあまり多くなかった。まず、幻字は表意文字であり、品詞情報は文字に書き込まれなかった。同じ字が主語にも述語にもなったのである。同じ[rai]という字が名詞としては「火」、動詞としては

「燃やす」や「燃える」、形容詞としては「燃えた」や「火の」、副詞としては「燃えるように」などの意味を持っていたのである

尚、幻字の品詞性は前第一改定アルカのころは語順で決まっていた。前第一改定アルカの語順は「主語＋述語」という単純な構造で、繋辞さえ存在しなかった。リーザは繋辞を流入させたが普及しなかったのである。ある幻字が名詞か動詞か形容詞かといったことは全てこの語順で決まっていたのである

だが、後第一改定アルカになると SOV の語順が確立し、S＋繋辞＋C の語順も成立した。繋辞は[de]という語であったが、これはまた[de]以下が形容詞や副詞であることを示す役割も持っていた。[liːz]という語は「小さい」という意味だが、[liːz]単体では形容詞ではなく、[de liːz]となって初めて形容詞となる。制アルカで tis が「小さいもの」という名詞であり、a tis になって初めて「小さい」という形容詞になるということと同じである。副詞もまた形容詞と同じで、やはり[de]によって表わされていた

また、後第一改定アルカのころは接続詞は逆接の[tail]と原因を表わす[pin]しかなく、順接などは存在しなかった。感動詞はあったが、幻字になったものはなかった。後置詞も前置詞もまだこのころはなく、「私は学校で泣いた」は「私は泣いた」と「場所は学校である」という 2 文で表わしていた。即ち[del ena]と[kal de naluːta]である

尚、テンスやアスペクトを表わす方法はなかったが、後第一改定アルカになってようやく過去と非過去の区別だけなされた。リーザが先代アルカから輸入したもので、動詞に d を付けるという簡単なものである

1－2－2－2：語彙の内訳

上述したメル 11 年メルの月の調査によると、後第一改定アルカの語彙の総数は 176 語であった。これは無論前第一改定アルカの語彙も内包している。そしてこれも前第一改定アルカと同じく、後第一改定アルカの時代に生まれて『制定語彙』以前に滅んだ語については何も触れらていない

分布であるが、176 語のうち単純語は 124 語で、このうち幻字が定まっているものは 62 語である。他は複合語で、このうち 32 語は幻字による複合語である

また、176 語のうち、自然言語由来のものは 42 語で、残りは初代アルカ・先代アルカ由来のものである

1－2－3－1：前クミール・アルカ――音象徴ができるまで

前期の語彙は自然言語に依存する点が大きかった。ところがその状況は中期になって一転する。中期になると使徒によるアルカの音象徴が創造された。このとき特に貢献したの

がリーザ、リディア、セレン、メルの 4 人である。メルは特に古アルカに音象徴をもたらしたきっかけを生んだということで貢献度が高い

そもそも古アルカに音象徴が生まれたのはとりわけ年少者であったメルがアルカを上手く利用できないということがきっかけだった。当時のアルカはアルカだけでは意思疎通が難しく、使徒は各々の共通する言語を取り混ぜながら意思疎通を図っていた。大概は語学力の高い使徒がそうでない使徒に合わせていた。たとえばセレンとリディアではセレンが拙い英語で喋るか、リディアがセレンの英語よりは遥かに良い日本語で喋るかという言語状況だったため、リディアが日本語を混ぜながらアルカを喋っていた

ところがメルはセレンやリディアと共通する言語が英語しかなく、その英語もリディアやセレンの訛りとは随分違ったものであった。また、当時年少者だったメルをセレンとリディアは特に可愛がっていたため、メルはセレンやリディアとの接触が多かった。3 者に共通するのは英語であり、実際に訛りだらけの英語とアルカが混用された。セレンとリディアはメルにアルカを教えたがっていたため、積極的に英語をメタ言語にしてメルにアルカを教えようとした。ところが当時のアルカの語は自然言語や初代アルカ・先代アルカに由来するものばかりであり、それらは恣意的なため、メルは語義の理解に苦しんだ

そんな折、セレンとリディアはメルがオノマトペの習得は容易に行うという事実に気が付いた。更にメルは自分のわからない語をどうにか伝えようとするとき、それをオノマトペらしき音を使って表わしていた。これを見たセレンとリディアはオノマトペを利用してメルにアルカを教えようとした

ところが、セレンが教えると日本語のオノマトペの体系を用いてしまい、リディアが教えるとフィンランド語などのオノマトペの体系を用いてしまう。更に悪いことに両者は英語のオノマトペの体系を満足に習得していない。日本語のオノマトペでは濁音は清音に比べて「重い」「汚い」「悪い」「大きい」といったイメージがあり、「ドンドン」のほうが「トントン」より大きな音のような気がする。仮にセレンがその体系にしたがってメルにオノマトペを教えたら、次にリディアが教えたときに齟齬を引き起こすかもしれない。というのも、フィンランド語のオノマトペの体系は日本語のそれとは異なるからである

だが、当時のセレンやリディアにオノマトペの体系が言語ごとに異なるなどという知識はなかった。そこで実際はじめはメルに思い思いの体系を教えていた。ところが、メルはあくまで自分のオノマトペの体系を貫き通そうとするため、メルの頭は混乱しはじめた。この状況を重く見たリーザは 3 者に共通する新たなオノマトペの体系をゼロから作り上げることを決定した

尚、リーザの狙いはメルの救済が主な理由ではなかった。リーザは当時のアルカの語彙が自然言語によるものばかりであることに不満を覚えていた。当初リーザは先代アルカのように自分が作った語彙を徐々に使徒に広める気でいたが、これが広まるより先に自然言語由来の語が定着してしまうのである。これでは様々な自然言語を混ぜ合わせたピジンにすぎない。リーザはアルカならではの語彙を望んだ。だが、どうしたらゼロから語彙を作

れるのかということがわからずに彼女は悩んでいたのである

そんなときにリーザはメルの状況を見て、アルカなりのオノマトペを思い付いたのである。独自のオノマトペを作る過程で音象徴の体系を作り上げ、その音象徴を利用して今度はオノマトペ以外の語も作るというものである

リーザのこの閃きは果たして大成功を収めた。音象徴を作り上げたアルカは次々と独自の語を生み出していったのである。その結果、オノマトペの数はあまり多くなくなってしまった。というのも、当時は語そのものが音象徴からできていたため、ある意味ではほぼ全てがオノマトペだったのである。そういう意味で純粋なオノマトペとただの語との線引きが難しく、オノマトペとはっきり言える語は少なかったのである

1－2－3－2：前クミール・アルカ――リーザによる改革

さて、前クミール・アルカにおける品詞であるが、ここでは前期までに現われなかった新たな品詞が生まれていった

後第一改定アルカになって英語をメタ言語にしたことにより機能語も多く先代アルカから流入してきた。その基盤を踏まえた上で中期は機能語が発達していった。リーザは前期にはあまり流入されなかった接続詞の流入を再び行い、今度は成功した

語順は SVO に変わり、後置詞が生まれる可能性は極めて薄くなった。そして実際このときに生まれたのは前置詞である。このとき生まれた前置詞は内容語を文法化したものが多い。たとえば[kal]は「場所」という先代アルカだが、「私は学校で泣いた」という場合、当時はこれを「私は泣いた」と「場所は学校である」という 2 文で表わしていた。即ち[del ena]と[kal de nalu:ta]である。この 2 文を繋げると[del ena kal de nalu:ta]になるが、当時繋辞は頻繁に省略されていたため、これは抵抗なく[del ena kal nalu:ta]になっていった。もともと前第一改定アルカでは繋辞は使われていなかったため、繋辞の省略は抵抗がなかったのである。こうして前置詞は発達していった。たとえば時間を表わす[ima]も同様の手続きで文法化していったのである

前置詞の次に発生したのはエクスプローダーである。当時のアルカはモダリティを表わす機能がなく、命題をどうにか拙く述べるといった機能しかなかった。意思や可能といった表現はできなかったのである。だが、第二改定によって抽象語が増えたことにより、内容語に意思や可能といった抽象的な概念が増えていった。使徒はその命題が可能であるとかそうする意思があるといったことを、動詞の後に「意思」や「可能」を意味する内容語を付けることによって表わしだしたのである。これがエクスプローダーの始まりで、最初のエクスプローダーは可能を表わす[en]だった。その次は希望を表わす[lan]であり、その次はエクスプローダーと違って動詞に前置されていた禁止を表わす[na]であった。[na]はそれまでは動詞に前置されていたが、他のエクスプローダーの影響から影響を受けて後置されるようになっていったのである。但し、否定の[jan]だけは前置されたままであった。尚、

エクスプローダーはこの後急速に増えだし、最大時では100種にも上ることがあった
　また、リーザは接続詞の他にテンスやアスペクトを表わす機能語を先代アルカから流入させた。これは符と呼ばれているもので、前期には過去を表わす d しかなかったものである。リーザは d の他に現在を表わす ra、大きな過去を表わす rado、完了を表わす dora、意思未来を表わす s をテンスとして流入させた。アスペクトとしては継続相として tan を取り入れた。また、意思未来という助動詞的意味を持った語の推移から、命令を意味する re、弱い命令を表わす m、敬意を表わす mi なども取り入れた。mi などは re と呼応関係があり、mi~re の形で「～してください」の意味になる。mi は m との組み合わせで mi~m ともいえるが、これはリーザがセレンらに対して使ったことにより、子供などを相手取るときにしか使わないようになった。セレンやリディアはしたがってリーザや自分たちに対して mi~m を使わなかったが、メル相手には使った。この mi~m は甘やかすときの口調であり、セレンはメルに優しく話すとき、[mi keko m]（＝来てちょうだい）などと言っていた
　また、リーザは先代アルカからツンク、ガコンを輸入した。それに対してセレンとリディアは独自に英語の感嘆符と疑問符に当たる文字としてテンペラとクーノステイラを創造した

1－2－3－3：語彙の内訳

　上述したメル11年メルの月の調査によると、前クミール・アルカの語彙の総数は925語であった。そしてこれも前期と同じく、前クミール・アルカの時代に生まれて『制定語彙』以前に滅んだ語については何も触れらていない

　分布であるが、925語のうち単純語は439語で、このうち幻字が定まっているものは331語である。他は複合語で、このうち409語は幻字による複合語である
　また、925語のうち、自然言語由来のものは63語で、残りは音象徴由来と初代アルカ・先代アルカ由来のものである

1－2－4－1：後クミール・アルカ

　後クミール・アルカでは『制定語彙』が作成されたことにより、多くの語の幻字が整理された。それによって今まで曖昧だった語やそれまでにはなかった語が誕生した。ただし、自然言語由来の語の多くは『制定語彙』に収録されなかったため、その存在はあるにもかかわらず、無視され続けていた。そういった語は表現法を持たないため、文章上には現われなかったが、口語には現われていた
　ともあれ、『制定語彙』によって古アルカの文章が発達したことは確かである。幻字が整理されたことにより、今まで以上に文章を書きやすくなったのである。もっとも、メル・

アルカからみれば幻字の対応する語彙数が少なく、とても文章を書けるような状態ではなかったと思われる。だが、それでも当時のアルシェにとって『制定語彙』は革命的で、これによって随分文章を書くことができるようになった

そういうわけで後クミール・アルカには多くの文章が生まれたが、このとき文章を書くようになって必要になったものがある。その一つは機能語で、より細かなテンスやアスペクトが必要になった。前クミール・アルカで流入した機能語のうち、rado は実際使われることが少なく、大抵 d が使われていた。口語では今現在かそうでないかを問題にすることが多く、細かなテンスを問題にすることは少なかったためである。アスペクトも継続相の tan が使われる程度で、完了相の dora は殆ど使われなかった

ところが文章ではそうではなく、細かなテンスやアスペクトを表わす必要がしばしば出てくる。そこで rado や dora が今まで以上に使われるようになり、更にはより多くのテンスやアスペクトが必要となった。そこでリーザが先代アルカから取り入れたのが客観的な未来を表わす se、と主観的にこうなるだろうという推量の未来を表わす ne であった。また、アスペクトではないが警告を表わす su も流入した

こうして機能語が再び増えたが、後クミール・アルカでもっとも注目に値するのは天秤詞の発生である。『制定語彙』によって古アルカによる文章量が軒並み増えだした。アルカはアンシャンテなどを通して度々伝言として使われることが多くなっていった。ところが伝言としてのアルカには問題があった。というのも、当時アルカは専ら命題を表わす機能ばかりで、整いだしたエクスプローダーも命題に関する可能性や話者の態度でしかなく、聞き手に対する対人的モダリティを表わす機能は殆どなかったのである。伝言には音が含まれないため、伝言を残したものがどのような気持ちでその伝言を残したのかが不明である。これが伝言の問題であった。同じ禁止の文でも本当に怒っているのか或いは冗談半分にいっているのかでは大違いである。ところが伝言にはその気持ちが反映されない

その事態に対抗したのがリディアである。彼女はアルカを書く機会が多く、この問題を特に感じていた。そこでリディアは前クミール・アルカで創造したテンペラとクーノステイラに注目した。これらは話者の喋り方のイントネーションを記録したものであると同時に話者の驚きや怒りや疑問などの態度を表わしたものでもある。リディアはこのテンペラなどの位置に別の幻字を持ってこれないだろうかと考えた。そこでリディアはテンペラなどの代わりに「楽しい」と「笑う」と「怒り」を表わす幻字をそれぞれ使ってみた。するとこれが使徒にすぐに通じ、即座にこの手法は盛況となった。使徒はリディアの真似をして様々な幻字を文末に持っていった。「男」の文字を置いて「男っぽく喋る」の意味を出したり、「強い」の文字を置いて「語調が荒い」の意味を表わしたりした。こうして天秤詞が生まれたのである

使徒の中には天秤詞も発音するのかと勘違いした者がいた。オヴィやクリスがそうである。それで彼らが作った天秤詞は音を持って読まれ、「男口調」を表わす ga、「女口調」を表わす n という天秤詞が生まれた

また、こうした有音の天秤詞に触発されたリディアがオヴィらの真似をして有音の天秤詞である a:n を作った。これは「女口調」の n からできたものだとされていて、「女口調」を更に弱めた「子供口調」という甘えた感じの喋り方を表わす天秤詞であった。これは「習う」を意味する[ʃuʃo]の幻字で表わされた。つまり、こういった天秤詞は幻字が先にできたものでなく、天秤詞としてできた音に後から幻字を当てはめた特殊なものであるといえる

1－2－4－2：語彙の内訳

上述したメル 11 年メルの月の調査によると、前クミール・アルカの語彙の総数は『制定語彙』に収録された 1347 語であった

分布であるが、1347 語のうち単純語は 729 語で、このうち幻字が定まっているものは 611 語である。他は複合語で、このうち 607 語は幻字による複合語である
また、1347 語のうち、自然言語由来のものは 72 語で、残りは音象徴由来と初代アルカ・先代アルカ由来のものである
尚、『制定語彙』には自然言語由来の語があまり収録されなかったため、実際には相当量の自然言語由来の語があったはずであり、このころのアルカの語彙数はもっと多かったと思われる

1－2－5－1：前ソーン・アルカ

セレンの起こした第三改定によってアルカは複雑な修飾構造を持つようになっていった。具体的には関係詞節を作ることができるようになった。関係詞節を作るのは rom という字で、これは中期の終わりごろに既に用いられていた。だが、その時点では rom という読みがなく、関係詞は無音だったのである。後期になってようやく rom という名が付いたのである
また、このころになるとそれまでは繋辞を介して形容詞と副詞を導いていたものが取りやめになった。形容詞を導く機能語 le と副詞を導く機能語 he がそれぞれ作られたのである。また、動詞とエクスプローダーの間に無音の字を挟み、動詞とエクスプローダーの境界を明確にした。こうしないと動詞とエクスプローダーが複合語になっていると勘違いされるためである。中期までは複合語が少なかったが、後期に入ると複合語の数が増えたため、このような必要性が生まれてきたのである。尚、この無音の字は後に制アルカで動詞と時相詞を繋ぐ動詞媒介辞として生き続けることになる。但し、その字形は別である
これらの変化は中期の終わりごろから始まって、後期の始めごろに終わったものである。前ソーン・アルカがはじまるころにはもうこれらの変化は終わりかけていて、すぐ後の後ソーン・アルカがはじまるころには終わっていた

1－2－5－2：語彙の内訳

『制定語彙』のときと同じく、後期の語彙は『高水準制定語彙』の調査によって行われた。調査はメル 11 年ザナの月に行われた。調査した人物は『制定語彙』のときと同様である。また、調査法も前回と同様である

その調査によると、前ソーン・アルカの語彙の総数は『制定語彙』の 1347 に『高水準制定語彙』からの 1222 語を足した 2569 語であった

分布であるが、2569 語のうち単純語は 967 語で、このうち幻字が定まっているものは 812 語である。他は複合語で、このうち 1232 語は幻字による複合語である

また、2569 語のうち、自然言語由来のものは 80 語で、残りは音象徴由来と初代アルカ・先代アルカ由来と恣意的な造語である

恣意的な造語とは xerox のように語源のないもので、適当な音を当てはめただけの造語である。この類の造語は主にコンピュータ用語などを造語するときにリュウが多く用いた方法である

尚、『高水準制定語彙』には自然言語由来の語があまり収録されなかったため、実際には相当量の自然言語由来の語があったはずであり、このころのアルカの語彙数はもっと多かったと思われる

1－2－6－1：後ソーン・アルカ

後ソーン・アルカには『高水準制定語彙』が生まれたが、形態的な変化は特に訪れなかった。このころに起こった主な変化は関係詞が複雑化したこと、中期に急増していたエクスプローダーが減少しだしたことなどである

1－2－6－2：語彙の内訳

上述したメル 11 年ザナの月の調査によると、後ソーン・アルカの語彙数は『制定語彙』の 1347 語に『高水準制定語彙』に収録された 4756 語を足した 6103 語であったとされる

分布であるが、6103 語のうち単純語は 1988 語で、このうち幻字が定まっているものは 1498 語である。他は複合語で、このうち 3945 語は幻字による複合語である

また、6103 語のうち、自然言語由来のものは 134 語で、残りは音象徴由来と初代アルカ・先代アルカ由来と恣意的な造語である

尚、『高水準制定語彙』には自然言語由来の語があまり収録されなかったため、実際には

相当量の自然言語由来の語があったはずであり、このころのアルカの語彙数はもっと多かったと思われる

また、『高水準制定語彙』以外の文献に見られる幻字があり、意味や音や字形が正確に分かっているものが 38 字あった。その他、字形等が不明瞭な幻字は数に加えられなかった

1－2－7：メル・アルカ

メル 13 年にリディアが発表した幻字の総数はおよそ 2000 字である。そしてリディアはこの後、古アルカの語彙数を数え上げた。リディアは『制定語彙』・『高水準制定語彙』・『制アルカオノマトペ』・『幻想話集アティーリ』の記したメモ・『ミールの書』の翻訳の際に生じた術語・使徒のレポートなど、公的な資料で利用できるものは全て使って調べ上げたのである

この調査では古い語が新しい語に変わった場合でも機械的に別々の語としてカウントしてしまうし、逆に 1 つの語で複数の意味がある場合でも機械的に 1 つの語としてカウントしてしまうという欠点があったが、機械処理を通したということと単純な労力の問題としてこれらの欠点は無視された。だが、この欠点も考えようによっては長所である。というのも、この調査は今までにアルカに一体どのくらい幻字で表現された語があったのかということを示してくれるからである。つまり、古い語と新しい語を同一視しないので古アルカ全体を通して眺めることができるし、同じ幻字の語を同一視するので語の意味よりも幻字にそって数えることができるということである

さて、その調査によると古アルカの語彙の総数は 16281 語であり、これは『制定語彙』と『高水準制定語彙』を足した数より遥かに多い。これらの語は使徒のレポートと『ミールの書』の翻訳の際に作られたものが殆どである。しかもその大半が数回しか使われない一時的なものであった。では、これらの語の正体は何かというとそれは自明な複合語である。そもそも『制定語彙』と『高水準制定語彙』には複合語が載せられているが、あまりにも自明なものは煩雑なので収録しなかったのである。自明な複合語とはたとえば「歩く」と「人」を繋げた「歩行者」のような類のものであり、言語学的にいえば分析性の高い複合語である。分析性の高いものは『制定語彙』や『高水準制定語彙』には載せなかったが、それでもレポートなどの中には頻繁に現われていたのである

また、リディアは 16281 語は文献上確認できるものであり、テープ等に残された音声情報に存在した語までは確認していないという。更に、単に話し言葉として使われて消えたものに関しては収録していないという。自然言語由来の語彙はこのころでもまだ使われていたが、それらは文献には上ることが少なかったため、実際の古アルカの語彙はもっと多かったと思われる

尚、リディアは古アルカとして確認された語のうち、およそ 15000 語はメル・アルカで使われていたと記している。つまり、メル・アルカの文献で確認できる語彙という点でい

うならば、メル・アルカの語彙はおよそ 15000 語であったといえる

1－2－8：アルカ・エ・ソーン

アルカ・エ・ソーンの語彙は独特のもので、アルシェのものとは随分異なる。アルカが 2 派に分離していたのはたった 2 年ほどのことであったが、クミールはこの短期間に多くのアルシェの語彙を滅ぼし、代わりにソーン独特の語彙を生んでいった

その語彙は先代アルカでアルシェに流入しなかったものや、アンクノットに記載された初代アルカを元にしたものやクミールが恣意的に造語したものである。この中では初代アルカから語をもじって取り入れたものとクミールの恣意的な造語が多い。だが、それらを抜いて最も多いものはアルシェの語をもじって作った語である。大抵は子音を抜いたり別の子音を付けたりしたものだが、音の付け方が法則的でないため、アルシェからすればそれだけで既に暗号であった

尚、アルカ・エ・ソーン最大の文献はクミールとラヴァがメル 9 年から作成しはじめた『暫定語彙帳』である。これはアルシェの『制定語彙』などに当たる小辞典である。アルカ・エ・ソーンの語彙はアルカの秘匿性のために頻繁に変わるということが分かっていたクミールは予め『暫定語彙帳』の語彙がいつのものでそれがどう変化したかということを書くための欄が設けられていた。それ以外の点は『制定語彙』を参考にしていて、読みは IPA で書かれている。IPA は『制定語彙』と同じメル 0 年ごろ改定のものを使用している『暫定語彙帳』には主に政治や学問など、知的生活に関する語彙が多く収録されていた。一方、アルシェの『高水準制定語彙』には生き物の名前など、実生活に使われるものが多く収録されていた。このおかげで制アルカの語彙を作る際、アカデミックなものは『暫定語彙帳』を参考し、生活的なものは『高水準制定語彙』を参照するという手法が取れた

さて、メル 12 年リディアの月リディアの日に発表されたクミールとラヴァの調査によると、『暫定語彙帳』に収録された異なり語彙数は 16789 語であった。ただ、これはある語が別の語形に変わった場合、それらを別々の語と数えた場合の数である。別の語形に変わっても幻字はあまり変わらなかったため、そういった語を同じ語と考える見方もある。そしてそう考えた場合の異なり語彙数は 6514 語である

尚、幻字はある語が別の語形に変わったときに語形と一緒に字形も変わることがあった。変わった幻字同士を別の字と考えて数えると『暫定語彙帳』には 1713 字があった。一方、それらを同じ字と考えて数えた場合、『暫定語彙帳』には幻字が 924 字あった

ところで、『暫定語彙帳』の原本はクミールのノートに書かれていたが、ノートが老朽化したため、別のメモ用紙に写してそれらをバインダーに留めた。ソーンはアルシェと違って写本が禁止されていなかったため、『暫定語彙帳』は原本と写本の 2 冊が存在する

セレンは和平後、『暫定語彙帳』の提供を強く要求した。これに対してクミールは情報の一部なら公開可能であるという返答をした。セレンはこれに対して強く遺憾の意を示した

が、クミールもそれ以上妥協しなかった。メル 11 年メルの月に、セレンは再度情報の全部を公開するように要求した。これに対してクミールは和平推進のためセレンの要求を呑んだが、後日ソーン内部で猛反対が起きた。困窮したクミールは原本と写本の幻字の欄を全てインクで塗り潰してから残り全部をセレンに公開した

これによってアルカ・エ・ソーンの語彙は判明したが、幻字が不明なため、アルカ・エ・ソーンで書かれた文章は解読不能になってしまった。だが、『暫定語彙帳』には語の意味と音が記載されていたため、無用の長物ではなかった。その後セレンが制アルカの語彙を作るときにアルカ・エ・ソーン語源のものを取り入れる必要が出てきたが、そのとき活躍したのがこの『暫定語彙帳』である。尚、『暫定語彙帳』は現在メテ家が保存している

1－2－9：古アルカの最終的な形態論

古アルカの最終的な形態論とは換言すればメル・アルカのころの形態論のことである。当時の文献が古アルカではもっとも残っているため、かなり精密な研究が可能である。古アルカの形態論や統語論を示したものにはセレンの『赤アンクノット』や『青アンクノット』があり、これはセレンが保管している。ただ、これらの中には第三改定及びそれ以降にセレンが行おうとしていた改定案についても書かれているという問題がある。つまり、ある記述が実際にあったことについての情報なのか、或いはセレンがこれから行おうとしていた改革案についての情報なのかということが区別できないのである

この区別を行えるのは無論セレン本人だけであり、セレンはこれらを読み返しながら当時の形態論について調査した。それによると、古アルカの品詞は 14 種であったとされる。『青アンクノット』には 14 種の品詞とその例があげられている。以下にそれらを示す

1：名詞：/zamo/　木
2：動詞：/txil/　持つ
3：形容詞：/kaya/　難しい
4：副詞：/tinkaː/　とても
5：助動詞：/mal/　～したい
6：連体詞：/bake/　this
7：接続詞：/tail/　しかし
8：感動詞：/lala/　ああ
9：前置詞：/keno/　of
10：天秤詞：/n/　わ、よ
11：数詞
12：時場
13：符

14：助数詞

尚、5 はエクスプローダーのことである。11 は例示されず、次ページで詳説されている。12 はテンスに関するもので、幻字だけがあげられている。13 は否定やアスペクトを表わした印のことで、幻字の周りに書いた。14 は例なし

この品詞分類はしかしリディアによって異論がなされた。まず、6 と 11 は 1 と文法的振る舞いが同じなので品詞として立てることがないと言われ、セレンはこれを認めた。また、符は表記法が特殊なだけで、否定は副詞の一種でアスペクトは時場の一種であると言われたが、セレンはこれを認めなかった。したがってリディアの説では古アルカの品詞は 12 種であるが、アシェット公式ではセレンの立てた 14 種となっている

さて、幻字は品詞性を文字の中に書き込まないため、名詞・動詞・形容詞・副詞はいずれも同じ文字で表わされた。ところがそれでは何詞なのか分からないため、動詞には時場やエクスプローダーとの間に挟まる無音の字を立てたし、形容詞と副詞はそれを導く字を立てて互いを区別した。無標は名詞で、名詞は何も付けない。いわば現在の制アルカと同じである

尚、古アルカでは形容詞を導くのは le で、副詞は he だったため、形容詞と副詞は区別されていた。ところが制アルカではこれらをともに a で繋ぐため、形容詞と副詞は区別されなくなり、形副詞が誕生した。一方、古アルカにあった he を媒介しない副詞のことは純副詞と呼ばれていて、強調を表わす[tinkaː]などがそうであった。これは制アルカでは a を媒介しないため、形副詞ではなく純詞に統合された。純詞という術語はそもそも古アルカの純副詞から来ているのである

また、名詞に動名詞の意味はあったが、それでは[liːz]が「小さいもの」か「小さくすること」か不明である。それで動名詞を表わす方法もあった。ker~bu（メル・アルカでは ker~tu）という呼応する接続詞である。これは節を作る接続詞であったが、動詞句を取り込むと動名詞に相当する意味があった

機能語はそれ専用の字であるか、或いは内容語が文法化したものである。前者は問題ないが後者は内容語との区別が問題であった。後者は動詞や形容詞や副詞とは違って名詞と区別する方法を持っていなかったのである。要は制アルカと同じである

前置詞は主に語句を取るが、実際には節を取ることも多く、接続詞との区別がしばしば困難であった。この性質はそのまま制アルカにも引き継がれた

数詞は古アルカの体系は制アルカのそれよりより自然言語に近いものである。古アルカの数詞体系は日本語と同じで、10 進法であり、万や億と同じように 4 桁区切りで数える。また、制アルカにあるマルティプル・ゼロの概念は古アルカにはなく、1001 は[tenfuː]とよんでいた。また、古アルカの名残で 23 は[paɹaɹaiz]とよばれていた

テンスとアスペクトは時場と符で表わしていた。時場は動詞の周りに何も書かなければ現在形であり、現在形は ra と読まれた。尚、この ra は省略可能である、また、動詞の右

に縦棒を引けば過去の意味で読みは d である。逆に左に引けば未来で読みは s である。そして下に横棒を引けば継続相を表わす ke であった。tan はこのころ滅んでいた。つまり、時場にはアスペクトが紛れ込んでいるということである

ところで、符は幻字の周りに書かれる機能語的な意味を持った記号の総称である。これらの記号は幻字とは呼ばれず、幻字の補助記号でしかなかった

助数詞は殆ど発達せず、組を表わす rap など、少数であった。エクスプローダーは後期に入って減少の一途を辿った。最大時には 100 種を越えたが、後期には 80 種程度になってしまった。メル・アルカではついにエクスプローダーは廃止され、副詞に統合されてしまった。天秤詞も中期にできた一時的なものが消え、使われる種類が後期に入って確定されてきた。メル・アルカで最終的に用いられた天秤詞はおよそ 30 種である

尚、幻字は統語的性質と形態的性質によって 0〜5 段と、特殊という 7 種に分類されていた。以下に『青アンクノット』を参考にして以下で説明する

0 段 : 文法上で必要とされたもので、同一文字の連続を示す helpai や繋辞の de などがこれにあたる

1 段 : それのみで意味を表わし、単独で使え、原則として複合語になれないもの。tail、keno など

2 段 : 単語の基本成分で、以下 5 段まではこの組み合わせである。単独で使え、単体で意味を持ち、複合語になれるものである。fai（火）などがそうである

3 段 : 2 段の語を 2 つ組み合わせたもので、もっとも種類が多い。xiku（キス）などがそうである

4 段 : 3 段と 2 段を組み合わせてできたもの。3 段の語に人を表わす lan が付いたりものを表わす al が付いたものが殆どで、[xikulan]（キスする人）、[vaxaku:al]（訓練用具）などが例である

5 段 : 3 段と 3 段を組み合わせてできたもの。分析性の高い一時的なものが多いが、中でも分析性の低いものは『高水準制定語彙』や『制定語彙』に大体収録されている。[faiga:bekulullan]（火薬を作る人）などが例である

特殊 : 以上の 6 種に振り分けがたいもので、non（私）などがある

2－1 : 制アルカ形態論概要

ここでは制アルカの形態論に関して述べる。古アルカは膠着性の強い言語であり、品詞の性質を理解することが学習上極めて重要である。そこで、以下では品詞の種類と機能を述べていくことにする

制アルカの品詞は 9 種ある。古アルカの品詞数は度々変化したため数がはっきりしないが、古アルカで品詞数が多かったときに比べると少ないといえる

ただ、9 種という数も考えようによっては変化しうる。たとえば代名詞は名詞から切り離すべきだと考えるものもいるだろう。しかし予め言っておくと、代名詞が純詞になるから名詞とは違うというのは不当である。なぜなら名詞にも純詞になるものがあるからだ。代名詞は活用もしないし、文法的な振る舞いが名詞と同じである。したがって名詞から代名詞を選り分ける必要はないと思われる

このことは形副詞についても言える。形態面から考えると形容詞と副詞を区別する必要はない。だから形容詞と副詞に選り分ける必要はないということである

ただ、プロトタイプのときにメルが指摘した形副詞と名詞の区別は考え物である。形副詞は接続詞＋名詞に分解できるから、品詞として立てることはないということだ。これに関してはもっともだと思う。ただ、形副詞については単にそういう語があると文法事項を説明しやすいから 1 つの品詞として立てただけである。従って、形副詞については議論の余地があるといえる

他にもプロトタイプのときにリディアが指摘したことに、動詞と名詞の区別がある。彼女の説はメルの論理と似ていて、動詞も名詞＋時相詞と考えればわざわざ動詞という品詞を立てることがないというものであった。ところがこれに対してメルは名詞に時相詞を含んだものをまとめて動詞と呼び、時相詞の部分は動詞の活用語尾であるかのように考えてはどうかと提案した。だが、セレンはそれを拒んだ。それによって結局のところ動詞も形副詞と同じく文法説明がしやすいように立てられた品詞となった

以上のように、品詞の数は異論があるものの、セレンは 9 種と定めている

2－2：内容語と機能語

制アルカの語は内容語と機能語とに分けられる

内容語は一見すると名詞も形容詞も副詞も動詞も区別がなく、全て同形である。語に何も付かなければ自動的に名詞で、a や i などが付与されたものが形副詞になる。名詞に付くのが形容詞で、動詞に付くのが副詞である。動詞は名詞と動詞媒介の「-」と時相詞が付くことによって初めて動詞になる。時相詞とはその名の通りテンスとアスペクトを表すものだが、それ以外にも助動詞的な意味を表すことが多々ある

結局、内容語そのものが元々の形態として動詞だったり名詞だったりすることはなく、動詞媒介が付いたり、a や i などが付いたりすることによって初めて動詞だとか形容詞だと

かが判るため、制アルカは極めて膠着性が強いといえる

　ところで、一風変わった内容語がある。純詞である。純詞は形副詞に相当する意味を持つ。尚、制アルカでは名詞・動詞・形副詞の 3 つをまとめて一般語(ordinary words)と呼ぶことがある

　一方、機能語は事情が別で、多くは諸語と同じように語形から一義的に品詞が決定している。機能語には格詞と接続詞と時相詞と関係詞がある。格詞とは諸語では前置詞や助詞や接続詞に相当するものである。格詞には sa のように内容語と同形のものが多々ある。したがって制アルカは文法化の進んだ言語といえる

　また、それ以外の品詞に感動詞があるが、感動詞は諸語と同じだからことさら説明することはない

　ともあれ、制アルカにおいて特に内容語は同形の語がちょっとした手続きしか経ずに別の品詞に変わることから、語だけを見ると品詞の概念が脆弱だといえる。だが、実際の制アルカの学習は品詞の持つ性質の学習に尽き、英語とは違ってあまり構文の学習は重要でない。つまり制アルカにおいては品詞論の方が構文論よりも重要だということであり、このことは制アルカが極めて体系的な膠着語のシステムを持っていることの現れであるといえる

2－3：消えた天秤詞について

　古アルカにあった天秤詞だが、これは廃止することになった。天秤詞とは喋ったときの喋り手の態度や感情やちょっとした動作などを述べたものである
　元々は喋り口調を示しただけのもので、動作などは表さなかった。口調を示すものは独自の幻字であることもあったし、機能も文中の位置も明らかに違うから 1 種の品詞として捉えていた
　だが、喋り手の態度やちょっとした動作まで表すようになると天秤詞の部分に文や節や句が必要となってくる。語を組み合わせて説明しているからもはやそれを 1 つの品詞とは言えない。そこで制アルカでは天秤詞という品詞を廃し、その部分を天秤部と称することにした

2－4－1：品詞論

　以下では個々の品詞についてやや詳しく説明する。品詞は名詞・動詞・時相詞・形副詞・

純詞・格詞・接続詞・関係詞・感動詞の順で述べる

2－4－2－1：名詞――estvet

制アルカにおいて機能語か感動詞でなく、純詞でもなく、a や i を介さず、動詞媒介も付かなければそれは名詞である。名詞は自然言語と同じように物の名前や概念を表す。名詞は固有名詞と代名詞と普通名詞(一般名詞)に分けられる。これは制アルカの教科書であって言語学の教科書ではないから、そもそも固有名詞が何だとかいうことは自明のこととして説明しない。ただ、制アルカでこれらをどのように書き表すかということを説明するに留める

2－4－2－2：固有名詞

＜固有名詞＞

英語では固有名詞は大文字で書き始めるが、制アルカではそんなことはしない。従って、mel と書くと「メル」のことか「時」のことか分からないという問題があるが、実際に制アルカを運用していて両者を混同することはまずなかろう。そもそも固有名詞を特別視しないのは日本語もそうだが、日本語話者のセレンからしてみれば別にそれほど不便を感じたことは無い。例えば花のさくらと人名のさくらを文面上で間違えることさえまず無いからである

加えて、英語などはいくら文字の上で固有名詞を区別したところで、結局口頭では普通名詞と区別が付かないし、だからといって英語は破綻していないという事実もある。したがって、制アルカが固有名詞を特別視しないことは欠点にはならない

むしろ、大文字がない分、文字数が少なくて覚えやすいし、コンピュータを使う際にもシフトキー入力をしないで済むのだから却って便利なくらいである

＜人名＞

人名は日本語のように単純ではない。日本人は苗字と名前を持つが、ヴァルテはそうとは限らない。多かったり少なかったりするのだ。ただ、一般的にはヴァルテは名前と苗字を持つ。英語と同じくファーストネームが先に来て、ファミリーネームが後に来る。英語と違って公式の場でもこの順序は変わらない。また、名前(est)と苗字(ost)の間にサルヌ(ミドルネーム 1)、セット(ミドルネーム 2)、オール(ミドルネーム 3)が来ることがあり、長い場合は 4 つも 5 つも名前が続くことがある。尚、最後に来るものが苗字であり、他は全てその個人を表わす別の名前である。そしてふつうは最初の名前と苗字しか使わない

例：ridia sapli rsiila teo lutia(リディア＝サプリ＝ルシーラ＝テオ＝ルティア)
　また、苗字を先に書く場合は、苗字の後にカンマを付け、更にその後に名前をエーステから順に続けて書いていく。これを読む場合はカンマの時点でポーズを置く
例：lutia,ridia sapli rsiila teo(ルティア家のリディア＝サプリ＝ルシーラ＝テオ)

＜尊称と卑称＞

　日本語の「様」などに当たる尊称は制アルカにもあるが、更に制アルカには日本語にはあまり見られない卑称がある。日本語だと「貴様」とか「～の野郎」などと訳さねばならないものだ。日本語は呼び捨てがそのまま卑称として使えるが、制アルカでは呼び捨ては中立的で客観的な言い方でしかない。それ故、数は少ないながらも卑称が特別に発達したのである。尊称と卑称は純詞として名前の直後に置くことができる
　尊称には相手を敬うだけのものや、ルシーラやハルマのように相手の役職を述べるものがあり、その数は多い。翻って卑称はあまり数がなく、専ら em と miin が多く使われる。em は程度の高い卑称で、嫌いな相手や怒っている相手に使う。一方の miin は程度が低く、本気で起こっている場合には使えない。miin はちょっと拗ねたりしているときに使うもので、使うことによって却って相手に対して「私は本気で怒ってはいないよ」ということを告げることができる

例：「何を言うかアルデスよ！」＝ku-i to non,ardes em!
　　「コリンのやつ、また逃げやがった」＝korin miin elf-i me.

2－4－2－3：代名詞

＜種類＞

　代名詞はまず有生か無生かに分かれる。そして更に疑問・全体・部分・弱不定・任意・選択・零・指示に分かれる。以下では順を追って説明する

1：疑問

　疑問の代名詞とは英語でいうところの what や who に当たるもので、有生は ne、無生は to である
　to は人に使うこともできるが、その場合は ne と違う意味になる。lu et ne?は「彼は誰ですか」という意味だが、lu et to?は「彼はどんな人ですか？」という意味にである

2：全体

　everybody や everything を意味する代名詞で、有生は do、無生は de である
例：do ke-a.(皆で一緒に行った)

3：部分

　一部の人や物を表す。some of them にあたる。有生は vo、無生は ve である
例：vo ke-ux.「一部の人は行きたくないようだ」

4：弱不定(未知)

　somebody や something に当たるもので、未知のものを示す。弱といわれているのは指示の 4 人称に強不定というのがあってそれと区別しているためである。有生は xo で、無生は xe である
例：xo ket-ik.「誰か来た」

5：任意

　anybody や anything に当たるもので、何でもいい任意のものを示す。有生は fa で、無生は fi である
例：lap-i lud fi.「どんなものでもいいから宝石が欲しい」

＊全体と任意の違い
　全体は修飾されているもの全てが一丸となっているのに対し、任意は集団の中からどれを選んでも良いということを示す。したがって、"do ke-el."と言えば「全員が一緒に行って良い」という意味であり、3 人いれば 3 人が行くことを意味する。一方、"fa ke-el."と言えば「誰であろうと行って良い」という意味であり 3 人いればその内の誰が何人行っても良いということを意味する。このように fa と do では意味が違うので要注意である
　論理学では「全ての」を表す全称量化子の∀は do でも fa でもあり、区別がされない。日本語でも本来「どのような」と訳すべきところを「全ての」といってしまうことが多々ある。しかし制アルカは両者を厳密に区別する。do は「全体が一丸となって」というニュアンスであり、fa は「全体のどの成員も」という意味である

6：選択

ある集団の成員の中からどれかの成員を表す。which や「どれ」に当たる。有生は wo で、無生は we である
例：lap-i we?「どれが欲しい？」

7：零

nobody や nothing に当たる語だが、有生無生の区別がない。区別がないのは u が数字の 0 から来た代名詞であることが原因である
例：u ket-a.「誰も来なかった」　sin-i u.「誰も嫌いじゃないよ」

8：指示(既知)

指示は「これ」「それ」などの指示代名詞と「彼」「私」などの人称代名詞を含んだもので、4 とは反対に既知のものを示す
未知のものと違って既知のものは区別が細かい。まず、自分が 1 人称となり、会話の相手が 2 人称になる。1・2 人称は有生しかなく、無生はない。無生物を相手取るときは擬人法とみなされる。尚、1 人称は an であり、2 人称は ti である
次に 3 人称だが、3 人称は有生と無生を区別する。その上、自分との距離が近いか遠いかで更に 2 つに分けるので、3 人称代名詞は 4 種類ある。「彼」が自分から見て近いところにいれば lu で、遠いところや見えないところにいれば la となる。また、lu の無生形は tu で、la の無生形は li である。英語などでは距離によって 3 人称を区別しないが、制アルカは区別するというわけである
今のは日常生活での使い分けだが、難しいのは小説や論文に出てくる 3 人称である。小説や論文は主人公に憑依して書く 1 人称視点での書き方でなければ、書き手が 1 人称で、読み手が 2 人称である。そして小説の焦点となっている場にいるものが lu となり、いないものが la となる
たとえば『ミールの書』においてミールがメルの部屋にいて、リディアが外にいるとする。場面はメルの部屋に焦点を当てているとすると、ミールやメルは lu で、リディアは la である。因みにこの場合、an は『ミールの書』の書き手であるセレンで、ti は読者である。当然、an や ti は出番が少なく、書き手が読者にメッセージを送るときにしか出てこないが、このような表現は現実の世界と小説の世界を分離させるため、読者は白けてしまい、物語の世界観を壊すとされて嫌われる
ところで、小説などの文章でなくとも 3 人称をこのように使う場合がある。自分の経験を誰かに説明するときは、物語の出来事地点を焦点に置くため、語り手である自分が作者として an になり、聞き手が読み手と同じく ti になり、物語の焦点に存在するものが lu で、焦点にいないものが la になる。例えば「昨日、公園で変な女の子をみたよ。その娘は晴れ

なのに雨傘をさしていたんだ」という場合の「その娘」は焦点を当てられている公園にいるので lu である。しかしその後「公園を出た後、街頭でその娘と同じように傘を持った少年がいた」という場合の「その娘」は、焦点が当てられた街頭にいないので、遠いとみなされて la となる

ところで、指示代名詞は以上で終わりではない。異色の指示代名詞、4 人称が残っているのである。4 人称とは 3 人称を越えたところにあるものである。3 人称は近かろうが遠かろうがまだ会話の領域に入っている。しかし 4 人称は完全に会話の領域から外れた「意識されない何か」であり、古アルカでも制アルカでも通して oni と呼ばれる。oni は「わざわざ特定化したり意識を向けるまでもないが、それがあることだけは認識されている何か」であって、非常に抽象的なものである

指示代名詞は既知であるが、この oni だけは未知である。しかも xo などと違って焦点が当てられず、誰であろうとそんなことはどうでもいいと考えられているので永遠に未知である。xo はその後誰であるか分かる可能性があるが、oni は永遠に誰だか分からないし、そんなこと考えなくても良いという意味を持つ。従って oni の不定性は xo よりも強く、それが oni が強不定代名詞と呼ばれる所以である

＜代名詞図解＞

以上、制アルカの代名詞を図示すると次のようになる

	疑問	全体	部分	弱不定(未知)	任意	選択	零	指示(oni 以外は既知)
有生	ne	do	vo	xo	fa	wo		
							u	別記
無生	to	di	ve	xe	fi	we		

	1 人称	2 人称	3 人称	4 人称(強不定)
			近 lu	
: 有生	an	ti		
:			遠 la	
指示代名詞 :				oni
:			近 tu	
: 無生	無	無		

＜代名純詞＞

an・ti・oni 以外の代名詞は純詞になり、内容語を修飾することができる。例えば fan xo は「ある女」というように。また、lu は指示代名詞としては「彼・この人」という意味だが、純詞になると「その」に変わる。例えば fan lu(その女)のように

尚、指示代名詞は純詞化しないで e を介すと意味が変わってしまう。eti lu は「その妹」という意味だが、eti e lu は「彼の妹」という意味である

ところで上述の通り、an・ti・oni は純詞にならない。an は誰だか分かっているし距離もないので指示代名詞で以って修飾する必要がないからだ。日本語には「この私が」という表現があって、強いて言うならそれに当たると思うが、制アルカにその用法はない。同様に、ti も指示する必要がないし、oni に至っては定義上、指示できない。従って an・ti・oni は純詞化しない

尚、純詞化した代名詞を代名純詞と呼ぶ

＜数と量の代名詞＞

英語の how many などに当たる表現は代名詞を応用して行う。「いくつの」「ある数の」などを表すには本来は alx to、alx xe などと言わねばならないが、これでは煩雑である。そこでこれらを 1 語にした数を表す代名詞が制アルカにはある。具体的には代名詞に s を付けたものがそれである。例えば tos で how many の意味になるし、xes で「ある数の」という意味になる。更にこれらは全て代名純詞として使うことができる

例：tos xa-i?（いくつある？）
例：nes xa-i?（何人いる？）
例：fin nes xa-i?（何人の男がいる？）
例：lap-i miik fis（いくつでもいいからリンゴがほしい≒いくらでもリンゴが欲しい）

また、s は数だけでなく量も表すことができる。そもそも制アルカは可算か不可算かを区別しない傾向にあるが、特に s においては数と量が顕著に中和されている

例：el xes xa-i（ある量の水がある）
例：el tos xa-i?（水、どれぐらい残ってる？）

ここで注意したいのは、xos、xes は a few とか a little とか some とかの意味ではなく、飽くまで「わからない数」という意味だということである。el xes xa-i とは「水がいくらかある」とか「水が少しある」とかという意味ではないので注意すること

2－4－2－4：普通名詞(一般名詞)

＜普通名詞の種類＞

普通名詞はアクセント記号も何も付けず、a や i も介さず、動詞媒介も付けない。また、代名詞のように自由に純詞になることはない。極めてふつうに書いて支障のない語である

普通名詞は数が品詞中で尤も多く、語形も長いものが多い。当然、普通名詞の種別も自然言語と同じく存在する。まず、普通名詞は単純語と合成語に分かれる。合成語は派生語と複合語に分かれる

普通名詞――単純語：fan 女
　　――合成語：派生語：seifa 星座（星の強複数）
　　：複合語：amoakl 轍（車の跡）

2－4－2－6：数について

数は数詞や表現法の項目で取り上げるべきだが早めに学習してほしいのでここに載せた

＜数量の捉え方＞

制アルカは数量に疎い。というより、数の文法的カテゴリーが特にないのだ。英語のように child が 2 人いれば children となることはないし、he が 2 人いれば they になるというようなこともない。原因は古アルカが幻字を使用していたためである。そもそも幻字は表意文字であり、それ自体が単一のものを示していた。たとえば石なら石の絵文字を使って表した。そしてこの石を意味する絵文字は同時に「1 つの石」を示す絵文字でもあった。即ち、石が 2 つあるならその絵文字を 2 文字書いて表したのだ。これが前期アルカの状況である

しかし､数が多くなるにつれて１つの絵文字の前に数量を書くことになった｡例えば｢100｣という数に続けて石の絵文字を書けば 100 個の石を表わす。すると、この場合の「石」の絵文字は英語では stones と複数形で表わさなければならないものになってしまうが、特に stones のように幻字が変わるといったことはなかった。このせいで、同じ文字なのにあるときは単数だったり、あるときは逆に複数だったりするという現象が生じてしまった。そしてその特性を引き継いだまま古アルカは滅んだので、自動的に制アルカもその特徴を継承することになったのである

英語のみならず、世界の多くの言語は数を一々言い表すが、制アルカは中国語や韓国語

や日本語のように数を一々言い表さなくても良い言語である
　一部の使徒は数を明言しないことによって制アルカの論理性が損なわれるというが、それは英語などの言語に慣れた者の発想だろう。蛇足ながら、日本語でも論理的な発言ができることは『ミールの書』の原本が日本語であったことを持ち出すまでもなく自明である
　英語などは義務的に数を明示するが、日本語や制アルカは必要に応じて数を明記すれば良いのである。この性質のおかげで数がわからなくとも悩まず文を作ることができるという利点がある。例えば松尾芭蕉の和歌に「古池や蛙飛び込む水の音」というのがあるが、この蛙は一体何匹かなどと考えなければ翻訳できないのが英語であるが、アルカにはすぐに訳すことができるのである
　尚、量についても同様で、ふつう量は明示されない

＜助数詞の捉え方＞

　制アルカの助数詞についてだが、制アルカの助数詞は単位として扱われるので、助数詞という品詞はない
　日本語の助数詞に「人」というのがある。これは人を数える助数詞であり、単位というよりは名詞の種類を示している。一方、「俵」という助数詞は名詞の種類が米であるということを表わすと同時に、その米の量を示す単位となっている
　このように、日本語の助数詞には名詞の種類を表わすだけの助数詞と、それに加えて名詞の一定量をも表わす単位としての助数詞がある。制アルカの助数詞に当たるものは後者の能力を持ち、前者はない。従って、人も動物も無機物も助数詞を伴わずに表わされる
「1 人の男」は fin ko でしかない。「1 リットルの水」のように単位が登場してようやく助数詞に相当するものが付加されるのである。尚、「組」や「トリオ」も単位として扱われる

＜複数の表現法＞

　制アルカではデフォルトが単数であり、複数は膠着語的手段で表す。具体的には se という語を使って表現するが、使い方によって強複数と弱複数を区別することができる。se は純詞として使うと弱複数となり、接頭辞として使うと強複数となる
　そもそも制アルカは複数を強弱に分ける。強複数とは複数という要素が語と強く結びついてしまっていて切り離せないものであり、弱複数とは単純に何かが複数個存在しているものを表す。例えば階段は段が複数個集まってできたものであり、バラバラにして段ごとに分けてしまったらもはや階段とは呼べなくなる。つまり、階段において段が複数個集まっていることは必須である。このようなものを強複数という。逆に 3 つのりんごは個別にしても依然としてりんごであるから、りんご 3 つの集合はただのりんごの集合でしかない。このような複数を弱複数という

また、複数にはもう 1 つ種類がある。近似複数である。近似複数とは被修飾語及び被修飾語が属するものの 2 者を取り混ぜて示す語である。たとえば fan so と言った場合、そこには女だけではなく女の連れている子供なり犬なりも含まれる。同様に、seren so といえば「セレンと仲間たち」という意味になる

近似複数は日本語の「たち」に似ていて、英語の”-s”とはあまり似ない。英語の”-s”には近似複数の効果が弱いので、英語でいうならむしろ and others に当たる

その一方で、日本語の「達」や「ら」は近似複数の効果を強く持つ。反面、純粋な複数を表す機能はあまり強くない。そのことは the stones というのを訳す場合に「石たち」とか「石ら」と訳すと非常に奇妙な感じを受けることからも明らかであるが、これは日本語の「たち」が純粋な複数を表す機能が強くないためである

＜制アルカは 10 進法を採用する＞

制アルカの数は 10 進法である

古アルカでは 0 から順に yu,fu,you,vi,von,txon,an,zan,hen,lon（10 は to）であったが、これと制アルカは殆ど無関係で、u,ko,ta,vi,va,le,di,fe,me,lo である。唯一 3 だけが同じであるが、これは偶然である

尚、十はない。メルが排他させたからである。曰く、「10 進法なのに、読み方と書き方が食い違っているのが奇妙で納得がいかない。書きでは十になったら桁が繰り上がって 10 になるから確かに 10 進法だ。しかし読みでは lon(キュウ)の次は to(ジュウ)で、10 番目の数の読み方が存在する。決して fuyu（イチマル）ではない。従って読み方は 10 進法とはいえない。このように書きと読みが一致しておらず、これがメルにはとても不快だ」とのこと。そしてそのメルの提案で 10 は削除されたのである

＜メルの数え方＞

はじめ、数の数え方はセレンが作った日本語式のものを採用しようとしていたが、メルが独自の数え方を提唱し、セレンは再考の後、メルの数え方を採用した

メルの数え方の基本は「つぶよみ」である。言い換えれば電卓式ともいえる。1234 を「センニヒャクサンジュウヨン」というより「イチニサンシ」という方が早いのは明らかである。だが、これには問題点が 2 つあった。1 つは 100 や 1001 のような数の場合「ヒャク」とか「センイチ」という代わりに「イチマルマル」とか「イチマルマルイチ」といわねばならず却って長くなってしまうこと。そしてもう 1 つは千とか万とかいった単位の概念を失うので、大体どのぐらいの数なのかという実感を失ってしまうということである。「イチオクニセンサンビャクヨンジュウゴマンロクセンナナヒャクハチジュウキュウ」というの

は確かに長いが、一億という言葉で大まかな数が実感できる。しかし、これが「イチニサンシゴロクシチハチキュウ」だとしたら、確かに語形は短いが、どれぐらいの大きさの数か全く実感がつかめないのである

だから始めメルの案は採用されなかったが、メルはそのことについて既に対処していた。まず、人間が数の大きさを実感できるようにメルはアルティスの正数である 4 を区切りにして 4 桁ずつの単位を作っていった。先の例に当てはめると 123456789 は「オクニサンシゴマンロクナナハチキュウ」となる。これなら「イチオクニセンサンビャクヨンジュウゴマンロクセンナナヒャクハチジュウキュウ」より遥かに語形が短いままでしかも数の大きさも実感できる

メルは、人間は 4 桁なら 1 つのまとまりとして記憶・処理できるはずだと考えた。123456789 のように数が大きくなるとどのぐらいの数か把握できなくなるが、4 桁区切りに兆だの億だの万だのといった単位を一々教えてもらえれば、数を把握できるということである。この 4 桁というのは中々絶妙な数字だそうで、「これがもし 4 桁区切りでなく 10 桁区切りだとしたらきっと人間には処理しきれないし、逆に 2 桁だと簡単すぎて煩雑だ。だから 4 桁がちょうど良い」とメルは言う

また、つぶよみで 100 や 1000 や 1001 を読むと却って語形が長くなってしまう問題だが、メルはこれも解決した。マルティプル・ゼロという概念を導入したのである。要は、不要なのにもかかわらず、つぶよみの際にはゼロを読まなければならないことが問題であるのだから、この不要なゼロをどうにかすれば良いという考えである。非常に合理的である。メルの数え方では 4 桁を 1 つの区切りとして数える以上、どんなに桁の大きな数でも 4 桁の数字のセットが複数個並んでいると捉えることができる。つまり、12345678 なら 1234 という 4 桁 1 セットと 5678 という 4 桁 1 セットの計 2 セットが並んでいると考えるわけである。そして、4 桁の数字の中で連続する 0 の最大数は 3 である。例えば 1000 のように

ということは、最大 3 個続く 0 を短く処理すれば良いのである。つぶよみでは 1000 は「イチマルマルマル」と読むから、これをそのまま制アルカにすると kouuu である。この uuu をメルはトリプルゼロとしてまとめ、読みを仮に d とした。その後実際セレンが起用した音は諸事情で ke であるからトリプルゼロを ke とすると、kouuu は koke となる。つまり koke で 1000 である

同じく、1001 を言う場合は kouuko ではなくダブルゼロという概念を導入すれば良い。ダブルゼロはセレンがその後 so と決めたので、1001 は kosoko である

そして最後にシングルゼロという概念もメルは作った。曰く、シングルゼロはゼロと同じだから不要なのだが、シングルゼロの na を設ければ u は独立して純粋なゼロのみを示す数になって色々便利だからということらしい。したがって、10 は kona となる

ところで、na,so,ke が選ばれているのは偶然ではない。マルティプル・ゼロは聞き違えると桁がずれてしまうので聞き違いは許されない。だからセレンはマルティプル・ゼロに na,so,ke という聞き分けやすい音を選んだ。これらは調音法が鼻音、摩擦音、閉鎖音とい

うように全て異なるし、有声・無声に関しても 3 者同様というわけではなく、調音点も s と n が同じだが、k は離れているので聞き違いは少ない。もしこれが s,x,z だとしたらと考えると、ぞっとするだろう。また、当初の予定では na,so,ke は n,s,k にするはずだったのだが、それは止めた。他の数字が CV なのにここだけ C というのは統一的でないし、更には桁を変える重要な部分だというのに聞こえがあまりにも弱くて正確な伝達が不可能だからである（パールとクリスとフルミネアがリュウの監視の下で実験済み）

尚、物によっては 100000000 や、1000000000001 のように 0 だけで成り立つような 4 桁 1 セットもありうるが、この場合そのセットは丸々読まなければ良いだけのことである。日本語が 100000001 を「イチオクイチ」と読むように、間の 4 つの 0 は無視すれば良い

＜大きい数とカンマ＞

ところで大きい数字を書くときにはカンマがつくが、これは特徴的なので注意すること。英語は 3 桁ごとに million、billion と上がっていくが、アルカは正数をとって 4 桁ごとに上がるため、4 桁おきにカンマを入れる。しかし、それでは 3 桁表記との混乱が生じるため、カンマの記号は使わず、アポストロフィーを使う。従って、「12, 000」はアルカでは「1'2000」と書くのが正しい。勿論、「12，000」と書いてアルカ式に直さなくとも良い

＜数のまとめ＞

以上、数字をまとめると以下のようになる

0：u
1：ko
2：ta
3：vi
4：va
5：le
6：ki
7：no
8：te
9：lo
10：kona：十
100：koso：百
1000：koke：千
10000：sen：万

100000000：ton：億
1000000000000：can：兆
10000000000000000：ron：京

　アルカは大きな数の単位を万・億・兆・京と正数の 4 つで締め切っているので、これ以上の単位はない。京以上の数は常人の日常生活では使わないので、制定するだけ負担となるからである。京以上の単位は 10 の n 乗といって表わす

＜序数について＞

　序数は数詞に la を付けると完成する。日本語は序数に疎く、教師も教科書を指して生徒に「100 ページを読んで」という。これでは 100 ページ分読めという意味か、第 100 ページだけを読めといっているのか不明である。勿論、常識的に前者はありえないが、ならば教科書の使い始めに「2 ページ読んで」といわれたらどう解釈すべきだろうか？そこで誤解を防ぐため、日本語とは違い制アルカでは序数と数詞の区別をきちんと行うのである

＜代名詞と序数＞

　代名詞と序数を表す接尾辞 la を繋いで特殊な序数を表すことができる。例えば無生疑問代名詞 to に la を付けて tola にすると、日本語で言うところの「何番目の」に当たる語になる。英語には「何番目の」に当たる語はないが、制アルカにはこのようにふつうにある
　ところで、数や量を表す代名詞は s を付けた tos などである。だから、tola ではなく tosla にしなくてはと思うかもしれないが、la が付く以上それが数に関与することは分かっているので s は必要ない。よって、tosla でなく tola で良い。それにこちらの方が合理的であるし発音もしやすい。では、以下に代名詞と la による語の一覧を挙げよう

nela・tola：何番目の～、何番目が：nela ket-a（何番目の人が来たの？）　fin　nela xa-a?（何番目の男がいたの？）　lat-a ez　tola?（何番目の部屋に入ったの？）　la i nela?（彼は何番目の人？）　seren e rsiila nela?（セレンは何代目のルシーラ？）
dala・dila：全ての番号の、全ての番号が：fel dala gaa-a（全ての学籍番号の学生がまとまって抗議をした）
vola・vela：一部の番号の、一部の番号が：lat-a al ez vela（何個も部屋があって、その内の何番目かをいくつかに入った）
xola・xela：ある番号の、ある番号が：la lat-a al ez xela（彼は何番目かの部屋に入っていった）
fala・fila：いずれの番号も：hacma fala e hax（第何使徒であろうが使徒はみな優れている）

rsiila fala e hax（いずれの代のルシーラであろうが優れている乃至アルシェ・ソーンどちらのルシーラでも優れている）（よってこの文は多義的である）
wola・wela : どの番号が、どの番号の : tola、tela と類義。ただ、wola・wela の方が特に「一定の限られた選択肢の中からどの番号を選ぶか」といったニュアンスを持っていて、そういう点で両者は異なっている

尚、例文を見れば分かるように、これら全て純詞になることができる

2－4－2－7 : 名詞の時制

制アルカでは名詞に時制を付けることができる。付けられる時制は 3 種。過去、現在、未来である
たとえば以前自分が住んでいた家を訪ねたとき、自分が住んでいた部屋を指して「ここは俺の部屋だ」というのは不適切である。というのも現在はもはや自分の部屋でなく、今住んでいる人の部屋だからだ。こういうとき、部屋という名詞に過去時制を付けて「元俺の部屋」という意味を表わすことができる
他にも今はもう別れてしまった男を指して「私のカレシ」とは言えないが、「元カレ」と言うことはできる。この「元」に当たるものも同じ過去時制で表わす
また、建設中の自分の家を指して「これは俺の家だ」というのは不適切である。というのもまだそれは家ではないからだ。そこで家に未来時制を付けて「これは今度俺の家になるものだ」という意味を表わすことができる
では、現在時制は何に使うかというと、「彼は現在の大統領だ」というように現在を表わすときに使われる
尚、これらは全て純詞であり、taz,tiz,toz を使って表わす。これらは動詞の後に来ると副詞的に使われ、名詞の後に来るとここで述べた意味で使われ、文頭に置かれると文全体を修飾する副詞になる。順に例示しよう

動詞を修飾する例 : san-a taz la.（昔は彼のことが好きだった）
名詞を修飾する例 : tu et ez taz e an（ここは私の部屋だったところだ）
文を修飾する例 : taz, man xo xa-a ka xe.（昔、あるところに女の子がいた）

2－4－2－1 : 動詞――sovet

動詞は名詞と同形であるが、動詞媒介と時相詞がつくことによって名詞との区別が可能になっている

2－4－2－2：動詞の自他

制アルカの動詞は基本的に全て他動詞である。exist のような動詞でさえも他動詞である。これはラルクが尊重する充足理由律に基づく。つまり、何か動作が行われれば(結果)、その原因となったもの(原因)がなければならないということで、前者を対象とするなら後者は動作主である。動作主はたとえどのようなものであっても必ず想定できる。従って、全ての動詞は論理的には他動詞であるというのがラルクの思想である

ただ人間の認知能力は必ずしも論理的な結論を生み出さない。実際、英語や日本語には自動詞があって、exist などは完全に自動詞である。しかしラルクの考えでは何者かを存在させた動作主(別に神でも DNA でも親でもなんでも良い)がいるはずからこれも他動詞であり、I exist.の I は対象だと考える

ところで、動作を D、動作主を A、対象を O とすると、他動詞文は 2 項述語で D(A,O)と書ける。exist の場合、「私がいる」という内容を述べるための A はわざわざ述べる価値もないものだし、却って述べるだけ煩雑である。だから A はないものとして扱う。こういった焦点化されないし意識も向けられないような要素を強不定代名詞を借りて oni とする

すると exist の論理式は Exist(oni,O)となる。oni は文中ではないものとして扱われるので A は空白になってしまう。そこで O が A の位置に上ってくる。上ってくるのは O の位置より A の位置の方がより焦点化されて目立った場所だからであり、そんな位置が空白になれば O は是非ともより目立つ位置にいきたいと考えるからである。このようにして実際の文、I exist.ができあがるわけである

制アルカには oni という代名詞(4 人称代名詞とも強不定代名詞ともいう)があるので、oni xa-i an といっても I exist の意味を持つが、英語と比べれば一目瞭然なように、このやり方だと文が長くて非合理的だ。だから oni を使えば自動詞に相当する意味を作り出すことができるが、文が長くなるので普段は使わない。ふつうはAの oni を省略して、その代わりにAの部分にOを上げてくるというやり方を取る。例えば「ネコは机から落ちた」という場合、oni を使うと oni met-a kets il elen であるが、ふつうは oni を省略し、oni があったところに kets を上げ、kets met-a il elen とする。従って、制アルカでは動詞を自動詞的に使おうと他動詞的に使おうと語形が変わらないのである。つまり、制アルカの動詞は自他同形である

ところで、動詞が自他同形だと困ることがある。たとえば miik met-a il elen といえば、リンゴが何かを落とすはずが無いので「リンゴが机から落ちた」という自動詞の解釈が常識でなされる。ところがこれがもしリンゴでなく、ネコだったらどうか。kets met-a il elen といった場合はどう解釈すべきか？この文では met-a の目的語がないので自動詞と思うかもしれないが、制アルカは自明の目的語を省略することができるため、met-a の目的語はあるのに単に省略されているだけかもしれない。ということは met-a の自他は不明である。つまり、「ネコが何かを机から落とした」のか「ネコが机から落ちた」のかが不明ということである。セレンはこの問題に関して何年も考察し、様々な手法を試してみた。当初は自

他を何らかの方法で区別する方法を取っていたのだが、例文を作成しているうちに、動詞の自他の解釈で迷う事例というのが思ったよりずっと少なく、十中八九は常識で自他を判断できるという経験を得た。そこでセレンは一々動詞の自他を何らかの方法で表わすのは面倒だと実感し、このような自他同形の形にしたのだ。すると当然不可避なのが自他の区別をしたいときはどうすれば良いかという問題である。これに対しての解答が oni である。つまり、どうしても自動詞の解釈だと言いたいときは oni を省略しない形に戻せば良い。例えば kets met-a il elen なら、oni met-a kets il elen とすれば良いということである。逆に、どうしても他動詞の解釈だと言いたいときは目的語を省略せず、きちんと述べるという方法を取れば良い。即ち、kets met-a miik il elen のように表現すれば良いということである

ところで、oni の省略によって上に上がってくるのはＯだけなのだろうか？いや違う。制アルカはＯ以外の格も上に上げることが可能だ。例えば「この刃物は良く切れる」という中間構文における oni を使った文は oni kil-e att oni kon kil tu である。この場合、ＡもＯも oni 化しているため、Ａの位置に上がってくるのは残った kon 格の kil tu になる。従って、ここから kil tu kil-e at という文が作られる。これが「この刃物は良く切れる」に当たるふつうの言い方である。このように制アルカではＯ以外の格も上に上がるという現象が頻繁に起こるので十分留意されたい

更に、この現象は yun のような比況格にも起こりうる。例えば五感動詞は yun 格に焦点がいきやすい。「桃の匂いがする」という文は、本来は oni tos-e oni yun diaik といったところだが、yun 格以上が oni なので diaik がＡの位置を占め、diaik tos-e となる。また、同じ理屈で「梨の味がする」は serik xoi-e である。これを間違っても「梨が何かを味わう」と解釈してはならない。因みに、serik を O にした xoi-e serik は「梨を味わう」である。全然意味が違うので注意が必要だ

以上が他動詞を基にした自動詞的用法の説明である。自動詞的といったのは、これを自動詞と認めるわけにはいかないからである。というのも、他動詞用法を自動詞的用法に変えたときに動くのはＡやＯなどであって、動詞そのものではないからだ。動詞は全く手付かずのままで、動詞の周りの格が交代や省略などを行っているだけなので、動詞が変化したとは言いがたい。従って、自動詞的用法があることは勿論認められるが、自動詞があるということは認められない。故に制アルカの動詞は他動詞であり、自動詞はないといえる

２－４－２－３：使役

制アルカの使役表現は動詞を伴って表される。使役内容は動詞の対象として表示される。また、使役を受ける相手は動詞の対象にくる節の動作主として表示される

使役に使われる動詞は「使役」という意味の語を動詞化した sol が一番多い。sol は相手

が乗り気であるか否かを表さない

一方、相手の意思に背くことを使役するときは vars-e を使う。また相手の意思に適うことを許可して使役する場合、即ち「～させてやる」ということを表す場合は、dop-e を使う

また、同じ使役でも、命令なのか依頼なのかということで随分態度が違う。命令として使役すれば rot-e が使われ、依頼として使役すれば ret-e が使われる

他にもいくつか使役動詞があるので、以下に例を挙げる

1：sol-e la ke-e（彼を行かせる）
2：vars-e la ke-e（彼を無理やり行かせる）
3：dop-e la ke-e（彼を行かせてやる。許可を与えてやることで、yus-e と区別。dop-e は被使役者に対し、積極的に「やってもいいよ」と許すことであるため、かなり肯定的である。一方、yus-e は特に許可するというわけではないが黙認しておこうという意味の許可であり、やや消極的である）
4：rot-e la ke-e（彼に行くように命じる）
5：ret-e la ke-e（彼に行くように頼む）
6：roks-e la ke-e（上手く彼を行かせる、まんまと彼を行かせる）
7：reks-e la ke-e（しくじって彼を行かせてしまった）
8：sers-e nana xon-e（赤ん坊に食べさせてあげる。sers-e は使役者が手取り足取りやってあげるという意味を持つ。同時に、被使役者は赤子のように好き勝手にあしらわれる）
9：yus-e la ke-e（彼の好きなように行かせてやる。被使役者の意思通りにさせてやる）

2－4－2－4：間接受身動詞

使役文の主語は目的節の出来事が発生した原因であり、目的節に影響を与えた与えてである。使役文の主語は目的節が表わす出来事に対して間接的に影響を与えているだけであり、直接その出来事の中に現われるわけではない。たとえば「太郎は花子を行かせた」という場合、出来事は「花子が行くこと」であり、その出来事の中に太郎は現われない。太郎は出来事を引き起こした原因という形で間接的に現われるのみである

使役文では主語は出来事に影響を与える者であったが、間接受身文では主語と出来事の構造は全く同じで、影響の方向性だけが逆転する。つまり、間接受身文では主語は出来事から影響を受けているのである。日本語では「彼は娘に死なれた」などの文章がそうで、通称迷惑の受身と呼ばれている

制アルカでは間接受身を使役と同じ構造で表わす。制アルカの間接受身には主語が出来事によって利益を受ける場合と損害をこうむる場合で分かれ、それぞれ am-e と im-e で表わされる。同じ死ぬという出来事でも出来事を主語が良いと取るか悪いと取るかで ma-e と im-e を使い分ける。尚、主語には自分以外の人間もふつうに取れる

1：am-o ti vort-e（君には死んでもらおうと思ってるんだ）
2：la im-a noa vort-e（彼は娘に死なれた）

2－4－2－5：転換動詞

制アルカは英語以上に転換動詞が多い。制アルカでは動詞を中心に文を作るため、様々な語が動詞になろうとする。名詞や格を組み合わせて新しい言い回しを作るより動詞を新しく作った方が文が簡単になり、合理的だから動詞になろうとするのだ

例えば「モップで掃除する」という場合、exo-e kon bezn というのは面倒である。そこで制アルカではこう考える。「そもそもモップを使ってすることといえば掃除することに決まっている。ならばわざわざ exo-e という必要がどこにあろうか？」――と。そう考えると、いっそのこと bezn が動詞化してしまった方が話は早い。そうして bezn は名詞から動詞に転換され、bezn-e という動詞が出来上がるわけだ。こうして「モップで掃除をする」は bezn-e となる

2－4－2－6：代動詞

代名詞はそのまま動詞として使うことができる。動詞として使われる代名詞は代動詞と呼ばれる。これは英語や日本語にはない特殊な用法である

例えば疑問代名詞 to は動詞として使うと「何をするのか？」という意味になる。従って、英語では What are you doing?というところを、制アルカでは単に ti to-i?ということができる。同じ内容を表すのに英語では助動詞 be や疑問代名詞 what や分詞 doing が出張らなければならないということを考えると、制アルカは極めて合理的であるといえる

代動詞として使われるのは主に to と xe であり、fi と we が補佐的に使われ、di と ve はあまり使われない。尚、それ以外の代名詞は代動詞にならない。また、代動詞になるのは無生の代名詞だけなので、例えば xe は代動詞になれても xo はなれない

例：la to-i?（彼は何をしてるの？）
例：rafel/fel/rafas,la di-i（宿題・勉強・家事手伝い、彼はその全てをしている）
例：rafel/fel/rafas,la ve-i（宿題・勉強・家事手伝い、彼はそれらを部分的にしている）
例：la xe-i（彼は何かしている。He’s doing something）
例：la i vok tin.la fi-i（彼は非常に忙しい人で、いつもとにかく何かしらしている）
例：rafel/fel/rafas,la we-i（宿題・勉強・家事手伝い、彼はその内のどれかをしている）

注）di-i は宿題と勉強と家事手伝いの内その全てを行っているという解釈であり、これらの

内のどれかをしているというのならそれは we-i になる。また、di-i は全てを完全に行っているか否かは不定である。全てを少しずつ行うという解釈もありうるので注意すること

＜代名詞由来以外の代動詞＞

代動詞には代名詞由来でないものもある。筆頭に挙げられるのは「行為」を表す so を動詞化した so-e である。so-e は前述の動詞を表す。前述の動詞の代わりをしているので so-e は代動詞と呼ばれる

例：an pordil-a os, tal la so-a（私は予防していなかったが、彼はしていた）

この場合、so-a は pordil-a を意味している。何度も pordil-a というのは面倒なため、so-a という代動詞を使っているのである

また、so-e は前述に動詞が明示されていなくても文脈で何の動詞か分かれば使える

例：（部屋を掃除するように相手に言いつけてからしばらくして戻ってきたその相手に向かって）so-ik?（（部屋の掃除は）終わった？）

so-e 以外にも代動詞はある。「再び～する」という意味の me-e がそれである。me-e は前述の動詞と同じ意味に「再び」という意味を付け加えたものだ。換言すれば、「me-e＝so-e＋「再度」」といえる

尚、me-e も so-e と同じで、文脈から何の動詞か分かれば先行動詞がなくても使える

例：an xon-a foa miik.me-i foi（私は昨日りんごを食べた。今日もまた食べている）

2－4－2－7：繋辞

唯一動詞の中で例外的な存在が繋辞である。繋辞は過去、現在、未来、通時の 4 種類があり、順に at,it,ot,et である。繋辞の前には被述者(説明される語)が来て、後ろには叙述内容(説明する語)が来る。被述者はセレンが造語した describee に基づいて D と呼び、叙述内容は explanation から取って E と呼び、繋辞は copula から取って C と呼ぶ

繋辞を伴った文を繋辞文と呼ぶと、繋辞文は一般に DCE と表現される。C を述語と捉えると論理構造は C(D,E)である。これは D(A,O)と同じ構造であり、表層形の語順はどちらも同じであるから統語論的な問題は大きくない

要するに繋辞とは英語の be 動詞であるわけだ。しかし、英語は be 動詞の後に形容詞を置けるが制アルカはできないという違いがある。考えてみれば制アルカの形副詞は名詞＋接続詞からできているので純粋な形容詞に当たるものがないのだからこのことは当然ともいえる。英語の hot water は形容詞＋名詞だが、制アルカでは el a af という名詞＋接続詞＋名詞という構造なのである。接続詞は基本的に接続する 2 つのものを省略することができないので、この場合 el を省略することはできない。したがって、She is cute.は lu it fan a

ank というしかなく、接続詞 a を使う限り fan は省略できないということである。つまり、「彼女はかわいい」という言い方はできず、「彼女はかわいい女だ」という言い方しかできないということである。英語文法的にいえば限定用法に当たるものしかなく、叙述用法に当たるものがないということになる

ところがこれは不便だということで、制アルカは E の部分に名詞をおいて形副詞のように使うことを許している。つまり、a ank(かわいい)という形副詞的表現の代わりに ank(かわいいもの)という名詞的表現を E に置くことを許すということである。従って She is cute は lu it ank となり、英語でいうとむしろ She is a cute one といった感じになる。制アルカのこのような表現は名詞表現を好むという点に合致しているので、違和感はない

しかし、転換動詞の場合はそうはいかない。例えば tu it fai といったら「これは火だ」といっているのか「これは燃やされた」といっているのか分からない。だが、そんな違いなど文脈で判断できるし、誤解が生じそうなときだけ省略しなければ良いだけのことである

尚、繫辞には時相詞を付けることができる。it-is のような表現は時制が重複するので妙な感じがするかもしれないが、可能である。もともとセレンは繫辞に時相詞を付けないことにしていたが、メルは始めからそのことを批判していた。セレンは始めは賛成しなかったものの、例文を作っていくうちにその不便さに気付き、繫辞にも時相詞を付けられるようにした

＜繫辞と格詞＞

英語の I'm from Japan にあたる言い方が制アルカにもある。言い換えれば繫辞は格詞句を後続できるということである。ただ、これは本来あったはずの名詞が省略された文だと考えることができる。例えば I'm from Japan は an et il parm であるが、これはそもそも an et lan il parm の lan が省略されたものである

＜繫辞文と一般動詞文を同一視する考え方＞

ところで、メルは繫辞文を一般の動詞を使った文と区別する必要はないと主張した。メルは繫辞を「動作主は対象を自分の性質とする」という意味を持つ他動詞だと捉えれば、繫辞文も D(A,O)の枠に収めることができると説いた

確かにそうすれば繫辞のテンスを含意するということだけに収まり、より体系が簡単になるだろう。だが、そこまでして体系を単純にする必要があるのかといわれると不明である。be 動詞のようなものと言った方が遥かに学習者によって理解しやすいのではないかという疑問が残っている

2－4－3－1：時相詞――opvet

ふつう、自然言語の教科書といえば動詞に関する項が数百ページに及ぶほど長い。動詞はテンスやアスペクトを表し、それを表すには様々な膠着要素や複雑な屈折が伴うため、一般に自然言語においては動詞に関する学習は初期段階で尤も面倒なものである

が、制アルカでは動詞の説明は極めて簡素である。それは動詞自体が形態論的にみて活用せず、語形も名詞となんら変わらない淡白なものだからである

勿論、制アルカでもテンスやアスペクトを表すことができないわけではない。ふつうの言語なら動詞が担っている役割を単に別の品詞が担っているため、動詞自体の学習項目が少なく見えるだけだ。そしてその「別の品詞」とは時相詞と呼ばれるものである

時相詞はその名の通りテンスとアスペクトを表す語だが、実際には助動詞に当たる意味も持ち合わせていて、前者を純時相詞、後者を意味時相詞と呼んでいる。時相詞の理解と学習は制アルカの学習で尤も重要な項目の１つである

尚、時相詞は例外なく動詞と共起し、省略は絶対に不可能である。時相詞は動詞と一体化し、2 つで 1 つのアクセントを持つ。そしてアクセントは時相詞に置かれ、動詞には置かれない

2－4－3－2：テンス

制アルカの時制は過去・現在・未来の 3 種があり、発話時と話題の内容時の対比によってその内のいずれかに定まる。内容時が話題時より前なら時制は過去形になる。日本語や英語など、多くの言語と同じだ

日常生活における発話時は現在そのものであるから、たとえば今セレンが何か行ったとしたら当然その行為は現在形で表される

ところで、時制を示す語は大抵時制以外の意味を示すことができる。例えば英語では現在形は勿論現在の状態を示すことができるが、それ以外にも習慣を表わしたり真理を表わしたりすることができる。だが制アルカの時制は厳密で、純粋に時間しか表わさない。要するに発話時より過去なら全て過去形である。そこには英語に見られる大過去もなければ時制の一致もない。同様に現在形も純粋に現在のことしか表さない

そして以上の基本 3 時制に加えて、もう 1 つ時制がある。それは普遍時制とか不定時制とか無時制などと呼ばれてきたものである。ここからは通時制とよぶ。英語の現在形は真理を表わすことができるが、制アルカはそれを通時制で表わす

これらの音形は taz,tiz,toz に合わせて過去が a、現在が i、未来が o、そして通時制が e である

＜従属節の時制＞

制アルカの従属節は印欧語にみられるように、主節と並置的な関係にあり、従属関係が弱い。制アルカの従属節は主節と同じく主語と述語を含む構造を取り、格詞などを伴って主節と連結する。述語が連体形を取って副動詞的に主節に連結するという日本語のような従属関係は持たない。「昨日来た男」のように、述語「来た」が連体形になって主節と連結するような、従属度の高い連結はしないということである

従属節は格詞によって導かれるものと、関係詞によって導かれるものがある。どちらも統語的には英語と同じく名詞的・形容詞・副詞的に働きうる

さて、従属節中の動詞の時制についてであるが、英語はそれが何節であるかによってどの時制を取るかが分かれており、極めて学習しにくい。例えば、多くの従属節は主節に対して時制の一致をするが、条件節に対しては一般に現在形を使うという制約がある。これを覚えていくのは面倒だ。しかし制アルカにはそのような例外がない。制アルカでは従属節中の動詞の時制は常に主節の動詞の時制との比較で決定される。主節の時制より過去のことであれば従属節中の時制は過去になるし、主節と同じ時制であれば現在になる

注意すべきは、主節が過去で従属節が現在の場合、従属節を現在形で訳してはならないということである。従属節が現在ということは、主節と同じということだから、ここでは過去になる。例えば"la vort-a im an kot-i"は「私が行ったとき、彼は死んだ」であり、「行く」の時制は主節の「死ぬ」が過去なので過去である。つまり、私が着いたときにちょうど彼が死んだことを示している。これを「私が行くとき彼は死んだ」というように、「行く」を現在形で訳してはならない。一方、"la vort-a im an kot-a"において、「行く」は主節の「死ぬ」に対して過去であるから、彼が死んだのは私が着いてからということになる。逆に、"la vort-a im an kot-o"の場合、「行く」は「死ぬ」より未来だから、これは英語の大過去にあたり、彼は私の到着を待たずして死んだという意味になる。大過去を使った文の例を他にも挙げると、英語で"The train had already left the station when I arrived"は制アルカで"lop lov-a map lopn im an lev-o"になる。英語では過去完了を使って主節の時制を大過去にしているが、制アルカでは過去完了形の動詞がないので、主節は過去のままで、従属節を未来にすることによって相対的に主節を大過去にするという操作を行っている。図示すると以下のようになる

	過去		大過去	
	主節	従属節	主節	従属節
英語	過去	過去（時制の一致）	過去完了	過去
制アルカ	過去	現在	過去	未来

この図をみれば分かるとおり、大過去を表わす際、英語は主節を変え、制アルカは従属節を変えるということである

ところで、今までは過去・現在・未来時制について説明してきたが、通時制はどのように扱えば良いのだろうか。これは極めて単純で、従属節中の通時制は主節の時制に影響されず、常に一定である。このことは学習しやすいという利点があるものの、通時制を使った文では大過去を表現できないという問題がある

従属節中の動詞の時制は以上に述べた通りであるが、従属節中の名詞の時制も動詞と同じ扱いを受ける。したがって、"tian taz"は元彼女だが、主節が過去だと"an in-a tian tiz xa-i sekl"（私は元彼女が庭にいるのを見た）のように"tian tiz"になって現在名詞で表現される

尚、主節と従属節のテンスが同じ場合、従属節が i でなく e ということがよくある。これは、従属節中のテンスは主節で既に述べたからわざわざ述べ直す必要はないという態度である

2－4－3－3：アスペクト

アスペクトについては行為のスタート時点とゴール時点をまず意識してほしい

スタート時点に焦点を当てたアスペクトが開始相(～し始める)である。同様にゴールに焦点を当てたものが終了相(～し終わる)である

また、スタートとゴールの間に焦点を当てたアスペクトが継続相(～している)である。英語でいうところの進行形はおよそこれに当たる

次に、将前相という少し難しいアスペクトに触れる。制アルカはスタート時点より前の時点にも焦点を当てることができる。例えば 3 時に出発という行為を行うとすると、3 時がスタート時点になり、2 時や 1 時などはスタートより前の時点になる。この 2 時という時点にも制アルカは焦点を当てることができるのである。2 時というと 3 時の出発に向けて準備をしている段階で、この段階に焦点を当てたアスペクトを将前相と呼ぶのである。日本語では「～しようとした」「～しようとしていた」に当たる

将前相とは逆に、ゴール時点より後の時点に焦点を当てたアスペクトがある。存続相である存続相はゴール時点で完了した行為の影響がゴール時点以降も続いていることを示す

代表例は「着る」や「開ける」である。「彼女は学校で赤い服を着ていた」の「着る」は彼女が自宅で行った行為である。自宅で完了した「着る」という行為の結果、彼女は「赤い服を着ている」という状態を獲得した。そしてその状態を保ったまま彼女は学校に来たのである。つまり、自宅で赤い服を着たという行為が学校に来た時点でも存続しているということである。同様のことは「ドアが開けられている」にもいえる。誰かがある過去の時点でドアを開けるという行為を完了し、その結果ドアは開いた。そしてその開いたという結果が未だに残っているのである。これらが存続相である

以上、制アルカには将前相・開始相・継続相・終了相・存続相という計 5 つのアスペクトがある。音形はそれぞれ p,t,s,k,n である

2－4－3－4：テンスとアスペクト

　時相詞とは時制(テンス)と相(アスペクト)を兼ねたものという意味である。テンスは述べることが義務だがアスペクトは随意である。アスペクトがない場合その動詞がどの段階にあるのかは不明であり、常識や文脈によって判断される
　テンスとアスペクトを組み合わせた表を以下に掲げる

過去：a
現在：i
未来：o
通時：e
過去将前相：ap
過去開始相：at
過去継続相：as
過去終了相：ak
過去存続相：an
現在将前相：ip
現在開始相：it
現在継続相：is
現在終了相：ik
現在存続相：in
未来将前相：op
未来開始相：ot
未来継続相：os
未来終了相：ok
未来存続相：on
通時将前相：ep
通時開始相：et
通時継続相：es
通時終了相：ek
通時存続相：en

2－4－3－5：意味時相詞

　以上で挙げた時相詞は純粋に時制と相を表すので純時相詞と呼ばれる。しかし、時相詞には助動詞的な意味を持つものもある。それらは時制や相を表さず、専ら可能だとか意思

だとかいう意味を表すため、意味時相詞と呼ばれている。これはセレンが制アルカ制作において独自に決めたものだから発生の歴史を持たない

要するに意味時相詞はモダリティも表すというわけだ。尚、制アルカのモダリティは意味時相詞だけでなく、他にも純詞や動詞を使って表すことができる。動詞を使うとは例えば「思う」のような動詞を使った場合である。ただ、モダリティはもっぱら時相詞で表され、純詞は補佐的であり、動詞は殆ど関与しないというのが実情である

ところで意味時相詞は常にテンスが不定で、アスペクトも不明である。意味時相詞は合理化を目指して純詞だったものが時相詞になったものだと考えてほしい。行けという場合に「述詞＋時相詞＋命令純詞」というパターンを取るよりも、いっそ「述詞＋命令純詞」にした方が早いからだ。この操作は、命令形のテンスは常に現在形だから時相詞がなくても誤解が生じないということに基づく。そうして命令純詞は命令時相詞になり、めでたくこのような形を取ったわけである。だから意味時相詞はテンスとアスペクトを示さないのだ。つまり、論理性よりも合理性を重要視したということである

以下では意味時相詞の例を挙げていく

命令時相詞：ac

命令を表す。威圧的であるから通常は al を使う。英語の命令形はふつう al に当たるから英語話者は注意するように。尚、主語はふつう ti だとわかっているので省略する
例：ket-ac（来い！）

依頼時相詞：al

依頼を表す。威圧的でなく、丁寧であるとともに常体でもある。英語の命令形は通常これで、日本語の「～して」もこれにあたる。ac と同じく主語はふつう省略される
例：ket-al(来て、来てください)

禁止時相詞：oc

禁止を表す。威圧的で、ふつうは使わない
例：ket-oc(来るな！)

禁止依頼時相詞：ol

何かをしないように依頼することを表す。「～しないで」に当たる。oc より一般的に使う
例：ket-ol(来ないで、来ないでください)

自分提案時相詞：of

　自分が相手に何かしてあげることを提案する時相詞。「～しましょうか？」にあたる。受益者である相手はふつう省略される。通常、疑問文になる
例：itm-of tu?(これ、買ってあげようか？)

相手提案時相詞：er

　相手に何かをするように勧める時相詞。「～したらどうですか？」にあたる。主語は相手であることがわかっているので省略する。通常、疑問文になる
例：ket-er?(来たらどうですか？)

勧誘時相詞：ar

　相手に自分と一緒に何かをすることを勧誘する時相詞。「～しませんか？」「～しましょうよ」にあたる。er との違いは、er は自分はやらないけど相手には勧めることを示し、ar は自分と一緒にすることを勧めることを示す点である。主語は私たちだとわかっているので省略し、ok 格ともふつうは共起しない。また、英語の Let's 文とは違い、疑問文となる
例：milt-ar?(一緒に踊りませんか？)

希望時相詞：il

　希望を示す。主語は自分でも自分以外でもいいので誰だか分かっているとき以外は省略できない。主語が自分のときは「～したい」にあたり、他人のときは「～したがっている」にあたる
例：lu ket-il(彼は来たがっている)

反希望時相詞：ux

　したくないという気持ちを表す。「したいというわけではない」という消極的な気持ちでなく、「いやだ」とか「したくない」という積極的な気持ちを表すので、ただの希望の否定とは違う。これも il と同じく主語を省略するとは限らない
例：xon-ux(食べたくない)

否定時相詞：u

　単に否定を表す
例：esk-u(雨は降っていない)

可能時相詞：el

　可能を表す。無論、主語を省略するとは限らない
例：ket-el(来れる)

不可能時相詞：ul

　el の反対で、不可能を表す
例：ket-ul(来れない)

意思時相詞：if

　意思を表す。誰でも主語に取れるので、主語を省略するとは限らない
例：xon-if(食べよう)

習慣時相詞：af

　日頃～しているという習慣を示す。勿論、習慣的に行える動詞としか共起しない
例：an it val tar xon-af miik(日頃りんごを食べているので私は健康だ)

許可時相詞：ef

　許可を表す。疑問文で用い、ふつう主語は自分だが、他人になることもある。後者の場合、日本語ではふつう使役で表現する
例：lu ke-ef?(彼を行かせても良いですか？)

必然時相詞・断定時相詞・客観時相詞：ax

　自分の意思とは無関係に、必然的にそうなってしまうものを指す。またこれは断定や客観をも意味する
例：esk-ax(絶対に雨が降る)

可能性大時相詞：ix

　ax ほどではないが、まずそうなるだろうということを示す
例：esk-ix(雨が降るはずだ)

可能性小時相詞：ox

　恐らくそうならないだろうということを示す
例：esk-ox(雨は多分降らないだろう)

反必然時相詞：ex

　絶対にありえないということを示す
例：esk-ex(絶対に雨は降らない)

必要時相詞・義務時相詞：ah

　必要があって義務的だというムードを示す。日本語は「～しなければならない」「～しなくちゃ」という義務の表現を多用するが、制アルカは主にそれらを-o で表現する。つまり、日本人が「～しなくちゃ」というところを、ヴァルテは「～しよう」と表わすのである
例：ke-ah(行かなければならない)

必要性大時相詞：ih

　必要性が大きく、やや義務的であることを示す。「～したほうがよい」にあたる
例：ke-ih(行った方がいい)

必要性小時相詞：oh

　～しないほうがいいということを表わす。「～しなくてもよさそうだ」は-ih os
例：ke-oh(行かないほうがいい)

不必要時相詞：eh

　～してはならないにあたる。「必要はない」や「～するのは自由だ」にあたるのは-ah os
例：ke-eh(行ってはならない)

2－4－4：形副詞――limsvet

形副詞とは形容詞と副詞の混成語で、形容詞や副詞の意味を持つ

ところで、英語の hot は形容詞として使われ名詞にはならないが、これは人工言語作成者のセレンとしては由々しき問題であった。もはや遠い昔の話だが、セレンはなぜ cold を覚えても「cold は形容詞」「cold の名詞形は coldness」と 2 つのことを覚えねばならないのだろうと憤っていた。まして英語は形容詞にラテン語系の語を残しているので sun を覚えても形容詞形は全く別に覚えねばならず、「sun は名詞」「sun の形容詞形は solar」という事実に特に憤慨していた

つまり、セレンはある語を覚えたときにその品詞とその品詞を変えたときの形とを覚えなければならないのが実に非合理的で面倒くさいと思ったのだ。そこで、自分の人工言語には何があろうと決してこのような愚行をさせるものかと心に決めたのである。そんな人生の半分近くも昔のことが制アルカには生きている

制アルカの形副詞は名詞と同形である。動詞も名詞と同形だから、一体どうやってある語の品詞を判定するのだろうという疑問が起こる。だが、動詞は動詞媒介で区別できるし、形副詞は a や i を前置することによって区別することができる

a か i に名詞を後続させれば形副詞が出来上がる。a は受動的な意味を形副詞に添え、i は能動的な意味を添える。例えば fin a tas の a tas は「大きくされた」という受動的な意味を持ち、要するに「大きい男」である。逆に fin i tas の i tas は「何かを大きくする」という能動的な意味で、要するに「何かを大きくする男」という意味である

他に例を挙げると、「殺された女」は fan a set で、「何かを殺す女」は fan i set である。また、「食べられたりんご」は miik a xon で、「人食いりんご」は miik i xon である

今までに挙げたのは形容詞にあたるものだったが、これを動詞に修飾させれば自動的に副詞になる。英語のように-ly を付けたり別の語形を覚えたりしなくて良い。例えば fin a tax は「速い男」で、具体的には例えば走るのが速い男などを意味するが、動詞に付けて lef-e a tax といえば「速く走る」という副詞になる

このように、a や i を名詞に前置させるだけで形容詞も副詞も簡単に作れてしまうという点は制アルカのシステムの誇るべきところである

尚、a と i は語を後続させるが格を表示するわけでないので、格詞でなく接続詞である

2－4－5－1：純詞――vesvet

純詞とは a や i を介在することなく使える語のことで、頻度が高い語が純詞になりやすい。例えば強調を表す tin などは本来は a tin というべきであるが、形副詞としてしか使わないた

め、名詞や動詞になる可能性はない。従って a を省略しても形副詞であると自動的に分かるため、a を省略できる。これが純詞であり、要するに形副詞としてもっぱら使われる内容語が純詞になりやすいのである

また、代名詞も純詞になる。例えば「この女」は fan a lu や fan e lu とでも呼ぶべきなのかも知れないが、e lu の頻度が非常に高いため、一々e lu と言うのは面倒くさい。ならば lu が純詞になって fan lu と言えるようになれば便利ではないか。そういった発想から代名詞 lu は純詞になった。同じように他の代名詞も純詞になることができる

更に、数字も純詞になる。1 人の女は fan e ko とでもいうべきだろうが、一々そういうのは面倒なので、ko が純詞になって、fan ko という。因みに、数を数字で書くときは fan 1 と書けば良い。要するに様々な語が煩雑さを避けるために a,i,e をかなぐり捨てることができ、そうして生まれたものが純詞なのである

純詞は量が多いため、一々挙げて説明しない。基本的な純詞は付録の最低限語意表に載せておくのでそちらを参照のこと。以下ではセレンがとりわけ説明すべきと感じた純詞について説明する。頻度の高いものや英語などから推移が難しいものが優先的に選ばれた

2－4－5－2：否定を表す純詞

否定は os で表す。os は古アルカの jan や den と同じく、語句に自由に付けることができる。修飾できる品詞は名詞、動詞、形副詞、純詞、数詞、格詞、接続詞、関係詞であり、非常に修飾が豊かだ。但し、実際は名詞、動詞、形副詞に付くことが殆どである

また、os は被修飾語が何かによって文の意味が変わる。同じ肯定文でもどこに os を付けるかによってニュアンスが変わるということだ。例えば an san-i ti に os を付けたとき、以下のような否定文が考えられる

an os san-i ti(私でない別の誰かがあなたが好きだ)
an san-i os ti(私はあなたが好きではない)
an san-i ti os(私はあなたでない別の誰かが好きだ)

よって、os を使うときは文意を考えながら適切な箇所に修飾させることである

2－4－5－3：受動文の純詞について

制アルカの受動文は非常に簡単で、能動文のＡと Ｏを入れ替えて、動詞に純詞の yu を加えるだけで良い。例を下に挙げよう

能：an baos-a ti「私は君を殴った」
受：ti baos-a yu an「君は私に殴られた」

英語や日本語と違ってＡは単純にＯと入れ替えることが許される。英語では能動文のＡ

は受動文だと by 格で表わさなければならないため、制アルカのように単純なシステムは持っていない。日本語も能動文のときの「私は」は受動文だと「私に」となり、「私を」とは言えないため、単純な格の交代は行えない

ところで制アルカは日本語ほど受動文を使うことはない。少なくとも日本語の受動文が主に示す「迷惑」というニュアンスを表わすことはない。制アルカにとって受動文の最大の利点は行為者をぼやかすことと、重文において動作主の重複を避けられるという点である。更に、話題の焦点が一番当たりやすい動作主が二転三転としないため、聞き手も動作主を 1 人に絞って内容を理解するため、理解しやすくなるという利点もある。話の焦点となっている人物が何度もコロコロ変わると人間は理解しづらくなるが、受動文を使えばその心配はなくなる。日本語においても「私が学校へ行ったら、彼が私を殴った」と言うより「私が学校へ行ったら、彼に殴られた」と言った方が理解しやすいだろう

ところで、受動文においてＡと O は自由に交代されるが、それ以外の格についての扱いはどうすれば良いだろうか。例えば「その話は彼によって私に語られた」という文をどのように捉えれば良いのだろうか？この場合、単に元の能動文である la ku-a kul tu al an を受動文に変えて kul tu ku-a yu la al an とするだけである。つまり、ＡとＯ以外の格は能動文を受動文に変えても全くノータッチで変化しないということである

2－4－5－4：here と there を表す純詞

場所は格詞 ka で示されるが、ka を使わずに純詞として表される場所もある。here と there に当たる語がそれだ。here を ka を使って表すと ka ka tu となるが、これは長ったらしい。here や there は良く使うのだから 1 語にした方が便利である

というわけで here や there に当たる純詞が生まれた。here は koo である。また、there は koo li でなく koe という独立した 1 語である

例：ke-a al koo(あそこへ行った)

更にこれらは純詞になって動詞を主に修飾する。意味は「ここで」「あそこで」に当たる

例：mile-a koe(ここで踊った)

2－4－5－5：特殊な時間表現を表す純詞

一般的には時間表現は格詞を使って表すので、時間表現については格詞も参照すること。但し、制アルカは純詞を使って特殊な時間表現をすることができる

ここで述べる時間表現とは例えば「さっき」とか「後で」のような極めて不定量な時間表現のことである。こういった表現を制アルカは時間の前後と現在からの心理的な距離とで切り分ける。つまり、まず過去か未来に分けた後、今度は現在から見て遠いか近いかで切り分けるのである。よって全体で 4 つの語が必要になり、制アルカはこれを 1 つの 4 対

語で表す

――近――過去：sakt：さきほど、さっき
　　――未来：sikt：後で
――遠――過去：sokt：以前、こないだ、この前
　　――未来：sekt：ずっと後で、今度

　これらは純詞だが、一般語が文法化したものなので、sakt などの名詞が存在する。sakt は il sakt「さきほどから」などのように、格詞と組み合わせることができる
　ところで、これらは無標で直接である。つまり、sakt といえば現在から見て「さっき」である。逆に現在でなくある時点からみて少し前の時間は間接的とみなされ、純詞 li を付けて表す。これはふつうの時間表現と同じである。従って、現在でないある時点からみて少し前の時間は sakt li である。あえて日本語にすると「そのさっき」といったところだろう

2－4－5－6：these days と those days を表す純詞

　these days「近頃は」と those days「当時は」を表わす純詞に、tuo と tue がある
例：la it jax tuo「彼は最近太ってきた」
例：at tue「あのころは良かった」

2－4－5－7：at this time と at that time(then)を表す純詞

　here・there と同じ理屈で at this time と at that time(then)を表す純詞がある。meo と mee である
例：an at kote meo(このときは 18 歳だった)

2－4－5－8：昨日・今日・明日を表す純詞

　昨日・今日・明日だけは頻度が高いので「1 日前」というような言い方は避ける。これらは 3 対語 fou で、純詞にもなれる
例：in-a la foa(昨日、彼を見た)

2－4－5－9：概数を表す純詞

　一般的に概数は純詞 via を使って表す。via は日本語にすると「おおよその、約～、大体の、おおまかな、概して、概～、大まかな、殆ど、～に近い、～前後」などの意味を表す

が、要するに概数を表す

また、「1 時間強」や「千円弱」というのは純詞 vas と vis を使って表す。この 2 つも概数を表す語である。従って「2 時間強」は fea ta vas である

2－4－5－10：修飾語句を被修飾語句全体に修飾させる純詞

日本語で「可愛い女」というのは 2 義的で、「色々いる女の中で可愛い者」という解釈と、「女という可愛い者」という解釈がある。前者の場合、一部の女が可愛いといっているのに対し、後者の場合、全ての女は可愛いといっているのである。このような大きな違いが日本語の「可愛い女」では区別されない。つまり、日本語では「可愛い」という形副詞が被修飾語である女の全てにかかるか否かが不明だということだ

しかし制アルカではこれらを厳密に区別することができる。修飾語句が被修飾語句全体にかかるということを表す純詞 pe を使えば良い。従って、前者の「一部の女」という解釈は fan a ank であり、後者の「全ての女」という解釈は fan ilp a ank である

ate は元々代名純詞 fa を流用しようと思っていたのだが、関係詞の先行詞を修飾する場合に問題が起きて止めた。元々は fa を使って前者の「可愛い一部の女」を fan a ank にし、後者の「女という可愛い者」を fan fa a ank にし、fan a ank fa は「可愛い女は誰でも」という意味にしようとした。この 3 つを順に A,B,C とする

が、これでは関係詞を使ったときに困るのである。fa しかないと B を fan fa un san-i fin としなければならない。そして C は fan un san-i fin fa としなければならない。が、これでは C において一体 fa が先行詞の fan にくっついているのか fin にくっついているのか分からないのだ。すると fa の語順をずらして先行詞の後に付けねばならないが、これだと B との区別が付かなくなってしまう。だから fa を使うのは止めて、専用に pe を作ったのである。こうしておけば fan pe un san-i fin と fan fa un san-i fin というように、pe と fa の違いで B と C の区別ができるからだ

2－4－5－11：初出・未知を表す純詞

日本語で「リディアって子に会った」といったとき、話者はリディアを知らないということが前提とされる。このような場合のリディアは初出や未知を表す。このように、「ってやつ」「～という」に当たる純詞が xav である。従って、「リディアって子」は ridia xav である。同様に、「学校っていうもの」は felka xav である。これらは英語の"Seren guy"や"Seren thing"に当たるものである。xav の頻度はそこそこ高いから押さえておくこと

2－4－5－12：比較に使われる純詞

何かと比べてより～であることを表わす純詞に van がある。反対により～でないことを表わすのは von で、同じくらいであることを表わすのは vin である
例：av van「もっと強く」
例：sor vin「同じくらい高い」
例：tis von「（小さいか大きいかはともかく）これよりは小さい」

2－4－5－13：当否疑問文を作る純詞

当否疑問文を作るには、答えて欲しい部分に no という純詞を後続させれば出来上がりである。例えば「りんごを食べたか？」と聞きたい場合、xon-a no miik?というように、xon-e の後に no を後続させるだけで良い。また、no は動詞だけでなく、名詞や形副詞に付くこともできるため、「食べたのはりんごか？」と聞きたいときには xon-a miik no?とすれば良い。英語のように助動詞 do の介助は不要であり、非常に簡単に疑問文が作れるのである
また、no は格詞にも付くことができる。ke-a al no felka?は「学校に行ったんであって、学校からきたんじゃないよな？」という意味である

2－4－6－1：格詞――banxvet

格詞とは英語の前置詞に当たるもので、名詞の動詞との関係を表す。英語の前置詞と異なるのは格詞は節をも取れることである。従って、英語では接続詞に当たるものが制アルカは格詞であることが多い
ところで、制アルカは英語と同じく動作主格と対格の格詞が基本的に省略されるが、倒置時には省略された格詞が復活する

2－4－6－2：頻発する文法化(grammaticalization)

英語では前を表す格詞に in front of があるが、これを front ということはできない。また、場所格は at や on であり、これを place ということはできない。つまり、He is in my room. を He is place my room.ということはできないということである。このことは一般名詞である place をそのまま流用して前置詞を作ることができないことを意味している
しかしこれでは記憶の無駄ではないか？セレンはそう考えた。なぜ He ate dinner time 8 o'clock.といえないのだろうか？それは勿論、at を time としてしまうと一般名詞との区別ができないからであるし、そもそも英語が人工言語でないからだ。なら制アルカでは place をそのまま格詞に使えるようにしようとセレンは考えた
制アルカでは ka は「場所」という一般名詞であると共に、「～で」という意味の格詞でもある。このように、制アルカは一般名詞をそのまま格詞として流用できるため、学習の

手間が省けると同時に細かな格詞のシステムを獲得することに成功した。おかげで「～の東に」などという中国語などに見られて英語には見られない格詞も容易に作れたのである。英語では"He lives in the east of the bank."といって「in＋東＋of＋名詞」の形で表さねばならないが、制アルカでは東格があるため"lu ra-i kefe klen"といって「東格＋名詞」という単純な形で表せるのである

　もちろん、全ての格詞が一般名詞の転換というわけではない。主格や与格などの基本的な格詞はペアとなる一般名詞を持たない。だがそれでも制アルカの文法化は諸語に比べて非常に多い

　ところで、文法化した語は元の語と同形であるため、内容語と機能語が同じ音形を持つという事態が生じてしまう。更に、制アルカのその他の機能語や純詞は同形の一般語が多く存在する。これではどうやってそれらの区別をすれば良いのか迷ってしまう

　だが、リディア曰く、その心配は要らないようだ。というのも、それらは統語的な情報や文脈的な情報さえあれば容易に区別が付くからだそうだ。加えて、口頭では大概機能語や純詞は弱く低く発音されるため、それだけでも内容語との区別が付くのである。尤も、機能語や純詞が強調された文では強く発音されるため、内容語との区別が付きにくいが、それでも統語情報と文脈情報で十分区別が付くとのことであり、セレンもそれに賛同している

2－4－6－3：様々な格詞

　制アルカは文法化が頻繁に起こるので格詞が創造しやすい。従って英語の前置詞よりも制アルカの格詞の方が遥かに数が多く、そのおかげで表現が細かくて多彩である。以下に代表的な格詞を挙げる

ul：主格
　動作主格を表す。通常は省略されるが、倒置や強調の際には復活する
例：on lu ul an san-i（彼のことが私は好きだ)

on：対格
　対象を表す。通常は省略されるが、倒置や強調の際には復活する
例：on lu san-i(彼のことが好きだ)

al：与格、終点格
　物や行為を受け取る者を表す
例：fit-a lei al la(彼に本をあげた)
　移動の着点を表す

例：ke-a al felka(学校へ行った)

il：奪格、始点格
　物を得る起点を表す
例：taf-a lei il la(彼から本を貰った)
　情報の源泉を示す
例：se-a tu il lei(これは本で知った)
　移動の起点を示す
例：ke-a il felka(学校から行った)

ol：場合格：～の場合に
　ol 以下が真のとき、ol 以前が真になることを示す。つまり、主節が真になる条件を表す
例：ke-ol ol la ke-o（彼が行くなら私も行こう）
　また、純詞 hot を付ける事によって「～のときに限り～する」という意味を表せる。論理学的にいえば必要十分条件を作るのでその条件命題は可逆である。同時に、hot がなければ可逆とは限らないので注意
例：ke-ol ol hot la ke-o（彼が行くときだけ私も行こう＝彼が行かないなら私も行かない）

el：反場合格：～の場合に～でない
　el 以下が真のとき、el 以前が偽になることを示す。つまり、主節が偽になる条件を表す
例：ke-ol el la ke-o（彼が行くなら私は行かない）
　また、ol と同じく hot を付ける事で条件命題を可逆にすることができる
例：ke-ol el hot la ke-o（彼が行くなら私は行かないが、彼以外なら良い。彼が来る場合に限り私は行かない）

ka：場所格
　場所を表す。地点と場所の差はない。つまり、ある 1 地点かある平面かは区別しない。英語のように at,on と一々区別しない。場所は基本的に全て ka で表す。尤も、「中」と具体的に言いたければ pot などの格を使って詳細に表せば良い
例：la miks-as ka lop（彼は電車の中で歌っていた）

im：時格
　時点と時間を表す。元は時間と時点を区別するつもりだったが、不必要と判断されてこうなった。要するに制アルカでは when と while の区別はないということだ。どうしても during や while の意味にしたいときは var や flo を使う。また、確定条件も表わす
例：la in-as teik im an ked-e（私が帰ったとき、彼はテレビを見ていた）

kon：具格
　行為に伴う道具を表す。with に当たる。ふつう、人を取るときは ok を使う。kon を使うと人の能力を活かしてという意味になる
例：kil-a kon diol(のこぎりで切った)

ken：不具格
　行為に使うべき道具を使わなかったことを表す。without に当たる
例：kil-a ken diol(のこぎりなしで切った)

ok：随伴格
　行為を行う主体的な仲間を表す。ふつう人を取るが、この場合はその人の能力を活かしてという意味でなく、単に一緒にという意味になる
例：ke-a ok la(彼と一緒に行った)

ek：不随伴格
　行為を行う主体的な仲間がいないことを表す
例：ke-a ek la(彼抜きで行った)

evin：非同等格詞
「～と同じくではなく」、「～とは違い」という意味を表す
例：an evin ti i ser(僕は君と違って背が低い)

atn：近格
　～の近くに、～のそばに
例：felka xa-i atn ra(学校は家の近くにある)

itn：遠格
　～の遠くに
例：felka xa-i itn ra(学校は家から遠いところにある)

van：強比較格
　～より～だ
例：an van ti it r(僕は君より背が高い)

du：量格

　量を示す。物質量だけでなく時間量なども取れる
例：vat-a du fei vina（30 分待った）

des：外側格
　外側にあることを示す
例：hac aaxt-in des kana(缶の外側に文字が書いてある)

dos：内側格
　内側にあることを示す
例：vat-al dos ant(線の内側で待っていてください)

em：1 回量格：～ずつ
　1 回ごとの動作量を示す
例：xon-a em di(少しずつ食べた)

fan：利益格：～のために
　利益を受ける相手を表す。利益か損害かが中立的な場合は al になりやすい
例：noa bel-a fan lai(娘は父のために料理を作った)

fin：損害格：～に利害があるように
　損害を受ける相手を表す。fan よりも al になりにくい。というのも、al はそもそも利益を受ける相手を示す用法もあるが、損害を示す用法はあまりないからだ
例：la ku-a fin an(彼は俺が不利になるような発言をした)

flo：期間格：～間、～の間
　while や during を表すが、ふつうは im を使う。特に期間を示したいときにだけ使う
例：xa-a flo keti(夏中ずっと居た)

ha：上格
　上に、上で
例：kets xa-i ha elen(ネコはテーブルの上に居る)

hal：表格
　～の表に
例：hac aaxt-in hal lei(本の表面に字が書いてある)

hi：下格
　下で、下に
例：kets xa-i hi elen(ネコはテーブルの下に居る)

hil：裏格
　～の裏の
例："vat" aaxt-in hil mas(紙の裏に「待て」と書いてある)

vin：同等格：強比較と弱比較の間の無比較として
　～と同じ、～と同じくらい。英語の as に当たる
例：an vin ti it sor(僕は君ぐらい背が高い)

ist：代用格
　～の代わりに、instead of
例：ket-a ist kot-a(行く代わりに来た)

kefa：南格
　南に、南で
例：felka xa-i kefa ra(学校は家の南にある)

kefe：東格
　東に、東で
例：felka xa-i kefe ra(学校は家の東にある)

kefi：北格
　北に、北で
例：felka xa-i kefi ra(学校は家の北にある)

kefo：西格
　西に、西で
例：felka xa-i kefo ra(学校は家の西にある)

tol：従事格(和合)：～と和合して、～に賛成して、～に従って
　和合や賛成、服従を表す
例：ke-a tol la(彼に従って行った)

tel：対立格(敵対)：～に対して、～に反対して
　反対を表す
例：ke-a tel la(彼に反対して行った)

tet：無関係格：～と関係なく
　無関係を表わす
例：ke-o tet jent（天気に関係なく行く）

tot：関係格：～に関係して、～の点で、～について、～にとって
　関係やそのものを捉える視点を表わす
例：tu et xop tot an（私にとってそれは簡単だ）

lex：性質格：～として
　語が持つ様々な性質の中からある性質を抜き出して、その性質を持つものとして行為を行ったということを表す。例えば父には「子供の教育者」「養う者」など、様々な性質があるが、ここからある 1 つの性質を抜き出して今はその性質を持つものとして行為を行うというのである
例：an lex lai ku-a(私は父として言ったのだ)

lia：手前格
　ある行き止まりがある空間において、自分から行き止まりまでの距離を D としたとき、あるものが D の半分以内にある状態を示す。日本語の「手前」とは意味が一部しかかぶらないので区別をきちんとすること
例：kov xa-i lia ez(箱は部屋の手前にある)

lii：奥格
　ある行き止まりがある空間において、自分から行き止まりまでの距離を D としたとき、あるものが D の半分より向こう側にある状態を示す
例：kov xa-i lii la(箱は奥にある)

mes：周辺格
　周辺を表す。～の周りに
例：laz lu lef-a mes lu(その少女は彼の周りを走っていた)

mos：中心格
　中心を表す。～の真ん中に

例：kov xa-i mos ez(部屋の真ん中に箱がある)

mox：接触格：くっついている、隣の、となりの、隣接した
　接触を表す。また、位置表現の場合は隣接を示す
例：ez e an xa-i mox ez e lu(私の部屋は彼の部屋の隣にある)

mex：非接触格：離れた
　非接触を表す
例：ez e an xa-i mex ez e lu(私の部屋は彼の部屋の隣ではない)

von：弱比較格
　より～でない
例：an vos ti it sor(私より君の方が背が高い)

pa：右格
　右にあることを示す
例：laz xa-i pa lu(その少女は彼の右にいる)

pet：外格
　中の反対で、外を表す
例：ems eke-i pet kana(油が缶の外へ流れ出ている)

ker：起点方向格：～の方から
　起点の方向を示す。具体的にその起点から来たというのではなく、その起点がある方向から来たということを示す
例：ke-is ker felka(学校がある方向から来ている)

pi：左格
　左にあることを示す
例：laz xa-i pi lu(その少女は彼の左にいる)

pot：中格
　中を示す
例：ems xa-i pot kana(油が缶の中にある)

kor：終点方向格：～の方へ、toward

　終点の方向を指す。ふつう、終点への到達は含意しない。終点に到達するならわざわざ語系の長い kor を使わずに al を使えば良いからだ
例：ke-is kor felka(学校のある方へ向かって進んでいるところだ)

rak：超越格：向こうに
　ある境界を超越したことを示す
　lii との違い。lii は境界を意識せず、突き当りと自分との距離の半分を超えるか否かを意識する。一方 rak は自分と対象との距離が何であろうと関係なく、単にその間にある境界を越えるか否かを示す
例：lat xa-i rak galt(入り口は門を超えたところにある)

ras：回数格
　回数を表す
例：beos-a ras vi(3 回殴った)

rik：内在格：こちら側に
　境界を越えないことを示す
例：lat xa-i rik galt(入り口は門のこちら側にある)

sa：前格
　空間的な前を指す
例：lu xa-i sa la(こいつはあいつの前にいる)
　時間的に過去を示す
例：ridia vart-a sa mel(リディアはメルより先に生まれた)

注）la xa-a sa an では「彼は私の前にいた」なのか「私より先に来ていた」なのか不明だ。前者は sa を空間的に解釈し、後者は時間的に解釈しているからだ。これらを区別するには e ka(空間的に)、e mel(時間的に)を動詞に付けて示す。例えば la xa-a e ka sa an(彼は空間的に私の前にいた)と la xa-a e mel sa an(彼は時間的に私の前にいた)というように

sal：積極条件
　そうなるだろうと予測している場合、そうなる確率の高い場合に用いる仮定。「恐らくこうなるだろう。そしてもしそうなら～する」と訳す
例：ke-ol sal la ke-o(彼も行くだろうから私も行こう)

si：後格

　空間的な後ろを指す
例：lu xa-i si la(こいつはあいつの後ろにいる)
　時間的に未来を示す
例：mel vart-a si ridia(メルはリディアの後に生まれた)

sil：消極条件
　恐らく起こらないだろうがという予測に基づく仮定
例：ke-ol sal la ke-o(恐らく彼は行かないだろうが、もし行くなら私も行こう)

okn：交差格
　～と交わって、交差して、across
例：eke tu eke-i okn eke li(この川はあの川と交わって流れている)

ekn：平行格
　～に沿って、～に平行して
例：eke eke-i ekn pon(川は道に沿って流れている)

sov：間格
　～の間に、between
例：ra xa-i sov klen/felka(家は銀行と学校の間にある)
　中立的立場であることを示す
例：seren ku-a sov ridia/mel(セレンはリディア寄りでもメル寄りでもなく言った)

tar：原因格、理由格
　原因や理由を表す。because にあたる
例：esn-in tar esk-i(雨が降っているので傘をさしているのだ)

tat：周期量格：
　周期を表す。～ごとに
例：itm-uf psel tu tat soot(毎週この雑誌を買っている)

tir：結果格
　結果を表す。thus にあたる
例：esk-it tir esn-i(雨が降り出したので傘をさした)

var：経路格

〜を通って、〜通って、through
例：ke-a al felka var seka(公園を通って学校へ行った)
時間を通して、while にあたる。flo は単に期間を表すが、var はその間中ずっと休まず一心にといったニュアンスがある
例：fel-a var dev(一晩中勉強した)

2－4－6－4：定量時間表現と不定量時間表現

格詞を伴って時間を表す句を作ることができる。代表的なものは when や at にあたる im である。また、before に当たる sa や、after に当たる si もよく使われる
ここに挙げた時間は定量的なものであり、具体的にどのくらいの長さかわかる。例えば 1 時間前といったら sa fea ko であるし、3 年前といったら sa sac vi である

一方、「さっき」や「後で」にあたるものは時間量が不定で、どのぐらい過去なのか或いは未来なのかということがわからない。また、具体的に何時間前かも分からないので数字を付けて表すわけにもいかない。その代わり、語を付けて長さを表す。例えば「数時間前」は sa fea fen で、「何時間も前」は sa fea fon である

ところで、定量的なものの中には量が曖昧なものがある。英語の a few は正にそれである。制アルカには a few に当たる fou という語があって、これも数詞になれる。従って、「2〜3 時間前」は sa fea fou である

尚、以上は格詞を使った時間表現であったが、純詞を使った特殊な時間表現もあるので、それはについては純詞の項を参照のこと

2－4－6－5：比況・様態を表す格詞

比況・様態を表す yun という格詞がある。英語の like に当たるものだ
制アルカでは yun の代わりに接続詞 e,a,i を使って比況を表すこともできるし、更には複合語を使って比況を表すこともできる。英語にはなじみのないこの現象だが、ドイツ語では可能だ。ドイツ語には「教会の塔のように高い」という複合語があり、それは形副詞として使えるのである。日本語や英語では確実に「〜のように」と言ってしまうところを、ドイツ語では複合語として表せるのである。制アルカもドイツ語のような手法が可能だが、実際は yun の方が遥かに良く使われる
というのも、複合語にしてしまうと意味が慣用的になってしまい、意味が正確に伝わりにくいし、句でなく語なので新語としての創造も遅い。その点 yun を使えば句として手早

く正確に比況内容を表現することができるからだ

2－4－6－6：格詞の形容詞的用法と副詞的用法

an in-a kets sa ra といった場合、sa ra の用法が in-a にかかる副詞なのか kets にかかる形容詞なのかで解釈が変わる。前者の場合「家の前でネコを見た」であり、後者の場合「家の前にいるネコを見た」である。後者の場合、「私」が家の前にいるわけで、ネコはそこから見える位置にいれば別にどこにいても良い。例えば屋根の上でも車の下でも良い。しかし前者の場合、ネコは家の前にいなければならない。このように、格詞句がどこにかかるかで文の意味が変わってしまう。そこで文意を明確にするための方法がいくつかある

1：格詞句を動詞に近付けて副詞にする。これは統語的な手段である
an in-a sa ra (on) kets（俺、家の前でネコ見たよ）
2：格詞句を修飾句と見立て、e を付けた上で動詞を修飾する
an in-a e sa ra (on) kets（私は家の前で猫を見た）
3：格詞句を強調して焦点化する。具体的には文頭に持ってきて更にカンマを後置する。この場合の解釈は副詞である。口語ではポーズがカンマになる
sa ra, an in-a kets（家の前で、私は猫を見た）
4：格詞句を文からカンマで区切って副詞であることを示す。口語ではポーズがカンマに
an in-a kets, sa ra（私は猫を見た。家の前で）
5：格詞句を修飾句と見立て、e を付けた上で名詞を修飾する
an in-a kets e sa ra（私は家の前にいる猫を見た）

2－4－6－7：同一の格詞が同一節中に現れる場合

同一の格詞が同じ節に複数来ることがある。そういう場合、どちらかが或いはどちらもイディオム的に使われているといえる。例えば il fon（久しぶりに）はイディオムで、il parm（日本から）はイディオムでない。この場合、il 句を 2 つまとめて ket-a il fon/parm としてはならず、ket-a il fon il parm としなければならない。/で結ぶ以上、fon と parm は等価とみなされてしまうが、実際「久しぶり」と「日本」は同じ土俵で比べることができないためである

2－4－6－8：格詞が連続する場合

格詞は連続し得る。例えば「入館は閉館の 30 分前までです」は lat-el kilk sa fei vina e hem であるが、ここでは kilk と sa が連続している。kilk は sa fea vina e hem を修飾し、sa は fea

vina e hem を修飾している。このように、格詞が連続することはありえることなので注意

2－4－7－1：接続詞――arkvet

制アルカの接続詞を一言でまとめると次のようになる
日本語の接続詞は主に文をだらだらとだらしなく続けるために存在しているのに対し、制アルカの接続詞は主に文と文との論理関係を表すために存在している
制アルカには日本語や英語には少ない文と文との論理関係を表す接続詞が多数あるため、論文を書いたり論議をかもす場合に非常に便利な言語である。例えば制アルカには「ここからの文は主張とは関係ない脱線になるが」ということを専門に表す接続詞や「結論は後で述べるから今はとりあえずこれを聞いてくれ」ということを表す接続詞がある。こういう接続詞は日本語では考えられないことである

2－4－7－2：何と何を繋ぐか

接続詞には主に文を繋ぐものと語句を繋ぐものと文章を繋ぐものがある。語句同士を繋げる代表的なものは an であり、文を繋ぐ代表的なものは in であり、文章を繋ぐ代表的なものは vol といえよう。だが別にこういった分類は制アルカの学習に必要なわけではないので、学習者はあまりこの点を気にかけることはない

2－4－7－3：括弧を意味する tie,tun

英語の that 節を作る接続詞 that に当たるものが、tie である。英語の that 節には始点となる that しかなく、終点となる語はない。しかし制アルカには that 節の終わりを示す tun という接続詞がある
また、英語で that がよく省略されるように、tie や tun も省略されやすい。但し、丁寧度が高い場合は省略されにくくなる

2－4－7－4：連言

連言は強弱 2 つに分かれる。強連言は同階層連言とも呼ばれ、名詞と名詞、形副詞と形副詞、動詞と動詞、目的語名詞と目的語句など、同じ階層の語句同士を結ぶ連言である。強連言には an という接続詞を使う。an は文面ではふつう/で示される
an/ti では an と ti を繋ぎ、an san-i aples/miik a har.では「アプリコット」という名詞と「赤いリンゴ」という名詞句を繋ぐ。aples と miik a har は san-i の目的語という点で同階層である

一方、弱連言とは要素同士を異なるレベルで繋ぐ接続詞である。in は良くツンクで代用される。A an Bといったら A と B は同階層として扱われるが、A in Bといったら A と B は別々に扱われる。従って、an san-i ti/lu.といえば「私は君と彼が好きだ」となるが、an san-i ti in lu.といえば「私は君が好きで、一方彼は…」という意味になる。小難しく言ったが要するに重文を作る接続詞だ

また、動詞に an や in が付く場合はニュアンスに違いが生じる。an は時間的前後を認めいが、in は時間的な前後を認めるのである。従って、in は hom-a omi in lat-a(ドアを開けてから部屋に入った)という風に使われ、an は san-i an sok-i lu(彼のことが好きだし、尊敬もしてる)という風に使われる。更に、同じ文でも an か in かでニュアンスが変わる。例えば xok-a an xek-a.は飲み食いしたという一連の動作をまとめて述べているが、xok-a in xek-a は単に飲み食いしたということを述べるだけでなく、「食べてから飲んだのだ」というニュアンスを与える

2－4－7－5：選言

選言にも強弱の 2 種類がある。強選言 or は A or B の形で使い、「A か B かどちらか一方」という意味になる。どちら 1 つしか選択できない。従って、aples or miik といえば「アプリコットかリンゴのどちらか」という意味になる

一方、弱選言の er は A er B の形で使い、「A か B のどちらか」を表すが、or と違って A と B の両方を選んでも良いとされる。従って、aples er miik といえば「アプリコットかリンゴ、或いはそのどちらでも」という意味になる

2－4－7－6：「その他」を表す方法

強選言でも弱選言でも選択肢以外の選択、即ち「その他」という選択を示す方法がある。具体的には選言に「その他」を表す alt を加えれば良いだけだ

強選言の例：aples or miik or alt(アプリコットかリンゴかそれ以外のどれか)

弱選言の例：aples er miik er alt(アプリコットかリンゴかそれ以外の中からいくつ選んでも良い)

ここで注意したいのは、alt を純詞の alt と間違えないことである。もし aples or miik alt といったら「アプリコット、もしくはこれじゃない別のリンゴ」という意味になってしまうからである。尤もこの場合は or や er の数が足りないしイントネーションも違うので自ずと区別は付くだろうが、それでも要注意である

2－4－7－7：選言と whether

or や er を使って英語でいうところの whether を表すことができる。この場合、tie,tun 節と呼応することが多いが、ふつうの会話ではやはり省略可能である
例：se-u san-i la or.(カレのこと好きなのかどうかわからないの)

2－4－7－8：同格の接続詞

同格はコンマによって統語論的に示すことができるが、同格接続詞 del を使って表すこともできる。del の後には同格内容が続く。従って、「リディアという女」は fan del ridia となる

2－4－8－1：関係詞――istvet

制アルカの関係詞は格詞から規則的に作られる。格詞に s を付けたものが関係詞になる。格詞から派生されているだけあって、その機能は瞬時に判断できる。英語の関係詞は何格の関係詞か判りにくい上に同形の語がいくつかの格を兼用している点でセレンからすれば非常に不様である。例えば which は主格とともに対格も表すが、制アルカでは厳密に区別する。尚、対格の関係詞は英語と同じく、しばしば省略される

2－4－8－2：特殊な関係詞

関係詞は格詞に s を付ければ作れると上に書いたが、多用される ul の関係詞形は uls でなく、un という特殊なものになる。また、同じく多用される on の関係詞形は ons でなく en である
例：リンゴを欲しがる少女＝fian un lap-i miik
例：私が好きな少女＝laz en san-i

2－4－8－3：関係詞における有生と無生の中和

英語と違って制アルカの関係詞は有生か無生かの対立がない。英語では the man は who で受け、the tree は which で受けねばならないが、制アルカでは who と which の区別はない。その代わり、英語のように which が主格と同時に対格も表すなどということはありえない

2－4－8－4：豊富な関係詞

英語と違って格詞から規則的に関係詞が派生されるということは、それだけ関係詞を作

りやすい環境にあるということであり、果たして制アルカの関係詞は英語に比べて遥かに種類が多い。英語では前置詞と関係代名詞を組み合わせて主格と対格以外の格の関係詞を作ることができるが、制アルカではそれらが別々の 1 語で言い表せる。例えば"This is the knife with which I stabbed her."においては具格句 with the knife の with が関係詞になって with which になっているが、制アルカではこれを具格 kon を関係詞化した kons で表すことができるのである。即ちこの例文は"tu i kil kons an toe-a lu"となるのである

繰り返すが、格詞から規則的に関係詞を作ることができるために制アルカの関係詞が豊富である。そしてそのおかげで、制アルカは英語にはない関係詞を有している。英語において「これは彼が行かない場合の雨である」という言い方は許されない。つまり、"This is the rain."と"He doesn't go in case it rains."を関係詞で組み合わせて"This is the rain in-case which he doesn't go."ということは不可能である。というのも、英語には in-case which などという場合格を使った関係詞がないためである。しかし制アルカは単に ol に s を付けて ols という場合格の関係詞をあっさりと作れるため、"tu i esk ols lu ke-u"という言い方が可能である。この文はおよそ「この雨のせいで彼は行かなかった」と同じだが、細かく言うなら「これは彼が行かない場合の雨だ」である。勿論、日本語にもこのような言い方はないため、こうして直訳すると非常に不自然な感じを受けるが、制アルカではこのような言い方が可能である。但し、制アルカにおいてもこのような文は頻度はそう高くはないという点に注意すること

2－4－8－5：先行詞を内包する関係詞

以上までの関係詞では次の文にはある関係詞が欠けている

1：物事：What he has done is unforgivable.（彼がしたことは許せない）

2：時間：I don't know when to go.（いつ行けばいいのか分からない）

3：理由：This is why I was mad at you.（だからお前にムカついてたんだよ）

4：場所：This is where I used to play.（ここが昔よく遊んだ場所だ）

5：方法：Tell me how to spell "mineral".（「ミネラル」のスペルを教えて）

これらの文を以上の関係詞だけで表わそうとすると、非常に面倒臭い。例えば 3 は"tu i tar tars an jo-a ti"であるが、tar tars という冗長振りが甚だ面倒である。そこで、制アルカはここで挙げた 5 つを効率良く表わすための特殊な関係詞を持っている。これらの関係詞は先行詞を内包している。例えば tar tars は tart という関係詞で表わされ、tar は関係詞 tart の中に内包される

本来なら 1～5 の先行詞と関係詞はそれぞれ us ots, im ims, tar tars, ka kas , tox kon などとなるはずだが、これらは全て特殊な関係詞によって排他される。具体的にいうと順に ut,imt,tart,kast,toxt である

さて、以上を踏まえた上で 1～5 を制アルカに翻訳してみる

1：dox-ul ut la so-a.
2：se-i os imt (an) ke-o (ih).
3：tu i art (an) jo-a ti.
4：tu i kat (an) axo-uf.
5：ku-al toxt axt-e "mineral".

2－4－9－1：感動詞――xivvet

これについては特筆することはない。あえて述べるとするなら制アルカの感動詞は内容語でもなければ機能語でもないという点と、挨拶語は感動詞に入るという点ぐらいであろう

2－4－9－2：感動詞と感嘆文

英語は感嘆文の構造が平叙文などと明らかに異なっているため、特に 1 つの文種として立てる必要がある。しかし制アルカではわざわざ感嘆文という文種を立てる必要はない
制アルカで感嘆文に当たるものは感動詞 lulu・lala を伴った文などである。lulu は良い意味と共に使われ、lala は悪い意味と共に使われるという違いがある。従って、”How cute the kitty is!”においてネコが可愛いことは好ましいことで良い意味だから lulu が使われ、”How silly you are!”において「貴方」が愚かなのは苛立たしく悪いことなので lala が使われる。具体的に言うと前者は”lulu,uni a ank tin!”で、後者は”lala,ti it leit!”である
尚、感嘆文だからといって必ずテンペラを必要とするわけではないが、ふつうはテンペラが付くので覚えておいた方が良い

2－5－1：接辞(affix)について

制アルカは複合語を好む性質が強いので、英語に比べると接辞は少ない。接辞は接頭辞と接尾辞であり、接中辞はない
ここでは重要な接辞をいくつか紹介するが、詳しくは辞書等で調べること

2－5－2：否定・反意を表す接頭辞

否定や反意を表す接頭辞に e がある。否定として働くときは後続する語が矛盾概念ならば矛盾概念を作り、反対概念ならば反対概念を作る。反意として働くときは反意語を作る
e は主にｎ対語彙でペアが足りないときに使われる。例えば「支配」と「従う」はｎ対だが、これは能受の関係でｎ対している。ところが「従う」のペアには意味が逆の「逆らう」

というのもあるはずで、これもｎ対になりうるはずである。ところが「従う」には既に別のｎ対語彙「支配する」が存在する。そこで、e を使うのである

また、e は上述の通り意味的に反対であるような語も活発に生産する。例えば bao は拳という意味であるが、これは丸めた手である。丸めた手に対するのは開いた手である。つまり、じゃんけんのパーである。そこで丸めた拳に対して開いた手は ebao と呼ぶ。同様に、koom は櫛で、髪を梳かすという転換動詞になるが、これに e をつけると髪をぐしゃぐしゃにするという意味になるのである

このように、e は生産的な語であり、これに相当する語がアルシェになかったのは酷く悔やまれることである。この語は元は a という音形でソーンにあったもので、アルシェにはなかったのである。そこで、制アルカでは積極的にこの接頭辞を取り入れた

様々なペアを表わすにはｎ対語が有利だが、ｎ対語以外で単なる反意語を表わすには e が有益である。koom をｎ対語にすると koem になるが、このような処理を続けていくと予期せぬ同音異義語が生まれる可能性が高いし、悪い意味なのに a や o になってしまったり、良い意味なのに i や e になってしまったりといったｎ対語の規則に対する抵触が生まれかねない。しかし e にはその心配がないのである。これは大きな利点である

ならばｎ対など止めて全て反意にはこの接頭辞を使えば良いと考える者があるかと思う。しかしそれは青臭い意見だ。ここで１つ、見事にそれをやってしまった失敗作を挙げよう。エスペラントである。かのエスペラントには反意を示す mal-という接頭辞がある。mal-は基本語にまで適応されるので基本語の語形が長くなるという問題をエスペラントは抱えているのである。セレンからすれば mal-一辺倒のエスペラントは非常に稚拙である。セレンはその二の舞にならないように気を付けていたので、基本語の語形を短くするためにｎ対語を使ったのである。一方、高級語は基本語ほど語形の長さが気にならないので、e を使ったのである

２－６－１：語群

英語においては語・句・節の区別は重要である。例えば、I want to go.の場合、「行くこと」は to go という不定詞句で表されているが、I forgot that he went.の場合、「行ったこと」は that he went という節で表されている。英語学習者にとって難しいのは、句の場合 to を使い、節の場合 that を使うという点である。I want that go としたり I forgot to he went としてはいけないというのは甚だ不便である

これとは対照的に、制アルカは語句節を区別することはそれほど重要ではない。節は主述を含んだもので、句はそれを含まないものだといわれているが、制アルカでは頻繁に主語が省略されるので、節と句の区別がしばしば困難だ。また、句と節で文法的変化が起こるわけでもないから両者の区別はときに不必要とさえいえる

2－6－2：句動詞は好まない

英語の教科書を見ると句の項目に長い記述があるが、制アルカは句と節の区別を重要視しない上に、句というものの存在価値がそもそも英語とは違うので、殆ど句については語ることがない。英語は句動詞が豊富にあるから殊更句について語る必要があるが、制アルカには必要ない。制アルカは動詞に前置詞や副詞を付けて特定の意味を表したもの、即ち句動詞を使わず、代わりに複合語を多用する

2－6－3：句や節の境界が曖昧な場合

句や節の境界が曖昧であるとき、どこまでが 1 つのまとまりなのかを示す方法に括弧がある。これは数学と同じ発想で、括弧で括られた部分が 1 つのまとまりになる。ゆえに、句や節の境界が曖昧な場合は括弧を使って境界を示せば良い

2－6－4：慣用句は少ない

慣用句は少ない。できたばかりの言語だからこれは当然といえる。ただ、古アルカに存在した慣用句は制アルカに訳されて流入したものが多いため、慣用句がないわけではない

尤も、慣用句は学習が難しいので今はない方が良いとさえいえる。それに慣用句は大抵もっと簡単な言い方で言いかえが利く。制アルカは内容を簡単かつ正確に伝えることを良しとするので、慣用句は邪魔者とさえいえる。したがって制アルカでは慣用句の存在自体が日本語などとは異なるのである。日本語では慣用句は知識の表れだが、制アルカの慣用句は内輪のくだけた言い方といった感が付きまとう

2－6－5：台詞・思考・引用

日本語では鍵括弧の中に文を入れて台詞を表す。しかし、思考まではふつう表さない。一部の小説などでは思考を只の丸括弧に入れることによって台詞と区別する方法が取られているが、これは確立された方法ではない。また、引用も鍵括弧に入れて表す。英語では基本的にそれらを全て引用符のダブルコーテーションで表す。従って、台詞も思考も引用も基本的に区別されない

一方、制アルカでは台詞は喋り括弧で括られ、思考は思う括弧で括られ、引用は引用符で括られるため、3 者の区別が明瞭である。日本語は思う括弧に当たるものが確立されていないので、制アルカより区別が明瞭でないし、英語は尚更明瞭でない。制アルカの方が区別が良くできている

台詞や思考は 1 つの段落として扱われるため、それだけで 1 つの段落になる。よって、台詞や思考の後は改行が義務的である。但し ku-e などの対象として現れる場合は別である
改行する例：@an san-i la`
改行しない例：la ku-a @an san-i la`

2－6－6：天秤部

台詞文というのは実際の発話と違ってどのような言い方をしたのか分からない。「ふざけんなよ」と書いてあっても言い方次第で「からかうなよ」の意味にも「遊んでないで仕事しろよ」の意味にも「バカ野郎」の意味にもなる。冗談半分なのか怒っているのかも言い方次第だ

E-mail などでは口調が伝わらないのでしばしば相手の感情が読み取れずに困ることがある。まして制アルカは命題を伝えることに専念する言語なので、感情が文章に表れにくく、口調が分からないのは非常に困る

古アルカでも文章のやり取りをする際にそのような問題があった。そこで、文末に口調や心情を表す特別な文字が発達した。日本語でいうと(笑)などに当たるものである。これを古アルカでは天秤詞(リーブラトーン)と呼んでいた。天秤の片方に感情が乗っていて、もう片方に分銅に当たる天秤詞が乗っかっているというイメージが語源になっている。つまり、感情に釣り合った表現を表わすものが天秤詞というわけである。天秤詞はリディアによって中期の『制定語彙』以降に生まれた

やがて天秤詞が色々な口調を表すようになると、一般語として使う文字も天秤詞として使われるようになっていった。それが高じると天秤詞は感情だけでなく舌打ちや髪のかきあげというちょっとした動作まで表すようになっていった。天秤詞は単語でなく句や文で現れるようにもなり、もはや品詞とはいえない状況になっていった。そこで制アルカでは天秤詞を天秤部と改め、品詞から外した

天秤部は話者の感情から椅子に座るといったちょっとした動作まで表すことができる。尚、天秤部は台詞文か思考文にしか使われない。また、天秤部が置かれる箇所は喋り括弧や思う括弧の直前である。天秤詞は始めは文末に置かれていたのだが、メル・アルカの頃にフゥシカが天秤詞の文頭配置を開発して以来、徐々に文頭に置かれるようになっていったのだ。そして、制アルカでは完全に天秤部は文頭要素と決められたのである

天秤部は話者(思考者)の次に置かれる。従って、全体としては「話者(思考者)→天秤部→内容」といった順番になる。また、話者(思考者)と天秤部の間はガコンで区切られる。始めはツンクのつもりだったが、天秤部自体にツンクが使われるので止めたのである

例：ridia.nix@lol`(リディアは微笑みながら「面白いね」といった)

尚、天秤部の読み方であるが、天秤部は喋り括弧なら ku と読み、思う括弧なら os と読む。また、話者(思考者)、天秤部、ku(os)は高く強く発音され、3 者の間には十分なポーズが与えられ、天秤部を伴った文だということを示す。ku(os)と内容の間にも十分なポーズが与えられる。従って天秤部を伴った文を読み上げるときは歯切れの良い軽快な印象を与えることになる

2－7－1：複合語論

制アルカはドイツ語などのように、複合語が豊富で、多くの語が単純語を組み合わせた複合語である

単純語は平均的な長さが 3～4 字で、多くの複合語は 2 つの単純語の組み合わせであるから、複合語は 6～8 字程度のものが多い。8 字というと children と同じであり、決して長い語は言えない。英語は日常的に使う単語も長いスペリングが多く、8 字ではむしろ中の下といった長さであろう。例えば conversation などは 12 字もあるが、これだってとりわけ長い英単語ではない

制アルカは複合語を好むが、その長さは英単語と比べても決して長いとは言えず、効率的なものである。更に同じく複合語を好むドイツ語と比べると、遥かに制アルカのほうが語形が短くて便利であることが分かる。例えばドイツ語で Überschallgeschwindigkeit という語は「超音速」を意味するが、これは実に 25 文字もある。一方、「超音速」は制アルカでは rakfotux であり、英語の supersonic より更に短い。rakfotux は 3 つの要素からなる複合語で、rak(超越)＋fo(音)＋tux(速度)を組み合わせてできた語である

複合語の語形が短いということはそれだけ複合語が使いやすいということであり、合理的だということである。裏を返せば制アルカはそれだけ複合語が好きで、複合語を使いやすい環境を積極的に作っている言語といえる

ドイツ語も複合語が好きだが、コンセプトが制アルカとは違う。ドイツ語の複合語は複合語を作っている要素間の文法的関係がかなり明示的で、非常に論理的になっている。そのおかげでドイツ語は複合語を見ただけで語の意味が想像しやすいという性質を持っている。それは確かに長所ではあるが、語形が長くなって使いづらいという欠点がある

その点、制アルカは全く発想が逆である。制アルカの複合語は細かな文法的関係を捨象して語形を短くする。要素同士の文法的関係は慣用に任せている。従って複合語を見ただけでは意味がやや曖昧だが、一度覚えてしまえば語形が短い分だけ使いやすいという利点がある

論理優先と実利優先、これはどちらが優れているという結論が出ないと思う。しかし、少なくともセレンは後者が優れていると判断したし、アシェットが打ち立てた過論理の排他にも後者が適合するだろうと判断した

2－7－2：複合語の内部構造

ドイツのような論理的な複合語においては複合語要素間の関係が明示されやすい

それと反対に中国語のような複合語においては要素の品詞をまず考えねばならず、要素同士がどのような関係を持っているのかは曖昧である。例えば中国語の複合語には XY の形で「X＝主語＆Y＝述語」という主述型や、「X＝動詞＆Y=目的語」という動目型などがある。前者には例えば「地震」という語がある。これは「大地が揺れる」という意味で、漢字を知っていればおのずと意味は予想できる。しかし地震という現象は「大地が揺れる」という解釈でなく「(地殻運動などの原因が)大地を揺らす」と考えてもいいはずで、その場合は「震地」と呼んでも良さそうなものである。しかし実際はそうではない。結局のところ「震」という字が自動詞的に使われるという知識を覚えてなければならないのである

また、動目型に「生気」という語がある。読んで字のごとく「気」を「生ずる」というところから来ていて、「怒る」という意味である。だが、日本語の「生気」は意味が違い、「生き生きとした気力」の意味である。中国語の場合、「生」が動詞となっているのに対し、日本語の場合は形容詞的に捉えられているのである。更にこの現象は中国語の中でも起こる。同じ「生」を使った複合語に「生物」があるが、この場合の「生」は動詞的に解釈して「物を生かす」と考えてはいけない。正しくは「生きているもの」という形容詞的解釈である。つまり、同じ「生」という漢字でもどの複合語に使われるかによって意味が変わってしまうのである。このような造語方法を取っている中国語は複合語においては論理性が比較的弱いといえる

さて、制アルカであるが、制アルカはドイツ語式ではなく中国語式の造語法を取る。要するに制アルカの複合語はまるで漢字を組み合わせて作るように、単純語を組み合わせて作るわけであり、複合語の要素をどのような品詞で解釈すべきかということはあくまで慣例に任せるということである

なぜそのような方式をとったのかといえば、それは過論理の排他だ。例えば「食品工場」という複合語があったとき、誰が「食品を作る工場」でなく「工場を食品化する」などと考えるだろうか？複合語の意味などというものはまず常識があれば理解できるものである。それなのにわざわざ論理的に「食品」は形容詞(または名詞)で「工場」は名詞だなどというマークをつける必要がどこにあるだろうか？勿論セレンはそのような論理的な言語を考えたことはある。しかしそんなマークを毎回毎回言わねばならないというのは甚だ不合理であるため、排他したのである

さて、中国語では複合語の要素を主述型などといって分類するが、制アルカではどうか。おおよそ制アルカには次のタイプの複合語がある

1：名詞＋名詞
　尤も多いパターンで、前の名詞が後ろの名詞を限定する。この場合、前の名詞を形容詞的と捉えると、2 のパターンと同定可能である
例：faikpon(弾道)＝faik(爆弾)＋pon(道)

2：動詞(能受)＋名詞
　1 の次に多いパターンで、動詞の受の解釈はそのまま形容詞の解釈でもある。つまり、「動詞＋目的語」と「受動の意味を持つ動詞＋名詞」と「形容詞＋名詞」を一挙に表すことができる。1 と同定しやすく、区別が困難な場合も多い
例：daafas(偉業)＝daa(偉大な)＋fas(仕事)

3：副詞＋動詞
　動詞の程度を表す複合語。だが、このパターンの複合語がそのまま名詞として使えることからこれを形容詞＋名詞と捉えることもできてしまい、2 との区別が困難なことがある
例：taxov(ぱっと動く)＝tax(速く)＋ov(動く)

4：道具＋動詞
　道具を伴って動詞の動作を行うことを示す。道具を名詞と捉え、動詞を名詞と捉えると 1 との区別が困難である
例：diolkil(のこぎりで切る)＝diol(のこぎり)＋kil(切る)

5：動詞＋動詞
　前の動詞の結果後ろの動詞に至った場合や、時間的前後で前の動詞の次に後の動詞に至った場合を示す。動詞を名詞と捉えると 1 との同定が困難
例：jikniks(滑って転ぶ)＝jik(滑る)＋niks(転ぶ)

　以上からも明らかであるが、全てのパターンが他のパターンと区別することが難しい。それはそれだけ制アルカの複合語が非論理的であると共に、同形で様々な品詞として使える柔軟性を持っているということに起因する。ここに挙げたパターンはあくまで複合語要素間の意味を細かく分析すればこのようなパターンが得られるというだけのことであり、実際はここに挙げたようなことを知らなくても良い

2－7－3：複合語の大原則――全ては右側が決定する

　ただ、1 つ知っておかなければならない大原則がある。それは、全ての複合語は右端の要素が最終的な意味を決定するということである。つまり、「ヒキガエル」だろうと「トノサ

マガエル」だろうと要するに「カエル」の一種であり、決して「ヒキ」や「トノサマ」の一種ではないということだ。更に「元大統領」はもはや大統領の成員ではないものの認知上・言語上のカテゴリーは大統領に分類される

　このように複合語の要素は右端の要素が基本になり、以左は全て何らかの修飾語であるということが複合語の大原則である。尚、この大原則を右側主要部の原則という

2－8－1：語彙の構成

　制アルカの語彙は数千の単純語とそれを組み合わせた複合語でできている。外来語は極少数である。数千の単純語の語源は殆ど古アルカに求めることができる。古アルカが語源でないものはセレンが独自に制定した無語源のものである

　古アルカの多くの語は『制定語彙』などの文献に載っていて、ここに収録された語はその後も多くが使われ続けた。『制定語彙』はクミールがアルシェを離反する前にできあがっていたので、この頃はまだアルカ・エ・ソーンは存在していなかった。そのため後期古アルカでもある程度ならアルシェとソーンのアルカは通じたのである

『制定語彙』の語は古アルカの音象徴からできているため、その殆どが外来語ではない。制アルカの単純語が『制定語彙』から参照されているということは制アルカの単純語は異言語臭がほとんどしないということである

　更に、単純語以外の語彙の多くは単純語を組み合わせた複合語からなるということは、制アルカにおける異言語臭は極めて弱いということになる。制アルカにおいて異言語臭がするとすれば、それは殆ど初期アルカにおける語を語源としたものである。その多くは英語・日本語・フィンランド語であるが、もはや殆ど原型を留めていないので制アルカ固有の語と言って良いだろう。もしそれらを固有語と認めないなら英語やフランス語には 1 つも固有語がなく、全てラテン語ひいては印欧祖語からの借用であるといわざるを得ない

　したがって、制アルカは殆どアルカだけから出来た言語ということができよう。また、自然言語が語源となったといってもその証明さえ難しいくらいに語源とかけ離れた音形を持っているのが殆どであるため、事実上、制アルカにおける異言語臭はゼロといって良いだろう。これは我々アシェットの誇りである

2－8－2：外来語の扱い

＜外来語に対する閉鎖性＞

　制アルカはスタート時点でかなり異言語臭の弱い言語だということは上で述べた。更に、制アルカは五万とある異文化の概念を取り入れる際にもできるだけ外来語をそのまま受け入れることをせずに、制アルカに翻訳して受け入れようとする。つまり、これからもでき

るだけ異言語臭を排他していこうとする言語なのである

＜外来語の境界線＞

何を以って外来語とするかは意見の分かれるところである。日本では狭義の外来語は西洋語からきた語で、広義になると中国から来た漢語をも含める

また、輸入元での区別でなく、どのような種類の語かによって狭義と広義に分ける考え方もある。例えばドアは典型的な外来語だが、それに比べるとジョンやメアリーは外来語というより単なる人名という感じがする。そこで狭義の外来語には普通名詞や動詞などの語を入れ、人名や地名などの固有名詞は広義の外来語に入れるという分類も成立する

では、制アルカでは何を以って外来語となすのだろうか。実は制アルカでは今述べた狭義の外来語のみが外来語として扱われる。即ち外来語は固有名詞を含まないということである。従って、「メアリー」はたとえ元が Mary でも外来語ではない。「アメリカ」も国名という固有名詞なので外来語ではない

更にその中でも訳語は外来語ではなく、音訳されたものだけが外来語とされる。従って information を音訳した「インフォメーション」は外来語でも、それの訳語である「情報」は外来語ではない。前者が外来語で後者がそうでないというこの感覚はたとえば日本人には共通する思われる

さて、外来語から弾かれる名詞についてもう少し細かく挙げる。外来語から弾かれるのは以下のものである。例と共に挙げる

1：人名：リディア
2：動物・植物・無機物・想像物などの固有の名前：コーマ、トール（セレンの靴の 1 つ）
3：商品名：バンドエイド
4：地名：アジア
5：国名：フィンランド
6：民族名：フン族

結局のところ 3 以外は全て固有名詞なのである。尤も、6 は具体的に誰か一人を指すわけではないが、同じ民族の全体を 1 つのまとまりとして考えれば固有名詞である

3 はこの世に 1 つのものではない。バンドエイドは大量生産されている。しかしリンゴのような只の普通名詞とも取りにくい。尤も、バンドエイドは定着しすぎたために普通名詞のように振舞っているからリンゴと同じように感ぜられるかもしれないが、もしこれがウィンドウズ XP やプレイステーションだったらどうだろうか。リンゴのような普通名詞よりは固有名詞に近いという正常な語感が働くだろう。従って、商品名というのは限りなく固有名詞に近い普通名詞であるといえる。そこで 3 も外来語から弾き出したのである

2－8－3－1：ｎ対語(エヌツイゴ)

制アルカの語の尤も特徴的なものはｎ対語である。ｎ対語とは同じレベルの語を集め、それに規則的な音形を当てたものである。ｎ対語は最後の母音が規則的に変化することによって対をなしている。例えば eta に対しては最後の母音 a が i に変化して、eti になる。尚、eta は姉で、eti は妹である

対の数は 2～4 である。中でも圧倒的に 2 対語が多く、殆どが反意語を成している。2 対語には例えば「大」と「小」、「買う」と「売る」、「男」と「女」などがある。4 対語には「東」「西」「南」「北」などがある。2 対は変化する部分の母音が a,i であり、3 対は a,i,o であり、4 対は a,i,o,e である。尚、何対であろうと u が中心的な語になる。eta は姉、eti は妹、eto は兄、ete は弟であるから、etu は兄弟姉妹を取りまとめた総称的なものである

ｎ対語はどれか 1 つを覚えてしまえば自動的に組になっている語をも覚えることができるため、制アルカの学習効率に貢献している。これのおかげで例えば paa(光)という語を覚えれば、すぐに闇が pai だと分かるのである

2－8－3－2：機能や意味を重視する

機能や意味を重視した意味構造を持つ。例えばここに原子を使って通信できる装置があるとしよう。更にそれはピラミッドの形をしているとする。この場合もし「原子通信機」と名付けるならそれは制アルカ的かつ日本語的なネーミングであり、そのものの機能や意味を重視した語になる。反対に"Pyramid"と名付けるならそれは英語的であり、そのものの形態を重視した語彙になる。今のは勿論多分に誇張を含んでいるが、日本語が機能や意味を重視し、英語が形態を重視するという傾向は本当のことである。だから英語話者は要注意である

2－8－3－3：数字を用いた表現

数字を併用した語彙が他の自然言語より多い。例えば指は、親指、人差し指…という代わりに第 1 指、第 2 指…という。このような語は自然言語では例えば中国語にある。中国語は曜日を月曜日から順に星期一、二……と呼んでいく。また、日本語でも月は 1 月、2 月というように数字と併用して表現される。このような形式の語はどういう種類のものがなるかというと、ほぼ同じと思われるものの集まりがなりやすい。例えば指は親指から小指までほぼ同じものが 5 本ある。それで数字と併用されるのである。尚、この場合に使われる数字は基数と序数の区別がない

2－9：オノマトペ

は制アルカはオノマトペが少ない。音象徴によってオノマトペを語源とする語は多いが、オノマトペ自体は少ない。制アルカは命題を合理的かつ論理的に伝えることを最優先とする。その性質のせいで曖昧な言い方や感情的・感覚的な言い方は積極的に削除され、結果的にオノマトペが少なくなるというわけである。例えば「魚がピチピチいってる」というのは「魚が跳ねている」と考えれば良いわけだし、「服がビショビショだ」というのも「服がとても濡れている」と分析的に考えれば良いわけだ

ただ、古アルカにはオノマトペを元とする語がかなりたくさんある。制アルカが古アルカから取り入れた語も元はオノマトペということが結構あるので注意が必要だ

第 6 章：統語論

1－1：古アルカ

古アルカのころからアルカは統語論にうるさくなかった。古アルカは表意文字を使っていたため、語の最低限の並び方さえ決まっていればあとは大抵意味が通じた。古アルカにとって重要だったことは文字の運用であり、細かい統語論はあまり問題ではなかった。古アルカで重要なのはむしろ品詞論であり、どのような品詞があってそれらがどのように使われるかということのほうが重要だったのである。尚、その性質は制アルカにまで継承されている

古アルカの統語論で問題になるのは主に語順である。古アルカの語順は大別して 3 種に分かれていた。主語と述語からなる単純な SP 構造をはじめに最終的な SVO 構造に落ち着くまでにかかった時間はそう長くなく、SVO になってからは終ぞ変わることがなかった

1－2：前第一改定アルカ

このころの基本語順は主語と述語を単に並べた SP 構造で、2 語文のようなものであった。修飾も行われることがなかった。形容詞に相当する kai（大きい）や li:z（小さい）も形容詞として使われていたわけでなく、単に述語として扱われていた。たとえば「私は小さい女だ」は「私は女だ」と「私は小さい」とに分解して、[del min]と[del li:z]というようにしていた

1－3：後第一改定アルカ

第一改定によって語順はSOVになった。これは日本語の語順に合わせたものだと考えられる。また、繋辞deの流入によってS+de+Cの語順も確立した。形容詞はまだ少なく、形容詞としての位置付けがなされていたわけではなかった。したがって修飾法も乏しかった。たとえば「私は小さい女だ」というとき、これは前第一改定アルカと同じく「私は女だ」と「私は小さい」とに分解して考えた。但し、後第一改定アルカでは既に繋辞が存在していたため、これは[del de min]と[del de liːz]というように言われていた。もっとも2番目の主語は大抵省略され、[del de min de liːz]といわれるのが一般的だった。前期で形容詞や副詞が繋辞のdeで導かれるのはこのことが原因である

前期の終わりごろになると[de liːz]などが形容詞と意識されはじめた。ところがSOVの語順では形容詞は前置が基本であるため、リーザが修飾語と被修飾語の順序を意図的に変えるという逆転現象が生じた。これによって[min de liːz]は[liːz de min]というように代わり、形容詞や副詞の類は前置されるようになっていった

また、このころは孤立語的性質が強かった上に格を表示する語がなかったため、倒置は殆ど行われなかった。また、同格や挿入なども避けられ、基本語順SOVはかなり余計な粉飾無しにこのままの形で使われることが多かった

1－4：前クミール・アルカ

後第一改定アルカごろに英語をメタ言語として使い出したことにより、英語からの語彙の流入が激しくなった。それと同時に語順も英語と同じ語順に急激に変わっていった。というのも、多くの文はまず英語を頭に浮かべた上でそれからアルカに翻訳していたためである。こうして語順は急激にSVOに変わっていった。ところが形容詞や副詞は依然として前置されることが多く、後置は有標的な語順でしかなかった

1－5：後クミール・アルカ

後クミール・アルカの語順もSVOのままであった。基本語順は結局このまま変わることがなかった

中期の初めは修飾句は前置であった。だが、『制定語彙』によって古アルカの文章力が発達したのを契機にその状況は変わった。文章力が発達したことによって高度な修飾句を作ることができるようになったのである。それまでは単に「大きい」とか「小さい」といった修飾語しかなかったものが、「山のように大きい」とか「私が昨日買った」などの句や節までできたのである。これは前置詞の発達と関係詞の登場ということもできる。但し、この時点での関係詞は文章上のもので、音はなかった

さて、『制定語彙』によって修飾語句が発達し、複雑な修飾語句が生まれた。このことによって初めて修飾語句の後置が行われた。それまではSVOの語順で修飾句が前置されると

いう状況だったが、修飾句が長い場合は後置されるという現象が起こったのである。これは英語などにも見られる現象であることから、古アルカは自然言語であるかのような変化をしていたといえよう

このころになると倒置・同格・挿入の中から、まず同格が生まれるようになった。続いて口語には既に発生していた挿入も生まれた。倒置は最後に生まれ、目的語を文頭に持ってきてツンクを後置することによって表現された。口語ではツンクの代わりにポーズが置かれた

1－6：前ソーン・アルカ

このころに起こった統語上の変化は関係詞に rom という音が付いて有音になったことによって関係詞が意識され始めたことなどが挙げられるが、他に大きな変化はない。関係詞が意識されたことによって関係詞の種類が増え、主格や対格の関係詞が生まれた。ところがそれは文章上では別の幻字で区別されたものの、口語では同じ rom であった

1－7：後ソーン・アルカ

アルカ・エ・ソーンが発生して『高水準制定語彙』が作成されても統語上の変化は殆どなかった。関係詞がより複雑化し、様々な格を取れるようになっていったということくらいである

1－8：メル・アルカ

メル・アルカも統語上の変化は特にない。エクスプローダーが消滅して副詞になったため、動詞とエクスプローダーの間に挟まれていた字が消えたという程度である

ところで、メル・アルカは最後の古アルカで、このころの統語論については多くの文献が残されている。概説的な内容が『青アンクノット』に記載されているのでそちらを参考に古アルカ最後の統語論を述べていく

まず、メル・アルカの基本語順は SVO である。修飾語句は前置も後置も可能で、修飾語句が長くなると後置される傾向にあった。修飾法は ker~tu という接続詞、rom という関係詞を使った多彩な方法があった

倒置は目的語の倒置のみしかないが、これはよく行われた。同格と挿入はツンクで挟んで頻繁に行われた

文型は英語と同じ内容の 7 文型が存在していた

文種は平叙文・否定文・疑問文・感嘆文・命令文などがあった

比較はエクスプローダーから発生した接続詞を用いて行われた。英語の than と同じ用法

であった

仮定法は反実仮想のエクスプローダーを動詞に後置することによって行われていた

話法には直接話法と間接話法の 2 種があった。直接話法で台詞の境界を表わす鍵括弧にあたるものには「口」を意味する ku という字が使われた。また、台詞でなく思考の場合は鍵括弧の代わりに「頭」を意味する lo という字が使われた

数の一致は存在しなかった

否定構文は否定を表わす den がどこにでも付くという性質によって非常に単純なものであった。尚、それまで使っていた否定を表わす jan はそのころには殆ど使われず、de jan（～でない）を語源とする den が頻繁に用いられるようになっていった

強調は強調のエクスプローダーや副詞の[tinkaː]で行われていたが、強調されるのが目的語の場合は倒置によって強調の意味を表わすこともできた

省略は極めて頻繁に行われた。主語と目的語がないことは多かったが、動詞はあまり省略されず、代動詞の so が代わりに使われることが多かった

英語に見られる物主構文はアルカには殆ど存在しなかった

関係詞は複雑で、rom という幻字を使って様々な格を取った。といっても主なものは主格と対格であり、所有格を取る関係詞は一応存在したが殆ど使われなかった

分詞構文はなく、関係詞を使って表わされていた

受動態は受身を表わすエクスプローダーの[ʒu]を使って表わした。「S V O」を能動態だとすると受動態は「O+ V+[ʒu̟]+ S」という構造であり、これは制アルカの受動態の構造と酷似するものである

2－1：制アルカの統語論

制アルカは統語論にうるさい言語ではない。言い換えれば統語論は大して理解の役に立たない。制アルカを理解するには語の理解の方が重要である。制アルカは格や動詞のシステムがしっかりしているため、あまり統語論にうるさくない。基本語順は存在するが格を明示すれば自由に倒置が行える

ただ、だからといって統語論について述べる必要がないというわけではない。以下では制アルカの基本語順や文型などについて記述していく

2－2：基本語順

制アルカは標準で SVO の語順を取る。O 以下の格についてだが、基本的にはどの格がどの順番で来ても良い。更に、O 以下の格が S や O の前に入り込んでくることも可能である。ただ、ふつう S と O は格詞が省略されるが、別の格が S の前や O の前に入り込んできた場合はどれが主格でどれが対格か混乱しないように格を明示することがある

SVO の後には様々な修飾句が付く。修飾句は一般に格詞や接続詞 a,i などによって導かれる。尚、これらは倒置によって SVO より前に来ることができる

2－3：格

制アルカには動詞を取り巻くように様々な格があるが、その中でも特に重要なのは主語の S と目的語の O である

S は主格が基本義であるが、S が oni のとき、その oni が省略された場合、即ち動詞が自動詞用法になる場合、S の位置を実際に占めるのは本来は動作主ではなく下から上がってきた他の格である。したがって自動詞の場合、S に来るものは元は S ではないものなのだが、それでも自動詞のとき S に格を付加する場合は ul を付ける。つまり、kil tu kil-e at の kil に格を付ける場合、ul kil tu kil-e at のように、ul を付けねばならないということである。kil tu kil-e at の元の文が oni kil-e at oni kon kil tu だからといって、本来の格を考えて kon kil tu kil-e at としてはいけないということである。このように、S は他の格と違って必ずしも動作主になるとはかぎらないが、それでも S の基本義は動作主であるので注意されたい

また、S に立つ語についてだが、通例 S は意思を持って行動できるものを取る。英語のように頻繁に無生物主語が立つことはなく、無理に立てるならそれは擬人法になる

例えば英語では"Rydia broke the window"では主語は Rydia であり、"The wind broke the window"では主語は wind である。Rydia は意思を持って行動できるものだが、wind はそうでない。にもかかわらず両者はどちらも主語に立つことができる

一方、制アルカでは前者は"ridia dor-a tems"であり、これは英語と同じ考え方である。ところが後者になると"tez dor-a tems"というのは擬人法的で、日常会話としては不自然であり、ふつうは"tems dor-a tar tez"という。つまり、意思を持って行動することのない風はふつうは S に立たないのである

次に、O について。O は基本的には対象を表わすが、本来は ka 格で述べられても良さそうな語が O にくることもあるし、同じく本来は kon 格にくるようなものがきている場合もあるので、注意が必要である。たとえば xa-e は O に場所をそのまま取ることができるので、ka 格は不要になる。本来は場所なので ka 格にきても良さそうなものだが、xa-e という動詞は O に場所を要求するので ka 格の出番はなくなるのである

2－4：文型

英語には 5 文型があって、これを覚えるだけでも一苦労した覚えがあるが、制アルカには「～文型」などという面倒なものものは一切ない。制アルカにあるのはただ 1 つの論理式、D(A,O)を元にして作成されたものだけである。これは英語の第 3 文型 SVO に当たる

もので、制アルカは第 3 文型 1 つで全てを表すことができるのである
　ただ、実際には繋辞文は英語の第 2 文型と見ることができるし、自動詞文はOの省略でなく単なる第 1 文型と見ることも可能である。しかし、第 4 文型と第 5 文型については確実に存在しない

2－5：強調と倒置

　制アルカでは強調は倒置を使って示される。無論、口頭では強調される部分を強く言えばそれで事足りるが、口頭でもやはり強調される部分は倒置されてなるべく文頭に来ようとする。これは鉄則だが、語句は文頭に近いほど文の焦点が当たっていることになる
　ところで倒置を行った場合、省略されていた格詞は復活する。例えば an san-i lu という文において対象を強調したい場合、倒置を行って lu を文頭に持ってくる。このときに省略されていた lu の格詞 on と an の格詞 ul が復活し、on lu ul an san-i となる。またこの場合、ul の代わりにカンマ(口頭ではポーズ)を入れることができる。つまり、on lu,an san-i としても良いということである

2－6：同格と挿入

　同格は同格内容をカンマで挟んで表現される。例えば"Rydia, the first moon, is born on July 19, 1984."(第一使徒リディアは 1984 年 7 月 19 日に産まれた)は、"ridia, hacma kola, vart-a im mel pek va,zan,ral"というように表される
　口頭では同格のカンマの部分でポーズが置かれることによって同格であることが知らされる

　また、挿入については同格と同じく、カンマで挟み込んで表現する。例えば"The little girl, however, didn't cry."(その少女はしかし泣かなかった)は"laz lu, tal, ena-u"と表現される

2－7：引用と話法

　制アルカにも直接話法と間接話法がある。直接話法は引用として喋り括弧の中に入れる。論文などの引用の場合は本人の思想だと考えて思う括弧に入れても良い。引用部分はそれで 1 つの単位となるので、ku-e などの動詞の対象になれる。ところが実際は直接話法はあまり使われず、ふつうは喋り括弧から始まる台詞文で表されるのであまり神経質に覚える必要はない
　一方、間接話法は日本語や英語と同じように代名詞の変化が起こる。つまり、He said, "I'm…"という文の I は He said he was というように変わるということである

尚、前述の通り、従属節の時制は主節との比較で決まる。もし主節より過去のことなら過去形であり、主節と同じなら現在形で、主節より未来なら未来形である。但し、従属節中の動詞の時制が問題視されない場合は当然のことながら通時になる

第 7 章：文献

1−1：古アルカ

古アルカの文献は時代を経るごとに総量も現存する割合も高くなる。前期に関する文献は殆どゼロに近く、中期に関する文献から徐々に現存するようになる。現存する文献は殆どが後期のものである

古アルカによる文献はそもそも古アルカによってまともに文章が綴れるようになってから量が増えた。まともに文章を書けるようになったのは少なくとも中期に入ってからのことであるからそもそも前期に関する文献は殆ど残されていない

文章が書けるようになると使徒が仕事として提出した論文が大量に出現するようになる。中期や後期のことである。論文には『制定語彙』や『高水準制定語彙』といった文献には収録されていない語も多く使われている。その中には一時的なものや個人的なもの、或いは裏情報で入手した公的には使用の認められていないアルカ・エ・ソーンの語などが混ざっていた。これらの論文は古アルカの歴史を知る上で重要なものだが、その内容は秘匿性が高いため、おいそれと研究が許されないのという点が問題である

使徒の残した文献は全てルティア家が保管し、参考文献として使うときだけ貸し出しされるという状況であった。ところが制アルカの成立以降は古アルカの研究が禁止になり、そのせいで使徒の論文は貸し出しも禁止になった。それどころかルティア家に保管された論文はリーザに許可されたものが制アルカに翻訳され次第焼却されるということになった

古アルカは利用できる文献が極めて少ない。それは古アルカが秘匿情報であったことの名残である。使徒の論文を考慮すると文献自体の量は決して少なくないはずだが、現存する文献の殆どがルティア家に保管されていて自由に研究が許されないという点が問題である

尚、紙の文献の他にもアンシャンテ上で膨大に行われた伝言が存在する。ところがこれはすぐに消えてしまうものである上に、これを紙面に写したことがなかったため、ここにあった貴重な情報も失われてしまっている。更に『制定語彙』や『高水準制定語彙』でのIPA の記述のために使徒の声を吹き込んだテープもあり、かつて実際にセレンはリディアの日常会話や伝言が吹き込まれていたテープを預かっていたが、後年になって返却しなければならなくなった。そしてこれも焼却された

1－2：前第一改定アルカ

　このときのアルカについての文献はリーザの手帳とノートである。語の音や意味、或いは統語についての記述がなされているが、これは焼却処分されていて現存しない

1－3：後第一改定アルカ

　このころの文献は神無アルカのプロトタイプとしてセレンが記した手帳の記録が現存している。だが、これそのものはアルカに無関係で、意味がない。また、セレンのノートの端々に当時のアルカが記載されていたが、これは紛失してしまっている

1－4：前クミール・アルカ

　このころになると使徒の論文が生まれてくる。『制定語彙』のような大きな文献はまだなく、使徒個人個人の持つノートやメモ書きにわずかに記録が残っていたが、中期に増えた使徒規則によってアルカに関する許可を取らない記述は全て保有したり作成したりすることが禁止されたため、前クミール・アルカに関する情報は許可されたもの以外はルティア家が全て保管していることになっている

1－5：後クミール・アルカ

　このころになると『制定語彙』が作成され、それによって文章が今まで以上に多く生まれるようになっていった。使徒による論文も盛んになった。また、独自の文章も書かれ、翻訳もされた。更に散文詩も作られるようになった。だが、これらは全てルティア家が保管していて閲覧できない
　古アルカで書かれた使徒個人の日記などが存在するが、これらは中期に全て焼却するように命じられた。これを受けてセレンは前期や中期に関する記述が書かれたノート等を廃棄した

1－6：前ソーン・アルカ

　このころ『赤アンクノット』がセレンによって作成された。これはリーザの許可を得たのでセレンが保管している。他の使徒の論文は依然としてルティア家が保管している

1－7：後ソーン・アルカ

このころ最大の文献は『高水準制定語彙』である。『高水準制定語彙』は他の使徒の論文と同様にルティア家が保管している

また、メル 9 年ファーヴァの月セレンの日から作成しだした『青アンクノット』は『赤アンクノット』の姉妹品であり、これもセレンが保管している。『青アンクノット』は日本語をメタ言語にしたもので、アルカの統語論と形態論を説明してあるが、アルカによる例文は乏しい

1－8：メル・アルカ

このときの最大文献は辞書類としては『制アルカオノマトペ』があり、物語類では『ミールの書』がある。これらは使徒の論文とともにルティア家が保管していたが、『ミールの書』だけはメル 13 年ミルフの月にメルの手によって一旦メテ家にもたれされた。同年パールの月に、『ミールの書』を殊のほか好むクミールがリーザに『ミールの書』の譲渡を願い入れたためである

クミールの要求を受けたリーザはメテ家が保管するソーンの使徒の論文の一部を公開することを交換条件として提示し、クミールがこれを飲んだので、リーザはメルに『ミールの書』をメテ家に運ばせたのである

ところが事情を知った『ミールの書』の作者であるセレンはリーザの行為に遺憾の意を示し、クミールに論文の公開は不要と告げた。これを不服としたのがリーザで、リーザはセレンに発言の撤回を要求し、メテ家に『ミールの書』を見返りなしに譲渡しないように要求した。するとそれを受けたセレンは『ミールの書』をメテ家から取り上げてクミールに個人譲渡した。見返りを期待するような関係で和平は成り立たないと考えたためである

厳密に言えば譲渡は使徒規則で禁止されているため、行えない。そこでセレンが考えたのはクミールの家宅に『ミールの書』が存在している時点で『ミールの書』の翻訳書の権利を捨てるということである。これは譲渡ではないため、問題はない。だが、そのままでは『ミールの書』の保管者がいない。使徒規則では保管者がいない場合はハルヴァに文献が流出しないように速やかに使徒がこれを回収することになっているが、その際の使徒は誰でも良いのである。これによってクミールは権利を放棄されて捨て置かれた『ミールの書』の保管者となったのである

ところがクミールはセレンのこの行為を受けてセレンがかねて閲覧を要求していた資料を見返りなく公開した。しかしその資料の中にリーザが要求していたものは含まれていなかった

1－9：アルカ・エ・ソーン

アルカ・エ・ソーン随一の文献といえば『暫定語彙帳』である。これはアルシェの『高

水準制定語彙』に対する辞書であり、アカデミックな術語についての辞書である。これは幻字がクミールの手によって判読不能となっているが、幻字の読みと意味は残されていて、アルカ・エ・ソーンの語彙を示す貴重な文献である。『暫定語彙帳』はソーンの使徒の論文とともにメテ家が保管している

2：制アルカ

制アルカの文献は殆どセレンが作成している。その文献量は古アルカと比べると遥かに少ない。制アルカの文献は制アルカそのものに関する言語学的な文献が多く、内容も総じて高度である。これらはセレンが執筆したもので、セレンが保管している。メタ言語は日本語で、マスター原稿は Word による電子文書である

第 8 章：表現法

1：アルカの表現法

この章では制アルカの様々な表現法について述べる。制アルカの表現法は基本的に古アルカのそれを踏襲している。また、古アルカ内でもそういった表現法が確立してから大抵は殆ど変わることがなかった。そのため、制アルカについて述べれば同時に古アルカについても述べたことになる

2－1：モノ的・スル的表現を好む

制アルカはコト的・ナル的表現よりもモノ的・スル的表現を好む。日本語は前者で英語は後者だから、制アルカは英語寄りといえる

日本語は「私のこと好き？」という言い方をするが、母語話者のセレンでさえこの「私のこと」というのはよく意味がわからない。英語の Do you like me?の方がよほどしっくりとくる。母語話者のセレンでさえ首を捻るような言い方があるくらい日本語はコト的・ナル的言語なわけだが、制アルカはまるで逆である

また、日本語はナル的表現を好み、「春になった」「信号が赤になった」など、数え切れないほど「なる」を使っている。それに比べて制アルカはそもそも「なる」にあたる言葉がないくらいナル的ではない言語である

制アルカは前にも述べたとおり、充足理由律を重要視する。「なる」という表現は、変化対象が主語に置かれ、変化させたものは通常現れないが、これは充足理由律を重く見る制アルカには不自然である。何の原因もなく何かに「なる」ことはありえない。「なる」とは

いっても結局は誰かが何かを何かに「変える」のである。従って、制アルカでは「なる」に当たる言葉はなく、「なる」の意味を「変える」が表すことになっている

2－2：名詞表現を好む

モノ的な表現をする以上、名詞的な表現を好むといえる。名詞的な表現を好むのは制アルカにとっては非常に合理的なことだ。というのも、制アルカでは名詞は動詞と違って時相詞が付いたりしないし、形副詞と違って接続詞の介在が要らず、短いからだ
例えば日本語で「待って」というところを制アルカでは名詞で vat と言える。但し、vat-al よりもくだけた感がある

2－3：全体解釈

制アルカは部分解釈よりも全体解釈を好む。傾向的には英語も同じで日本語は逆である。例えば"Do you hear me?"というのを日本語に訳した場合、me を全体解釈のまま「私を聞いていますか？」と訳してはならず、「私の言っていることを聞いていますか？」と訳さねばならない
「私」を全体とすると、「私の言っていること」というのは「私」という全体から出た一部である。こうして全体解釈と部分解釈を区別した場合、英語はわりと全体解釈をし、日本語はわりと部分解釈をする。そして制アルカはどちらかというと全体解釈をする言語である。従って、この例文も制アルカでは"ten-i an?"となる

2－4：短文主義

制アルカは日本語と違い、短文を好む。これは論理的な簡潔さを狙ってのことであり、人が理解しにくい文を書く者は愚かだとされる。尤もセレンは日本語で書くときは短文だと幼稚に見えるので敢えて避けているが、制アルカではだらだらと文を続ける方が遥かに幼稚であるとみなされる

2－5：制アルカは単語的な言語

制アルカは単語的な言語である。単語的な言語とは何を意味するかというと、統語論による情報が少なく、句のまとまりも少なく、語を適当に組み合わせるだけで文ができてしまう言語だということである。更に、このような言語は語と語の慣用的な結びつきも少なく、慣用句そのものも少ない。単語的な言語は学習が容易で辞書の効果が高いという非常に大きな利点がある

ところで、英語も日本語も単語的な言語ではない。誰でも「辞書」という語は dictionary だと知っているが、「辞書を引く」となると途端に分からなくなる。「引く」が consult や see などだとは夢にも思わない。see なんて誰でも知っているのに「引く」に当たるという発想には至らないのだ。see も dictionary も単語としては簡単なのにこれら 2 つが結びつくということはあまり知られていない。つまり単語自体は知っていてもその語に対してどの語が結びつくかということはあまり知らないのである

ある単語がどの単語と慣用的に結びつくかというのをコロケーションというが、英語は単語だけを覚えてもあまり役立たず、たくさんのコロケーションを覚えねばならない。コロケーションを覚えねばならない分、学習が大変になる。このように英語は単語だけを覚えても仕方のない言語なので、単語的な言語ではない。このことに関しては日本語も同じである

それに比べて制アルカは単語的な言語である。klel「辞書」という語を動詞に転換すれば「辞書を引く」という意味が自動的に出てくる。わざわざ klel のコロケーションを覚えなくとも良い。尚、制アルカが単語的な言語であることから以下のような特徴が出てくる

1：コロケーションを覚えなくて済むので学習が容易

dictionary は consult と結び付くなどと覚えなくて済むので記憶に負担がかからない

2：慣用句が少ないので学習が容易

慣用句は様々な語の組み合わせから成るが、単語的な言語である制アルカはそれを好まない。よって、慣用句が少ない分だけ学習が容易である

3：句動詞が少ない分、学習が容易

コロケーションが少ない分、句動詞も少ない。英語では abolish を知っていても実際はあまり使われず、代わりに do away with が多用される。外国人からすれば abolish という単語を覚えた方が簡単で、句動詞にされるとなんだか 3 つも別々に覚えさせられるような気がして非常に覚えづらい。このことは日本人の英語のテストを見ればすぐ分かることだ。日本人は難しい単語より簡単な単語からできた熟語の方ができない。つまり、句動詞の方が難しいのである。その点、制アルカは句動詞が少ないので学習が容易だ

4：統語論による拘束が少ない分、省略も盛んだし、単語さえ知っていれば喋れる

単語的な言語なので、単語が大きな意味を持っていて、統語論的情報はあまり意味を持たない。そのため省略も多い。要するに重要な情報を持った単語だけを言えば良いのだからかなり自由な省略が許されるということだ。また、統語論があまり意味を持たないから統語論を気にしながら喋る必要はなく、単語さえ知っていれば喋ることができる言語だとも言える

日本人が英単語を並べてもちゃんとした英語にはならないが、制アルカでは適当に単語を並べればちゃんとした文になるというのだから、いかに制アルカが単語的な言語かということが分かる

5：辞書の効果が大きい

これは或いは最大の利点かもしれない。異言語学習において辞書は有能なパートナーだが、あいにく辞書は殆ど語の情報でできている。句動詞やコロケーションは語の次である。ということは英語のような非単語的言語では辞書は効果を発揮しにくいということだ。実際、英和辞典だけで英文を作ろうとするとまず間違えるし、そもそも自分の知りたいコロケーションが載っていなくて右往左往することが多い

一方、制アルカは単語的な言語であるから極端な話、辞書を調べて載っている語を羅列していけば問題なく文が作れるのである。制アルカにおいて重要なのは語がどのような格詞をどのような意味で取るかという単語情報であってコロケーション情報ではない。辞書は基本的に単語情報がメインだから、単語的な言語である制アルカの辞書は英語の辞書より効果が大きく使いやすいといえる

2－6：単語で話す制アルカ

以上から分かるように、制アルカは連語よりも単語を重視する。そのため、単語だけで会話することも盛んである。日本語や英語ではぞんざいな言い方だと嫌われるが、それで意思が疎通できるならこの上なく便利ではないか。制アルカは合理性を好むので、迷うことなく単語だけで会話するし、そのような言い方がとりわけぞんざいだとされることもない。尤も、省略が多い分、丁寧ではないとされるため、セレンがリーザに日常的にそのような言い方で接することは許されない

3－1：文体論――口語体と文語体

言語は変化するものである。日々の変化は微々たるものであっても、何年も月日を重ねるうちにその変化は大きなものとなる。しかし、言語が変化しやすいのは文語よりも圧倒的に口語である。口語は文語に比べて速い速度で変化していく。その結果、文語はより古い形を残すことになる

古アルカはおよそ 10 年で滅んだが、その間に生じた文語と口語のズレは基本的に幻字に関わると自然言語由来の語の有無でしかなかった。後者は口語に存在する自然言語由来の語が対応する幻字がないために文語に現れなかったというものである

つまり、いくら高速で人為的に進化させた言語とはいえ、流石に文語と口語が大きく食い違うほどには変わらなかったということである。もっとも、幻字を原因とする変化だけでも影響力はそこそこ大きく、古アルカの文語と口語は事実上異なっていたが、幻字の問題を切り離すと口語と文語の間に大した差は生まれなかったといって良いだろう

ある程度の長さを持った古アルカでさえこうなのだから、生まれたての制アルカに文語と口語の差が生じるはずはない。強いて言うなら文章の方が口頭より改まるため、省略が

減ったり、倒置による強調が減少したり、モダリティが排除されて客観的な文章にされたりするぐらいであろう

3－2：常体と敬体――敬語・丁寧語について

日本語は日本人も操れないような難しい敬語のシステムを持つが、制アルカは英語と同じように、いや或いはそれ以上に敬語のシステムがない。英語は Would you like や sir などの言葉を使って相手に敬意を払うことができる。しかし、制アルカは英語より敬意を表す表現が少ない。そういう言い方がないわけではないが、あまり使われない

敬意を表す表現が少ないのは古アルカも同じで、その原因はアシェットの構成員である。アシェットのメンバーは年齢の近い者が多いし、文化によっては年齢差を気にしないところもある。だからルシーラとハルマという上下関係があるにせよ、セレンが上下関係を嫌ったため、実際はあまり上下関係なく付き合ってきた。それで敬語表現が少ないのである

古アルカには敬意を表すエクスプローダーがあったが、それもあまり使われなかった。唯一使われていたのは丁寧さを表す「ータ」「ーノ」だけであった。これらは直前の母音を伸ばした後に男性形なら「タ」、女性形なら「ノ」を付けるというもので、リュウやミルフが好んで使った。尊敬を表すエクスプローダーが使われなくなると、次第にこの丁寧を表すものが尊敬をも表すようになり、セレンもリーザに向かってこのエクスプローダーだけを使うようになった。因みにこのエクスプローダーの存在は古アルカが音韻論的に長母音を認めていた証拠であろう

しかし制アルカはこの丁寧を表すエクスプローダーさえも失ったため、敬意を表す表現は更に減ってしまった。尤も、もし敬意を表す表現が必要なら今後制アルカの使用者が生み出していくであろう。セレンはその言語行動を観察したり指導したりするだろうが、飽くまで言語の成長には柔軟で寛容な姿勢で構えるつもりである。みんなが敬意を表す言い方が必要とすれば作るし、みんなが自主的に作っても特に問題なければそれはそれで良い

3－3：丁寧な物言いについて

制アルカでも丁寧な言い方が十分できる。丁寧な言い方とは情報がふつうより細かくて相手に分かりやすい言い方のことである。日本語では丁寧な言い方は敬意と密接に結びついているが、制アルカでは敬意よりも論理性と結びついている

一般に、丁寧さが増すと合理性が減って論理性が増える。具体的に言うと以下の要因によって丁寧さは増していく

1：省略をできるだけせず、文意を明確にする
2：意味時相詞に頼らず純詞を使い、テンスとアスペクトを明確にする

3：代名詞は極力避け、固有名詞を使う。敬称を付けるべき相手には付け、愛称は避ける
4：客観・主観的客観・主観を明確に区別する
　更に、発話においてはやや高めの声で穏やかに話すことが必要とされる
例：seren se-i os tie kmiir rsiila ket-o or os tun.（セレンには月司クミールがいらっしゃるかどうか判りかねます）

4－1：日付の表現

　知っての通り、制アルカはグレゴリオ暦を標準で使わない。ラルクの正式な暦はメル暦である。従って日付もメル暦で書かれる。但し、グレゴリオ暦で書くこともできる
　まず、メル暦について。メル暦は月と日が使徒の名で読み書きされる。年号は数字で読み書きされる。曜日は曜魔の名を使うが、曜日を書くかどうかは随意である。よって、たとえば 2002・12・20 はメル暦では mel kova,dia,din と書く
　一方、グレゴリオ暦はキリストから取った cam という名で呼ばれ、西暦の代表を務める。グレゴリオ暦では月日の年も数字で読み書きされる。よって 2002・12・20 は cam 2002,12,20 と書く。尚、読み方は cam tasota sic kotala sec tanala である
　メル暦の月日を数字で読んではいけない。というのも、年を省略した場合、互いに数字だとどちらの暦か分からない。更によしんば年が省略されなかったとしてもメル 2000 年ぐらいの話をしたとき、西暦と区別が付かなくなってしまうからだ。当然、逆も然りである

4－2：使徒番号早見表

　メル暦では月にも日にも使徒の名を使う。月は 13 月まであるので使徒番号に従ってリディア・オヴィ…と進んでいけば良い。同様に日は 28 日まであるのでこれも使徒番号に従ってリディア・オヴィに始まり、クノン・クミールに終われば良い。以下に使徒番号と使徒の名を示した表を掲げる。尚、ここで使われる使徒の名は使徒の名の略称である。略称は表の後ろに付しておく

アルシェ	:	ソーン
01：リディア	: 15	ラヴァ
02：オヴィ	: 16	ウムトナ
03：クリス	: 17	リーネ
04：ギル	: 18	レレゾナ
05：フルミネア	: 19	ジール
06：リュウ	: 20	リナ

07：メル　　：21　エケトネ
08：ラルドゥラ　　：22　エンナ
09：ザナ　　：23　アッシュ
10：パール　　：24　ネーネ
11：ミルフ　　：25　ピネナ
12：ファーヴァ　　：26　ンムト
13：ルージュ　　：27　クノン
14：セレン　　：28　クミール

01：dia
02：vii
03：lis
04：gil
05：ful
06：dyu
07：mel
08：ral
09：zan
10：pal
11：mik
12：fav
13：ruj
14：ser
15：rav
16：tan
17：kil
18：rez
19：jil
20：din
21：ket
22：len
23：lax
24：nee
25：pin
26：mat
27：kun

28：mir

4－3：曜日の表現

もともとラルクが古アルカで使っていた暦は今のメル暦の原型(旧メル暦)となるもので、曜日の感覚がなかった。そのため曜日というと敵性概念でしかなかった。更に 7 はラルクにとって忌数なので、殊更であった

そこで、曜日を表す際に蔑みを込めて 7 匹の悪魔ソームと呼ばれる『幻想話集アティーリ』上のテームスの名をそれぞれ冠した。それがラルクの曜日の言い方の起源である。7 匹の悪魔とは勿論忌数の 7 から取ったもので、代表的なテームスたちである

後にソームはセレンが曜魔(曜獣)と名付けた。曜獣とも呼んだのは曜魔は妖魔と間違えやすいからである。また、曜魔の多くが v の音を含んでいるのはアルカ・エ・アルシェからアルカ・エ・ソーンに入った悪魔の名の語形が多いためである

曜魔はそれぞれラルクの 7 大属性に沿った特徴的な力を持っている。7 大属性とは具体的にいうと闇・水・風・土・火・雷・光のことである。よく観察すると陰から陽の概念へ向かっているのがわかる。一番暗いのは闇であり、そこから一番明るい光に向かって徐々に陽に傾いているということだ。例えば火は燃えて明るいが雷ほど明るくないので雷ほど陽ではない。しかし土よりは熱いし明るいので土よりは陽であるというように

曜魔はこれらの属性を自在に操る強大なテームスのことである。例えば悪魔ベーゼルは火を操るので火の曜魔となる。以下、闇から順に挙げていく

闇：velm：悪魔ヴェルム
水：erva：悪魔エルヴァ
風：satii：悪魔サティ
土：teeve：悪魔テーヴェ
火：beezel：悪魔ベーゼル
雷：ilva：悪魔イルヴァ
光：part：悪魔パルト

古アルカではこうして七曜を定めていたが、旧メル暦にもこれを適応させようとすると 1 年でズレが生じてしまう。例えばあるときは闇の曜日が水曜でも、別のときは闇の曜日が木曜だということがあるからだ。これは Wednesday があるときは火曜になったり木曜になったりすると同じで、そう考えればどれだけ異様かがわかるだろう

というわけでこれは旧メル暦には使われなかった。しかし、後にグレゴリオ暦の七曜が数字を伴った中国語的な言い方をされるようになると、曜魔が逆に使われなくなってきた。反対に、旧メル暦には日を 7 毎に区切ったカレンダーでいうところの縦の 1 列の呼び方がなかったため、だんだん曜魔は旧メル暦に使われるようになっていった

そして現在では曜魔は制アルカにおいてメル暦の曜日を表す。メル暦は 1988/11/30 が第

1 日目であり、ここが元旦である。よってこの日が闇の曜日である
　ところで、制アルカで七曜は何というか。これは従来通り第～曜日と呼べば良い。では第 1 曜日といえば何曜日のことだろうか。実はこれは水曜である。というのもメル暦の始めの日は 1988/11/30 で、この日が水曜だったためである。数字を伴った言い方はグレゴリオ暦だけに使われていたということを考えると、いかにグレゴリオ暦で日付を数えていても飽くまでその根底では旧メル暦が意識されていたということがわかる

　さて、以上をまとめると、以下のようになる
メル暦：曜魔の名で曜日を表す
グレゴリオ暦：水曜を第 1 曜とし、数字で数える
　尚、曜日は日付の後ろに括弧を伴って付ける。よって 2002/12/20(Fri)を制アルカのグレゴリオ暦にすると cam 2002,12,20(3)となる。読みは cam 2002 sic 12la sec 20la cat 3la である。また、それをメル暦に直したものは mel 14,dia,din(beezel)である

4－4：時刻の表現

　時刻は 24 時間・60 分・60 秒法である。時・分・秒の順で並べる
　ふつうは 24 時間法だが、12 時間法で述べることもできる。12 時間法の場合、0～12 時を前半と捉え、sa を付ける。一方、12～24 を後半と捉え、si を付けて表す。よって、fea kote=fea ki e si である。尚、時分秒はコロンで区切って表す
　ところで、時刻は数字の部分が序数になる。そうでないと「1 時」と「1 時間」の区別ができないからだ。そんな区別は im と du で区別できると思うかもしれないがそれは早計だ。実際セレンもそれで失敗した。im と du で使い分けるとすると、たとえば「12 時過ぎ」というのはどう表わせば良いか？rak を使わざるを得ないが、rak fea kota では「12 時を過ぎて」なのか「12 時間が経過して」なのかが分からないではないか。そこで、時刻を格詞で区別するのは却下し、時刻自体に弁別性を与えた
例：18:04:30 は fea komela fei vala feo vinala 或いは fea kila fei vala feo vinala e si と読む
　尤も、これは正式な言い方であり、実際はもう少し簡略化して言う。たとえば fea komela, vala, vinla のように。更に、時刻だと文脈から分かれば fea kome, va, vin でも良い

4－5：数学表現

　数式の読み方はおよそ 2 通りに分けられる。1 つは数式の記号にそれぞれ名前を当てて、それらを粒読みに読み上げていく方式。もう 1 つは数式を日常言語に近い形で読み上げていく方式。どちらかというと日本語は前者であり、英語は後者である。例えば A≧B は日本語では「A 大なりイコール B」と読み、そのままでは日本語としておかしな文である。それ

に比べて英語は”A is greater than or equal to B”である。これは「A は B より大きいかもしくは等しい」と訳せ、そのまま文としておかしくない。日本語の数式の読み方は記号の粒読みであり、日常的な日本語の文ではない。それに比べると英語は遥かに日常的に使われる文の形を保っている

　そして制アルカはどちらの方式を取るかというと、日本語の方式を取る。記号 1 つ 1 つに名前があり、その上でただその名を当てはめるほうが学習者にとっては学びやすいし、実用する際にも早く言えるので便利だからだ。英語のやり方は非常に冗長で使いづらい

　以下では数学に使用する記号や数学用語を挙げる

数：制アルカの数字読みで良い。即ち 1 は ko。以下に数を挙げる

1=ko

2=ta

3=vi

4=va

5=le

6=ki

7=no

8=te

9=lo

0=na：10=kona

00=so：100=koso

000=ke：1000=koke

0 単独＝u：0=u

正の数：加算の＋と同じ記号を使うが読みは異なる。正号は pok

負の数：減算の－と同じ記号を使うが読みは異なる。正号は pek

＋：加算を示す。読みは fak または a

－：減算を示す。読みは fik または i

×：積算を示す。読みは fok または o

累乗、べき乗：sefok

乗数＝haalx

被乗数＝hialx

累乗の読み方：「被乗数＋ha＋乗数」である。例えば「2 の 3 乗」は ta ha vi で、「10 の 32 乗」は kona ha vita である。また、マイナスの乗数は「被乗数＋ha＋pek＋乗数」である。従って、2 のマイナス 4 乗は ta ha pek va である

累乗根、ルート：sefokmom、mom

ルートの読み方：累乗根の左肩は無標で 2 である。また n ルート x は nla mom x である。

左肩は序数である。したがってルート 4 は mom va であり、3 ルート 4 は vila mom va である。また、「2 かけるルート 4」のことを日本語では「2 ルート 4」と言ったりもするが、これでは 2 がルートの左肩なのか分からない。制アルカでは左肩は序数であり、そうでなければ基数である。従って、「2 かけるルート 4」は ta mom va である。「3 ルート 4」の 3 がルートの左肩であることはそうでないことより日常的にありえやすい。だから 3 を左肩として読む方が序数となって読みが長くなっているのである

÷：除算を示す。読みは fek または e

商：kep

余り：soj

（：括弧の始点を示す。読みは ti

）：括弧の終点を示す。読みは tun

，：(a,b)などの表記に使われる。読みは tsan

．：小数点の表記に使われる。読みは int

＝：等号を示す。読みは kak

≒：ニアイコール。読みは kik

≠：ノットイコール。読みは kok

＞：大なりを示す不等号。読みは vas

＜：小なりを示す不等号。読みは vos

≧：その数を含む大なり。読みは kavvas((イコールを)含んだ「大なり」)

≦：その数を含む小なり。読みは kavvos((イコールを)含んだ「小なり」)

≡：合同。読みは kakmo

∽：相似。読みは kikmo

⊥：垂直。読みは has

//：平行。読みは ekn

∴：故に。読みは tir

分数＝telt

分数に使われる横棒「/」＝「～分の～」＝un

分数の読み方：「分母 un 分子」で日本語と同じ読み方である。例えば 1/2 は ta un ko で、23/47(yondjuunanabunnonijuusan)は vano un tavi

分子＝folt

分母＝felt

仮分数＝tastelt

帯分数＝tistelt

帯分数の読み方：「基数＋an＋分数」である。例えば 3 と 2 分の 1 は vi an ta un ko

比の読み方：比は「：」で表わす。読みは al。「2:3=4:6」は ta al vi kak va al ki と読む

変数：変数 x や y はそのまま x や y という外来文字の読みを当てて良い。即ち x+y はアル

ファベットの読みを使って eks a wai と読む
関数＝fran
f(x)：ファンクション x のこと。関数は fran なので、fran eks と読む。ｆを ef と読まないのは単なるｆ×ｘと区別するためである
∞：無限。読みは xiz
百分率・パーセント：oksgal,oks。99.9%は lolo int lo oks
千分率・パーミル：okstol
筆算＝axtzep
暗算＝oszep
検算＝sainzep

ここでは制アルカの非言語コミュニケーションについて取り上げる。また、オノマトペもここで扱う。本来はオノマトペを非言語に入れるべきではないが、オノマトペは言語の中でもとりわけ叫びなどの声といった言語でないものに近いという性質を持つため、準言語として非言語の項で説明する

第 9 章：非言語

1：広義のボディランゲージ

ここではふつうボディランゲージと呼ばれているものだけでなく、定型的な仕草や儀礼的な仕草も含めて考える。仏壇での手合わせも高貴な女性が口に手を当てて笑うのも広義のボディランゲージとして捉えるので注意すること

2：ボディランゲージは古アルカから受け継いだ

ラルクのボディランゲージは殆ど全て古アルカから受け継いだものである。古アルカのボディランゲージは初期～後期のはじめにかけて数や種類が極めて多く、しかも同じ仕草でも人によって意味が違うというひどい有様だった。そこでセレンはリディア・メル・リュウ・オヴィ・クリス・ギル・フルミネアと協力してボディランゲージの統一と整理を行った。メル 9 年のことである
この整理統一では数多あったボディランゲージの中から自然言語に依拠しないアルカ独特のものが選ばれ、他は排除された。また、同じ仕草でも意味の違うボディランゲージも 1 つの意味に統一された。ここでいうアルカ独特とは具体的にいえば幻字をモチーフにしたボディランゲージである。たとえば、トイレに行きたいときのジェスチャーは元々トイレ

を指す語だったものだ

3：ボディランゲージになった幻字

　メル 9 年の整理統合によって自然言語やリルクの文化を元とするボディランゲージは極力排他されていった。一方、古アルカの幻字を元とするものは殆ど残った。古アルカの幻字は漢字のような絵文字だったし、漢字と違って曲線と直線が区別されたため少ない画数でも表現が多彩だった。画数が少なくて字形が単純なため、手や体の動きで幻字を示すことが容易だった
　幻字をボディランゲージで表すのを初めて行ったのはリディアだと思われる。セレンの一番古い記憶ではメル 3 年にリディアが何かの折に「私が？それとも貴方が？」という意味で non と dyussou の幻字を遠巻きに手で描いて見せたのが最初だ。リディアは自分向きに描いたのでセレンとしては鏡文字を見ている気分だったが、non も dyussou も左右対称になるペアがないので意味が理解できた。しかし当のリディアはこのことを忘れているそうで、結局幻字の最初のボディランゲージ化がいつかはわからない
　いずれにせよ、古アルカはこのように幻字を次々とボディランゲージ化していったので、非常に古アルカのボディランゲージはラルク的である。制アルカは古アルカからボディランゲージを踏襲するので、制アルカのボディランゲージも非常にラルク的であるといえる

4：ボディランゲージとポライトネス

　ボディランゲージはそれぞれにポライトネスがある。ここでのポライトネスは丁寧であることだけでなく、公的であること、地位が高いことなども表すので注意すること
　ボディランゲージごとにポライトネスが異なるというのは日本でも同じである。例えば親指を立てるのは good という意味だが、これはポライトネスが低い。従って公の場では使えないし、偉い人の前でも使えないし、女性も使いづらい。中国ではこれは日本ほどポライトネスが低くないので女性もよく使う。セレンは初めて見たとき少し驚いたが、このことはボディランゲージのポライトネスが文化によって違うということを意味する
　一般にボディランゲージはポライトネスが低く、公の場や改まった場では使いにくい。しかし中にはポライトネスが高いものもある。女性が口に手を当てて笑うのはポライトネスが高いし、葬式で手を合わせるのもポライトネスが高く、むしろしなければ無礼になる
　制アルカも同じ状況だ。儀礼的に使われるものはポライトネスが高く、そうすることを要求される。反面、ふつうのボディランゲージはポライトネスが低く、くだけた場面で使用される

5：動きの少ないラルク

アメリカ人と日本人を比べていると、アメリカ人の方がボディランゲージが多い。日本人はあまり会話中に動きを見せない。これに対してセレンはその理由を 2 つ挙げている。1 つはアメリカ文化では主張することが日本より圧倒的に重要だから、自分を目立たせるために身振りが大きいということ。もう 1 つは英語は強弱アクセントだから言語自体がリズミカルであるため、リズムを上手く取るために身振りが必要だということである。日本語は高低アクセントだから淡々としゃべることができ、リズムを取るための身振りが要らないし、主張も好まれない文化なので目立つための身振りをする必要がない。それで日本人はボディランゲージが少なく、アメリカ人は多いのだろうとセレンは考えるわけである

その是非はともかく、ラルクは日本と同じくボディランゲージを多用しない。ラルクでは何より言葉でコミュニケーションを取るべきと考えられているので、ボディランゲージなどを使った感覚的な表現より、言葉だけで出来た理性的な表現を好むからである。また、高低アクセントなのでリズムを刻むために体を揺らす必要もないからである

このように、制アルカはボディランゲージが少なく、動きの少ない言語であるといえる。言い換えれば言語そのものに依存した言語であるともいえる。尚、このようなコミュニケーションに日頃から慣らせておけば、電話や映像がない場合のアンシャンテにおいて意思が通じやすいという利点がある

第 10 章：位相

1：概要

この項目はこれから長い時間をかけて発達していくものである。生まれて日が浅い制アルカの位相は研究するまでもないほど小さなものである。どうしても位相を探したければそれは使徒の数だけあると言わざるを得ない。だが所詮それは使徒の母語が制アルカに干渉したせいで発生した位相なので、純粋に制アルカの位相とはいえない

2：方言位相

今のところない。どうしてもあると言いたければ方言は使徒の数だけ存在するといえる。だがそれは方言と呼ぶべきものでなく、ただの学習者の拙い制アルカである。そんなものを一々方言と数えていたらセレンの下手な英語でだってセレン方言の英語として数えねばならない

使徒の現在の学習段階を考慮したところ、セレンの制アルカが唯一の正式であり、それから逸脱するものは全て誤用であって方言ではないと言わざるを得ない。現在の制アルカ

に方言があるというのはセレンの英語を１つの方言と呼ぶのと同じくらい愚かである

3：上下位相

　ラルクは日本ほど上下関係を意識しない。以前リディアが、日本語は友達と喋る場合と先生と喋る場合では全然別の言語に聞こえると驚いていたことがある。彼女に言わせれば、瞬時に人間関係を判断して言葉遣いをスイッチするのは英語をいきなり日本語に変えるのと同じくらい難しく、そういう意味では日本人はバイリンガルだそうだ
　制アルカは日本語と違って、相手が先生だから言葉遣いを変えるということは特に見られない。上の者には敬意を表すものの、言葉遣いは多少丁寧に変わる程度だ

4：年齢位相

　ラルクは日本や韓国ほどには年齢差を意識しない。一般的に年下が年上を敬うことはあるが、言葉遣いは特に変わらない。多少丁寧になる程度である

5：男女位相

　制アルカは女言葉・男言葉というものが殆どない。古アルカにはあったが、時代を経るごとに消えていき、最終的には殆どなくなっていた。そこで制アルカにも男女位相は殆どないのである
　因みに、古アルカで男女位相が廃れたのは論理性を優先させたためである。命題を効率良く伝えるにはモダリティは邪魔だという思想が優勢になり、その一環として男女位相も廃れていったのである
　男女位相はわずかに「ユンク語」という妙齢の美少女だけが使う語や「ユナ語」という可愛い幼女だけが使う語に残っているだけである。尤も、ユンク・ユナも性別というよりは外見や中身を基準にしたものだから、男女位相と呼ぶべきではないのかもしれない
　ところで、そもそも男女は様々な面で違いがあるため、何年かするうちに女子だけが好む言葉や男子だけが好む言葉が出てくると思う。現に alul という語は男子はあまり使いたがらない。だから、いつかはそういう風に自然と女言葉・男言葉が発生するかもしれない。しかし今のところは位相差がないといって良いだろう

第 11 章：声

1：明瞭な発音

セレンはアシェットの何人かに「日本人は口を動かさずによく喋れるね」といわれたことがある。異言語と比べると日本語は確かに口を動かさない言語である。リディアやメルはそのことで随分聞き取りに苦労してきたそうだ。本人に何度も言われたが、彼女たちにとって日本語の 5 つの母音を聞き分けるのはたびたび難しかったそうだ

セレンは日本語は英語などに比べて聞き取りが簡単だという先入観があったため、彼女たちの言い分は非常に不可解だった。だが、言われてみればたとえ母音の種類が少なかろうと、発音が明瞭でなければ確かに聞き取りは難しいといえるかもしれない

ところで、発音が明瞭でなければ聞き違いが生じるのではないかという心配がある。確かに日本語でしばしば聞き違いは起こるが、コミュニケーションができなくなるほどではない。発音が明瞭でないのに意思疎通ができるのは、日本語の単語がある程度の長さを持っているからである。例えば「蚊」のような短い語は発音が少しでも曖昧なら聞き違いやすく、すぐに「蛾」などと間違えられてしまう。しかし「インターナショナル」というような長い語なら仮に誤って「インダーナジョナル」と発音してもまず通じてしまう。通じるのは「インダーナジョナル」などという音形の語はないし、それに似た音形の語は「インターナショナル」くらいしか見当たらないためである

つまり、語の音形が長くて他の語との差異が明瞭である場合には発音が多少不明瞭でも通じてしまうということである。同時に、音形が短い語は発音が不明瞭だと聞き違いが生じやすいということである

さて、それを踏まえて制アルカについて考えてみよう。制アルカは英語や日本語と比べると、一般に音形の短い語が多い。内容語は勿論のこと、機能語も短いものが多い。従って、制アルカは発音が不明瞭だと聞き違いが起きやすい言語だといえる。当然のことながら制アルカは聞き違いを防ごうとするので自然と発音を明瞭にしようとする動きが起こる

制アルカを話すときは、日本語や英語を話すときよりも個々の発音を大事にしなければならない。これは一見面倒くさいことにみえるが、全体としての発音量は英語や日本語より少ないので労力は等しいといえよう

更に別の利点として、このことは制アルカの聞こえを美しいものにしているともいえる。個々の発音が明瞭であるということは、ぶつぶつ言っていたり声がくぐもっていてよくわからないということがなく、ハキハキと聞こえるということである。この点で日本語と制アルカは異なる。更に、英語のように弱い音節が曖昧で省略されたりボソボソ発音されたりしないという点で制アルカはハッキリと安定したイメージをかもしだしている

2－1：制アルカの速度

ここでは制アルカを喋る速さについて述べる。日本人が英語を聞くと日本語より速くて何を言っているのかよくわからないという印象を受けると思われる。英語は強拍から次の

強拍までの時間が等時的であるから、強拍間に単語がたくさんあればそれだけその部分は速く発音しなければならないからである。英語のこの性質は強弱アクセントによって成り立っている。しかし制アルカは高低アクセントなのでどこかで急に速くなったりすることはなく、穏やかに淡々と進んでいく

また、別の観点から速度を述べる。日本の歌謡曲や TV を聴いていると分かることだが、数年或いは数十年の間に日本語の速度が増しているのである。速度が増しているとはつまり 1 分間あたりに発音している音の数が増えているということである。歌謡曲はテンポが速くなり、歌詞も早口で歌うようになった。ニュースキャスターの喋る速さも速くなった

さて、いうまでもないが発話の速度を上げていくとそのぶん聞き取りはしづらくなってくる。勿論、遅すぎても問題だが、あまりに速いと耳を済ましても聞き取れなくなってしまう。だから我々はあまり速くなりすぎないように話しているのであるが、それでも昔に比べて日本語のスピードは上がってきているのである

さて、日本語には日本語のスピードがあるように、英語にも英語のスピードがある。そもそも言語はその言語なりのスピードを持っているのである。当然、制アルカも制アルカのスピードを持っているということになる

では、制アルカのスピードは異言語と比べてどうだろうか。アシェットに所属する者は制アルカ発生の時点ではまだ20歳前後の若者ばかりだったからきっと速いスピードで話すと思うことだろう。だが、それは誤りである。日本語と比べると制アルカの速度は遅いのである。これは前段の内容と関係する。制アルカの語の多くは声調言語を除く他の自然言語より語形が短いので、発音を明瞭にしないと聞き違いが生じやすい。そのため、どうしても発音を明瞭にする必要があるとは既に述べた。これと同じく、話すスピードが速いと相手が聞き取れずに聞き違いが生じてしまうという問題がある。その問題を回避するために、制アルカのスピードは遅いのである

従って、制アルカは発音が明瞭で、あまり早口でない言語だといえる。が、勿論これは全うされるとは限らない。今のところはそうなっているが、制アルカに対する皆の慣れがスピードを変えないとは限らないからだ

2－2：速度と印象

制アルカは日本語や英語などと比べるとやや喋る速度が遅い言語だと述べたが、何も速い速度で喋るのが許されない言語ではない。速く話すこともできるし、遅く話すことも勿論可能である。ただ、そうした速度変化がコミュニケーションにおいて何を意味するのか、、また、相手はその態度をどのように受け取るのかという点で違いが生じるのである。換言すれば、喋る速度を変化させることで相手にどんな印象を与えうるかということである

1：速く話した場合

・急いでいる
・怒っている
・軽い性格だ
・明るい
・面白い
・くだけた場面である
・頭の回転が速い

2：遅く話した場合
・慎重である
・重要なポイントを話している
・冷静に怒っている
・慎重で冷静な性格だ
・暗い
・つまらない
・柔軟でない
・かたい場面である
・愚鈍である

ここであげた以外にも様々な印象がありえるが、とりあえず思いつくままに列挙した。列挙したものに中には好印象のものも悪印象のものもあり、速いから良いとか遅いから悪いと一丸に言えるものではないことが表れている

3－1：制アルカの発声法

日本人が仮にプロソディを完璧にして英語を話したとしてもどうも英語に聞こえないということがある。聞いていると発音も抑揚も良いのに、何だか英語母語話者とは違うという不思議な感覚だ。実はこれ、英語の発声法と日本語の発声法が異なることが原因である場合がある

日本語は胸式呼吸を使って発声を行っている。セレンの個人的な感覚で言わせてもらうと、胸式で発生された声は何というか乾いていて軽く、浅い感じを受ける。それに対して英語は腹式呼吸を使って発声を行っている。腹式で発声された声は悪く言えばくぐもってこもって湿ったような印象を受けるし、良く言えば重くて深い音だと感じる

英語が腹式で発声するのは英語のプロソディと深く関わっている。英語は強拍から強拍までの時間が等時的で、その間に弱拍がくる。言い換えればそれは強弱リズムがあるということである。そして、リズムを刻むには胸式呼吸よりも腹式呼吸の方が都合が良い。こ

れは実験すればすぐにわかることだ

腹に手を当てて膨らまないようにチェックしながら、胸式呼吸を続ける。その状態で短くない英語を喋ってみる。すると、喋り始めの頃は息に余裕があるが、暫くすると苦しくなって続かなくなるだろう。ここで苦しくならなかった人、別のチェックをしてみよう。もう一度腹に手を当ててある程度長い英文を言ってみる。すると腹筋が一定のリズムを刻みながら大きく動いているのがわかるだろう。今度はある程度長い日本語文を同じように言って見ると良い。今度は腹筋がそんなにリズムを刻んで震えないはずだ。尤も、これは英語を日本語感覚で話すしかできない人にはできない実験だが、英語ができる人はこの実験で「なるほど」と思ったことだろう

英語のリズムを刻んで発話していくとどうしても腹筋も一定のリズムを刻んで震える。このリズムが英語のリズムを作っているわけである。では、胸式で同じくリズムを刻めるかというと不可能だ。そもそも腹筋というものは息をハッと吐いた後、自動的かつ無意識に空気を吸ってくれる便利なものである。従って、腹筋がリズムを刻むたびに発話に必要な空気が補填されていくのである

一方、胸式呼吸には空気を補填する能力がなく、息を吐くと吸うときに「ハッ」という雑音がでてしまう上に息切れを起こす。だから胸式で英語を話そうとすると息切れして続かないのである

蛇足だが、歌というものは腹式呼吸で歌うものである。胸式で歌うのは素人である。だから息漏れが聞こえる歌手は下手だといわれるのである。もっとも、息漏れを喘ぎというスパイスとして使う歌手もいるが、それは意図的にそういう手法を取っているだけである

さて、以上のことを踏まえると、強弱アクセントでリズムを刻んでいく言語は生体の構造上、どうしても腹式呼吸になりがちである。逆に、その必要がなく淡々と安定した声を出す高低アクセントは胸式が便利である。実際に、高低アクセントである日本語は胸式で発声されている

注)ここでは呼吸を胸式・腹式と 2 分しているが、実際は胸式だからといって全く腹が動かないということはないし、まして腹式だからといって肺に空気がないなどということは絶対にありえない

3－2：胸式発声法と短文主義

ここまで読めばおのずと判るだろうが、制アルカはアクセント体系から自然と胸式呼吸の発声法を使うということがいえる

胸式呼吸のデメリットの 1 つに、息切れによって文の初めは強く聞こえるが、文が続くにしたがってどんどん発声が弱くなってしまい、文末が特に聞き取りづらいということがある。制アルカは重要な語ほど文頭に来るから良いが、日本語は否定文であることを特徴

付ける「ない」が文末の方に来るので、しばしば否定文を肯定文と聞き間違えられる。これを書いている今日もセレンは否定文を肯定文と聞き間違えられたばかりである

胸式呼吸は息切れしやすいので、途中にポーズをおいて空気を取り入れる必要がある。談話の中で尤も顕著なポーズは文と文の切れ目である。従って、1 文あたりの単語量が少なければ少ないほど空気補填がしやすいということになる。空気補填がしやすいということはそれだけ文末が聞き間違えられにくいということである

ここに制アルカの短文主義が関連してくる。制アルカは短文主義を掲げ、1 文は短い方が良いと考える。そのため日本語に比べて 1 文の長さが短く、空気補填のチャンスが多い。従って、文末が聞き取られにくくなっているのである

3－3：女の子の声

声の高さに関して非常に面白い日米の文化差がある。セレンがこれに初めて気付いたのは女の子の声の違いだった。実は、日本を始めとする主にアジア系の言語では、女の子は丁寧な場面になると声を高くし、男に良く見せようとするときも子供のように声を高くするという傾向がある。その一方で、主に西洋の言語ではこれと逆の現象が起き、丁寧な場面では声を低くし、男に良く見せようとするときも落ち着いた低い声を出すという傾向がある。どうやらその文化で女性が求められる性質と声の高さには関連があり、更にそれは文化によって異なるということがいえるようである

日本人のセレンからしても、教養が高く美しい女性はどちらかというと高い声で話す方が聞いていてしっくりくる。低すぎる声の女は美しく聞こえない。逆に高すぎる声は行儀の悪さと頭の悪さを連想させ、これも不快である。要するに、高すぎても低すぎても悪く、やや高い方が女らしく聞こえるとセレンは感じているわけであり、恐らく多くの日本人もそう感じているのではないだろうか。そして何よりそのことは女の方が良く自覚しているだろう。普段の声はそれほど高くないのに電話に出て改まると多くの女は急に声が高くなるということからもそれは明らかである

セレンが女の子の声の違いに気付いたのは中学生のときである。リディアは声が高いので他の仲間と付き合うようになったから気付いたのだが、アルシェの女の子の一部は丁寧に話すときに声が低くなっていた。その態度がセレンには威圧的に見えていたのだが、それはとんだ誤解だった。一方、セレンの中学校の日本人少女らは教師と話すときなど、丁寧に話すときには声を高くしていたのである

要するに「良家のお嬢様で素行も口調も丁寧な少女」に期待されている声の高さというのが日本語と英語では文化的に違うのである

ところで、制アルカではどちらかというと女性は高い声の方が好まれる。高すぎるのは悪いが、ある程度高い方が可愛げがあって女らしいという印象をラルクは持っているのである。もっとも、ラルクから見れば日本人の声は高すぎであるため、日本人の女の子では少し声が低めというのがもっとも好ましい声の高さといえる

3－4：声と印象

人間の声は個々人で高さが異なるし、それによって受ける印象も違う。しかも受ける印象というのは人類にとって普遍のものもあればそうでないものもある。つまり、ラルクにもラルクなりの声の印象というのがあるのである
ラルクでは男女関わらず高くて穏やかで優しい声が好まれる。低い声は凶暴性や粗雑さの現われとして嫌われる傾向がある。これは誰かと話すときも同じである。低い声は相手を威圧しているようで嫌われる。以下に場面と声の変化を列挙する

1：丁寧さが増すほど声は高く穏やかになる
2：くだけた場面では高くて軽やかで、悪く言えば軽薄な声になる
3：怒るときは高くうるさくなる
4：冷ややかに怒るときは低くなる
5：脅すときは低く、ドスをきかせる
6：感謝するときは高くし、抑揚を付けて話す
7：謝罪するときは高くし、抑揚を付けずに静かに話す
8：弁解するときは高く穏やかに話し、説得的である雰囲気を出す
9：説得するときは高く穏やかに、また、場面によっては抑揚をつけて激しく話す
10：慰めるときは子供をあやすように高く話す
11：激励するときは勢い良く元気に高く話す

などなど、例を挙げれば切がないが、いずれにせよ様々な場面で低い声より高い声の方が用いられるということは観測できるだろう

第 12 章：アルティス

1：概要

本章ではまずアルティスについて述べ、その後でアルティスやラルクの中でもとりわけ制アルカに関与することを取り上げて説明する。大小合わせて挙げていくといくら書いて

も切がないのである程度セレンが必要と思ったものだけを挙げる

2－1：アルティス概説総論

　アルティスとはアシェットが唯一認める宗教のことである。アルティス教徒はヴァルテと呼ばれる。アルティスは『幻想話集アティーリ』に登場するアルテと呼ばれる神々、テームスと呼ばれる悪魔、そして世界を流れるヴィードと呼ばれるエネルギーの中のアルマを信仰対象とする宗教である。信者は自分の中に秘められた僅かな魔力を言葉として体外に出し、それをアルテなどが受け取ることによって彼らの協力を得ることを目的とする。体外に出た魔力は魔晄アレフとなるが、アレフはアルテやテームスのエネルギー源である。アルテは様々な者がいるので、願いによって祈る対象はまちまちである。ただ、共通するのは魔力を祈りという形で言語、とりわけアルカに乗せるということである

　アルティスの教理は現世での幸福と死後トワーユでの暮らしを願うことである。トワーユは現世で悪行さえ行わなければ自動的に行ける極楽である。そのため、信者は現世で幸福を追求しつつ、悪行は行わないという行動方針を取る。アルティスは快楽を良しとするし、苦痛に耐えることを良しとしない。食事や飲酒、性交や睡眠といった欲求は大いに開放すべきで、制限して耐えることはないとしている。また、イスラム教のように日に何度かメッカの方向に向かって拝むといったような義務は何一つない。とにかく悪行を働くなということに重点が置かれているのである。人は我慢をすればどうしてもストレスが別の場所に来るものだから、無駄に様々な欲求を制限しない方が却って悪行の発生を食い止めることができると考えられているのである。その代わり、快楽になれてしまった信者が欲求をエスカレートさせて悪行を行う危険性があるため、悪行に関する処罰はことのほか厳しい。そういうところでアルティスは快楽と悪行のバランスを取っているのである

　尚、アルティスにおける悪行とは何よりも「個性を認められるべき者に対してその者が望まない影響を与えること」である。個性を認められるべき存在とは知性と自我の確立した人間のことで、動物や無生物は含まないし、人間でも子供や愚か者は含まれない。アルティスは人間の能力のうち、知性を尤も重要視するため、知性の乏しい者は個として扱わなくても良いという考えを持っている。そして、個性を認められた一般の大人に対して彼が望まないことをすることがアルティスでの悪行にあたる。この単純な規則によって殺人や窃盗や強姦は悪行だと規定できるし、安楽死は逆に肯定することが可能である

　尤も、なら子供や猫なら殺しても強姦しても良いのかというと、そんなことは言っていない。個性を認められないものは確かに尊重されないが、だからといって自由に殺されたりするようなことはない。彼らを殺すことも勿論悪行である。殺されたり閉じ込められたりするのはむしろ悪行を犯した者である

　以上をまとめると、アルティスにおいて尤も尊重されるものは個性を認められた者であり、次いで個性を認められない者がきて、最後に悪行を犯した者がくる。そして尤も重大

な悪行は個性を認められた者が嫌がることをすることで、次が個性を認められない者が嫌がることをすることである

アルティスは主に 3 つの派閥に分かれる。アルテを祈るアルシオン派と、テームスを祈るヴァルテス派と、アルマを祈るアルマスト派である。アルシオン派は筆頭派閥であるが、内部に更に内訳を持つ。サールのみを祈る派閥とエルトのみを祈る派閥と、両方ともに祈る派閥である。このうち尤も多いのは両者に祈る派閥である。派閥によって異なるのは祈る対象であり、宗教的な本質は何ら変わらない。派閥によって身に付けるものや振る舞いに多少違いはあるが、それは微々たるものであり、殆どの部分は共通する

ところで、アルティスでは偶像崇拝は認められている。アルテの姿を象ったものを身に付けたりすることで加護を得られるという信仰がある。アルティスの偶像崇拝はラルクの偶像崇拝にも繋がる。ヴァルテが自分の名を意味する幻字を象ったエーステを身に付けるのも偶像崇拝の一種であるが、これもアルティスと矛盾を起こさないからこそできることである

アルティスではキリスト教の司祭や神父にあたるものがない。個人主義が極まっているラルクでは、神父に告白したり、神父を父と呼んで頼ったりすることはない。信者は個人的にバラバラに行動し、信仰を行う。シオンのような者を除けば特に誰か先導するような信者がいるわけでもない。神父に当たる人間はカルテンにいるが、彼の役目はサリュの警護と信者のサリュへの案内に過ぎない

また、アルティスは布教を禁止しているため、宣教師といった人間も存在しない。布教によって派閥が増え、派閥争いを引き起こすだろうことは明白である。そのため、アルティスは布教を禁止しているのである。ではアルティスはどうやって残るのかというと、それは世襲によるか、改宗志願者の存在による。世襲は親から子へなされるが、子が 14 歳になって成人すれば親の意思を拒否してアルティスを止めることができる。また、改宗志願者がいる場合、国の特定機関が適正を判断する。この機関がアルティスの聖職者の機関といえる。アルティスにおいて聖職者はその機関の人間と、カルテンの守衛くらいのものである。聖職者が事実上殆ど存在しない宗教だが、それゆえ言い換えれば信者全員が聖職者ともいえる

また、アルティスは殉教を禁じる。アルティスの教理は現世での幸福であるため、幸福を追求するための宗教が原因で死んでしまっては元も子もないからである。信者がアルティスのために死ぬことを幸福と感じるという理由でもなければ殉教はキリスト教の自殺と同じくらい罪である。この考えから、アルティスでは踏み絵は踏めと教えている。踏み絵を踏まずして死ぬ方が教えに背くことになるからである

同様の理由でアルティスは他の宗教の排他は認めても抗争は認めない。他の宗教の教えを強要されることを拒むことは義務であるが、他の宗教を間違っているとして攻撃してはならないということである。信仰は違えど他の宗教の人間もまた一人の宗教家であるため、敬意を払わねばならない。間違っても無駄な争いで命を落として殉教するなどというよう

なことがあってはならないのである

2－2－1：アルティス分野別概説

　以下の文章はリーザ＝ルティアの制定した内容をセレン＝アルバザードが文章に起こしたものである。ヴァルテは必ず以下の文章を熟読しておくこと

2－2－2：アルティス

　アルティスとは、アシェットのための新興宗教である
　アルティスは神に当たるアルテや悪魔に当たるテームスなどを信仰することによって彼らの力を賜ろうとする宗教である
　アルテやテームスは総称であり、内訳として数多くの神や悪魔が存在する。従って、アルティスは多神教である
　また、アルティスには派閥がいくつも存在する。主な派閥は 3 つであり、アルテを重んじるアルシオン派と、テームスを重んじる悪魔崇拝のヴァルテス派と、アルマを至上の存在として重視するアルマスト派がある。中でもアルシオン派は最大規模の派閥である
　アルティスはそもそもランティスのアシェットへの帰属意識向上を目的として発足された宗教であるが、ランティス以外の人間もアルティス教に改宗できる
　尚、アルティス教徒のことはヴァルテという

2－2－3：世界観

　アルティス教の世界観では、現世と後世という 2 つの世界が存在する。つまり、この世とあの世という 2 つの世界が存在するということである。そして前者は霊界と呼ばれ、後者はトワーユと呼ばれる。霊界は更に人間の住む世界アトラスと神々の住む世界アルテフィアとに分かれる

2－2－4：死生観

　全ての生命はセレスというものを持っている。セレスはトワーユの入り口にある小滝であるヴェーユの飛沫から発生するものである。ヴェーユで生まれたセレスは霊界へ赴き、肉体を得て生きる。やがて肉体が滅びるとセレスはトワーユへ帰るが、霊界で悪行を多く働いたセレスはヴェーユを通過できず、分解されて無に還ってしまう。一方、悪行をあまり働かなかったセレスはヴェーユを通過し、トワーユへ入ることができる。そしてトワーユでは全てのセレスが現世の肉体を伴って幸せに暮らすことができる

2－2－5：輪廻転生

輪廻転生は原則として存在しない。生まれ変わるということはありえないのである
霊界はヴェーユで生まれた新しいセレスがトワーユに入れるべき良品であるかどうかをテストするための世界である。したがって、一度霊界に行ったことのあるセレスは二度と霊界に戻ることはない
但し、このことは逆に言えば生まれてから数年と経たずして死んだ幼児などのセレスはまだ良品であるかどうかをテストする以前に霊界を去っているため、テストのためにもう一度霊界に来る必要性があるということでもある。つまり、若くして世を去った幼児や子供の場合は輪廻転生があるとされる。その場合、その子供は前回と同じ親の元へ行くとされている
こうしたことからアルティスでは子供が死んだ場合、次に生まれた子供の性別が何であれ、前回の子供が輪廻転生したものだと考え、子供に再び同じ名前を付けて迎えるのが一般的である
また、子供以外に輪廻転生するのはテームスのこけらから生まれたアデルである。アデルは滅ぼされてもテームスに戻ってやがて輪廻転生し、また霊界に降り立つのである

2－2－6：ヴィード

ヴィードとは霊界に溢れるエネルギーであり、内訳としてアルマ・ヒュノ・ラス・ノワの 4 種がある
あまねく存在を構成する元素とは全く異質のものであり、そのものの存在を構成する要素ではない。たとえば水は H2O の分子からなり、水という存在を構成するのは水素と酸素という元素だけである。そこにヴィードは何ら関与しない。しかし、水にもまたヴィードが流れているため、ヴィードはそのものの存在を構成する要因とは無縁である
ヴィードはセレスのない無生物にもセレスを持つ生物にも等しく流れている。流れるヴィードの量は様々であり、多く持っているものもあれば、そうでないものもある
ヴィードは存在を構成する要素と何ら関係ないが、ある存在を何らかの存在足らしめている要素ではある。H2O は水素と酸素さえあれば構成できるが、ヴィードがなければ存在はできないということである。つまり、構成要素さえ持ってくればある存在は存在できるようになるかというとそうではないということである。ヴィードがなければ存在は存在足りえないのである
パソコンは電源を入れて電気を通さないと機能しないが、それと似たようなものである。パソコンは電源が落ちている状態でも部品によって構成されているが、電気を通さなければ使えない。ここでいう電気がヴィードに当たるものである。但し、パソコンは電気を通

さなくても物としては存在できているので、これは完全に平行した例ではない。ここで強調しているのはパソコンにとっての電気が存在にとってのヴィードに当たるものだということである

2－2－7：アルマ

　アルマはヒュノ・ラス・ノワのトリニティである。ヴィードの中でも至上のエネルギーであり、尤も安定した望ましいエネルギーである
　全てのものは有形無形を問わず、ヴィードを持っている。ヴィードはその存在の構成自体には関与しないが、存在を存在足らしめるために必要不可欠なエネルギーである。そのため、存在を構成する元素以上に重要なものとみなされる
　そのヴィードの中でもアルマは至上のエネルギーであるため、これを信仰対象とする考え方が存在する。それがアルティス教のアルマスト派である。アルマスト派は存在の全てをアルマに原因付けようとする。また、コトというのは単数或いは複数のモノの変化や関係において成り立つため、アルマスト派は全てのコトもまたアルマに原因付けようとする
　たとえば皿が落ちて割れるという一連のコトは、皿や床といったモノ同士の接触という関係によって起こることである。皿や床といったモノは存在であるからアルマスト派はその存在の原因をアルマに求める。そして皿が割れたというコトはモノ同士の関係から生まれたため、その行為の原因もまたアルマに求めるのである。つまり、アルマスト派にとって存在や行為は全てアルマに原因を求めることのできるものである。そして彼らはアルマを信仰することによって全ての事物を理解・制御しようとするのである
　アルマスト派でなくともアルティスはある程度事物の原因をアルマに求めようとすることがある。ただ、アルマスト派ほどアルマに固執することはない

2－2－8：アルテと人間

　アルティスの神話である『幻想話集アティーリ』によると、人間とはアルテが力を失っていった種である。そのため、アルテは本質的に人間に近い存在である
　人間は祈りの言葉をアルテに捧げる。祈りの言葉は魔力を帯びており、アルテがこれを享受する。そしてその返礼としてアルテは人間に自らの加護を与える。即ちアルテと人間は共生関係にあるといえる

2－2－9：祈り

　人間がアルテと交信を取れる唯一の手段は祈りを捧げることである。祈りは必ず言葉で行わなければならない。言葉は体内の魔力を帯びて体外に排出されるため、祈りに最適な

のである
　言葉は音声でなければならないということはない。文字や思考による言葉もまた祈りになることができる。但し、思考のような抽象的なものより、音声や文字といった具体的なものに魔力は宿りやすい。従って、祈りは音声や文字を伴って行うのが良い
　尚、音声と文字では音声の方が魔力が乗りやすい。しかし音声は空気中ですぐに減衰してしまうため、音声に乗った魔力もまたすぐ減衰してしまう。一方、文字は音声ほど強力な魔力を帯びることはできないが、長期に渡って残ることができるため、長期的に魔力を持続させることができる。また、文字に籠った魔力は誰にも開放されないでいると次第に強力なものに変化していく。従って、年代を経た祈りの文字は音声より強力な魔力を持つことがある

2－2－10：神の母語

　魔力は言葉に乗るが、それはアルカでなければならない。というのも、アルテやテームスはアルカを母語とするためである。アルカでない言語でいくら祈ったところで神に届くことはない。アルカは神の母語であり、祈りは神の母語アルカで行わなければならないのである

2－2－11：偶像崇拝

　偶像崇拝は励行される
　力を賜りたいアルテの偶像はお守りのような効果があるとされている
　また、自分の名前に関連した古アルカの文字を象ったアクセサリーのエーステもまたお守りの効果がある。エーステを身に着けているとアルテに対し、今祈りを送ったのは自分だということをより良く知らせることができ、アルテとの交信感度が向上すると考えられているためである

2－2－12：戒律

　以下はヴァルテが遵守しなければならない戒律である。ヴァルテはよくよく目を通しておくことが望ましい
　尚、ここで述べたことが戒律のすべてではないし、以下で述べたことは場合によっては内部で矛盾を生じることがある。これは法律と同じである。戒律同士に矛盾が生じた場合は各人の責任でどちらかの戒律を優先しなければならない

＜総論＞

・常に現世での幸福を追求すること
・トワーユへ赴くためにも、悪行を行ってはならない
・アルティスを布教してはならない
・ハルヴァと抗争してはならない
・殉教してはならない
・異教との重複信仰は認められない

＜悪行総論＞

・他人に迷惑をかけてはならない
・他人の意思を尊重しなければならない
・他人に深く依存してはならない
・自分の思想を押し付けてはならない
・自分の信条を曲げてはならない
・自分の行動は自分の意思で行い、その結果生じた責任は全て負わねばならない

＜悪行詳論＞

・嘘を付く
・話を誇張する
・人を殺したり、治らない怪我をさせる
・金品を盗む
・強姦する
・しつこく神経質に振舞う
・肉体的・精神的に軟弱である
・生活に困るくらい働かない
・怠惰に生き、時間を無駄遣いする
・働きすぎる
・生活に困るほど博打をする
・浪費する
・深酒する
・過度に喫煙する
・無趣味
・過度に自慢する
・不規則な生活を送る

・体を冷やす
・人によって態度を変え過ぎで、自分というものを持たない
・集団でつるみ、他者を排他しようとする
・恨む
・馬鹿にする
・裏切る
・何でもないことで人を笑う
・物を乞う
・物を投げる
・過干渉する
・助ける余裕が十分あるのに助けない
・不親切で、人に気を使わない
・無愛想に振舞って場の空気を悪くする
・人の邪魔をする
・過度に期待する
・喋りすぎで、余計なことを言う
・寡黙すぎる
・何でもないときに奇声をあげる
・おかしな声で話す
・人の目を見つめて話す
・人の体に勝手に触る
・人に近寄りすぎる

＜対ヴァルテ＞

・派閥抗争を起こしてはならない
・派閥同士でつるみ、他の派閥を排他してはならない

＜対ハルヴァ＞

・アルティスを布教してはならない
・改宗を望んでくれば布教できるが、アシェットの許可が必要
・抗争してはならない
・ハルヴァの宗教は同じ宗教として尊重しなければならない

＜実生活における様々な戒律＞

・異教の名を名乗ってはならない
・異教の祝いに参加してはならない
・異教の神に祈ってはならない
・異教の庇護を受けてはならない
・アルティスの祝日を祝わねばならない
・アルティスは世襲制であるため、子孫にはアルティスを布教しなければならない
・子孫へアルティスを世襲するためにも、ハルヴァとの婚姻は許されない。但し、相手がアルティスに改宗するか子孫がアルティスに改宗することに対して非常に協力的であれば許される
・伴侶がアルティスを尊重しない場合、離婚しなければならない
・子孫が成人（14 歳の最後の日）に達した次の日以降にアルティスをこれ以上継続する意思がなければ、世襲はその時点で諦めねばならない
・布教につながるため、アルティスについての詳細な情報をハルヴァに漏らしてはならない。情報を公開する必要があるならリーザの許可を得なければならない
・祈りはアルカで行わなければならない
・ハルヴァに改宗を依頼された場合はまずリーザに許可を申請し、許可が下り次第個々のヴァルテがその者を改宗して良い
・ハルヴァと会話していて思想の違いに直面したときは争わず、相手を尊重し、黙って矛を収めねばならない
・全てのヴァルテはアルカを習得していなければならない
・アルティスを非難された場合でも争ってはならない。だからといってこの者を許してはならない。さも何でもない風を装ってその者との接触を断つこと
・ヴァルテは平生アルカで会話しなければならない
・金言集『アルヴァント』や神話『幻想話集アティーリ』を尊重しなければならない。これらの書物の言葉をよく吟味し、日常生活に活かさねばならない
・アルティスを尊重しない人間と個人的に親しい関係を持ってはならない

　さて、以上がアルティスに関する分野ごとの概説であるが、以降ではアルティスに関する術語の中で極めて重要なものを簡単に説明する

2－3：術語解説

adel：アデル。『幻想話集アティーリ』に登場するモンスターで、封印されたテームスが揺れるたびに地上に降ってくる。その数は無数だが、テームスと違って殺すことができる。しかし後から後から降ってくるのできりがない。アデルはテームスが揺れるたびに降って

くるこけらのようなもので、強さは大したものではなく、人間でもどうにか倒すことができる

alef：魔晄アレフ。アルテやテームスの栄養源で、これがないと彼らは生きていけない。彼らは自分でアレフを生成することができるが、これはあまり美味でないそうである。一方、能力の乏しいとされる人間の中にはアルテやテームスが好む味のアレフを生成できる能力を持った者がいる。彼らは自分の魔力を言葉を通して体外に出し、アレフに変換する。そしてそれをアルテやテームスに献上することによって代わりに力を借りるのである。神話の時代にはこれらの特殊能力を持った人間がおり、彼らは召喚士と呼ばれた。但し、召喚士ではアルテの力しか借りることができないため、テームスに捧げるものは後のヴァルテス派を除いていない

armast：アルマスト。アルマ信者。アルティス教の一派で、アルマを尊ぶ。特殊なアルマートと呼ばれる香を炊く

　アルマスト派は armastwit という独特な挨拶を持っている。右手を手刀のように胸の前に持ってくる。親指の横が胸の方向を向き、小指の横が相手を向く。この状態で左手の 5 本の指で右手の親指以外の指を逆手で包む。順手ではやりにくいので、あくまで逆手である。この挨拶は相手がアルマスト派か尋ねるものであると同時に同一派閥同士の挨拶になっている。これに対してアルマスト派でないことを示すには、先ほどの左手を逆手でなく順手にすれば良い。そうすることによって自分がアルマスト派でないことを礼儀正しく伝えることができる

arte：アルティスは多神教で、アニミズムを持つので様々な物に対して神が存在する。神はアレフというエネルギーを栄養源とする。神はエルトとサールに別れる。アルティス教徒はアルテに祈ることによってアルテから力を得ようとする。アルテは『幻想話集アティーリ』に詳しく説明されていて、しばしば人間に害をもたらしたり救済を施したりする

　アルティスにおける神の位置は人間と近いもので、人間はそもそも力を失って分派したアルテの一族である。他の動物についてはアルテからの分派とされていないため、人間はアルテの下ではあるが、他の動物よりは上という扱いがなされている

　アルテはサールとエルトにそれぞれ王がいるが、リディア以降は和解してサルトになっていて、どちらかがより偉い王ということはなく、両者の王が均等な立場にある

arva：アルティスの聖典、聖書。一冊ではなく、数冊の総称。具体的には『アルヴァント』・『幻想話集アティーリ』・『アルバシェルト』のことを指す

arxion：アルシオン派。アルティス教の最大派閥。アルテを信仰対象とする。『幻想話集ア

ティーリ』ではシオンという人間の少女が始祖となった

dort：アルテまたはテームスに対して祈ること。アルティス教徒は彼らに祈ることによって彼らの加護を得ようとする。アルティス教では祈りは主に言葉で行われる。言葉は体の中から出てくるもので、体内の魔力を帯びて排出されると考えられている。そのため、言葉は魔力を帯びており、その魔力は祈った相手の元へ送られ、それを栄養源として得たアルテやテームスが代わりに力を貸すという仕組みになっている。『幻想話集アティーリ』では人間は魔法を使え、人によっては更にアルテを召喚する能力をもっていたが、リディア以降は人間の魔力は弱まり、魔法も召喚も使えなくなったとされている。これが現代の我々である。いまや人間は残された微力な魔力を使い、アルテから力を得るのみである

祈りの言葉はアルテによって決まっているが、総括的なものもある。尤も一般的なものは古アルカから使われた arte（神よ）であり、続いて arte,vin-al（神よ、守りたまえ）がある。具体的に誰かを守って欲しい場合は arte,vin-al an（神よ、我を守りたまえ）とか arte,vin-al noa（神よ、我が娘を守りたまえ）などという

elt：アルテはサールとエルトの 2 派に分かれる。サールはその片割れである。サールは元は創世記に存在した女性神で、男性神エルトの妻であった。2 人は子供を作らない約束をしていたが、サールは夫を騙して娘を設けてしまう。娘のユーマの存在を打ち明けられたエルトはサールを捨てる。悲しんだサールは大穴に身を投げて死ぬ。それを知ったエルトもまた悔やみ、高い塔を立て、その塔の上で死ぬ

大穴に身を投げたサールの死体は四散し、その破片がそれぞれ独立した神々になった。彼らは自分たちをサールの一族と呼び、同じくエルトの死体から生まれた神々と対立した

サールとエルトは対立を繰り返したが、テームスに対して共に戦うということもあった。しかし共闘が終わればすぐに抗争は再び始まった。抗争は次第に悪化し、サールはアルデスという王が立ち、エルトはルフェルという王が立ち、神々の大戦争ラヴァスが始まった。しかしラヴァスは決着が付かず、神々は別々の世界に住むことに決めた

しかしリディアの時代になると、大召喚士リディアの呼びかけで神々は和平を望むようになる。再び起こったテームスとの共闘がきっかけで最終的に神々は和解する。リディア以降はサールとエルトはサルトと名を改めた

サールは一般に人間に対して害を及ぼすものである。ユーマは人類の祖先であるが、サールは娘であるユーマのせいで夫に捨てられたと思って恨んでいたからである。一方、エルトは不憫な娘を憐れに思っていたため、人間を守るようになった

サール召喚士はサールに頼って敵を滅ぼそうとする。また、エルト召喚士はエルトに頼って自分や味方を守ってもらおうとする。サールとエルトの人間に対する態度の違いはこのように魔法にまで表れている

harva：ハルヴァ。アルティス教に属さない異教徒と無宗教者のこと。ラルクはハルヴァを排他するが、決してこちらから自主的に攻撃したり揶揄したり過干渉することはない。イスラム教でもキリスト教でも良い。たとえ教理は違えども、同じ宗教として尊重しあう精神を美徳とする。従って、異教徒を馬鹿にしたりする悪口は最も悪辣なものとして禁忌される

kacte：『幻想話集アティーリ』における公園のこと。但し、「公園」と kacte とは多いに異なる。衆人の休憩、談話、遊戯、憩いの場として使われる点は「公園」と同じである。kacte は緑豊かで空気が比較的清浄である。大抵は噴水や池があり、偶に川まである

多くは全体の形が円形か四角形で、境界の多くは低木の植栽か頑丈で高い金網で囲まれている。また、賑やかな kacte の場合は、葉の多く冬でも枯れない高い木が植えられている。地面は舗装されているところと、そうでない土の剥き出しのところがある

子供の遊具はどの位置からも監視の届く安全なところにある。遊具同士は固まって置かれていて、必ず監視が行き届くようになっている。また、子供の遊具の周りには特別に金網などで境界が設けられていることもある

水道の水は清浄されていて飲める。飲み水以外の水道がある。太い水道で、各所に点在している。これは消火用の水道であり、子供たちでは容易に開けないようになっている。これらの水道には長いホースが設置されている

kacte には守衛所があり、常に数人が kacte 内と kacte の付近を巡回し、数人が守衛所で待機している。水道は守衛所のところにあり、飲料水に毒を加えたりできないようにされている

また、トイレは非常に清潔で広く、紙が備え付けられていて水洗である。個室の扉の外側にはパネルが付いていて、そこに手をかざすことで扉が自動で開く。水洗は内部のパネルに手をかざすことで流れるが、無駄な水を使わないよう、水は 1 度しか流せないように設定されている。もう 1 度流すには 1 度出なければならないわけだ。トイレは kacte の隅の方にある。トイレは基本的に密室な為、何が起こるか解からない。数人の男に連れ込まれて金を脅し取られるようなことがありうる。その為、トイレ付近には男女 2 名の守衛が常に配置されている。このことは更にトイレ紙の窃盗、覗き、痴漢、放火、破壊などの犯罪の軽減に役立っている

kacte には図書館が常設されている。制限エリア以外の蔵書ならば、貸し出しが可能になっている。但し、その kacte のある行政区域内の人間だという ID が必要である

kacte は中心部にいくほど賑やかだ。中心部にはステージがあり、演奏などができる。また、尤も中心部にはカルテンがあり、アルテへの特殊な礼拝が可能になっている。カルテンは防音効果が高く、中は静かであるが、機械装置のおかげで涼しい。それに比べて周縁部は静かである。これは周囲の住宅地への騒音対策である。先程、賑やかな kacte の周縁には葉の多く冬でも葉が枯れない高木が植えられるといったが、それは高木に kacte 内の音を

吸収してもらうためである

また、飛行機やヘリコプターはkacteの上空を基本的には通過できない。しかし、行政区によってはkacteの利用者が多い時間帯にのみ通過を禁止することもある

電波を発する物の使用は電波の届き易い制限エリア内でのみ使用が許されている

尚、多くのkacteは夜は閉められる。特に、金網で囲まれているようなkacteはまず間違いなく侵入が禁止されるkacteである

kacteは政府の管轄で、維持費は主に税金でまかなわれる。大きな額ではないが、負担と感じる者もいるだろう。その為、行政区によってはkacteを利用したい者だけが税金を払って利用するということがある

また、kacte内では出店が許されていて、軽食などが売られている。軽食というのは日本で言えば菓子類やたこ焼きやクレープのようなものである。出店は当然制限エリア内にあり、多くは公園の隅である。kacte内で出店をする者は政府から援助金が出る。その援助金もkacteの維持費に含まれる。その代わり、経営者は販売物の価格を援助金の分だけ下げなければいけない。つまり、kacte内の軽食は市場価格より安いということだ。そして、kacte内に軽食の類以外の販売が許されていない理由はここにある。もしkacteに服屋があったら、市場より安いので、皆kacteで買うだろう。すると相応の援助金が必要になり、その分税金を多く取らねばならなくなる。そうなると、kacteが市街地中心にあって利用しやすい行政区と、そうでない行政区の間に摩擦が生じてしまう。また、kacteを利用する者としない者の間にも摩擦が生じてしまう

また、kacteの美化は徹底されている。クリーンキーパーが数名常設されていることは当然で、軽食の店舗も極力ゴミを出さないような商品を売らなければならない。一々資源を無駄にするような包装は極力避けられる。とりわけ、利用者側にも強い美化への心がけが要求される。法律はkacte内の美化について厳しく定義している。例えばkacte内でのガムの吐き捨て、ゴミのポイ捨てはkacte外でのそれより重罰である。更に、kacteの舗装された地面に唾を吐いたりすることも犯罪である。舗装部分は土と違い、汚れが残るからである。しかしながら、kacteにはゴミ箱が少ない。トイレの付近とか、入り口付近にはあるが、美観を損ねるため、内部には殆どない。近年日本にできたディズニーシーと同じ発想である

さて、ところで、kacteは「公園」に比べ、莫大な維持費がかかることは言わずもがなであろう。守衛の人件費は勿論のこと、敷地代にも目を向けねばならない。kacteは住宅街から離れ過ぎては意味がないので、住宅街に広く土地を買うことになるが、それにまずは莫大な資金がいる。日本の大学は好例だが、大学は都会にあるほどキャンパスが狭く、そうでないほど広い。例えば専修大学などは狭く、中央大学は広い。セレンの母校である学習院大学は東京都豊島区にある。付近に元首相の邸宅があるような高級住宅地である。そこに20万㎡の敷地を持つのだから、その費用は計り知れない。kacteも似たような事情にある。従って、多くのkacteを作ることはできない

住民達はより kacte に近いところに住もうとする。そのため kacte 付近の地価はますます高騰する。商店街は無論 kacte の付近にできる。そのため、kacte を中心とした街作りが行われる。治安維持のため、警察や消防は kacte 付近にある。日本の番地は駅から近い方が 1 丁目ということがあるが、こちらは kacte からどの程度離れているかで番地が決まる

kacten：カルテンは『幻想話集アティーリ』の中に出てくるもので、カルテ内の中心部にある礼拝堂である。全てのカルテに 1 つずつ設けられている。カルテンの周りはステージがあるのでしばしば煩い。そのため、カルテンには防音処置が施されている。しかし、機械装置によって中は涼しく保たれている

カルテンは礼拝堂とか教会などと訳されるが、厳密にはそのどちらでもない。まず、キリスト教では教会は神の家と考えられているため、非常に豪華絢爛な造りをされるものであるが、カルテンはそうではない。カルテンの中心部にはサリュという祭壇があり、サリュは尤もアルテと交信を行いやすい場所とされる。カルテンの存在意義は正にこのサリュを保護することである。従ってカルテンは強固な造りが第一に要求される。キリスト教の教会と違って豪華絢爛よりも堅牢であることが望まれるのである。そのため、カルテンには定まった様式はない。核シェルターのようなものでもカルテンになりうるからである

アルティス教徒はふつう祈りをどのような場所でも行うことができる。だが、祈りはアルテに届かなければ意味がないため、信者はできるだけアルテに祈りが届きやすい場所を求む。サリュは中でも特に交信しやすい場所とされているため、特別な願いを持った信者はサリュに赴いて祈る。尚、サリュの使用料は無料である

カルテンはカルテが開いている間は使用できるが、カルテが閉まっている時間帯は使用できない。また、サリュを破壊したりしないようにカルテンで持ち物検査が義務付けられている。また、キリスト教の告白とは違うので、誰かが祈りの内容を聞くということはない。サリュのある部屋は強固な造りで、完全な防音で、電波も入らない。盗撮や盗聴の危険がないように常にサリュの部屋は厳しいチェックが行われる。従って信者はサリュの部屋でアルテに向かって大声で祈ることができる。科学的に考えれば、実は大声で悩みを吐き出すことによってストレスの解消に繋がり、諸々の問題を根本から解決するという利点がある。神学的でなくカルテンの利点を挙げることはこのように可能である

lark：ラルク。アシェットがアルカを元に作り上げてきた文化のこと。古アルカから脈を打ち始め、制アルカへと移行していったもの。制アルカが主要言語と決まった後でもラルクは古アルカとは切っても切り離せない。むしろ古アルカの文化と基本的に同一といっても過言ではない

mir：神。エルトとサールからなるアルテにテームスを加えた総称。ラルクにおいてアルテは神であるが、テームスもまた悪魔としての神である。要するに善悪関係なしに人間を超

越したものという意味での神である
　また、アルカでは異教徒のける神や神格化された人間をも mir と呼ぶ。従って仏も神もまとめて mir と呼ぶ

saal : アルテはサールとエルトの 2 派に分かれる。サールはその片割れである。サールは元は創世記に存在した女性神で、男性神エルトの妻であった。2 人は子供を作らない約束をしていたが、サールは夫を騙して娘を設けてしまう。娘のユーマの存在を打ち明けられたエルトはサールを捨てる。悲しんだサールは大穴に身を投げて死ぬ。それを知ったエルトもまた悔やみ、高い塔を立て、その塔の上で死ぬ
　大穴に身を投げたサールの死体は四散し、その破片がそれぞれ独立した神々になった。彼らは自分たちをサールの一族と呼び、同じくエルトの死体から生まれた神々と対立した
　サールとエルトは対立を繰り返したが、テームスに対して共に戦うということもあった。しかし共闘が終わればすぐに抗争は再び始まった。抗争は次第に悪化し、サールはアルデスという王が立ち、エルトはルフェルという王が立ち、神々の大戦争ラヴァスが始まった。しかしラヴァスは決着が付かず、神々は別々の世界に住むことに決めた
　しかしリディアの時代になると、大召喚士リディアの呼びかけで神々は和平を望むようになる。再び起こったテームスとの共闘がきっかけで最終的に神々は和解する。リディア以降はサールとエルトはサルトと名を改めた
　サールは一般に人間に対して害を及ぼすものである。ユーマは人類の祖先であるが、サールは娘であるユーマのせいで夫に捨てられたと思って恨んでいたからである。一方、エルトは不憫な娘を憐れに思っていたため、人間を守るようになった
　サール召喚士はサールに頼って敵を滅ぼそうとする。また、エルト召喚士はエルトに頼って自分や味方を守ってもらおうとする。サールとエルトの人間に対する態度の違いはこのように魔法にまで表れている

salt : サルト。サールとエルトの和解以降に使われた彼らの総称。サールもエルトも区別しない言い方

salyu :『幻想話集アティーリ』中のもの。サリュはカルテン内にある祭壇で、アルテとの交信が行いやすい場所とされる。そのため、特別な願いを持った信者が祈りに来る。サリュの破壊防止のため、カルテンの守衛によってサリュを使用する信者は持ち物検査をされる。しかし一旦中に入るとそこは完全防音で、盗聴や盗撮の心配もない空間になっている。守衛が日々盗聴や盗撮を危惧して管理しているからである。また、サリュのある小部屋は防音と共に電波も通さないため、完全に秘密は守られる。そのため信者は大声で祈ることができ、これが実はストレス解消に繋がり、様々な問題を根本的に解決することがある
　サリュはアルテのとの交信が行いやすい場所とされ、その場所にはサリュの証である祭

壇が置かれる。祭壇は棺形であり、石造りである。石にはアルテに関する言葉が彫ってある。サリュの小部屋にはサリュ以外にもアルテを象った偶像などが置かれている

seles：セレス。いわば魂のことである。生命の中に存在して、生命を生命足らしめている何か。アルテやテームスさえセレスを持っている。セレスは天国トワーユの入り口にあるヴェーユという小滝の飛沫から生まれるとされている。生まれたセレスは肉体を伴って現世に行くが、肉体が死ぬとヴェーユへ帰る。しかし、罪によって汚れきったセレスはヴェーユでも洗い流せないので消滅させられる。一方、見事ヴェーユを通過したセレスはトワーユに入って幸せに暮らす

teems：テームス。『幻想話集アティーリ』における悪魔の総称。魔晄アレフを栄養源とする点でアルテと同じである。エルトとサールがユーマを設けたときにおきた世界の歪み。最初に生まれたテームスは悪魔テームスという名で、それが母体となって様々な悪魔を生んでいった

テームスはアルテをも凌ぐ力を持っている。テームスはアルテや人間を襲って殺し、彼らのヴィードを直接吸収することで生きている。つまりテームスにとって神や人間は糧である。当然、糧がなくなると生きていけないのでアルテや人間を皆殺しにすることはない

アルテや人間はテームスの暴虐から逃れようと何度か戦いを挑んだ。しかし個々のテームスはいくら殺しても母体である悪魔テームスがいつか復活させてしまうという性質を持っていたために、決着は付かずじまいだった。最終的にリディアの時代にアシェットが悪魔テームスを滅ぼし、世界の歪みテームスは滅んだ

尚、『幻想話集アティーリ』においてテームスが降臨した場所は上代ではテージュという海の上で、リディアの時代ではアルテージュと呼ばれるアルバザード上空である

アルティス教のヴァルテス派が神話の時代に滅んだとテームスの力の残り香を信仰対象とするように、テームスは死してなお、人の心を揺さぶるだけの力を持っているのである。ラルクにおいてテームスの意味は大きい。誰よりも強い者として悪魔に憧れを抱く者もいる。善悪や恐怖を超えても強い力に憧れるということがあるのである

また、現実においてはテームスはアシェットが指定する危険団体・危険組織のことである。こちらの意味でのテームスを信仰する者はアルティス教には誰もいない

twaayu：トワーユ。アルティスにおける天国。万物はセレスを持っている。セレスはトワーユの入り口になっている veeyu という小滝の飛沫から発生するものだ。死ぬとセレスが肉体から離れていき、ヴェーユを通ってトワーユへと入っていく。ヴェーユでは裁判が行われており、生前悪だったものはヴェーユを通過することが許されず、そのセレスは破壊されて無に帰す。但し、悪人でも殺された者はヴェーユを通ることができる。トワーユでは万物が生前の姿をしており、苦しみなく幸せに暮らしている。ヴェーユを通過する時点

で滝の水によってセレスが清められる。ヴェーユは病者の病を清め、抑えねばならぬ苦しく醜い欲を清め、他を蔑み己のみを可愛がる心を清める。だからトワーユでは誰もが安らかに暮らすことができるのである

vartes：ヴァルテス派。アルティス教の一派。テームスを信仰対象とする

veeyu：ヴェーユはトワーユの入り口にある小滝である。ヴェーユの飛沫はセレスになり、セレスは肉体を持って現世に行くが、死ぬとヴェーユに戻ってくる。しかし、罪に汚れすぎたセレスはヴェーユで洗いきれず、その場で分解されて消滅する。見事洗い流せたセレスはヴェーユを通過するときに、生前もっていた汚れた心や欲を全て洗い流してもらえ、トワーユへ向かう。ヴェーユは従って、罪人とそうでない者を篩い分ける裁判所にあたるもので、閻魔大王の審判に当たるものである

viid：ヴィード。この世に溢れるエネルギーであるアルマ・ヒュノ・ラス・ノワの総称。セレスのない無生物もセレスを持つものも等しく体内にヴィードを溜め込んでいる。持てるヴィードの量は様々である。多く持っているものもあれば、そうでないものもある

また、ヴィードは種類ごとに持っている量が異なる。あるものはヒュノだけ多く持っていて、ラスは殆どないということもある

3：結婚による苗字の変化

日本では結婚すると片方が自分の苗字を捨てて相手の苗字を名乗るようになるがアルティスでは苗字が変わることはない。それは結婚だけでなくどんな場合にでもそうである。一度自分の苗字となったものは永久に変わらない。死んだ後に戒名が付くようなことさえない

では、子供が生まれた場合はどうするか。両親の姓が異なる以上、どちらかに合わせなければならない。このようなときは両親が話し合って決める。子供に決定権はない。一度決まった姓名は変わることがない

アルティスはこのシステムのため、婿だの嫁だのという感覚が希薄である。結婚しても苗字が変わらないのだから家の名を残すの残さないのという問題はありえない。自分が生きている以上少なくとも今世代は家の名が残るし、子供を 2 人作って母親と父親の苗字をそれぞれ付ければ次世代まで双方の家の名が残るというわけだ

このシステムは非常に便利であるが、家族共通の苗字というのがなくて困るという問題がある。もっとも、制アルカはそもそも苗字という概念を多用しないので、実際問題として困ることはあまりない。ただ、どうしても家族全体をひとまとめにして呼びたいときは両親の苗字を連名にして表す。このとき必ず母親の苗字が先に来る

4－1：主観的客観主義

主観的客観主義。これは制アルカを、ひいてはアシェットの哲学を理解するのに極めて重要な思想である

今、目の前にりんごがあるとしよう。もし我々がこれを見れば直ちに「りんごがある」と断定するだろう。また、りんごが箱の中に隠されていて中に入っているかどうか分からないが少なくとも自分はりんごが入っていると信じている場合、「りんごがあるだろう」と推量するだろう。そして一般人は前者を客観的で、後者を主観的だと区別することができる。他にも、「地球は丸い」というのは客観的で、「幽霊は存在しないだろう」というのは主観的だと区別することができる

このように、我々は何が客観的で何が主観的かを判断することができる。しかしその判断は果たして正しいのだろうか？我々が自信をもって客観的に「りんごがある」といったとしても、もしかしたらそのりんごは幻かもしれないのである。幻覚を見ている者が「りんごがある」といった場合、本人は確かに客観的事実を述べたと思っているのである。同じく酔っ払いが「俺は酔ってない」というのも本人にとっては主観ではなく客観的事実であろう。だが、現実は違う

我々は自分が認知したものを客観的なものと主観的なものに分けているが、そもそも認知自体が誤っていた場合についてはふつう考えない。「見たものは正しいもの」とばかりに、認知したものは事実であり、その事実を客観か主観に分けているだけである。そして客観だと思うのはあくまで自分の経験に基づいて決めるものである。これは客観とは名ばかりのものである。要するに、「これは俺以外のみんなも賛同しそうだ」と考えれば客観であり、「これは俺と俺の賛同者ぐらいしか賛同しなさそうだな」と考えれば主観なのである

ラルクでは、真の客観とは我々の認知とは切り離したところにあると考えられている。つまり、認知する我々がいようといまいと、また、その認知が正しかろうと誤っていようと、事実は我々から独立して存在するということである

我々は事実を認知しようとするが、その認知は誤っているかもしれない。だが、毎回毎回自分の認知を疑っていては何も信じられなくなってしまうので、とりあえず認知したものは正しいと認めておこうという態度を取るのが普通だ。そうして認知したものを自分以外のみんなも賛同しそうならそれは客観的と判断し、そうでなければ主観だと判断しているのである

我々は認知器官を使って認知する以外に認知する方法がないが、よりによってその認知器官を通じて得た認知は自分の器官を通して得たものだから全て主観的である。つまり、我々が認知したものは全て主観的なものであるから、いくら後から認知したものを客観的なものと主観的なものに選り分けたとしてもそれは似非客観でしかないのである

そしてラルクではこのような似非客観を、「認知という主観的行為を通してから客観的と

判断されたもの」として考え、主観的客観と呼ぶ

　我々人間はどうあがいても事実を事実のまま知ることはできない。我々は認知を通してしか事実と関係を持てない。にもかかわらず、認知器官を経た情報は全て主観的であるがために、事実はどうやっても主観的にしか捉えることができない
　そのせいで我々は砂漠でありもしない街を蜃気楼としてみてしまったり、酔っ払ってありもしない幻覚を見たりしてしまうのである。また、逆に本当はそこにりんごがあるのにないと信じ込んでしまうこともあるのである
　従って、我々がいくら客観的になろうとあがいても、それは主観的客観でしかないのである――という思想を主観的客観主義といい、ラルクの根幹的な考え方の１つである

4－2：主観的客観が無標である制アルカ

　日本語では「～と思う」という言い方が多用される。これによって「今の発言は私が個人的にそう思ってるだけで、客観的に正しいといってるんじゃありませんよ」というニュアンスを与えている。この言い方について「日本人は責任逃れをする」とか「日本人は主張をするのを怖がっている」という人がいるが、まぁその真偽はとりあえず置いておこう。日本語は「～だ」や「～です」で終わるような無標な文は断定を表し、「～と思う」や「～じゃない？」などの有標な文は断定を表さない。一般に、無標の方が有標形式より多用されるのだが、面白いことに日本人は実際の会話においてまず断定をしないのだ。ほぼ必ず「～じゃない？」とか「～とか思う」とか「～だろう」とか「～みたいな」というような要素を使って断定や限定を避けている
　英語はこのようなことはあまりしない。英語にも I think という言い方があって「～と思う」という意味を表す。それで日本人はついつい I think としつこく言ってしまうが、これは甚だ英語母語話者にとって耳障りだそうだ
　さて、以上を踏まえていうが、制アルカはこのいずれのタイプでもないのである。制アルカはそもそも無標が主観的客観である。つまり、特に断りがなければ全ての文は客観ではなく、「～と思う」が付属しているということになる。そして逆に客観的だと自信をもって言えることについては客観的であることを示す専用の純詞を使って表す。また、「これは非常に私的であって非常に主観的である」という意味を表すときにもそれ専用の純詞を使って表す

　ここで、日英幻において主客問題がどのように捉えられているかを対照してみよう

	事実(客観)	主観的客観	主観
制アルカ：	1	2	3

英語	:	4	5	6
日本語	:	7	8	9

注)ここでいう事実(客観)とは発話者が「自分の認知を超えて事実だろう」と考えているもののことで、本当は人間が触れることのできない事実について表現する場合に使う。当然、本当は触れることのできない自分の認知を超えた事実について何か物を申すわけだから、誤りは絶対に許されない

1：有標。文の動詞に純詞を付けて表す
2：無標
3：1と同じ

4&5：無標。但し4と5はふつう区別されない
6:有標。I think などの要素を付けて表す

7&8：無標。但し7と8はふつう区別されない
9:有標。「～と思う」などの要素を付けて表す

こうやって分析すると日本語と英語の違いが見えてこないが、それでは両者の決定的な違いは何だろうか。4&5と7&8を客、6と9を主とすると、日本語では英語においてふつうは客になるようなものが主になることがあるという点が違いである。反対に、英語ではふつう客になるようなものが日本語では主になってしまうこともある。つまり、両者の差は主になるものが多いか少ないかという差に過ぎず、本質的な違いはない。結局のところ日本語が「これは主観的かな」と思って「～と思う」とつけるところを英語では一々"I think"と言わないというだけの差である

このように英語と日本語の違いはあくまで主観だと感じやすいか否かという程度の違いでしかないのに対し、制アルカはこれらとは本質的に異なった捉え方をするのである。制アルカは客観的主観のみが無標であり、それ以外は純詞を付けて有標形式で表現するのである

この事態はラルクの主観的客観主義から生まれたものであり、これを理解していないと日本人がＩ think と連呼するのを煙たがられて相手から英語ができないと思われるように、制アルカができないと思われるのである

勿論、この思想を理解していなくともそんなに支障なく制アルカは使える。ただ、その代わり正しい制アルカの表現法を使えない以上、いつまでたっても「最低限話せる」だけの人間でしかないのである

4－3：客観的描写

制アルカは主観よりも客観を優先する。従って、何らかの事柄が起きた場合は事柄を冷静に分析し、機械的に動作主と行為と対象を割り出し、それをその順序で表現する。味気も色気もないが、尤も適切に事実を伝達する方法である。日本語はこれとは大違いで、情報を伝達するだけの文でさえ一々誰かの心理や人間関係などが登場してくる。日本語は話者の心を逐一述べていくのに対し、制アルカは純然と事実を伝えていく

日本語は心を伝えるため、リーザがセレンのために何かを言えばセレンは「先生が仰ってくださった」といわねばならない。決して、「リーザが言った」とは言えないのである。「先生が仰ってくださった」には少なくとも「セレン・リーザ間の上下関係」と「セレンのリーザへの敬意」と「リーザの行為に対してセレンが感謝している気持ち」という 3 つの心が現れている。だが、そもそもセレンのその発言を聞いた者は今挙げた 3 つの心をどうでもいいと思っているかもしれない。聞き手とってはセレンのリーザに対する心など全く以ってどうでもよく、単にリーザが何をしたか知りたいだけかもしれない

このように、日本語は単純な情報の伝達をする際も登場人物との人間関係や気持ちを表現せねばならないので、情報伝達としては甚だ効率が悪い言語といえよう。勿論、日本語もそっけない言い方をすれば速く情報伝達ができるが、ここでセレンが問題にしているのはやる気になればできるかどうかということではなく、日常的にそうしているかいないかということである。日常的に心を一々述べる日本語は情報伝達においては非合理的な言語である

それに比べて制アルカは事実を客観的に述べるのが最上の喋り方とされているので情報伝達の効率は極めて良い。勿論、制アルカでも純詞などを駆使して心を表すことは可能であるが、それでも「先生がいらっしゃった」などという面倒な言い方は絶対にせず、単に"luket-ik"(彼女は来た)という言い方しかしない。制アルカが純詞を使って心を表すのはむしろ珍しいことで、特別に自分の気持ちを伝える必要があるときにしか使わない

以上のことを換言すれば、同じ 100 個のデータをインターネットで誰かに伝える場合、日本語は心というジャミングがデータに混ざってしまうので、ジャミングで邪魔される分を予め計算して 150 個の情報を送らなければ必要な 100 個のデータが相手に届かないというような感じである。しかし制アルカは心というジャミングがないので 100 個のデータを送る場合に 100 の情報を与えれば十分なのである。と、こう考えればいかに制アルカの情報伝達効率が良いかということが分かるだろう。情報伝達においては心は電波にかかるジャミングのようなもので、いってしまえばゴミである。そして制アルカはそのジャミングに囚われないのである

4－4：無生物主語

物主語ともいわれるものだが、制アルカは英語と違ってあまり無生物主語を取らない。ラルクは客観を尊重するが、言語は人間の主体的な認知に基づくものである以上、どうしても動作主には意思を持って行動できるものを取りたがるからである。従って、「風で窓が割れた」という場合、"tez dor-a tems"というように、意思を持たない風が主語に立つのは不自然である。こういう場合、制アルカでは"tems dor-a tar tez"と述べる。つまり、主語にはAが oni になってOが代わりに上がってきた tems が立ち、tez は原因格に下がるのだ。こういった操作によって、意思のないものがAから引き落とされているといえる

元々、制アルカは無生物主語を頻繁に立たせようとしていたのだが、認知主義の観点と、何より動詞の自他同形という合理性がそれを許さなかった。もし自由に無生物主語がAに立つと、動詞の自他がいよいよ区別付かなくなるからである。例えば miik met-a は無生物主語を認めなければ常識から自動的に自動詞の解釈がされるが、無生物主語を手放しで認めると、miik は何かを落とした動作主と捉えかねず、met-a は他動詞の解釈もありえてくる。すると解釈に揺れが生じてしまう。それを防ぐためには oni を復活させて、oni met-a miik というように言わねばならないが、これは煩雑である。ところが無生物主語を認めなければ miik はOから上がってきたものだとわかるため、met-a は自動詞で解釈されるのである。こうすれば解釈に迷いが生じない。もし迷いが生じるならそれは例えば主語が miik でなく、kets などの場合である。kets は意思を持って行動するため、解釈に揺れが生じる。そこで文脈で自他が判断できない場合は oni を使ったりして判断させるわけだが、無生物主語を認めるとこの手間が意思を持たないものにまで波及してしまうため、非常に煩雑である。無生物主語を認めなければ往年の自他問題は意志をもったものだけに限定することができ、非常に便利である。そういう合理性の問題もあって、無生物主語は認められないのである

但し、無生物主語を全く認めないかというと勿論そんなことはなく、実際は制アルカでも使われる。ただ、その頻度が英語などに比べるとずっと低いというだけの話である

5－1：相対的絶対

ラルクは基本的に絶対というものを認めない。この世には基本的に相対しかなく、絶対はありえないという考え方をしている

身長 155cm のリディアは 172cm のセレンより低い。これは相対的な低さである。だが、155cm という身長はそもそも一般的に低いので、155cm を絶対的な低さと考えてしまいがちである。が、これを絶対と捉えるのは誤りである。飽くまで 155cm が低いというのは誰だかわからない様々な少女と比べてのことである。比較している以上飽くまでこれも相対といえる。つまり、具体的な何かと比較する場合はもちろん相対だが、非具体的な何かと比較する場合は絶対ではなく、飽くまで相対的な絶対であるということがいえる

相対的な絶対のことをラルクでは相対的絶対と呼ぶ。ラルクは絶対を認めない。その代

わりにこの相対的絶対を認めるのである。ラルクで絶対というと、通常はこの相対的絶対を表すので注意すること

5－2：相対的絶対と制アルカ

英語の形容詞 hot は絶対的形容詞(原級)で、hotter は相対的形容詞(比較級)である。英語の場合、絶対が無標で相対が有標である

一方、制アルカの場合、「絶対」が「相対的絶対」に当たる。その上で相対的絶対が無標で、相対が有標である。従って、一見すると英語と同じである。尚、相対をマークするのは純詞の van,vin,von,evin である

5－3：nud について

相対を表す nod、絶対を表す ned を使って相対や絶対を表すことができる。元々相対的絶対が無標なら ned や nod といった表現はいらないと考えるかもしれないが、これはある種の強調と考えれば良い

例えば日本語で「カラスは黒い」といった場合、それは一般に「全てのカラスは黒い」という意味を表す。にもかかわらず日本語では「全てのカラスは黒い」ということが許される。「全て」とわざわざ言わなくても良いのに敢えて言うのは「全て」ということを強調するためである

nod や ned もこれと同じである。制アルカは無標で相対的絶対なのだから敢えて ned を使う必要はない。なのに ned を使うことがあるというのは、ned によって相対的絶対であることを強調しているのである。したがって、ned を使った文が意味重複で非文などだと指摘しないよう注意すること

6－1：自律と他律

一般に、西洋は自分で自分を律する自律文化であるが、日本は他人から自分がどう見えるを気にすることによって自分を律する他律文化だと聞く。それに関してセレンは数年前にリディアと話したことがある。セレンは日本が定住型の村社会であったことを理由に、日本の他律文化を説明した

日本人は村社会で、村から追い出されたらどうしようもないので村の者に爪弾きにされないようにした。そのため、他者に同調的になったし、ウチとソトの区別を厳しくするようになった。とにかく日本人は村の仲間から疎外されないように足並みをそろえて行動し、出る杭は皆で打ち、周りと同じになるように務めた

その結果、当然、周りの目を気にするようになり、物事の価値判断を自分がどう思うか

でなく周りが認めるかどうかという視点でするようになった。当然それは善悪の判断にまで及び、自分を律することまでも他人の目から見て恥になるか悪になるかという観点で考えるようになった

しかし都市化が進んだ現代の街に住む日本人は回り近所との付き合いもなく、集合住宅住まいになると隣人でさえどんな人か知らないということが珍しくなくなった。つまり、村社会の代替物がなくなっているのである。それは同時に自分を律してくれる他人の目がなくなったということでもあるが、だからといって急に西洋のように自分を律する自分というものを獲得できるはずもなく、現代の日本は都市部を中心に自分を律することができなくなっているのである。特にその傾向は若者に顕著である。若者は律してくれる他人を得られず、ましてや精神形成の過程で自分を律する自分さえ獲得できずにいる

律してくれる者がいない状況というのは悲惨である。まして他律文化の場合は自分が自分を律しないので、律してくれる他人がいないと殆ど精神的には無法地帯である。「旅の恥はかき捨て」などという言葉は律する他人の目を失うと無茶苦茶しだす日本人を表す好例である。要するに自分を知っていない相手ならどう思われても困らないし後にも残らないから良いやということで、恥を感じなくなるのである。他律文化で律する他人を失った精神がまさにこの諺であり、それは他律文化の脆さともいえよう

いつもは「人様が見たらなんて言われるだろう！」という恥じらいがあり、それが無法な行為を食い止めていたが、あるとき恥だなんて思う相手がいなくなれば急になんでもできてしまう。そしてそうやって育っていったのが今の一部の若者であり、電車の中で着替えたり化粧をしたり座り込んだりするような人間なのである

電車の中で化粧をして綺麗になったところで、周りからみれば「元はブスでしたってのをありありと目の前で見せてら！」と一笑に付すべきところだが、あいにくその女には周りの人間に対して恥を感じていない。ましてその女の友達なども同じようなレベルなので、まして恥という感覚はわかない。彼らは他律できていないし自律もできていない

――という内容をセレンはリディアに説いた。するとリディアは大いに納得していた。。同じ話をメルにしたところ、興味を持って聞いていて、大方納得していた

セレンは日本が他律文化だと思うし、他律が効かなくなってきているにもかかわらず日本人は少しも自律できていないと思う。その結果、律するということ自体できていないと感じている

6－2：自律文化のラルク

さて、ラルクは自律文化である。別に西洋人と目される人間が多いからそうなったわけではなく、アルシェの仕事が文化に影響を与えたのである

ソーンの方は知らないが、アルシェの仕事は孤独なものである。アルバザードにまとまって住んでいたアルバザード組はともかく、そうでない人間は常に孤独に仕事をしてきた。

仕事内容と納期が一方的に決められ、その間に仕事をこなす。なのに仲間は誰一人として傍にいてくれない。納期に間に合わなさそうでも誰も励ましてくれないし叱ってもくれない。だから、アルシェの仕事をこなすには、自分が強靭な精神力で自分を律さなければ務まらないのだ。自分が怠けようと思ってもそれを律してくれる仲間はいない。ただただ自分が自分を律することによってアルシェの仕事は全うされてきたのである

蛇足だが、次のことはルシーラとしていっておかねばなるまい。自分を律することは難しく辛い。それに使徒は大勢いる。期間も長い者はもう 10 年を超えた。にもかかわらず今まで誰一人として使命から逃げ出したり仕事を放棄したりする者はなかった。これは一重にみんなの類稀なる精神力の賜物だと思っているし、それによってセレンは常に支えられてきたと思っている。それと同時にセレンはそんな強者たちと仲間であることに誇りを持っている

6－3：自律文化と言語

自律文化であることは言語にも関係する。例えば「恥」という概念が日本語とは異なってくる。他律文化の日本は他者からみてどう思われているだろうかという視点で恥か否かを考えるが、自律文化のラルクは自分を律する自分としての立場から見て今の自分は理想の自分であるか否かという視点で判断する

したがって、極端に言えば、皆が見ている前で失敗したとき日本人は皆に失敗を見られたことが恥ずかしいと感じるのに対し、ヴァルテは失敗したこと自体が恥ずかしいと感じる。更に極端に言えば、日本は誰も見ていなければまだ恥ずかしくないと思うが、ラルクは誰が見ていようといまいと恥ずかしいと思う

従って、「みんなに見られてとても恥ずかしかったよ」というような文は日本語的であり、ラルクの感覚にはあまりそぐわない（勿論、ラルクでもみんなに見られた方が余計に恥ずかしいとは思うが）。反対に、ラルクでは「誰もいない部屋でうっかり欠伸が出て恥ずかしかった」とか「道にうっかりゴミを落としたままにしてしまい、恥ずかしかった」という表現をするが、これは日本語の語感にはそぐわない。むしろ日本語だったら「道にうっかりゴミを落としたままにしてしまい、悪かったなと思った」といって「悪い」という表現をする方が妥当であろう。しかしラルクでは間違いなくそれは「恥」なのである

6－4：カイトクレーマー

ラルクは自律文化であるが、自分が自分を律するとは少し違うニュアンスがある。実はラルクでは自分を律してくれる者を自分の頭の中に思い描いて自律をするのである。その思い描いた者をカイトクレーマー、或いは略形でキットという。これらはどちらも古アルカから使われている語である

キットは具体的な誰かであることが多く、ふつう、尤も自分と近しい者である。但し、キットは 1 人でなく複数でも良い。たとえばセレンにとってみればメルなどの近しい使徒がキットである。セレンは「あ、これはメルだったらダメだっていうかな」などと考えながら取るべき行動を判断していくわけだ

キットは大抵具体的な誰かであって、聖人でもなければ法典でもない。よって、正しいことを捲くし立ててくるだけではない。ときには励ましてくれるし、悩みをいう相手でもある。勿論それはただの想像で、実際メルがどう言うかは関係ない

ときには具体的な誰か以外がキットになることもある。小説に出てきた好きなキャラクターでも良い。とにかく自分の行動を規範したり助言したりしてくれる相手がキットになれるのである

6－5：キットと独り言

制アルカにおいて独り言とはキットに向かって話しかけることと、只の独り言に分かれる。キットに向かって話しかけても別に頭がおかしくなったわけではなく、文化的に良くみられる行為である。ただ、それでもふつうは他人が周りにいればキットには心の中で話しかける

7：言葉を重視するラルク

ラルクは言葉を珍重し、コミュニケーションはできるだけ言葉を使って行うべしという思想を持っている。この点では日本とはまるで逆である。制アルカの小説では、男が女の目を見つめて言葉もなしに落とすというようなシナリオの流れは不自然だし、男女が言葉も交わさず黙々と夜道を歩いているだけで心が通じていると考えることも不自然だ。会話がなければ関係がギクシャクしていると取られるのが自然である。また、剣道の試合で両者が向き合ったまま動かない状態に対し、日本人はそれを「間」として重視する。そしてその「間」に両者の葛藤だとか駆け引きだとかいう様々な解釈をする。しかしヴァルテの目には単に両者は向き合ったまま何もしていないと映る

言い訳にしてもそうだ。日本人はとかく言い訳をすると「言い訳するんじゃない！」といって余計に怒られるが、ラルクでは理由の説明を拒むということは大罪である。理由を言わないことも悪ならばそれを言わせないのはより悪である

日本人は悪いことをしたら理由はどうあれ自分の非を認めろと考えるが、ヴァルテは悪いことをしても本当にそれが悪いかどうかを話し合うという点から始める。そうして自分が悪いとわかったらそこでようやく反省する。つまり、反省に至る過程がまるで違う。しかも反省の仕方も対照的である。日本では謝罪と沈黙が反省を示すが、ラルクでは謝罪と適切かつ早急な賠償が反省を示す。日本では項垂れて謝罪して後は黙って下を向いている

ことが反省の正しい態度で、そこには言葉は少ない。反対にラルクでは弁明をハッキリとし、それでも悪ければ即座に非を認めて具体的に賠償するということが正しい反省の態度となる。具体的にいえば「悪いとわかってからすぐに非を認めたか」「賠償は適切か」「更生したか」という 3 点が重要であり、日本と違って俯いて小さくしていても無駄である

このようにラルクは言葉を重要視するが、そうなった原因はアシェットの構成である。アシェットは様々な文化の霊人が集まってできている。考え方も違えば生き方も違う。このような文化の坩堝にいると、自分と周りとの違いは主張しなければ誰も気付いてくれない。日本のような村社会と違ってラルクは極めて共感覚が少ないので、言わないでも誰かが察してくれるということはありえないのだ。だから我々にはとにかく主張するということ、そして相手の主張に耳を傾けこちらの考えを押し付けないということが大切だった。この「**言わなければ伝わらない**」というのはラルクの根源的な考え方である

8－1：約束

約束は制アルカで pina という。pina は promise より重い意味を持つ。また、日本語の「約束」より遥かに重い意味を持つ。pina は古アルカ語源だが、古アルカの pina はというと、元の形が後第一改定アルカから前クミール・アルカの間にできた pipina であり、これは na が「心」でなく「命」であった頃の意味であるから、「命を貫く」という意味であった。この語形はあまり長く生きず、中期アルカの始め頃には既に pina に短縮されていた。短縮の大きな原因は pina という語形の語彙が無かったため、合理性を優先させたことによると思われる。pina は「命を貫く」という意味だったが、これは「仮に破ったとしたら命を貫く＝死なねばならない」という意味が出所であった。このことを見てもわかる通り、pina は「約束」などより遥かに意味が重い

ラルクでは約束を破ることは非人道的であり、人格が破綻しているとさえ取られる。その為、ラルクでは約束を守れなくなることと破ることをきっぱりと区別する。前者はやむを得ない理由によるならば仕方がないという見方をされるが、後者は上述の通り人格破綻者だと思われる

以上の性質から、pina は「約束」よりも遥かに頻度が少ない。小さなことでは pina することはない。例えば子供に「おかし買って」とせがまれて「明日買ってやろう」と答えたところ子供に「わーい、本当？」と言われて「ああ、約束だ」と返すときに pina を使うことは言語的に不自然である

また、pina は見通しが利かないときは使われない。約束する内容が可能であると確信していることでないと pina とはいえない。見通しが効かず、上手くいくかどうかわからない事について約束するということ自体がそもそも不貞であるとみなされる。約束は他人を信頼させ、安心させる効果がある。なのに約束した本人が上手くいく確信がないのでは、「約束」という言葉の価値が薄れてしまう。それを防ぐ為にも確信がないことに pina すること

はありえないのである。従って、「籠から逃げた君の鳥は絶対見つかるよ。約束する」や「私を一生愛してくれるって約束してくれる？」において pina を使うのは不自然である。後者を日本語で言われたら束縛感と共に嬉しさがあるが、制アルカでこう言われたらかなりの束縛感とそれによる恐怖や不快感を受けることになるので、受けるイメージが随分違う

8－2：hain と veig

約束を守る者は hain と呼ばれ、約束を破る者は veig と呼ばれる。veig は数ある罵倒語の中でも極めて辛辣なものであり、人間性を否定する言葉である。英語の liar は日本語の「嘘つき」よりも遥かに辛辣だが、veig は英語の liar よりも更に更に辛辣であるので注意が必要である。反対に hain は人間性を誉める誉め言葉としては極めて程度の高い部類の言葉である

＜付録＞

最低限語彙表

代名詞

	疑問	全体	部分	弱不定(未知)	任意	選択	零	指示(oni 以外は既知)
有生	ne	do	vo	xo	fa	wo		
							u	別記
無生	to	de	ve	xe	fi	we		

		1 人称	2 人称	3 人称	4 人称(強不定)
				近 lu	
	有生	an	ti		
				遠 la	
指示代名詞					oni
				近 tu	
	無生	無	無		
				遠 li	

時相詞

過去：a
現在：i
未来：o
通時：e
過去将前相：ap
過去開始相：at
過去継続相：as
過去終了相：ak
過去存続相：an
現在将前相：ip
現在開始相：it
現在継続相：is
現在終了相：ik
現在存続相：in
未来将前相：op
未来開始相：ot
未来継続相：os
未来終了相：ok
未来存続相：on
通時将前相：ep
通時開始相：et
通時継続相：es
通時終了相：ek
通時存続相：en

・意味時相詞

命令時相詞：ac
依頼時相詞：al
禁止時相詞：oc
禁止依頼時相詞：ol
自分提案時相詞：of
相手提案時相詞：er

勧誘時相詞：ar
希望時相詞：il
反希望時相詞：ux
否定時相詞：u
可能時相詞：el
不可能時相詞：ul
意思時相詞：if
習慣時相詞：af
許可時相詞：ef
必然時相詞・断定時相詞・客観時相詞：ax
可能性大時相詞：ix
可能性小時相詞：ox
反必然時相詞：ex
必要時相詞・義務時相詞・推奨時相詞：ah
必要性大時相詞・当為時相詞：ih
必要性小時相詞：oh
不必要時相詞：eh

数

0：u
1：ko
2：ta
3：vi
4：va
5：le
6：ki
7：no
8：te
9：lo
10：kona：十
100：koso：百
1000：koke：千
10000：sen：万
100000000：ton：億

1000000000000：can：兆
10000000000000000：ron：京

格詞

ul：主格
on：対格
al：与格、終点格
il：奪格、始点格
ka：場所格
im：時格
kon：具格
ken：不具格
ok：随伴格
ek：不随伴格
evin：非同等格詞：～と同じくではなく、～とは違い
atn：近格：～の近くに、～のそばに
itn：遠格
van：強比較格：～より
des：外側格
dos：内側格
du：量格
em：1 回量格：～ずつ
fan：利益格：～のために
fin：利害格：～に利害があるように
flo：期間格：～間、～の間
ha：上格
hal：表格
hi：下格
hil：裏格
vin：同等格：強比較と弱比較の間の無比較として
ist：代用格：～の代わりに、instead of
kefa：南格
kefe：東格
kefi：北格

kefo：西格
lex：性質格：～として
lia：手前格
lii：奥格
mes：周辺格
mos：中心格
mox：接触格：くっついている、隣の、となりの、隣接した
mex：非接触格：離れた
von：弱比較格：より～でない
pa：右格
pet：外格
ker：起点方向格：～の方から
pi：左格
pot：中格
kor：終点方向格：～の方へ、toward
rak：超越格：向こうに
ras：回数格
rik：内在格：こちら側に
sa：前格
sal：積極条件格「多分～だろう。そしてもしそうなら～する」
si：後格
sil：消極条件格「恐らく～でないだろうが、もし～なら～する」
okn：交差格：～と交わって、across
ekn：平行格：～に沿って
sov：間格、between
tar：原因格、理由格
tat：周期量格：　～ごとに
tol：従事格(和合)：～と和合して、～に賛成して、～に従って
tir：結果格
tel：対立格(敵対)：～に対して、～に反対して
tet：無関係格：～と関係なく
tot：関係格：～と関係して、～の点において、～について、～にとって
var：経路格：～を通って、～通って、through
yun：比況格：～のように、like
kelt：～するくらい～。「踊りたくなるくらい嬉しい」
kont：～しながら、～しつつ、～している間に

milt：～すればするほど～。「会えば会うほど好きになる」
zan：目的格：「～するために」

純詞

ilp：修飾語句が被修飾語句全体にかかるということを表す純詞
ax：絶対そうだ
os：否定純詞
om：いつ、when
am：どこ、where
es：なぜ、why
ak：どのように、どのような how
ix：かもしれない、可能性がある
as：心理甚大純詞：～も、～さえも、～すらも、～までも、こんなにも
is：心理甚小純詞：～しか、～だけ、～ばかり、～ぽっち
aal：特に、際立って
ilm：～し飽きる
alt：別の、他の
ind：～するのに疲れる
at：良いということを示す純詞
it：悪いことを示す純詞
me：もう一度
ca：強調を意味する
da：何度も、連続で
das：推奨、勧誘、～したほうが良い
den：もう 1 つの否定純詞
dep：禁止
diin：とにかく、いずれにせよ、ともかく、何はともあれ、それにしても
dop：許可
emii：野卑、～しやがる
en：不可能
ens：できる限り～する
ex：ありえない、絶対無い
eyo：不確定(ユンク)
fal：義務

fex：勧誘、Let's、～しようよ
foa：昨日
foi：今日
foo：明日
fil：随意
ai：最終的に、結局、ついに、とうとう、ついには、ついに、終に、遂に、しまいに、ようやく、ようやっと、やっと、finally、at last
hao：当然、言うまでもなく
kaat：そもそも、始めから、元はといえば
kat：開始
kik：～するようなものだ。実際はそうではないが、そう取られても仕方のないことを示す
kes：次の
kit：完了、終了
kos：1 つ前の
lal：詠嘆
lam：初めて
lap：希望
lip：懸念
nolt：習慣（社会レベル）
nelt：癖（個人レベル）
lon：推量
len：やはり、思ったとおり
ma：変化、～に変化して
mi：不変化、～のままで
nanan：冗談を表す、なんちゃって
nee：相手に情報を知らせると共に、その情報が注目すべきという特別な気持ちを示す
nii：～してやる
no：疑問純詞
non：反語純詞
on：可能
ox：多分ない、可能性はありえる、もしかしたらそうかもしれない
pen：ますます、一層
pina：約束
rak：～すぎる
rek：～に失敗する
rok：～に成功する

san：事態に対して肯定的・好意的意味を添える
se：弱複数
seer：命題内容に対する感謝を示す
sei：不確定(非ユンク)
sen：そうではなくて、そうじゃないなら
sete：確認的な疑問(ユナ・ユンク)
sin：事態に対して否定的な意味を添える
so：近似複数
son：ならば
tan：他含意、～も
ten：伝聞、～らしい
tin：これも強調
tio：ただ、単に
tisl：ご存知のように
toi：いつのまにか、何時の間にか、いつの間にか、いつのまに、いつしか、気づいたら、気付いたら、そういえば、そういや、何時しか
vas：甚大、概数の強
vis：甚小、概数の弱
via：おおよその、約～、大体の、おおまかな、概して、概～、大まかな、殆ど、～に近い
vin：～さえも、～すらも、～までも、～でさえ
ven：自発
von：意思
wen：など、等、エトセトラ、etc
xaf：責任、～する責任がある
xat：必要
xep：困難、～するのが難しい
xet：無用
xif：責任を追わずに～する
xil：経験があって～する
xink：実は、実を言うと
xop：容易、簡単に～する
yus：様態、～するようだ、～するようにみえる
atk：更に良いことに
fak：更に
itk：更に悪いことに
dyussou：～様（男性に対して）

liiz：～ちゃん（少女に対して、もしくは可愛いと思っている女性に対して）
luu：～さん（女性に対して）
rau：苗字に付ける敬称
sou：～君（男性に対して）
xav：未知・初出を示す
yuna：～ちゃん（美しい幼女に対して）
yunk：～さん（美しい妙齢の乙女に対して）

接続詞

del：同格接続詞：A del Bで、「A という B」という意味
an：強連言。ふつう/で代用する
anon：雑談接続詞、雑談の切り口として使われる
e：修飾を導く
hai：話題転換、さて、ところで
in：弱連言。ふつうツンクで代用する
or：強選言
ova：例示、例えを挙げる。比喩ではない
pal：以下が複線であることを示す
er：弱選言
vol：順接
tal：逆説
tie:修飾始点
til：～だけれども、～なのに、～のに、～にもかかわらず、though
tun：修飾終点
tex：以下が情報やデータであることを示す
too：反実仮想
zepl：以下が本論とは違う脱線内容であることを示す

関係詞

一般関係詞は格詞に s を付けたものである

un：ul の関係詞

en：on の関係詞
ut：先行詞 us を内包
imt：先行詞 im を内包
tart：先行詞 tar を内包
kast：先行詞 ka を内包
toxt：先行詞 tox を内包

独特の感動詞と挨拶表現

dacma：はじめまして
doova：さようなら。一旦別れる際に言う言葉。「行ってきます」「行ってらっしゃい」「また明日」「じゃあね」などもこれに当たる
alkyunk：任せろ、平気だ、大丈夫
altoo：あのね、えーっと
alva：気をつけて。自分に対する気を引き締めろという言葉にも使える。2 度いうと意味が強くなる
andeteo：完全に自分の非を認めた謝罪で、責任は全て自分にあると認めた言葉。事態の大小は問わないが、その代わりよほど自分が悪いと思わなければ言わない
arkas：言葉遣いが悪いぞ、その口の聞き方は何だ、そのアルカは間違っている
arte：神よ！ヴァルテは全員使えるが、主にアルシオン派が使う
at：いいねぇ、おいしい、いい匂いなど、プラスを表す
atta：よかった、危なかった、セーフ
atte：がんばれ、ガンバレ
ax：はい、yes
baan：馬鹿！
dexal：うそーっ！　皿をうっかり落としたり、高いつぼを割ったり、そんなバカな！と驚いて思うような気持ち。事態を認めたくない場合に使う
depente：貴方の幸せを祈ります、早く良くなってね
doo：じゃあね。doova の略形。doova よりくだけている
ee：あんがと、サンキュ、どうも。seere よりくだけている
elt：神よ！エルト信者が使う
en：うそっ！、ありえねー
didn：気楽にいこうぜ
dii：ねぇ。好きな人への呼びかけ。性別は問わない
estol：よろしくお願いします

farna：ゆっくり休みなさい、安静に、お大事に
fatoo：ご苦労様、お疲れ様
haai：やあ、やぁ
haan：なるほど、ああそうか(ゆったりとした驚き)
hacka：お誕生日おめでとう
hel：あ、思い出した
hwa：わーい
iio：どういたしまして
ion：どういたしまして、iio より軽い
it：ヤダ、悪い、まずい、くさいなど、マイナスを表す
kekko：ようこそ
kekkokekko：ようこそいらっしゃいました
ketta：さぁ、さあ、さぁさぁ！相手を促す
kilm：今だ
lala：おやまぁ、なんてこった。悪い意味と共に使う
lee：ねぇ。nee の幼児語。甘えるときは大人も使う
leen：lee を更に甘くしたもの
lot：そうか、なるほど。haan はゆっくりした「あぁ、そうかぁ」みたいな理解であり、lot は「あっ、そうか！」みたいな速い理解
lulu：おやまぁ：良い意味と共に使う
melka：明けましておめでとう（メル暦の新年に使う）
mik：いい加減にしろ、止めろ
myulla：がっかりだ
nee：ねえ、呼びかけ
oca：こら、ゴルァ
on：そうかもしれない、ありえるね
onxan：ありえるね
oon：やあ、やぁ、よっ！
ons：了解、かしこまりました
paam：かっこいい、かわいい（見た目の優れていることを指す。恋愛対象になることのない相手の容姿を誉めるときにしか使わない）
varma：かっこいい、かわいい。恋愛対象としてみる相手にしか使わない。varma と相手にいった場合、私は貴方に気がありますというに他ならない。無論、恋人にいう場合はこちらを使う
passo：大丈夫、オッケー、いいよ
apen：あきれた、まったくもう、どうしょもないね

pent：残念だ、ごめんね。自分が悪いというより相手に同情を示している
misoonoyun?：ご機嫌いかが？soonoyun?より丁寧で、挨拶の中では尤も丁寧
onx：ありがとう、感謝感謝
ret：お願い！
saa：ちょっとまって、えーっと
saal：神よ！サール信者が使う
see：まぁまぁ（なだめる）
seere：ありがとうございます
sent：ありがとう。相手の行為を歓迎する気持ちを表わす。seere より頻度が高い
soono?：こんにちは。soonoyun の略形で、当然 soonoyun よりくだけている
soonoyun?：こんにちは。きちんとした挨拶。時間を問わずに使える
tee：いいえ、いや。teo よりくだけていて日常的。加えて teo ほど語気が強くない
tea：その通り
tei：違う
teere：いいえありがとう、ノーサンキュー
teo：いいえ
tetta?：ねぇ。非常に丁寧な呼びかけ
tetto?：tetta?を子供っぽくしたもの
tiati：愛してる、好きだよ
tiatis：さようなら、また今度。恋人同士が使う。別れるという意味はない
tittatitta?：いい子いい子。子供をあやすときに使う
tixante?：もしもし
tua：はいどうぞ
uude：ご愁傷様です、残念です、かわいそうに、我慢して
uwa：こらっ
vak：いけいけ、やっちゃえ、いいじゃん
vant：ごめん、ごめんなさい、すいません、すみません、どうも、悪かった。vantant の略形で、vantant よりくだけている。ふつう使われるのはこちら
vantant：申し訳ありませんでした。公的な感じの謝り
wei：おい、ねえ。nee より親しい間柄で使う。2 回繰り返すこともしばしば
xante?：すみません、あのー、ちょっといいですか？
xi：消えろ、死ね
xidia：おやすみ。寝る相手に向かって言う言葉。別に昼でも良い
xiia：ダーリン、ハニー。恋人に使う呼びかけ
xilma：安らかに、ご冥福をお祈りいたします
ya：肯定のうん。ax より軽い

yaa：痛い、熱い、冷たいっ、寒っ、暑っ、臭っ、うるせー、などのマイナスの意味を示す
yau：いたっ(幼児語)、イヤだ(幼児語)
yun?：調子はどう？という意味や、何か物を探しているときに「見つかったか？」というような意味を持つ感動詞。非常に応用範囲が広い。必ず疑問文で使われる

幻字の名称

t：tes(電気 tes から)
k：ket(猫 ketto から)
x：xal(存在 xal から)
s：sol(行為されたこと soal から)
n：nim(色 nim から)
v：vin（下弦の月 viine から)
f：fox(文化交流・摩擦 fox から)
m：mir(論理 miir から)
d：dur（上弦の月 duurga から)
g：gat(門 galt から)
p：par(太陽 paparura から)
b：bel(料理 kyubelii から)
h：hac(使徒ハルマ hacma から)
y：yun(鳥籠姫ユンク yunk から)
c：cuk(皇女ルーキーテ cuukiite から)
r：rus(月司ルシーラ rsiila から)
z：zam(木 zamo から)
j：jok(吉な方向 joks から)
w：wit(挨拶 wit から)
l：lex(知識 lex から)
a：aa
i：ii
o：oo
e：ee
u：uu

曜魔

velm：闇
erva：水
satii：風
teeve：土
beezel：火
ilva：雷
part：光
soom：ソーム、七曜の悪魔
soot：一週間

『赤アンクノット』の幻字

以下に『赤アンクノット』に収録された幻字の音と意味を並べた表を掲げる
音が２つある場合、左のほうが右より古い語形である。また、（古）とあるのは『赤アンクノット』を作成したとき、或いはその作成過程で既に使われなくなっていた語形である
以下の表に載せたのは名詞や動詞や形容詞などの一般の語・エクスプローダー・前置詞である。更にその後に古アルカの音象徴のうち、『赤アンクノット』に収録されたものを載せた。ただ、以下の表はできるだけ『赤アンクノット』に忠実にしてあるため、書いてある内容の意味が分かりにくい点があるかもしれないということを予め注意しておく
尚、幻字の画像も続けて収録した。幻字の画像の番号は幻字の音と意味の表に付された番号に対応している

古アルカ幻字表

t¥1：デル・アン：私（男）
k¥1：ノン：私（女）
x¥1：ル：それ
s¥1：ルッソ・デュッソウ：あなた（男）
n¥1：ティス・ティッス・ティット：あなた（女）
v¥1：ソウ：彼
f¥1：ルウ：彼女
m¥1：ジャン・ナ・バ：不正確
d¥1：ティロン：正確

g¥1：ヘルパイ：「々」と同じ
p¥1：アシュ：ＹＥＳ
b¥1：テオ：ＮＯ
t¥2：テームス：永遠の
k¥2：ク：口
x¥2：イ：目、右
s¥2：エ：左
n¥2：ト：鼻
v¥2：へ（古）・テ：耳
f¥2：イニ：毛
m¥2：パル（古）パ（古）：前の、未来の
d¥2：ヌチ（古）：後の、過去の
g¥2：クム（古）クキ：錠
p¥2：ン（古）：沈黙
b¥2：モノ：壁、止める
t¥3：ランツェ（古）・ランツァ（古）・ランティス・カタル（古）・リベラル（古）：霊人
k¥3：ユーマ（古）・ヒューマ（古）：人間
x¥3：マタロ（古）・ラート（古）：死
s¥3：ホロ（古）ルー：動く
n¥3：クト：鳥、羽
v¥3：ルド：価値
f¥3：ドル：価値のない
m¥3：セェル：中心の
d¥3：カルテ：ＷＨＥＲＥ、ＰＬＡＣＥ、ステージを表す
g¥3：イマ：ＷＨＥＮ、ＴＩＭＥ
p¥3：ネエ（古）：ＷＨＯ
b¥3：アル：ＷＨＡＴ
t･4：コモ（古）・イオ：ＷＨＹ
k･4：モコ（古）・ウイ（古）：ＨＯＷ
x･4：クム：動物
s･4：ムム：植物
n･4：ニア：休む、座る
v･4：アニ：疲れる
f･4：ホ：骨、関節
m･4：ノ：爪
d･4：ワ（古）：手

g･4：チ：腕
p･4：ルァ：足
b･4：ジ：指
t･5：ケア：治す
k･5：シュ：背中
x･5：キム：曲げる
s･5：キリ（古）：切る
n･5：ザナ：立つ
v･5：ルク：歩く
f･5：クイ：食べる
m･5：カロ：少ない
d･5：ルナ：走る
g･5：クツ（古）：飲む
p･5：ヴァノ：守る
b･5：ヴァニ：攻撃する
t･6：ヴァス：対抗する
k･6：ヴァデ：負ける
x･6：ルヂ：跳ぶ
s･6：ルテ：浮く
n･6：ルファ：飛ぶ
v･6：ヴァテ：とじ込もる
f･6：ンヴァ：囲む
m･6：ロ：頭
d･6：エル：顔
g･6：ヂ：顎
p･6：ポ：首
b･6：フ：肩
t･7：ス：肘
k･7：ケ（古）：手首
x･7：ヤ：胸
s･7：ガー：腹
n･7：セ：腿
v･7：ヌ：膝
f･7：ヲ（古）：足首
m･7：マ：すね
d･7：ミ（古）：ひかがみ

g･7：ソ（古）：土踏まず
p･7：アー：腰
b･7：ウ：尻
t･8：メネ：王女
k･8：ネェメ（古）：姫
x･8：ホノ：固い
s･8：ホケ（古）・ホーミ：柔らかい
n･8：テトナ：関係
v･8：ミュカレ：嘘の、宗教の
f･8：ディア：儚い
m･8：ガコン：「完了」の意
d･8：シ：甘い、手加減
g･8：ヤユ：毒
p･8：ラ・ミ：強調、特に
b･8：テル（古）：吹く
t･9：ファイ：炎
k･9：エリア：水の
x･9：イーレ：雷の
s･9：テーゼ：風の
n･9：トゥーノ：土の
v･9：イマ：時の
f･9：リブロ：命の
m･9：エビデ・プロパータ：悪の、善の
d･9：カ：辛い
g･9：：ム：すっぱい
p･9：ヒ：しょっぱい
b･9：ギュ：苦い
t･10：ヒュノ：霊の
k･10：ラ：魔
x･10：ノワ：気の
s･10：アルマ：アルマの
n･10：ナム：心の、気持ちの
v･10：ナ：感じる
f･10：デ・ナ・ジャ：ハイフンで形容詞と名詞の接続などに使う
m･10：ロ：ＡＮＤ
d･10：ヴァル・タイル・ケン：しかし

g･10：チテ：速い
p･10：チシ（古）：ゆっくり
b･10：テチ：遅い
t･11：カルア：海
k･11：カルト：森
x･11：カルス：砂
s･11：カルワ；山
n･11：マイケニカ（古）：同じの
v･11：マイケ：単なる
f･11：デスパ：封印の、禁止の、カギ
m･11：リ：生命の息吹
d･11：リエ・レリイ：酒
g･11：ヴィク（古）・ヴァイ：男
p･11：ミン：女
b･11：ヒュ：高い
t･12：モス：低い
k･12：ユファ：痛み
x･12：エーホ（古）：氷
s･12：カルモ（古）：地
n･12：ヴィヴィ：強い
v･12：ニョヘ：弱い
f･12：ジ・ジナ：天
m･12：ミャエ：騙す
d･12：カルク：地震、揺れる
g･12：エショ：洗う
p･12：チョ：みがく
b･12：ラープ：特に良い、願い
t･13：ヒュク：登る
k･13：モク：降りる
x･13：ヒノ：忍耐と根気、〜のために
s･13：ケノ：〜の
n･13：ユ（古）・ジュ：受ける
v･13：ケル〜ブ・ケル〜トゥ：事
f･13：ラット・ラップ：「よい」のやわらかいもん
m･13：ヤーモ：悪い
d･13：ラップ・ラット：組み合わせ

g･13：ケラ：方向、向ける
p･13：クリブロ・ハァベ：生物
b･13：ルーノ：無生物
t･14：ミナ：花
k･14：テンペラ：「！」
x･14：クーノステイラ：「？」
s･14：ヴァラエ：嫌い
n･14：シナ・シーナ：好き
v･14：ヴァク（古）：攻撃する（殴る）
f･14：チル：持つ
m･14：ララ：やなもんが降ってくる
d･14：ルル：やなもんを塞ぐ
g･14：コロ：精神の、金の
p･14：ケテ（古）春、東
b･14：ケファ（古）：夏、南
t･15：ケエ（古）：冬、北
k･15：ケリ（古）：秋、西
x･15：カマ：多い
s･15：ミイ（古）・イミ（古）：有
n･15：ホミュ（古）・ケム：扉、未知の
v･15：ジグ：選ぶ
f･15：ミヴァ：子供
m･15：ザモ：木の
d･15：ケコ：来る
g･15：ケタ：行く
p･15：バケ（古）・トゥ：ＴＨＩＳ
b･15：ビケ（古）・ルゥ：ＴＨＡＴ
t･16：ワケ（古）・ジケ（古）・アフ：ＩＴ、それ
k･16：ベケ（古）・バオケ（古）・ラトゥ：ＨＥＲＥ
x･16：オケラ（古）・ラルゥ：ＴＨＥＲＥ（あそこ）
s･16：オケ（古）・ラフ：ＴＨＥＲＥ（そこ）
n･16：リズク（古）・リズ：細菌
v･16：リーズ：小さい
f･16：カイ：大きい
m･16：ダイズ：王の
d･16：アイライ：スライム、ぬめぬめした

g･16：イフィ：老いた
p･16：イフェ（古）・イフ：若い
b･16：ヘギャ（古）・ギャヘ（古）：音の
t･17：フィ：長い
k･17：フェ・フ：短い
x･17：ダイズアイライ：突然群発して種を減らす
s･17：イフィ：気長だ
n･17：ロキ：気の狂った
v･17：ビヴィット（古）：まこうの
f･17：コタ：反対の
m･17：ココ：同じの
d･17：ミュル：鏡の
g･17：イシリウス・ミュルコタ：リフレク（魔）
p･17：セド：消す、省略
b･17：ヒャ：期間、間
t･18：ヴォ（古）・ソ（古）：魔法を使う
k･18：ヴォ（古）：撃つ
x･18：フォ（古）：解く
s･18：ジョ（古）：放つ
n･18：バルグ・バオグ；拳の
v･18：ニョヘヴィク：弱虫
f･18：シャ（古）、シャル：いる、ある
m･18：リメール：初めて、処女
d･18：ベンチャス（古）・ベース：最後の
g･18：イテ：会う
p･18：ルーミ：無い
b･18：ミュオ：離れた
t･19：パラメキア：乗り物の
k･19：ゾ（古）：（魔法）をかける
x･19：ギギ・ギーラ：金属の
s･19：ナモ（古）・ラル：死の
n･19：ククリ：言葉の
v･19：サベ：服の
f･19：ニム：色の
m･19：ビャツ：ゴミの
d･19：チャール：大切な

g･19：ルーファイ（古）：熱心な
p･19：ルーエリア（古）：さめた
b･19：ケルケ：逆さまの
t･20：ゼゼン（古）・ゼン：学の
k･20：リミ（古）・リン：綺麗な
x･20：エーヤ：汚い
s･20：ラグナ：機械
n･20：エリ：血の
v･20：ファイル：怠けた
f･20：ゼロ（古）：脳の
m･20：カシュ：法の
d･20：カツ（古）・カサ（古）・カサ・カツ：紙の
g･20：カヤ：難しい
p･20：ヤカ：易しい
b･20：ファイクム（古）・ファイクム・ファイィクム・ファイア：ファイア（魔）、火刑
t･21：ニョエ：薄い
k･21：ツル：相互の
x･21：ルーツ：主観
s･21：シャイ：客観
n･21：ギャケリ（古）・レム：音楽
v･21：ヨツ（古）・フォツ：解放する
f･21：ギヨ（古）・ヤーヨ：結ぶ
m･21：ホホ：塊
d･21：パール：光の
g･21：ミュパル（古）・ヴェル：闇の
p･21：ニョギュ（古）・ニータ：優しい
b･21：ヴィギュ（古）・ブルタ：厳しい
t･22：ゼシュ：医師
k･22：ロキ：わかる、ＵＮＤＥＲＳＴＡＮＤ
x･22：ポヴィ：しめる
s･22：エタ：くむ
n･22：エコ（古）・タエ：そそぐ
v･22：ピュツ：薬の
f･22：ミョイ：磁気の
m･22：シュショ：習う
d･22：チョヨ（古）・ピヨ（古）：つつく

g･22：チョヴォ（古）・ピヴ（古）：つく
p･22：チョチョ（古）・ピピ（古）：さす
b･22：ルツ：個人
t･23：カルブ：世界、～界
k･23：エモ（古）・ナモ（古）・ブルー：悲しむ
x･23：ナヒュ（古）ニルー：喜ぶ
s･23：ヘカ（古）・ヘーカ：伝える、手紙
n･23：ヘク（古）・ヘーク（古）：教える
v･23：ブサ（古）・メッサ：袋
f･23：ブパ（古）・ホーサ（古）：器
m･23：ロブ（古）、ルーパ：かぶる
d･23：モブ：うめる
g･23：ロコ：考え
p･23：チョギ（古）・ピーキ：剣、スマートな
b･23：ザモザモ（古）・ザモン：杖、おだやかな
t･24：ヴィヴォ：斧、力強い
k･24：アヴォ：ロッド、知的な
x･24：フーギ：短剣、鋭い
s･24：ロヨ（古）：手裏剣
n･24：ラクヨ：熱い
v･24：フィギ：槍、紳士的な
f･24：ヴォザモ：弓、すばしっこい
m･24：ヴォル：にぶい
d･24：メチ：ムチ、しなやかな
g･24：フィヨ：スピア、油断の無い
p･24：パララ：数
b･24：リール：原子
t･25：リーツ（古）・リン：～系
k･25：ゲジ（古）・ニール：リング
x･25：ゲキ（古）：回転
s･25：ゲケ（古）・ニーゲ（古）：ループ
n･25：ゲタ：螺旋
v･25：ケリャ（古）：追う
f･25：ケリュ（古）：逃げる
m･25：イツ：場合
d･25：シリ：恵む

g･25：デペンテ：祈る
p･25：ウーデ：我慢する
b･25：ドゥルネ：真夜中
t･26：モパ：朝
k･26：ヴィード：夜
x･26：ヒュパ：昼
s･26：ミュパ：夕方
n･26：ジュ（古）・ユー、ヴィ：病にかかる
v･26：ヴァミュ（古）・ミューヴァ：暴れる
f･26：ドゥルガ：上弦の月
m･26：ヴィーネ：下弦のつき
d･26：パパルラ：太陽、光、輝く
g･26：ケンペ（古）・リーファ：星
p･26：タタ（古）・タンタ：外の
b･26：ココ（古）・コンコ：内の
t･27：リャ（古）・アトゥ：近い
k･27：リュ（古）・アルゥ：遠い
x･27：ワス・ワホ：れんが
s･27：ホス：石
n･27：ブス：陶器
v･27：ワワ（古）：四角の
f･27：ゲゲ（古）・ガガ（古）：三角の
m･27：ボボ（古）：直線
d･27：ゲゲ（古）：円
g･27：ヒュゲ（古）：魔方陣
p･27：ギル：金の
b･27：ヂホ：牙
t･28：ンヤ：ＹＥＳ、うん
k･28：カルリ：島の
x･28：ヴィクゥミュカレ（古）：ペシミスト
s･28：ミンミュカレ（古）：
n･28：ロリ（古）：足りない
v･28：コヴェ：箱
f･28：コバ（古）：筒
m･28：パ・ルパ：道
d･28：シカ：平らな、正直な

g･28：エオ：でこぼこな、卑怯な
p･28：セヌー・ヌー：こんぼう、古い
b･28：セダ：刃、新しい
t･29：ミュクリ：生贄
k･29：ヴィパ：エネルギーの力
x･29：クーポ：虫
s･29：フゥ：1
n･29：ヨゥ：2
v･29：ヴィ・ビ：3
f･29：ボン・アル：4
m･29：チョン：5
d･29：アオ（古）アン：6
g･29：ザン：7
p･29：ヘン：8
b･29：ロン：9
t･30：ユー・ト：0
k･30：トント：特殊
x･30：ジャシャ：太った
s･30：リシャ：やせた、細い
n･30：イル（古）：しばしば、たまに
v･30：ヒュシャ（古）：将軍
f･30：ヴァシャ（古）：兵士
m･30：ロホ（古）：かぶと
d･30：ヤホ：よろい
g･30：ワホ（古）：小手
p･30：ケタルファ：とび出る
b･30：リャジ（古）・アトゥジ：触る
t･31：ハイ：ＷＥＬＬ（さて、ところで）
k･31：ホケリャジ：撫でる
x･31：シカク：告白
s･31：カヤク：対論
n･31：シク・アルル：勧誘
v･31：ミュシャ：穴
f･31：ミュツ（古）・ミューテ：わける
m･31：テスラン・イーレファイ：電気をつける
d･31：ワポ（古）・ワルポ：渡す

g･31：ナチョ（古）・ニーナ：楽しい
p･31：ナニョ・ブーナ：つまらない
b･31：エナ：泣く
t･32：ルチョ（古）・アピア：意味する
k･32：ナチョク：笑う
x･32：ヒュク：誉める
s･32：モク：けなす
n･32：イマイ：計る
v･32：フゥ：もし
f･32：パ・パン：べし
m･32：エン：できる
d･32：ヒュロ：表
g･32：ヅル（古）・アッヅ：壊す
p･32：ファイヅル：爆発
b･32：クウ：運動
t･33：ヴァシャクウ：訓練
k･33：スーファオ：落胆
x･33：セドファイ：消火
s･33：ダジ（古）・アルク：助ける
n･33：ミダ（古）：聖
v･33：メリ（古）：糸
f･33：メリ（古）：紡ぐ
m･33：ハルマ：使徒
d･33：シキュ（古）・ラーラ：母の
g･33：キャン（古）・アーン：父の
p･33：ボル（古）・アル：～と、～すると
b･33：ピン・ピッピ：ＢＥＣＡＵＳＥ
t･34：ユエ：酸
k･34：ブツ：塊の
x･34：ニョヂ（古）・ヂーン：歯
s･34：ヒブツ：塩
n･34：ソッカ：ＤＯ
v･34：ソクカ：交差する
f･34：ギャケリク：歌う
m･34：ビャッカル：遺跡
d･34：キル：銃

g･34：ピナ・ピロ：約束
p･34：ハ：しっぽ
b･34：ヅプ（古）・ハーン：なる
t･35：ジプ（古）・アーロ：器用
k･35：プジ（古）・ローア：不器用
x･35：ティンカー：とても
s･35：ノイド：の様に・比べる
n･35：マイン：体
v･35：ジッポ：頼む
f･35：ホツマ：～だけ
m･35：ライザ：迷う、困る
d･35：ヴェム：恐れる
g･35：パーム：勇気
p･35：エミュ：油、べとべとした
b･35：ルート：必ず、多分、きっと
t･36：チルマイン：抱く
k･36：ワタ：売る
x･36：ワコ、タワ：買う
s･36：ウランセ：射つ
n･36：ニンフ：段
v･36：アーシャ：殆ど
f･36：イーオ（古）・セレ・エーン：ありがとう
m･36：イーオ・イーオン：どういたしまして
d･36：ルタ：出る
g･36：ルコ：入る
p･36：ヒュロ：堅い
b･36：モロ：愚かな
t･37：クルル：作る
k･37：ジジ：設ける・置く
x･37：ポト：ＩＮ
s･37：ムル：ＦＲＯＭ
n･37：ペン：いっそう、ますます
v･37：ニャ：軽い、おろす
f･37：ビュ：重い
m･37：ルッケ：超えた
d･37：ビョ（古）・ドーバ：次の

g･37：バイミ：特に無い
p･37：チチ（古）・ババ（古）・ルーラ：友達、～の間に
b･37：イシュ：読む
t･38：ジェイ・ジェ：まだ、いまだに
k･38：リムルル：性の
x･38：サプリ：気体の
s･38：ユッケ：～のようだ
n･38：セレン：静かな
v･38：ジラ：決める
f･38：ゥラ：関係詞
m･38：ロム：継承詞
d･38：ツンク：よみはない
g･38：デ：ーと同じ読みかたでいい
p･38：マノム：疑う
b･38：チュ（古）・ユラ：必要
t･39：ヒョ：当然
k･39：ヴ：意志
x･39：ヱ：使役、～させる
s･39：ペ：くやむ
n･39：イホ：確かめる
v･39：ヲ：例え
f･39：ゴ：欲望
m･39：イミュ：珍しい
d･39：イズゥ・イズ：反復
g･39：キョ：演じる
p･39：ジョ：怒る
b･39：ティア・ティーア：愛
t･40：ファル：義務、強制
k･40：ニュ：ちがった
x･40：フ：許可
s･40：チュウ：恥ずかしい、助平
n･40：ヘルツェ（古）・エッセ：助平、（俗）エッチ
v･40：チュルチェ・レーチュン・テステェル：レズビアン
f･40：ヴァイラ・ポンノ：ホモセクシャル
m･40：ガ：否定
d･40：ムム（古）・ムンム：あやふやな

g･40：ミュラ・ミュウ：嘘
p･40：ルリ：本当
b･40：ッン：なんかＯＲする
t･41：ミソ：試す
k･41：ベーブ：臭い
x･41：トテ：匂い
s･41：リート（古）：良い匂い
n･41：ヌエ：丁寧に
v･41：テン：千
f･41：カルキ：裂け目
m･41：クララ：食物、料理
d･41：ヒュシャ（古）：優れた
g･41：ト：結び
p･41：ゴ（古）ゴール（古）：お願い、ＰＬＥＡＳＥ
b･41：シャル（古）・シャルル：経験
t･42：テアトル：木っ端微塵にする
k･42：ルーイーレ（古）：はじけた、いっちゃってる
x･42：カイトクレーマー、キット：もう一人の自分
s･42：ピーキプーギ：有罪、罪、犯人
n･42：ヌゥオ：落胆
v･42：ヌエ：沈んだ、沈む
f･42：カルヌ：水面
m･42：セレンス：警告、命令
d･42：キカル（古）・キート：始める
g･42：セェルザモ：軸、芯
p･42：ファイガーベ：火薬
b¥42：ガーベ：材料
t･43：アルシェ・カーデ・ソーン
k･43：ハノイ：塔
x･43：イル：全て
s･43：パッソ：そうである
n･43：ドルーヤ：館
v･43：コッコ：ＷＩＴＨ
f･43：ミロク：神
m･43：アセン：反省な
d･43：ロキコヴェ：オルゴール

g･43：ギノ（古）：爪
p･43：ギラルド（古）：ベル
b･43：ナォ（古）：リュート
t･44：キケロ：おかしい
k･44：ホーラ；赤
x･44：プスホーラ：青
s･44：ジーク：ショック
n･44：アルカ：アルカ
v･44：アトラス：アトラス、その星そのもの
f･44：アン：指示語のそれ
m･44：フト：摘む、取る
d･44：ローロ：管
g･44：テク：葉
p･44：ヨル：使う
b･44：ユンク：鳥籠姫
t･45：アルシェ：アルシェ専用語
k･45：ウヌス：死刑
x･45：ビュギ（古）・ラービュ：碇、妨げる
s･45：フオ：残酷
n･45：イヒ（古）：くりぬく
v･45：ハウ（古）：尻叩き
f･45：ユウカ（古）：皮をはぐ
m･45：ルシロ：家
d･45：ウヌスウヌス・アルウヌス：お家断絶
g･45：ラト：どの、ＷＨＩＣＨ
p･45：ムン（古）・ムルグ：具合、様子
b･45：メルモ：回り
t･46：ラーヴァ（古）：騎士
k･46：エーステ：名
x･46：ミユ：変わる
s･46：アノネ：あのね
n･46：アルゲノム：妹が自分と同じ
v･46：パルサー：蛍
f･46：イルパッソ：そりゃそーだ
m･46：エマ・エス：雨
d･46：パフィ：橋

g･46：エスパフィ：虹
p･46：サ：着る
b･46：ギンサ：パンツ
t･47：ルシーラ：司る、操る、マスター
k･47：ミール：頼る
x･47：クミール：理論、論理
s･47：リーベ：そよぐ
n･47：ミレー：舞う
v･47：ミレーヌ：踊る
f･47：ミンウ：しなやかな
m･47：オ：距離
d･47：ルーン：地下
g･47：オヴィ：討伐
p･47：ヴィ：力
b･47：ガーヴィ：根性
t･48：ルフ：身軽な
k･48：シルフ：しなやかな
x･48：ライファ：イーファのひきいた方
s･48：デルヴァイ：でしゃばり
n･48：シャ：味
v･48：シム（古）：甘酸っぱい
f･48：シヒ（古）甘塩
m･48：ギュム（古）：甘酸っぱい（腐ってる）
d･48：ギュカ（古）：苦辛い
g･48：ヒカ（古）：辛塩、塩辛い
p･48：カヒ：罪
b･48：クハ：舌
t･49：アルケコ：引く
k･49：アルケタ：押す
x･49：ゲノム：嫉妬
s･49：カリル：墓
n･49：クルルカリル：独裁者
v･49：イズミユ：革命
f･49：ティクノ：竜
m･49：リーズリーズ・アルリーズ：メル
d･49：ラリーズ：チビ

g･49：アルクユンク：まかせろ、大丈夫、平気（俗）
p･49：ヤガー：男の胸
b･49：クッキ：変な
t･50：ハティア：恋愛
k･50：ヴーマ：統計
x･50：ネンテ：確率
s･50：ダス（古）：警告
n･50：トーキ：終わる
v･50：ステェルニア：アヒル座り

＜エクスプローダー＞

男読み	女・子読み
f･50：マル	ラン・イィ：希望
m･50：ナ	ナ：禁止
d･50：フゥ	フゥ：仮定
g･50：パ	パァ：妥当（強）、～したほうがよいぞ
p･50：レ	レ：命令
b･50：エン	エン：能力可能
t･51：ヌ	ヌン：依頼
k･51：ノ	ノン：疑問
x･51：ノンノ	ノンノ：反語
s･51：ユ	ユン：比況
n･51：ナム	ナムゥ：自発
v･51：ロ	ロン：推量、だろう
f･51：ソ	ソン：完了、～し終わった
m･51：ム	ム：勧誘、弱命令
d･51：ジュ	チュ：受身
g･51：ボル	フォル：条件、～すると
p･51：ラ	ラ；断定、強調
b･51：ル	ルン：習慣、したもんだ
t･52：ヒュ	ヒュー：恩行、～てくれた
k･52：ヘク	ヘクゥ：授与、～てあげる
x･52：ジ	ジン：譲歩、～した方が良い
s･52：チュ	チュウ：必要、～する必要がある
n･52：デ	テム：祈願、～てくれますように

v･52：パ　　パァム：勇気、思い切ってする
f･52：ヒョ　　ヒョム：当然、すべきだ
m･52：イ　　イィ：目算、見たものの推量
d･52：マノ　　マム：邪推、～するのではなかろうか
g･52：ヘ　　エ：音推、聞いたものの推量
p･52：テ　　テット：関推、関わるものの推量
b･52：ク　　クゥ：食推、食べたものの推量
t･53：ト　　トン：匂推、匂ったものの推量
k･53：リャ　　リャア：触推、触ったものの推量
x･53：ヴ　　ウ：意志、しようぞ
s･53：ヱ　　ヱェ：私益、～させる
n･53：ガ　　カ：打推、関推の弱否定としかつかわれない
v･53：ペ　　ペン：後悔、すべきだったのに
f･53：ティ　　ティー：親愛、
m･53：ララ　　ルル：詠嘆、～だなぁ
d･53：ナム　　ナム・ナン：敬愛
g･53：ミ　　ミン：愛情
p･53：ビュ　　ビュウ：必然、どうしても～する
b･53：イホ　　イーホ：確認
t･54：エミ　　エミィ：野卑、～しやがる
k･54：ムム　　ムン：避決、かもしれない
x･54：ヲ　　ヲォ：例示、～すると
s･54：ル　　ルゥ：絶対、必ず～する
n･54：ピナ　　ピィナ：約束、約束だから～する
v･54：ゴ　　コ：欲望、したいからする
f･54：ヴィ（古）　ウィ（古）：男性、男らしく～する
m･54：ミ（古）　ミン（古）：女性、女らしく～する
d･54：ヂュ（古）　チュン（古）：欲望、助平にも～する
g･54：ウ（古）　ウゥ（古）：遺憾、遺憾にも～する
p･54：ミュ（古）　ミュウ（古）：珍しくも～な
b･54：ヌ（古）　ヌゥ（古）：陳腐、陳腐にも～する
t･55：モロ（古）　モロロ（古）：愚行、愚かにも～する
k･55：ヒュロ（古）ヒュロロ（古）：堅行、堅くも～する
x･55：ジョ　　ショ：怨恨、よくも～してくれたな
s･55：セ（古）　セェ（古）：即行、早くも～する
n･55：プ・フ　　フア：許可、～してもよい

v･55：プ　　プゥ：良行、～すればよい
f･55：ファ　　ファ：義務
m･55：ニュ　　ニュゥ：異性、つけてもいいし、つけなくてもよい
d･55：ユーマ　　ユーマ：人間、つけるべき
g･55：ズ　　ス：反復、何度も、繰り返し～する
p･55：ルド　　ルドォ：価値、価値があって～する
b･55：クム　　クムゥ：同属、同属同士
t･56：キョ　　キョン：役柄、～として～する
k･56：ニョ・ニ（古）　ニョン（古）・ニー（古）：優行、～してあげる
x･56：ハ　　ハァ：後祭、～してしまった
s･56：ミソ　　ミッソ：試行、～してみる
n･56：ケタ　　ケッタ：行行、～していく
v･56：ケコ　　ケッコ：行来、～してくる
f･56：ヒ　　ヒィ：為行、～のためにする
m･56：ビョ（古）　ヒョ（古）：行度、～する度に～する
d･56：―タ　　―ノ：丁寧
g･56：ヒュ　　ヒュゥ：高位
p･56：モ　　モン：低位
b･56：シ　　シン：容易、～しやすい
t･57：ヒュゥ　　ヒュン：優越、～しやすい
k･57：ゴ　　ゴォ・コン：欲求、～して
x･57：シャ　　シャン：経験
s･57：カ　　カァ：難航、～しづらい
n･57：セレ　　セン：感謝、～してもらう
v･57：キ　　キム：開始、～し始める
f･57：モ　　モン：中断、～しかける
m･57：ジ　　ジン：強調
d･57：ネ　　ネ：確推
g･57：ダ　　ダ：警告
p･57：ト　　トォ：終了

＜前置詞＞

b･57：ポト：ＩＮ
t･58：ケイマ：時を表わす
k･58：ヒュヒュ：上に

x･58：モモ：下に
s･58：セセ：ＢＥＴＷＥＥＮ
n･58：ケノ：ＯＦ
v･58：ジュジュ：ＢＹ
f･58：ムル：ＦＲＯＭ
m･58：ケル：ＴＯ
d･58：ケケル：ＡＢＯＵＴ
g･58：フィーナ：ＦＯＲ
p･58：ムト：ＩＮ

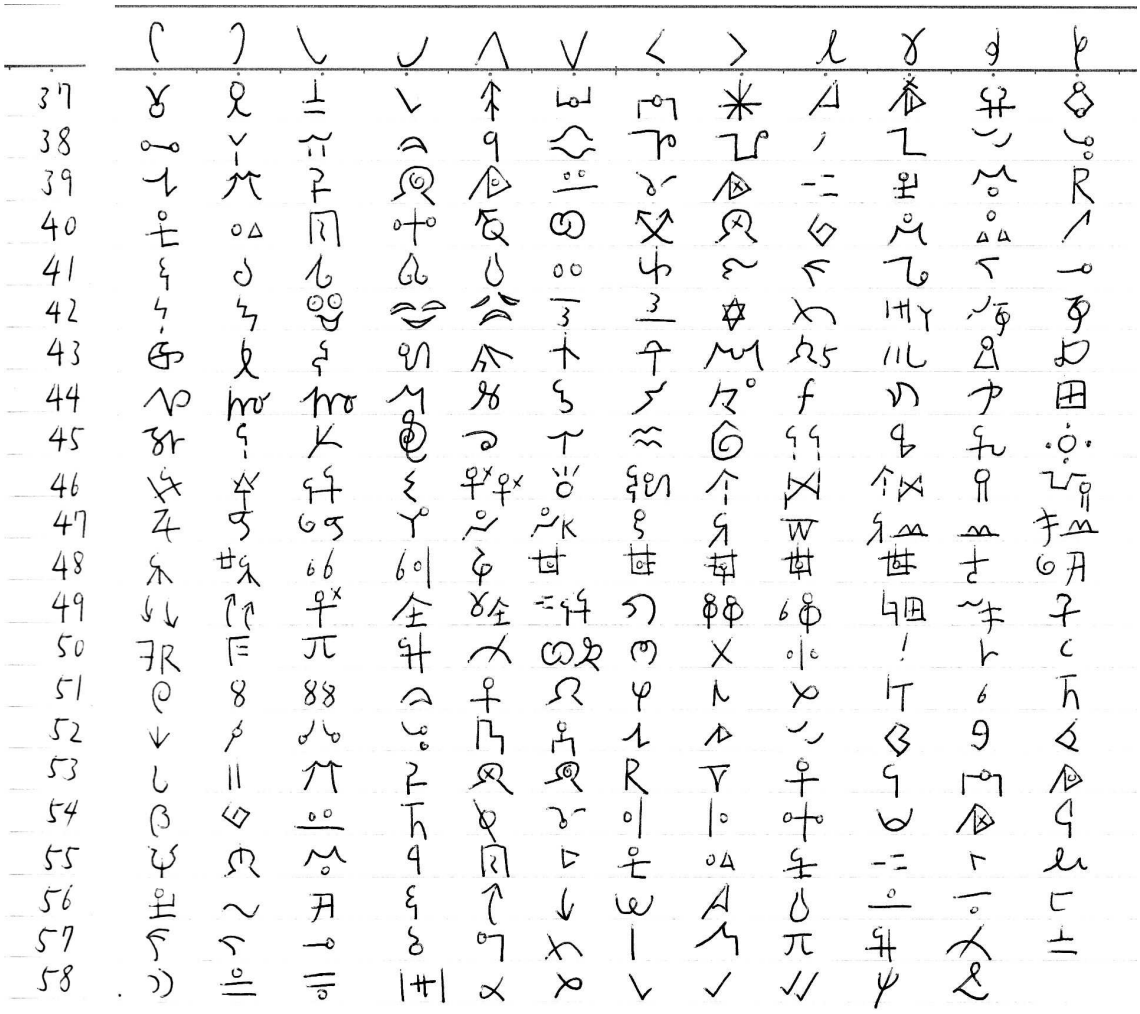
＜音象徴＞

ア：魔法の、海
イ：力、雷、見る
ウ：体、尻
エ：氷、嫌な、悪い、速い
オ：距離、空間
カ：辛い、つらい、場所
キ：変化
ク：動く、ペア
ケ：方向
コ：中の
サ：絹の、繊維、綿
シ：甘い
ス：砂、警告語尾
セ：新しい
ソ：使う、土踏まず、する
タ：外へ
チ：速さの
ツ：物
テ：風、関係
ト：森、花
ナ：心の、気持ち、禁止の
ニ：色、優しい
ヌ：古い、沈んだ
ネ：推定、かもしれない…と思う

ノ：気力、根性などの根気、ために、瓜
ハ：尻尾
ヒ：しょっぱい、忍耐の
フ：許可、許し、短い
ヘ：平らの（古）、音の（古）
ホ：固い
マ：多い
ミ：女々しい、否定的な
ム：すっぱい、厳しい、命令、なんだかよくわからないもの
メ：しなやかな
モ：下の、低い
ヤ：苦しい
ヰ：a,e の語尾
ユ：毒々しい、不思議な魅力のある、格式高い、不思議な感じ
エ：使益
ヨ：放つ
ラ：強調、大きい、魔力
リ：命、清、正当な、実在の、聡明な、理、魅力、小さい
ル：足、物、丁寧語尾、何か、何とか
レ：命令
ロ：忍びの、e の語尾のＡＮＤ、頭の、小さい
ワ：四角の
ヲ：例え
ン：語尾、丁寧を意味する
ガ：三角の、否定
ギ：金属の
グ：決める
ゲ：円の（古）
ゴ：欲
ザ：立つ
ジ：指の、示す
ズ：もう一度
ゼ：脳の
ゾ：（魔法）をかける
ダ：威厳のある
ヂ：牙、あご

ヅ：壊す
デ：「 - 」
ド：過去（古）
バ：親しみのある、可視の、近い
ビ：疎遠な、不可視の、遠い
ブ：全体の
ベ：ＴＯ、臭い
ボ：点
パ：乗り物の、光
ピ：ＲＥＡＳＯＮ、鋭い
プ：よい
ペ：くやむ
ポ：首
ヴァ：戦い
ヴィ：力
ヴ：意志
ヴェ：黒い、闇
ヴォ：撃つ
ファ：炎、義務
フィ：長い
フゥ：もし
フェ：疑い（古）
フォ：解く
ギャ：波の、揺れる
ギュ：苦い
ギョ：しっぽ（古）
キャ：父
キュ：母、おおもとの
キョ：役
ヒャ：間
ヒュ：霊的なもの・こと
ヒョ：当然
シャ：存在
シュ：本、紙
ショ：使う
ジャ：名詞のれんけつ語尾、大きい

ジュ：愛
ジョ：怒る。高ぶる
ビャ：不要な
ビュ：重い
ビョ：次の（古）
チャ：重要な
チュ：発表、いやらしい
チョ：鋭い（古）
ピャ：
ピュ：薬の
ピョ：
ニャ：軽い
ニュ：違う
ニョ：へなへなした
ミャ：
ミュ：無、実数関係、否定的な感じ
ミョ：磁気の
リャ：近い
リュ：遠い
リョ：



制アルカに継承された幻字

原則として、制アルカは表音文字の 25 文字を使って表わされ、他にはテンペラなどの表意文字がいくつかある程度である。だが、厳密に言えば古アルカから制アルカにそのまま継承された文字はいくつか残っていて、それらは制アルカを学習する上で少なからず有用である。そこで以下に古アルカから継承された幻字について述べる

アルカ

当然のことだが、古アルカにはアルカを表わす幻字があった。これは変わらず制アルカにも継承されている。制アルカを運用する際にこの字が使われることは恐らくないものの、

この字はアルカを表わす幻字として消えることなく使われ続ける幻字であるため記載した

この字は、女が自分を指して言う場合の「私」を意味するノンと、男が自分を指して言う場合の「私」を意味するアンが繋がってできた幻字で、リディアが創造したものである。ノンは具体的にはリディアを表わし、アンは具体的にはセレンを表わす。即ちこれは「私（リディア）と貴方（セレン）を繋ぐ」という意味の文字であり、この字形はリディアが「アルカはリディアとセレンを繋ぐコミュニケーションの道具だ」と称したことから選ばれたのである

使徒記号

次はアシェットの使徒を表わす幻字である。これは 28 字ある。元はどれも使徒を表わす文字ではなかった。使徒を表わす文字は別にきちんと存在しており、それらは『赤アンクノット』にも収録されている。使徒は仕事をルシーラに提出する際、必ず自分の記号で署名していた

ところがメル 8 年にシェルトが考案され始めたことによりこの状況は崩れた。シェルトは 29 の駒を使うが、1 つはテームスという特殊な駒であるため、残りの数は 28 になる。そこでメルとクミールはこれらの駒にそれぞれ使徒の名を当てはめていった。このとき、駒にハッキリと使徒の名を書くと人間関係にひびが入ると彼女たちは考えた。というのも、駒の中には強いものと弱いものがあるためである。そこで彼女たちは実際の使徒記号を使わず、使徒を暗示させる文字を代わりに使ったのである。たとえばセレンを意味する駒にはセレンがルシーラであることからルシーラの文字を当てたという具合である

したがって、シェルトに使われる駒は既存の使徒記号とは異なる。但し、例外はある。ラルドゥラやルージュなど数人は既存の使徒記号のままである。ラルドゥラは他の幻字で表わしにくかったためである。一方、ルージュについてはメルが彼を嫌っていたので最も弱い駒に直接割り当てたというのが理由である

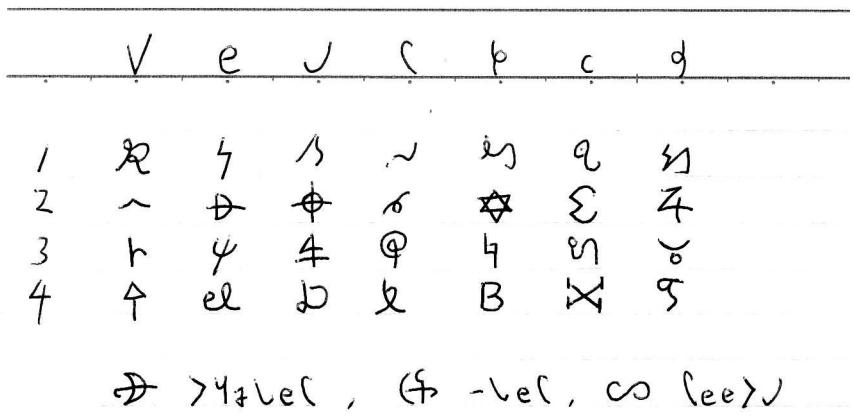
シェルトの幻字はシェルトの普及とともに新たな使徒記号として普及していった。しばらくするとこの幻字は既存の使徒記号を排他しはじめた。メル・アルカの時点で既存の使徒記号とシェルトの幻字は混在しはじめた。まず私的文書の中にシェルトの幻字が現われはじめ、次第に公文書にまで及ぶようになっていった。こうして制アルカに至るまでにシェルトの幻字は新たな使徒記号へ取って代わっていったのである

確かにシェルトはラルクが誇る 1 つの遊戯ではあるが、それは直接アルカに関係がある

わけではない。だが、シェルトから生まれた新たな使徒記号はシェルトのみに使われるのではない。使徒記号がアルカと最も関わりを持つのはメル暦においてであろう。メル暦の日付を表わすにはふつう使徒記号が使われるからである

メル暦の日付はふつう、使徒の名で表わされる。たとえば年の最初の日はリディアの月リディアの日であるが、これを制アルカの幻字で dia,dia と書くのは何ら問題ない。ところがそれと同じくこれを使徒記号で表わすことも何ら問題ないのである

使徒記号が書けなかったりコンピュータでフォントがなく扱えないという場合は制アルカの幻字で書くしかないが、そうでない場合はふつう使徒記号で日付を書くことが多い。そのため使徒記号は有用である

そこで以下に使徒記号を挙げる。ただ記号を並べるだけでなく、同時に月のカレンダーとして見ることもできるように配慮した。横はソームの頭文字であり、曜日を表わす。縦の数字は週の数を表わしている

尚、図の下部にある 3 つの字はメル暦に使われる特殊な幻字で、使徒記号ではない。myuxet は「月無し」の意味で、ルージュの月クミールの日の翌日からの 1 乃至 2 日間の月である。axet は「アシェット」の意味で、myuxet の月の第 1 日目である。換言すれば平年における最後の日、大晦日である。また閏年の場合、axet の後に myuxet の月 teems の日が入り、これが閏日に当たる。尚、teems は「テームス」の意味である